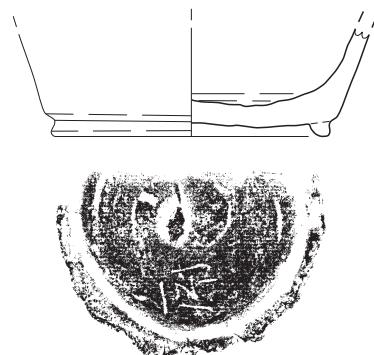


大道遺跡群6

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

第21次 第28次 第31次

第34次 第36次 第37次



2013

大分市教育委員会

大道遺跡群6

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

第21次 第28次 第31次

第34次 第36次 第37次

2013

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分駅周辺総合整備事業に伴って、平成 18・20・21 年度に実施しました大道遺跡群第 21・28・31・34・36・37 次調査の成果を収録したものです。

駅周辺総合整備事業は、将来の 50 万都市を展望した都市基盤整備の中核となる事業であり、国・県・市が一体となり取り組んでいます。この事業により、鉄道により分断されていた大分駅南北市街地の一体化を図り、駅北・商業業務中核都心と駅南・情報文化新都心との役割分担の中で、ゆとりと潤いのある新都心を創出することを目的としており、後世に誇り得る県都「大分」の顔づくりをめざしています。

今回報告いたします大道遺跡群第 21・28・31・34・36・37 次調査地点は、複合文化交流施設「ホルトホール大分」の建設地になります。「ホルトホール大分」は人と文化と産業を育み、創造、発信する新都心拠点を基本理念に、文化・交流・教育・福祉といった機能の充実をめざし、平成 25 年 7 月に竣工予定であります。

大道遺跡群第 28・31 次調査では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡群、井戸跡、大溝跡等が発見され、遺跡が立地する地理的環境などから、水上交通の要所となる遺跡として注目されています。また、第 21 次調査では、弥生時代後期に位置づけられる土器群が良好な状態で発見され、その中には瀬戸内地域の土器も含まれていることから、当時の地域間の交流を示す貴重な資料となりました。

本書が市民の皆様に駅周辺地区の歴史を今一度振り返っていただく機会となり、その一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査事業の実施にあたり、ご指導いただいた諸先生方、ご協力いただいた関係機関各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月 15 日

大分市教育委員会

教育長 足立一馬

例　　言

- 1 本書は大分市教育委員会が大分駅周辺総合整備事業に伴って平成 18・20・21 年度に実施した大道遺跡群第 21・28・31・34・36・37 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査担当は、第 1 表 調査地点一覧表のとおりである。
- 3 遺構の実測は、各調査担当者が行ったほか、有限会社九州文化財リサーチ（第 21 次）、大成エンジニアリング株式会社（第 28 次）、株式会社九州文化財総合研究所（第 34・36・37 次）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。遺構全体図作成については、九州航空株式会社が大分市教育委員会文化財課の委託を受け行なった。
- 4 遺構の写真撮影は、各調査担当者が行なった。各調査区の全体の撮影については、大分市教育委員会文化財課の委託を受け九州航空株式会社が行なった。
- 5 遺物選別は、佐藤道文・松浦憲治（大分市教育委員会文化財課）、中西武尚（大分市歴史資料館）が行なった。遺物の接合・注記作業は、倉増美智代・敷島加代子・小野千恵美（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行なった。
- 6 報告書に掲載した出土遺物の実測・製図は、第 21 次と第 28・31・36 次の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム（業務責任者 古閑健一）が委託を受け行なった。第 28 次の一部の遺物実測は佐藤、松浦が行い、第 31・34・36 次の遺物実測は佐藤・塩地潤一・小野知恵・敷島が行なった。遺物・個別図・遺構図の製図を主に倉増が行い、小野知恵・佐藤良子・佐藤麻理子・松木晴美（大分市教育委員会文化財課嘱託）の協力を得た。
- 7 遺物写真撮影は、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、株式会社埋蔵文化財サポートシステム（業務責任者古閑健一）がデジタル写真撮影を行なった。
- 8 本書の執筆は、以下のとおりである。

第 I 章 佐藤

第 II 章 佐藤

第 III 章 ［遺構］佐藤・倉増・中西　　〔遺物〕佐藤・中西

第 IV 章 佐藤

- 9 本書の編集は、倉増が行い、株式会社埋蔵文化財サポートシステム（業務責任者 古閑健一）の協力を得た。
- 10 本報告書巻末の写真図版及び掲載できなかった写真図版を附属の DVD-RAM に収容している。詳細は DVD-RAM 内の「はじめにお読み下さい」を参照頂きたい。
- 11 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原 337 番地の 5）に収蔵・保管している。
- 12 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に指導・御助言を頂いた。（敬称略、順不同）

小田富士雄（福岡大学名誉教授）

中西 武尚（大分市歴史資料館）

凡　　例

- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
① SB：掘立柱建物跡、② SA：柵状遺構、③ SH：竪穴建物跡、④ SE：井戸跡、⑤ SK：土坑・貯蔵穴、
⑥ SD：溝跡、⑦ SF：道路状遺構、⑧ SX：性格不明遺構、⑨ SP：ピット・小穴を表している。
- 2 本書に記載される遺構番号は、以下の要領で表記される。
「21 SB 001」…21(調査次数) SB(遺構略号) 001(遺構番号)
- 3 本書に用いた方位はすべて座標北 (G.N.) である。座標は、旧日本測地系の平面直角座標 2 系 (北緯 33° 0'、東経 131° 0') の X・Y 座標を基点として表記している。
- 4 本書に掲載した遺構配置図（遺構の新旧関係を記録した図面）の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の

遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。

- 5 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル (m) で、遺物の法量はセンチメートル (cm) で表記している。
- 6 遺物の法量の内、器高と口径、底径と高台径は以下のとおり計測している。

器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ

口径：上記の状態で、口縁端部外縁の最大径

底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径

高台径：高台端部外縁の最大径

- 7 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。

(1) 遺物断面が黒塗りのもの…陶器・須恵器 (2) 遺物断面が灰色のもの…瓦器・瓦類

(3) 遺物平面の稜線と調整の変換点…実線 (4) 調整が同じでその単位が分かるもの…長破線

(5) 紗と付着物、黒班等その範囲を示す必要があるもの…一点破線

- 8 本稿における編年観及び年代観について、以下に掲載する分類資料図 (1 ~ 3) に示す標識資料との比較による。なお、これらの資料が掲載された文献は分類資料図 3 にある一覧のとおりである。その他、遺物の年代観等については以下の文献を参考にした。

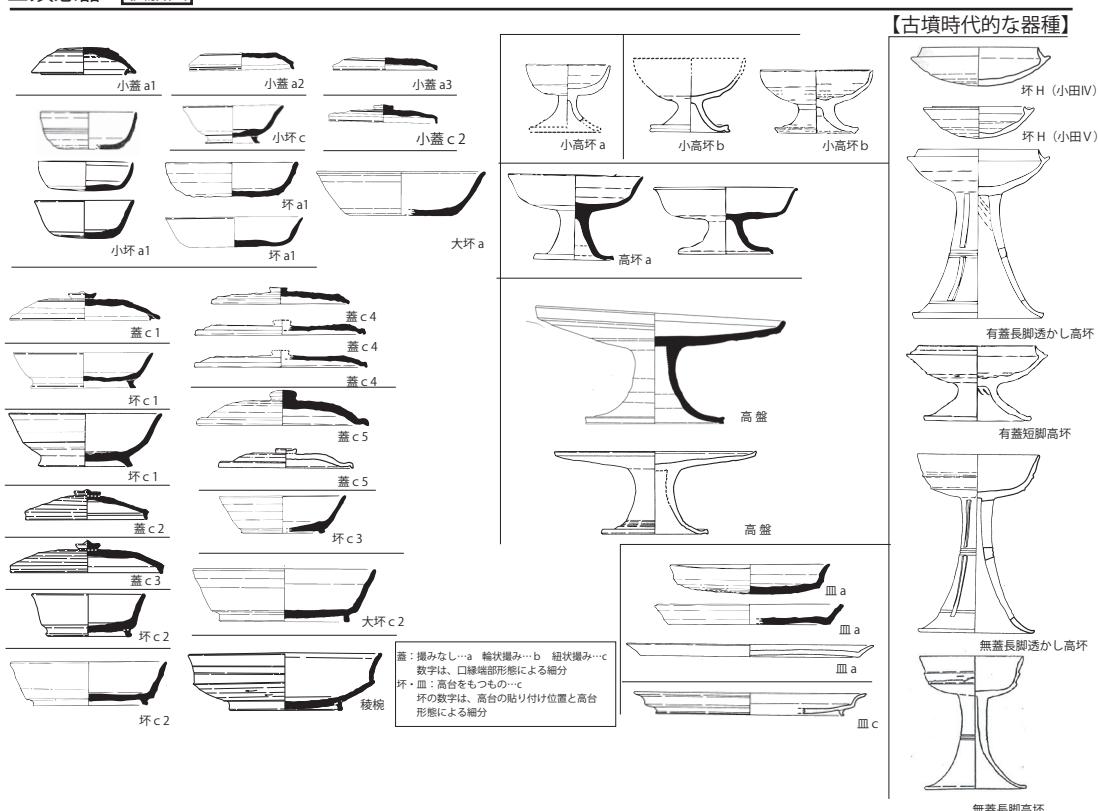
大分市教育委員会 2010『下郡遺跡群 VIII』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7

久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究 IX』庄内式土器研究会

山本信夫 1992「北部九州の7~9世紀中頃の土器」古代の土器研究会 第1回シンポジウム

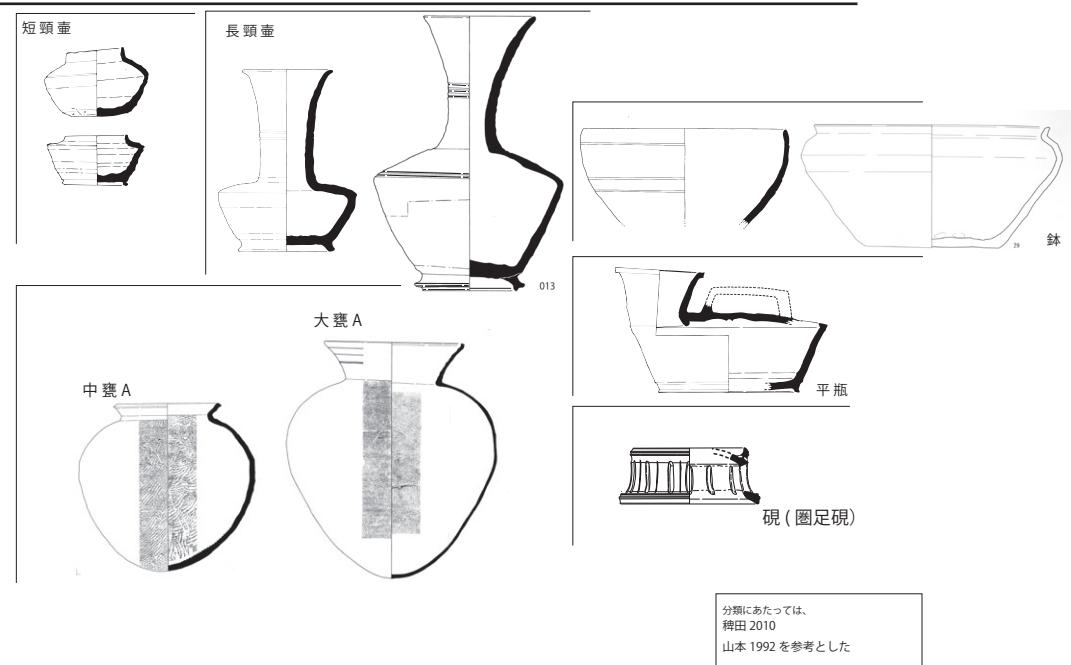
〔分類資料図 1〕

■須恵器 供膳具



[分類資料図 2]

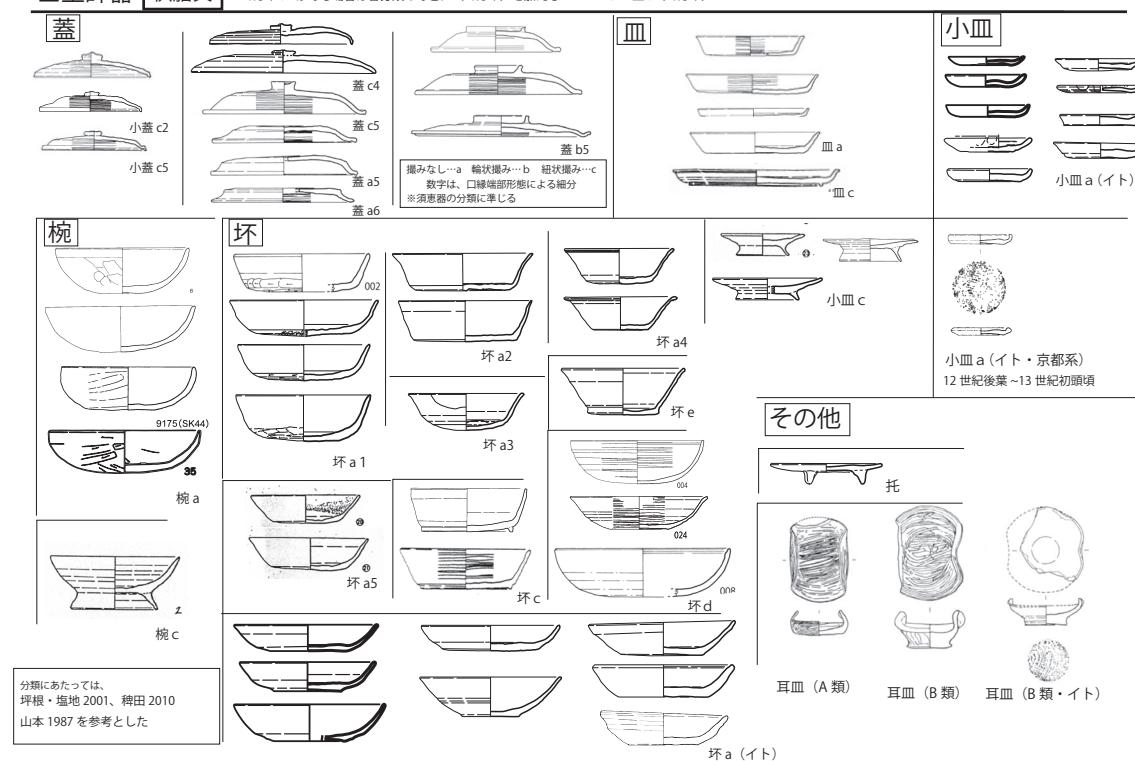
■須恵器 貯蔵具



■土師器 供膳具

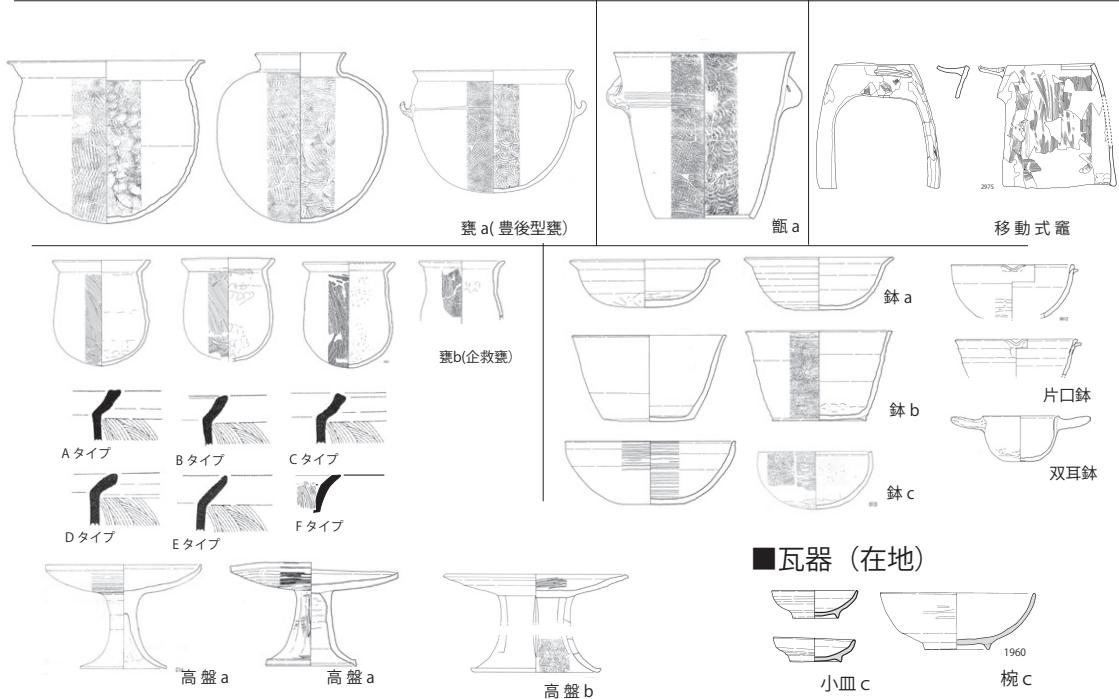
ミガキ a2 がある場合は各分類のあとに (ミガキ) を加える

ex: 盘a (ミガキ)

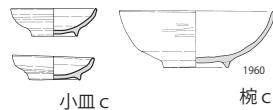


[分類資料図 3]

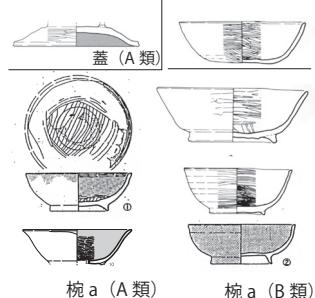
■土師器 煮炊具・貯蔵具



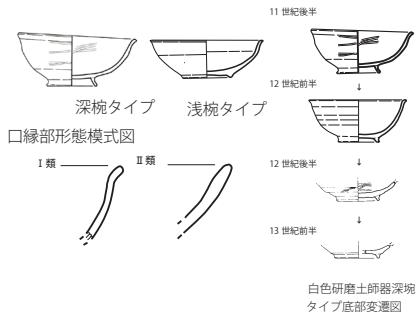
■瓦器 (在地)



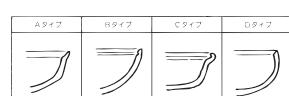
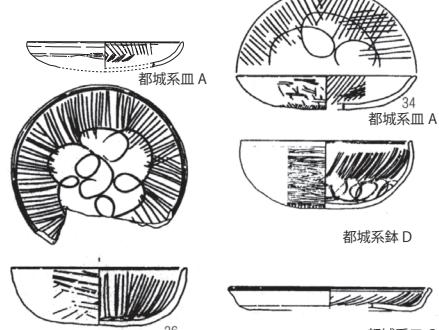
■黒色土器



■白色研磨土師器



■都城系土師器



<分類にあたっての参考文献>

[瓦質土器][土師質土器]

山本哲也 2009「豊前・豊後における瓦質土器の初期様相」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
河野史郎 2002「出土土師器壺・皿類及び瓦質土器雑器の分類と編年」『大友府内 4』大分市教育委員会

[瓦器]

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

[白色研磨土器]

稗田智美 2012「第2節 羽田遺跡出土の白色研磨土師器碗について」『羽田遺跡3』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第114集
[土師器]

坪根伸也 1995「付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡II』大分市教育委員会

坪根伸也・塩地潤一 2001「豊後の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

稗田智美 2010「(4) 古代の土師器について」『下郡遺跡群VIII』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集

山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性 九州・南西諸島」[共同研究] 中世食文化の基礎的研究

国立歴史民俗博物館研究報告 第71集

山本信夫 1987「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡II』

林潤也・中西武尚・今田しのぶ 2001「豊後における都城系土師器について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
[須恵器]

山本信夫 1992「3. 遺物各説」『宮ノ本遺跡II -窯跡篇-』太宰府市の文化財 第10集

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	2~3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の成果	10
第1節 調査の概要(佐藤)	10
第2節 大道遺跡群第21・34次調査	10~29
(1)はじめに(佐藤)	10
(2)基本層序(佐藤)	10
(3)遺構(倉増)	10~17
(4)出土遺物(佐藤)	17
第3節 大道遺跡群第28次調査	30~89
(1)はじめに(佐藤)	30
(2)基本層序(佐藤)	30
(3)遺構(倉増・中西)	30~66
(4)出土遺物(佐藤)	67~70
第4節 大道遺跡群第31次調査	90~120
(1)はじめに(佐藤)	90
(2)基本層序(佐藤)	90
(3)遺構(佐藤)	90~104
(4)出土遺物(佐藤)	105~108
第5節 大道遺跡群第36次調査	121~124
(1)はじめに(佐藤)	121
(2)基本層序(佐藤)	121
(3)遺構(倉増)	121
(4)出土遺物(佐藤)	124
第6節 大道遺跡群第37次調査	125
(1)はじめに(佐藤)	125
(2)基本層序(佐藤)	125
(3)遺構(佐藤)	125
(4)出土遺物(佐藤)	125~126
大道遺跡群6遺物観察表	127~146
第Ⅳ章 総括	147~154
第1節 調査成果の時代別整理(佐藤)	147~149
(1)はじめに	
(2)時代別の調査成果	
第2節 古代の建物配置及び遺物について(佐藤)	149
第3節 結語(佐藤)	150
参考文献	155
写真図版	157~168

挿図目次

第1図 調査区位置図(1/5000)	4	第48図 第28次井戸跡遺物実測図 1 (1/4)	72
第2図 調査区周辺地形分類図 (『大分市史』上一部改変)および遺跡分布図(1/60000)	5	第49図 第28次井戸跡遺物実測図 2 (1/4)	73
第3図 周辺遺跡地図(1/40000)	7	第50図 第28次井戸跡遺物実測図 3 (1/4)	74
第4図 平成9年大分駅周辺空中写真	9	第51図 第28次井戸跡遺物実測図 4 (1/4)	75
第5図 '90キグレNEWサーカスチラシ	9	第52図 第28次井戸跡遺物実測図 5 (1/4)	76
第6図 建設中の複合文化交流施設『ホルトホール大分』	9	第53図 第28次井戸跡遺物実測図 6 (1/4)	77
第7図 大道遺跡群第21・28・31・34・36・37次 調査遺構配置図(1/600)	11・12	第54図 第28次井戸跡遺物実測図 7 (1/4)	78
第8図 大道遺跡群第21次・第34次調査遺構配置図(1/400)	13	第55図 第28次土坑遺物実測図 1 (1/4)	78
第9図 大道遺跡群第21次調査遺構全体図(1/400)	14	第56図 第28次土坑遺物実測図 2 (1/4)	79
第10図 21SB065遺構実測図(1/60)	16	第57図 第28次溝跡遺物実測図 1 (1/4)	79
第11図 第21次溝跡土層断面実測図(1/40)	16	第58図 第28次溝跡遺物実測図 2 (1/4)	80
第12図 第21次土坑遺構実測図(1/40)	18	第59図 第28次溝跡遺物実測図 3 (1/4)	81
第13図 21SD001・SK020遺物実測図 1 (1/4 3のみ1/2)	20	第60図 第28次溝跡遺物実測図 4 (1/4)	82
第14図 21SK020遺物実測図 2 (1/4)	21	第61図 第28次溝跡遺物実測図 5 (1/4)	83
第15図 21SK020遺物実測図 3 (1/4)	22	第62図 第28次溝跡遺物実測図 6 (1/4)	84
第16図 21SK020遺物実測図 4 (1/4)	23	第63図 第28次その他の遺構出土遺物実測図(1/4)	85
第17図 21SK020遺物実測図 5 (1/4)	24	第64図 大道遺跡群第31次調査遺構配置図(1/250)	91
第18図 第21次土坑・柱穴遺構遺物実測図(1/4)	25	第65図 大道遺跡群第31次調査遺構全体図(1/250)	92
第19図 大道遺跡群第28次調査遺構配置図(1/300)	31・32	第66図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図 1 (1/60)	94
第20図 大道遺跡群第28次調査遺構全体図(1/300) 調査区北壁土層図(1/100)	33・34	第67図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図 2 (1/60)	94
第21図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図 1 (1/60)	36	第68図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図 3 (1/60)	96
第22図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図 2 (1/60)	38	第69図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図 4 (1/60)	97
第23図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図 3 (1/60)	39	第70図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図 5 (1/60)	98
第24図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図 4 (1/60)	40	第71図 第31次柵状遺構実測図(1/60)	98
第25図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図 5 (1/60)	41	第72図 31SH030遺構実測図(1/60)	99
第26図 第28次柵状遺構実測図(1/60)	42	第73図 31SE035遺構実測図(1/40)	100
第27図 28-1SH050遺構実測図(1/60)	44	第74図 第31次土坑遺構実測図 (1/40 SK146 1/20・SK139 1/60)	102
第28図 28-1SH058遺構実測図(1/60)	45	第75図 第31次SD025土層断面実測図(1/40)	104
第29図 28-1SH059遺構実測図(1/60)	45	第76図 第31次SD025土層断面実測図(1/60)	105
第30図 第28次井戸跡遺構実測図 1 (1/40)	48	第77図 第31次SD089遺構実測図(1/250・1/40)	106
第31図 第28次井戸跡遺構実測図 2 (1/40)	49	第78図 第31次建物跡・柵状遺構遺物実測図(1/4)	109
第32図 第28次土坑遺構実測図(1/40)	51	第79図 第31次井戸跡遺物実測図(1/4)	109
第33図 第28次溝跡遺構実測図 1 (1/40)	52	第80図 第31次土坑遺物実測図 1 (1/4)	110
第34図 第28次溝跡遺構実測図 2 (1/40)	53	第81図 第31次土坑遺物実測図 2 (1/4)	111
第35図 第28次溝跡遺構実測図 3 (1/40)	54	第82図 第31次溝跡遺物実測図 1 (1/4)	112
第36図 第28次溝跡遺構実測図 4 (1/40)	56	第83図 第31次溝跡遺物実測図 2 (1/4)	113
第37図 第28次溝跡遺構実測図 5 (1/40)	58	第84図 第31次溝跡遺物実測図 3 (1/4)	114
第38図 道路状遺構及び関連遺構全体図(1/150)	59	第85図 第31次溝跡遺物実測図 4 (1/4・1/1)	115
第39図 28-1SF040・043遺構実測図(1/50)	60	第86図 第31次溝跡・その他の遺構遺物実測図(1/4)	116
第40図 28-1SF041・042遺構実測図(1/50)	61	第87図 大道遺跡群第36次調査遺構配置図(1/100)	122
第41図 28-2SF200遺構実測図(1/80)	62	第88図 36SB005遺構実測図(1/80)	123
第42図 28-1SX034遺構実測図(1/60)	64	第89図 36SD025土層断面実測図(1/40)	123
第43図 28-1SX037・038・039遺構実測図(1/60)	65	第90図 第36次調査出土遺物実測図(1/4)	124
第44図 28-1SX027遺構実測図(1/40)	66	第91図 大道遺跡群第37次調査遺構配置図(1/200) 調査区壁土層図(1/60)	126
第45図 28-2SX160遺構実測図(1/60)	66	第92図 大道遺跡群第21・28・31次主要遺構出土遺物 (弥生時代後期～古墳時代)(1/20・1/16)	151
第46図 第28次掘立柱建物跡・竪穴建物跡遺物実測図(1/4)	71	第93図 大道遺跡群第28・31次主要遺構出土遺物 (古代)(1/8・1/4・1/2)	152
第47図 第28次竪穴建物跡遺物実測図(1/4)	72	第94図 大道遺跡群北部主要遺構変遷図(1/800)	153・154

表目次

第1表 調査地点一覧表	1	第20表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表2	131
第2表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳1	26	第21表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表3	132
第3表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳2	27	第22表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表4	133
第4表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳3	28	第23表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表5	134
第5表 大道遺跡群第34次調査遺構台帳	29	第24表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表6	135
第6表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳1	86	第25表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表7	136
第7表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳2	87	第26表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表8	137
第8表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳3	88	第27表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表9	138
第9表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳4	89	第28表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表10	139
第10表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳1	117	第29表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表11	140
第11表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳2	118	第30表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表1	141
第12表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳3	119	第31表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表2	142
第13表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳4	120	第32表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表3	143
第14表 大道遺跡群第36次調査遺構台帳	127	第33表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表4	144
第15表 大道遺跡群第37次調査遺構台帳	127	第34表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表5	145
第16表 大道遺跡群第21次調査遺物観察表1	128	第35表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表6	146
第17表 大道遺跡群第21次調査遺物観察表2	129	第36表 大道遺跡群第36次調査遺物観察表	146
第18表 大道遺跡群第34次調査遺物観察表	129		
第19表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表1	130		

写真図版目次

写真図版 1

大道遺跡群全景（下が北）
第21次調査区全景（上が北）

写真図版 2

第28-1次調査区全景（上が北）
第28-2次調査区全景（上が北）

写真図版 3

28-1SH050 検出状況（南より）	28-1SH050 土層観察時（南東より）
28-1SH050 土層観察時（詳細）	28-1SH050 壁溝検出状況（東より）
28-1SH050 壁溝検出状況（詳細）	28-1SH050 作業風景
28-1SH050 完掘状況（南西より）	28-1SK010 検出状況（北より）

写真図版 4

28-1SK010 遺物出土状況（北より）	28-1SK010 遺物出土状況（詳細）
28-1SK010 土層観察時（北より）	28-1SD045 検出状況（南東より）
28-1SD045 土層観察時（北より）	28-1SD045 完掘状況（北より）
28-1SD030 土層観察時（東より）	28-1SD030 刻書土器出土状況（西より）

写真図版 5

- 28-1SD030 刻書土器出土状況（詳細）
28-1SD030 作業風景（北より）
28-1SF041・042 検出状況（北より）
28-1SF043 完掘状況（北より）
28-1SD030・041・042・043 遠景（南より）
28-1SF041・042 検出状況（南より）
28-1SF041・042 完掘状況（北より）
28-1SX037・038・039 検出状況（南より）

写真図版 6

- 28-1SX034 土層観察時（南より）
月に照らされる調査区
28-2SE170 検出状況（南より）
28-2SE170 土層観察時（南より）
第 28-1 次調査区北壁土層（南より）
第 28-2 次調査区北西部検出時（北より）
28-2SE170 遺物出土状況（南より）
28-2SE170 完掘状況（南より）

写真図版 7

- 第 31 次調査区全景（上が北）
31SB005 検出時（北より）
31SB010c 根石出土状況（東より）
31SB010 検出状況（南より）
31SH030 検出状況（南より）

写真図版 8

- 31SH030 黄茶土検出状況（東より）
31SH030 完掘時（南より）
31SE035 磯出土状況（東より）
31SE035 木櫛出土状況（北より）
31SH030 土層（南より）
31SE035 検出状況（南より）
31SE035 遺物出土状況（南より）
31SE035 完掘時（南より）

写真図版 9

- 31SE035 完掘時詳細（北より）
31SK001 遺物出土状況（北より）
31SK001 完掘時（北より）
31SK065 土層（北より）
31SE035 井戸枠取り出し状況
31SK001 遺物出土詳細（北より）
31SK065 検出状況（東より）
31SK065 完掘時（北より）

写真図版 10

- 第 31 次溝群検出状況（北より）
31SD025 燃石出土状況（北より）
31SD025 黒色土プラン土層（南東より）
31SD025 縦断土層詳細（南より）
31SD025 検出状況（南東より）
31SD025 遺物出土状況（西から）
31SD025 縦断土層遠景（南より）
31SD025 縦断土層西部（南より）

写真図版 11

- 31SD025 縦断土層中央部（南より）
31SD025 土層（西より）
31SD025 東壁土層（西より）
31SD025 完掘時（東より）
31SD025 縦断土層東部（南より）
31SD025 完掘時（南より）
31SD025 西壁土層（東より）
31SD025 作業風景（南東より）

写真図版 12

- 31SD089 完掘時（東より）
31SD089 北側土層（西より）
34SK020 完掘時（南東より）
第 37 次調査区北西隅土層（南東より）
31SD089 南側土層（南より）
34SK020 遺物出土状況（南東より）
37SD001 完掘時（南より）
第 37 次調査区全景（南東より）

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査経過

大分市は、平成8年度より、大分駅の高架化・都市街路整備・大分駅南土地区画整理を一体とする大分駅周辺総合整備事業を推進している。このうち、大分駅南土地区画整理事業は、長年の懸案であった大分駅及び駅近傍JR線の高架化実施にあわせて、南北市街地の一体化をはかるとともに、商業・業務用地と都市型住宅地の両面を整備することで地方中核市としての大分市の中心部としてふさわしい都市拠点の形成をめざしたものである。

大分駅周辺総合整備事業は平成8年3月15日に都市計画決定され、平成9年度から本格的に事業が着手され、平成26年度の完成予定で事業実施中である。なお、平成18年度後半から工事が開始された大分駅の高架化については、平成20年9月に久大線・豊肥線ホームが完成し、9月13日に仮開業するに至った。

その後、駅の北側は府内中央口（北口）、南側は上野の森口（南口）と命名され、平成24年3月17日にそれまで部分高架であったものが完全高架化に移行し、それにともない高架ホーム下に新駅舎が設けられた。同時に、新駅舎改札口の向かい側には33店舗が集う「豊後にわさき市場」がオープンし、賑わいをみせている。

府内中央口には1958年に建設された旧駅舎があったが、完全高架化を以って使用を終了し、解体後旧駅舎跡及びホーム跡地には、2013年春着工、2015年春竣工予定のテナント・レストラン・シネコン・ホテル・温泉施設等が集合する新駅ビルが建設される予定である。

大分駅周辺総合整備事業着手に先立ち、地区内の埋蔵文化財の所在状況に関して平成8年10月都市計画課駅南対策室より大分市教育委員会文化財室に照会された。事業予定地内における遺跡の所在状況については全く不明であったため、大分市教育委員会では平成8年9月25日から10月11日に現駅周辺総合整備課（平成9年4月に正式設置）事務所予定地の試掘調査を実施し、遺構が存在することを確認した。（=東大道遺跡：平成12年度から大道遺跡群と改称）この結果を受け、大分市教育委員会では、平成9年度から住宅等の移転により空地となった地点から順次試掘調査を実施して、埋蔵文化財の所在状況を確認し、本調査が必要な箇所の絞り込みを行うことにした。平成9年度から11年度にかけて断続的に実施した試掘調査の結果、事業予定地内には2地区に埋蔵文化財包蔵地が所在することが判明し、それぞれ南金池遺跡と大道遺跡群として周知されることになった。

このうち大道遺跡群は、大分駅南土地区画整理事業地区の中心地域に所在する遺跡であり、東大道、金池南、桜ヶ丘地区に広がる微高地上に点在する遺跡を総称するもので、当初は東西約1.5km、南北約0.8kmの範囲となっていたがその後の発掘調査が進展した結果、平成19年4月には大分駅の南側、東西約0.6km、南北約0.7kmに範囲が訂正されている。

本書に収録した大道遺跡群の各調査地点は、第21次が平成18年度、第28次が平成20年度、第31・34・36・37次が平成21年度に調査されたものであり、いずれも平成25年度7月に竣工する複合文化交流施設「ホルトホール大分」の建設予定地を対象とした発掘調査である。本敷地内では、平成11年度に確認調査を実施しており、複数の溝跡やピットといった遺構が検出されており、遺跡の存在が確認されることとなった。その後事業計画に沿って、上述した期間で発掘調査を随時行い、「ホルトホール大分」竣工間近に合わせて調査成果を収録した埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行することとした。

第1表 調査地点一覧表

調査次数	所在地	調査担当	調査期間	調査面積
第21次調査	金池南1丁目	永松正大	平成18年12月25日～平成19年3月28日	1628m ²
第28次調査	金池南1丁目	中西武尚・佐藤孝則	平成20年9月1日～平成21年3月1日	5000m ²
第31次調査	金池南1丁目	佐藤道文・山下朋紀	平成21年6月18日～平成21年8月31日	1119.1m ²
第34次調査	金池南1丁目	永松正大・山下朋紀	平成22年2月4日～平成22年3月16日	430.6m ²
第36次調査	金池南1丁目	永松正大	平成22年2月4日～平成22年3月16日	160.3m ²
第37次調査	金池南1丁目	永松正大	平成22年2月21日～平成22年3月16日	352.8m ²

第2節 調査組織

平成18年度 第21次調査

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 秦 政博

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課

文化財課

課 長	佐藤 功 (～平成18年9月30日)
	玉永 光洋 (平成18年10月1日～)

管理係

係 長	安東 時男
主 査	幸 俊昭
主 任	加藤 キヌ

文化財係

係 長	塔鼻 光司
主 事	永松 正大

平成20年度 第28次調査

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 足立一馬

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課

教育総務部次長兼課長	玉永 光洋
参 事	岩田 祐二
管理係	
課長補佐兼係長	福田 誠一
主 査	幸 俊昭
主 任	加藤 キヌ

文化財係

課長補佐兼係長	塔鼻 光司
主任技師	中西 武尚
嘱 託	佐藤 孝則

平成21年度 第31次・34次・36次・37次調査

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 足立一馬

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課

教育総務部次長兼文化財課長	玉永 光洋
参 事	岩田 祐二
課長補佐	塔鼻 光司
管理係	
課長補佐兼係長	福田 誠一
主 査	幸 俊昭 (～6月末)

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼課長	木崎 康雄
------------	-------

管理係

課長補佐兼係長	岩田 祐治
主 査	桜井 敏男
主 任	山本 雅博
	加藤真由美

換地工務係

係 長	富永 好一
主 査	後藤 正一

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

都市計画部参事兼課長	木崎 康雄
------------	-------

管理係

参事兼係長	伊達 俊秀
主 査	桜井 敏男
主 任	加藤真由美
主 事	大川内匡史

換地工務係

課長補佐兼係長	富永 好一
主 査	後藤 正一

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼課長	中畑 修
------------	------

管理係

参事兼係長	伊達 俊秀
主 事	高屋 修司

主 査	神崎小由美（7月1日～）	主 査	加藤真由美
主 任	加藤 キヌ（～6月末）	主 事	大川内匡史
文化財係		換地工務係	
係 長	坪根 伸也	課長補佐兼係長	富永 好一
主任技師	高畠 豊	主 査	後藤 正一
主 任	永松 正大		
主 任	佐藤 道文		
嘱 託	山下 朋紀		

平成24年度 整理・報告書刊行事業

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 足立一馬

【事務局】大分市教育委員会教育部文化財課

課 長	福田 誠一
主 幹	坪根 伸也
主 幹	池邊千太郎
埋蔵文化財担当班	
専門員（班長）	高畠 豊
専門員	塩地 潤一
主 査	佐藤 道文
主 事	朝川 貴俊
嘱 託	倉増美智代

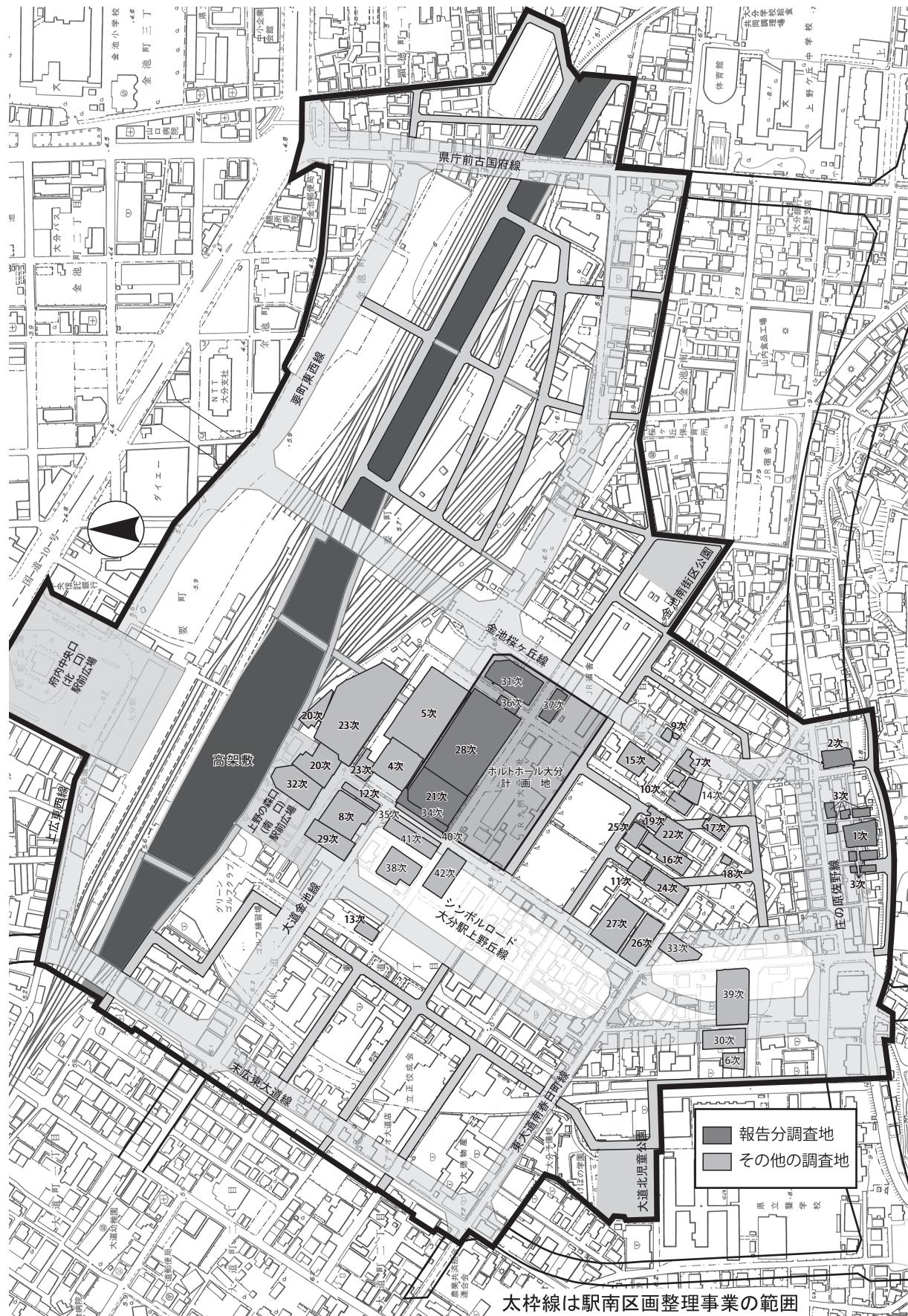
敷島加代子

【刊行協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

課 長	長野 保幸
課長補佐	井筒 幸男
管理担当班	
主 幹（グループリーダー）	衛藤 興憲
主 査	高屋 修司
専門員	武安 高志
主 任	大川内匡史
換地工務担当班	
主幹（グループリーダー）	副田 泰二
主 任	鶴上 浩

【整理・報告書刊行事業協力者】

井口あけみ・木村藍子・羽田野裕之・古田陽・姫野久恵・神田陽子・田畠里美・加藤真優美・佐藤久美・橋本千代美



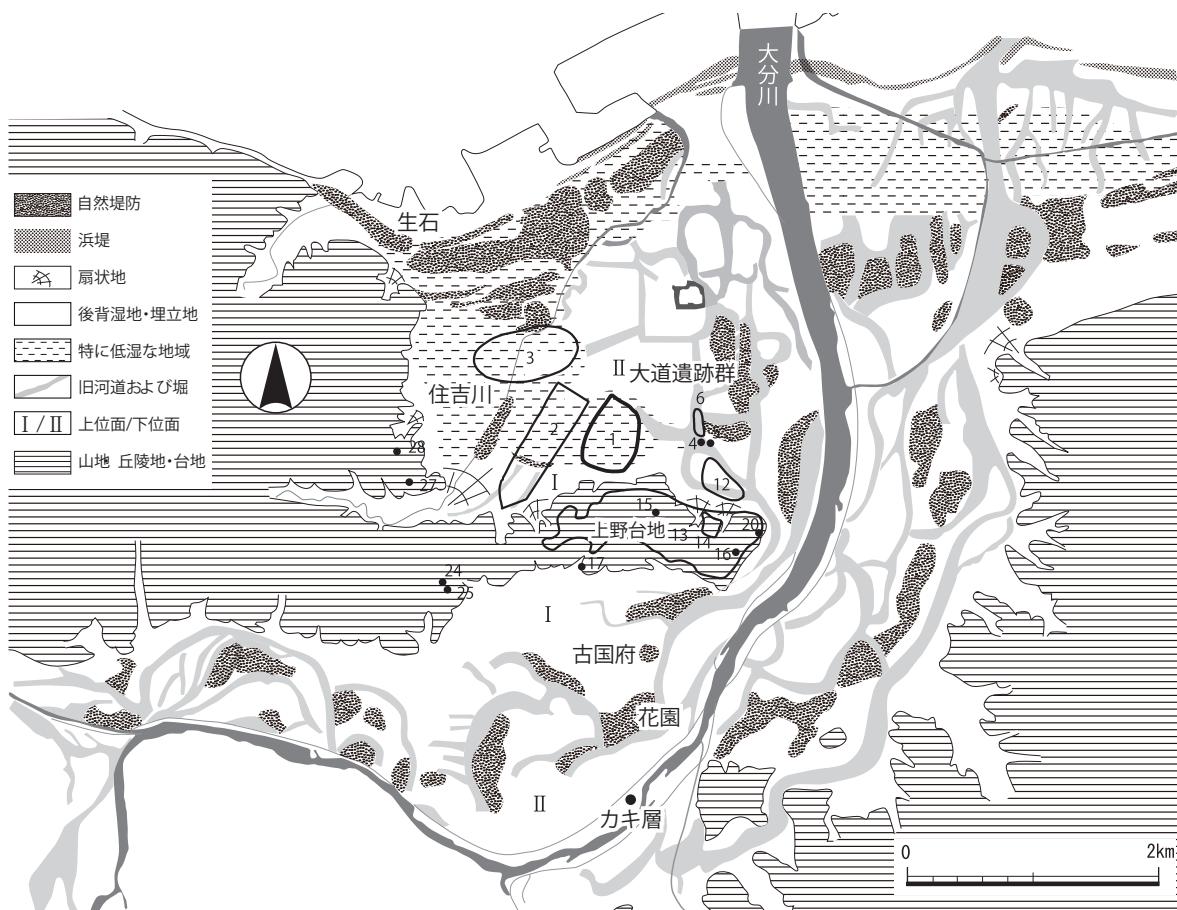
第1図 調査区位置図 (1/5000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分県大分市は、九州の北東部に位置し、その北側は瀬戸内海西端の別府湾に面しており、地形的にも九州の玄関口としての役割を担っている。周辺は、山地に囲まれており、東側は結晶片岩からなる佐賀関山地、南側は霧島山地、西側は鶴見岳・由布岳などの第四紀火山列が聳え、その中にはニホンザルの生息地として天然記念物に指定される高崎山が含まれる。別府湾沿岸部に広がる平野部は、東には県内最大河川であり、水流の美しさにおいて日本でも有数に数えられる大野川が、豊肥方面から複数の河岸段丘を形づくりながら流れ込み、西には由布山系を源流に、七瀬川や賀来川といった様々な小河川が合流しながら大分市街地へと流れ来る大分川が、それぞれ別府湾へと繋がっている。大分市は、山地や台地に縁辺部を囲まれ、その中を縦断する二大河川により寸断されたような地形を成している。そして、限られた平地の中で集落がつくられ、それぞれが独自の文化を培い、後の小藩分立体制に象徴されるような風土的土壤が形成される。

現在の市街地中心部付近が位置する大分平野には、大分川・住吉川といった2つの河川が寄り集まるように流れ、中心市街地は大きな三角州状を呈している。大道遺跡群は、三角州の最も南端にあたり、そのすぐ南には上野台地が控える。大道遺跡群の周辺は、自然流路や後背湿地が入り混じっており低湿土壤が広範囲にわたり分布する。特に、大分駅の南東部付近は湿地状の土壤が広がっており、かつては一面にレンコン畑が広がっていたとされ、地形的特性を表している。今回報告対象となる調査地は、安定した黄褐色土が基盤層となっている。但し、調査区域西部にあたる第21・34次地点の北西部では遺構密度が低く、近世期以降の耕作関連の遺構が顕著であり、建物等の施設は皆無な状況であった。JR大分駅上野の森口付近に位置する第32次調査区、その西側の第29



第2図 調査区周辺地形分類図(『大分市史』上 一部改変)および遺跡分布図(1/60000)

次及び確認調査地点においても溝跡が発見されるのみで、黄褐色土基盤層は薄くなり、変わって灰白色粘質土やシルト質土といった水成堆積の様相を示す土壤が確認されるようになる。これらのことから、第21・28・31・37次調査区付近は、島状に安定地盤が残ったエリアであり、その部分に古墳時代前期～後期の集落、古代の施設がつくられたと推測することができる。

第2節 歴史的環境

大道遺跡群の調査は平成12年度から始まり、平成24年度末までで42地点に及んでいる。これらの発掘調査から、大道遺跡群内には大きく3時期の集落及び官衙的遺跡が展開していることが判明している。本節では、過去の調査成果を振り返りながら、時代ごとに本遺跡の概要について触ることとする。

【縄文時代】

この時期の遺構は確認されていない。遺跡範囲内では、第3・7・10・14・15次調査地点に縄文土器が、新しい時期の遺構及び遺物包含層に混入した状況で出土している。上記地点は大道遺跡群の中央南寄りに位置することから、上野台地裾部に縄文時代の集落が展開していた可能性が考えられる。

縄文土器は鐘崎式・小池原式上層・北久根山式といった縄文時代後期に該当するものや、阿高式・船元式といった西九州・瀬戸内地域を代表する縄文時代中期に比定される資料が認められる。船元式土器は、近畿・中国・四国を中心に広域に分布するものであり、本遺跡も海岸線に近いという立地状況からその文化圏に含まれていたと推測される。

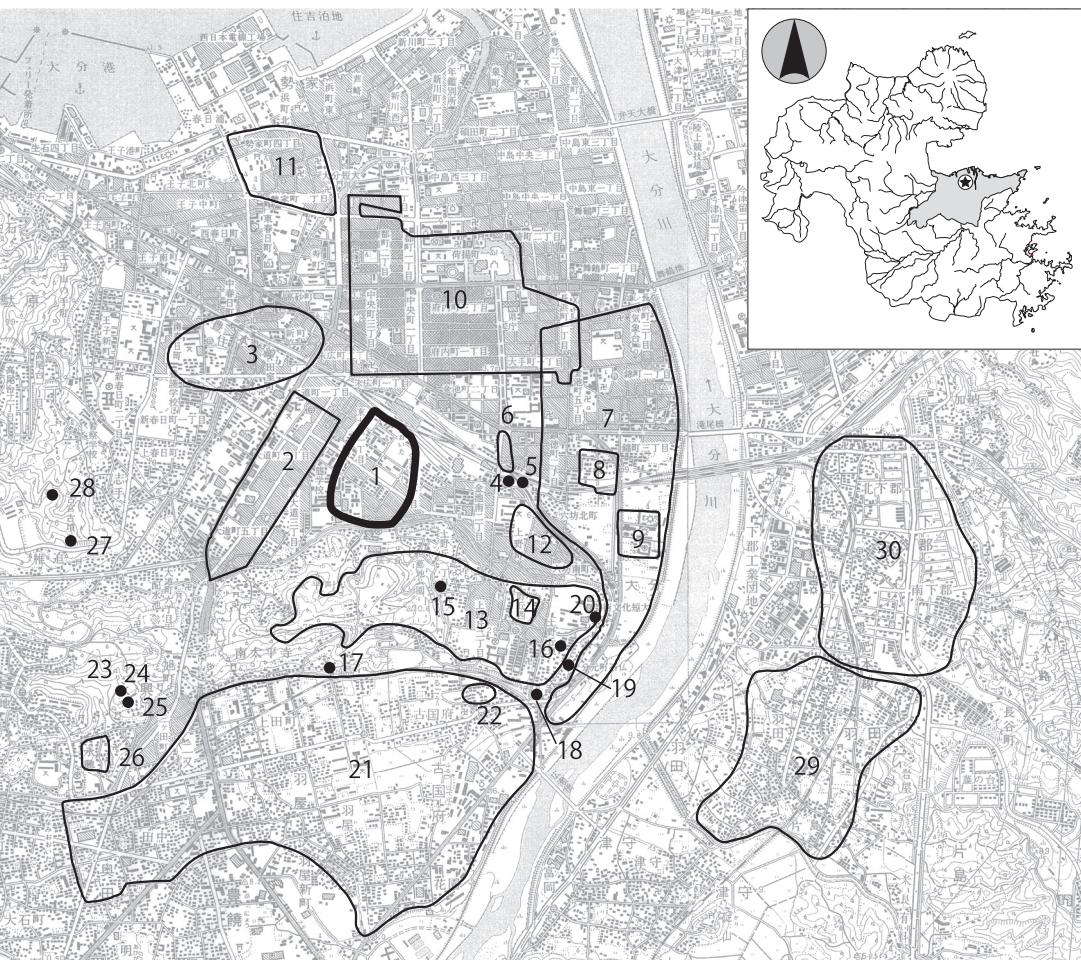
【弥生時代】

現段階で弥生時代に該当する遺構の発見事例は、第21(34)次・23次・32次・10次・19次調査地点において確認されているが、遺構分布としては希薄な状況である。時期の主体は弥生時代後期～終末段階であり、それ以外の時期に当たる遺構は極めて少ない。

第23次地点では弥生時代後期後葉の井戸跡(23SE011)や廃棄土坑(23SX038)が確認されている。その南側に近接する第21(34)次調査で検出された廃棄土坑からは、弥生時代後期前葉頃に比定される壺・甕等の一括資料が良好な状態で出土している。第10次調査では南北方向に延びる幅約3mの規模を有した溝跡10SD010があり、土層観察から水流痕跡が看取され、水路として機能していたと考えられている。出土遺物から弥生時代後期初め頃と位置づけられている。第22次調査地点では楕円形を呈する土坑から、弥生時代中期初め頃の下城式甕や東北部九州系甕が出土している。本遺跡群内においては最も古い遺構と判断される。その他、第15次・19次地点では新しい時期の遺構に混じって弥生時代中期～後期の土器が認められる。また、遺跡範囲内の南端付近で行った試掘調査からは、湿地状堆積層の中から弥生時代前期に該当するとと思われる壺破片が出土している。これらの成果より、弥生時代後期には集落が形成されたことは確実であるが、遺物の出土状況から判断すると、縄文時代同様、上野台地裾部付近には遺跡が存在した可能性が考えられる。

【古墳時代】

古墳時代前期を中心に、大道遺跡群全般で遺構・遺物が確認される。大分駅上野の森口(南口)付近に位置する第20・23・32次調査区では、溝跡より古墳時代前期前葉～後葉にかけての古式土師器が大量に廃棄された状態で出土している。この溝跡は広範囲に延伸しており、何らかの区画溝と考えられる。大道遺跡群では、溝跡と同様、廃絶に際して古式土師器の壺や甕などを一括廃棄した井戸跡や土坑は数多く発見されているが、竪穴建物跡については、第4次調査で2基検出されているのみで、集落と呼べるほどの分布状況は今のところ認められな



1	大道遺跡群	11	勢家遺跡	21	古國府遺跡群
2	大道条里跡	12	若宮八幡宮遺跡	22	岩屋寺遺跡
3	東田室遺跡	13	上野遺跡群	23	城南遺跡
4	上野町遺跡	14	上野大友館跡(上原館跡)	24	千人塚古墳
5	顯徳寺遺跡	15	上野廢寺	25	弘法穴古墳
6	南金池遺跡	16	上野竜王畠遺跡	26	永興遺跡
7	中世大友府内町跡	17	元町石仏	27	古宮古墳
8	大友氏館跡	18	岩屋寺石仏	28	亀甲古墳
9	万寿寺跡	19	伽藍石仏	29	羽田遺跡
10	府内城・城下町跡	20	大臣塚古墳	30	下郡遺跡群

第3図 周辺遺跡地図 (1/40000)

調査では、24SE008 から布留 1 式併行期の土器とともに、クスノキ製の臼と臼蓋が出土している。臼は炭素 14 年代測定より、西暦 287 ± 5 年に伐採され加工されたとのデータが得られ、共伴した土器も付着する煤の炭素 14 年代測定より、較正年代 AD235 – AD390 、較正年代 AD205 – AD400 となることが判明した。これらの数値と臼のデータと照合すると出土した土器はおおむね 4 世紀代と捉えることができる。これらの科学分析の成果より、土器の実年代を把握することができたが、数値については型式変化や共伴する土器様相等から総合的に判定する必要がある。

古墳時代中期～後期にかけての遺構は類例が少なく、現在のところ第 28・31 次地点に集中する。それぞれで竪穴建物跡が 1 基、溝跡などが確認されている。また、古代の大溝（28-1SD030・28-2SD130・31SD025）からは当該時期の須恵器蓋・坏身が散見される。7 世紀代のものも含まれていることから第 28・31 次に集落等が存在し、次代の官衙的遺跡へと繋がっていくものと推測される。

【古代】

この時期は、土器編年に照らし合わせると 8 世紀末～9 世紀前半段階に限定される。第 4・5・21・23・28・31 次地点で確認される大溝は、規模や形状から判断すると、極めて特異な遺構と考えられ、水流痕跡が認められることから水路としての機能が想定される。また、その直線的な配置は官道の様ともいえる。第 23・31 次調査では、大溝に沿うようにして、大きく 2 グループの掘立柱建物跡群が分布する。また、これら建物跡群は大溝の北側に配置されるといった共通性が看取される。第 28 次地点では、大溝に繋がるように南と北に向かってそれぞれ延びる通路跡もしくは道路状遺構が造られており、遺跡の特徴を示す重要な遺構と言える。

遺跡群の南側の第 14～24 次地点でも、総柱建物跡や井戸跡が点在する。また、第 16 次地点を中心に同規模の溝跡が並行して延びている状況が見られ、その構造から道路状遺構の可能性が示唆される。各調査地点からは、硯・石帶・瓦・刻書土器・綠釉陶器・越州窯系青磁等の出土が確認され、また、第 5 次調査では遺構検出時からではあるが奈良三彩も見つかっている。これらの状況より、8 世紀末～9 世紀前半頃には官衙的遺跡が展開していたことが分かる。しかし、10 世紀代以降になると全体的に遺跡は希薄となる。

【中世末～】

この段階の遺構は、主として溝跡が検出される。屋敷跡や集落跡といった様相は全く認められず、遺跡群内は耕作地となっていたと思われる。江戸期に入り、府内藩では日根野吉明による初瀬井路が開削され、それにともない大規模な水田化が進む。確認される溝跡は、この事象に該当するものであろう。

その後は、耕作地としての土地利用が進むが、明治時代になると近代化の余波が少しづつ押し寄せ、岩田製糸工場といった小紡績工場が開かれ、大分駅が開通した後は、大正 6 年に近代的大工場として片倉製糸工場が建てられるなど、大分の発展の舞台の一つとなる。

今回の報告対象となる調査地点は、以前は駅南グラウンド又は JR グラウンドと呼称される野球場であった。敷地内の北西隅（第 13・4 次北西部）には野球用ネットがあり、第 28 次地点は内外野に該当し、一部には芝生が張られ、敷地周囲は錆び付いた網が巡らされていた。

このグラウンドは、野球場として使用されていたが行事やイベントが催される際は、その会場としても活用されていた。その一例として、サーカス会場が挙げられる。大分市では現在も続いているが、定期的にサーカスが開かれていた。その会場は、赤や青・緑といったカラフルな天井をした大きなテント形式であり、ある程度の客席も設けられていた。大道遺跡群第 4・5・21・28 次調査では、サーカステントを固定するための掘削坑が円弧状に 2 列確認されていることから、本グラウンド内では 2 回開催されたことが分かる。その一つが 1990 年に上演された分に該当すると思われる。第 5 図にあるように、このサーカスは著名人がスタッフとして構成され、ファッショナブルでミュージカル風なスタイルで話題となったようである。現在は、このようなイベントは大分



第4図 平成9年大分駅周辺空中写真



第5図 '90 キグレ NEW サーカスチラシ



第6図 建設中の複合文化交流施設『ホルトホール大分』

参考文献

- 大分市教育委員会 2008『大道遺跡群1』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4
 大分市教育委員会 2009『大道遺跡群2』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5
 大分市教育委員会 2010『大道遺跡群3』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6
 大分市教育委員会 2011『大道遺跡群4』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7
 大分市教育委員会 2012『大道遺跡群5』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8

市東部の松岡に所在する総合運動広場で主に催されている。このように野球場やイベント場として、ながらく市民に利用された広場は、平成25年7月に竣工予定の複合文化交流施設「ホルトホール大分」としてリニューアルされる。

「ホルトホール大分」は、県都大分市の中心部、100mシンボルロードの正面に位置する。「人と文化と産業を育み、創造、発信する新都心拠点」を基本理念に、駅南・情報文化新都心の中核的な施設となることをめざし建設中である。ホルトホール大分内部には、1200名収容可能な大ホール、市民図書館、総合社会福祉保健センター、保育所、カフェレストラン、屋上公園といった、文化・教育・福祉等に関する多種多様な施設が配置され、情報・文化の中心として充実した機能を有している。

駅南という地区は100年前に大分駅が開通したことにより必然的に発生した。その頃は、大半が耕地であった地域が、今は、現代的な建物が建ち並ぶまちへと変わり、大分市の中でも歳月の流れを感じることができる代表的な地域である。これから約100年は、新たに情報文化新都心として、新大分市の中心として22世紀に向かおうとしている。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回報告する大道遺跡群第 21・28・31・34・36・37 次調査は、平成 25 年 7 月に竣工予定である複合文化交流施設「ホルトホール大分」建設地地点に該当する、区画整理以前は駅南グラウンドと呼ばれる、野球場やサーカス会場等で利用される広場であった。

第 28・31・36 次調査地では、平成 15 年度に実施した大道遺跡群第 4・5 次調査で確認された大溝と呼称される、幅約 4 ~ 6 m の溝跡が引き続き検出された。これらの成果を総合すると長さ約 200 m に渡って、大溝が構築されていることが判明した。本溝跡は出土遺物から 8 世紀後半～9 世紀前半頃に機能・廃絶したと考えられる。古墳時代の遺構分布については、第 28・31 次地点において井戸跡・廃棄遺構等が認められている。第 20・23・32 次地点で確認された推定環濠跡と位置づけられている古墳時代前期の溝跡と近時する時期であることから、集落域が第 28・31 次地点まで広がっていることが確認された。また、これまで大道遺跡群では事例が少なかった古墳時代後期の遺構・遺物も第 28 次地点を中心に散見されたことは、注目される所見である。弥生時代の遺構は、第 21・34 次地点で検出された。第 34 次調査地は第 21 次調査段階でネットフェンス等が建っていたため未掘になっていたエリアである。両調査地点を跨るような状況で、弥生時代後期前葉の土器群を一括廃棄した土坑が確認されている。出土した土器群には外来系要素が看取されるものも含まれ、当該時期の良好なセット資料といえる。

調査は、第 21 次調査が平成 18 年 12 月 25 日～平成 19 年 3 月 28 日、第 28 次調査が平成 20 年 9 月 1 日～平成 21 年 3 月 13 日、第 31 次調査は平成 21 年 6 月 18 日～8 月 31 日、第 34 次・36 次・37 次調査は平成 22 年 2 月 1 日～3 月 16 日にかけて実施している。

第 2 節 大道遺跡群第 21 次調査・第 34 次調査

(1) はじめに

第 21・34 次調査は、同一敷地内を、年度を分けて実施したものである。調査では、掘立柱建物跡、溝跡、廃棄遺構及び無数のピット群を検出している。出土遺物から、確認された遺構群は弥生時代後期・古墳時代前期・近世後半期の大きく 3 期に区分される。

(2) 基本層序

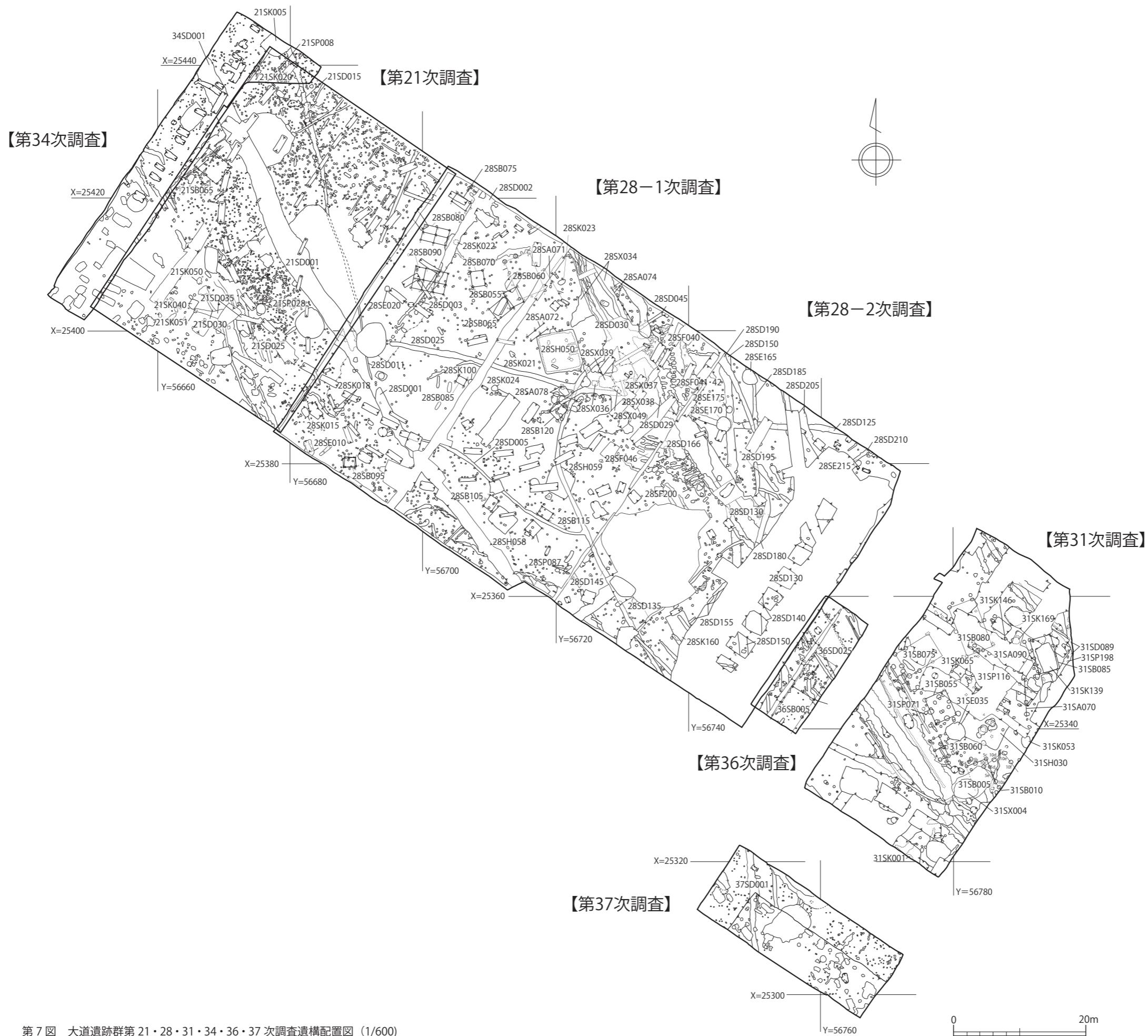
表層で認められる砂利層、客土層を除去すると耕作土層が確認される。耕作土を掘り下げると基盤層である黄灰褐色土が表出する。多くの遺構は基盤層から掘り込まれていることから、調査は黄灰褐色土を検出面として実施した。

(3) 遺構

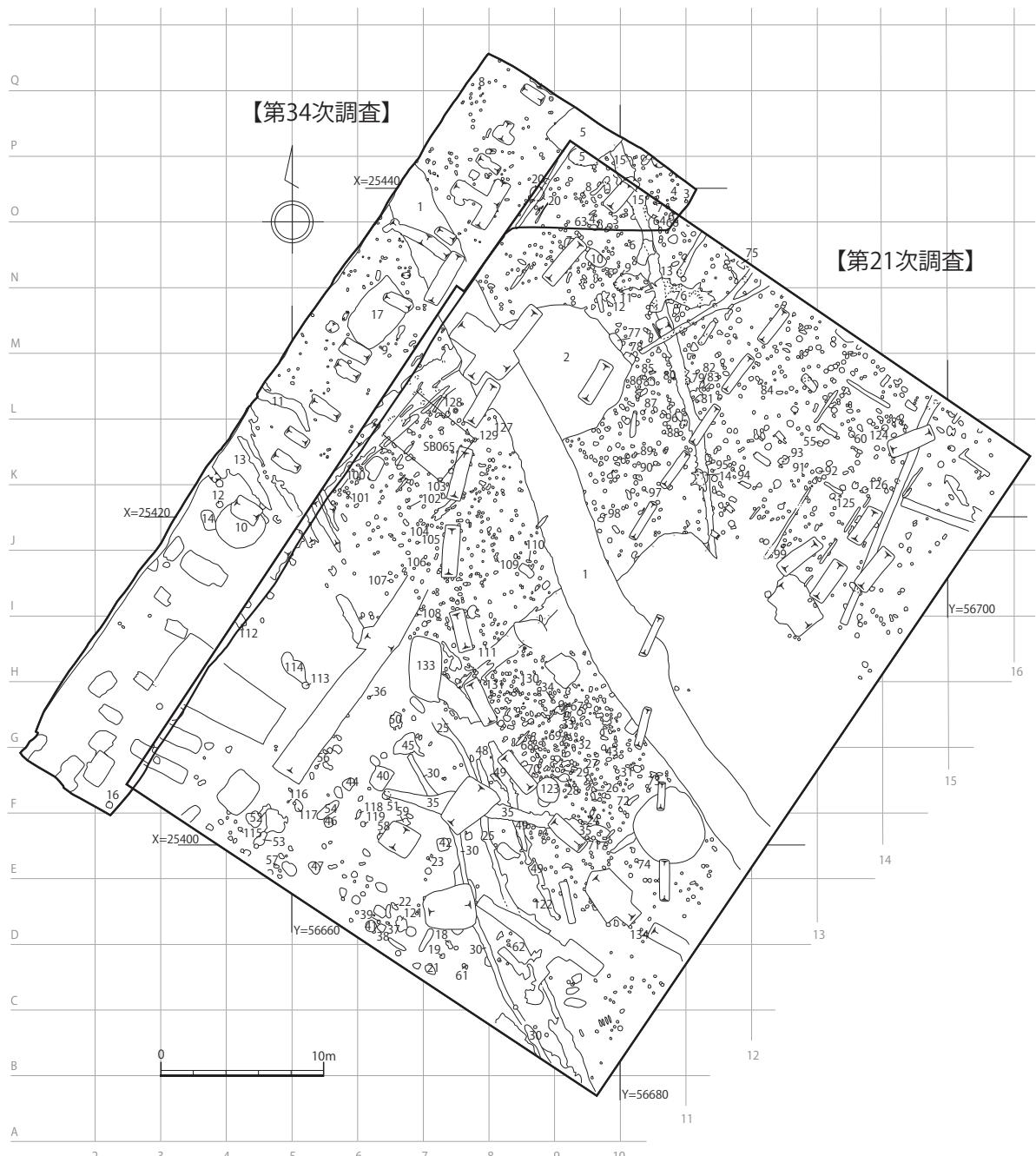
掘立柱建物跡 (SB)

21SB065 (第 10 図)

第 21 次調査区北西部 O6 グリッドから L7 グリッドで検出した梁行 1 間、桁行 2 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-40° -E を指向する南北棟である。柱間は梁行 3.35 ~ 3.48m、桁行 2.25 ~ 2.4m を測る。柱間総距離は梁行 3.48m、桁行 4.45m で、身舎面積 15.5 m² である。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.2 ~ 0.3 m、楕円形プランは長径約 0.4m、深さは 0.2 ~ 0.4m を測る。柱穴の基底部の標高は 4.4 ~ 4.5 m で、南東方向に傾斜している。柱穴 b から染付碗などの国産磁器の破片が出土しており、近世以降の時期に位置づけられる。



第7図 大道遺跡群第21・28・31・34・36・37次調査遺構配置図（1/600）





第9図 大道遺跡群第21次調査遺構全体図 (1/400)

溝跡 (SB)

21SD001 (第9図・第11図)

第34次調査の西側O6グリッドから第28-1次調査南側中央G11グリッドで検出した南北方向に延びる溝跡である。遺構の北端と南端は調査区外に延びるため、全貌は不明である。主軸方向はN-28°-Wである。第34次調査から第28次調査に至る全長91.0m、幅約1.5～4.0m、検出面からの深さ約0.28mを測る。断面形状は緩い逆台形状で、底面には凹凸が認められる。埋土は灰褐色粘質土を基調とし、第5層は灰褐色砂質土である。少なくとも1回以上の掘り返しが行われ、構築当初のプラン内の北側4分の3程度で掘り返されており、溝として機能していた部分の規模は狭くなっている。出土遺物は、第1・2層で国産陶器や国産磁器などが大量に出土している。出土遺物から18世紀中頃から19世紀頃の所産と考えられる。

21SD015 (第9図)

第21次調査区北部O9グリッドからF12グリッドにかけて検出した調査区を斜行する溝跡である。溝跡の両端は調査区に区切られているが、南端は28-1SD011と接続すると考えられる。主軸方向はN-14°-Wで、ほぼ直線的である。検出長38.0m、幅0.2～0.3mを測る。遺物は、古墳時代の小破片が出土している。本溝跡と同一遺構である28-1SD011が28-1SD005の延長部分である可能性が高いことから、21SD015は同時期の古墳時代後期後半頃の所産と考えられる。28-1SD005や28-1SD045などと同様に小区画を形成する溝跡であると考えられる。

21SD030 (第9図・第11図)

第21次調査区中央南側F6グリッドからB8グリッドにかけて検出した。F6グリッドで21SD035に切られ、南端は調査区外に延びている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-27°-Wである。検出長約20.0m、幅約0.4m、検出面からの深さは0.14mである。断面形状は段掘り状で、第1層でやや深く掘りこんでいる。埋土は黒褐色土を主体とし、第2層は黄灰褐色砂質土ブロックを含む黒褐色土で人為的に埋積されたと考えられる。出土遺物から弥生時代後期後半頃の所産と考えられる。

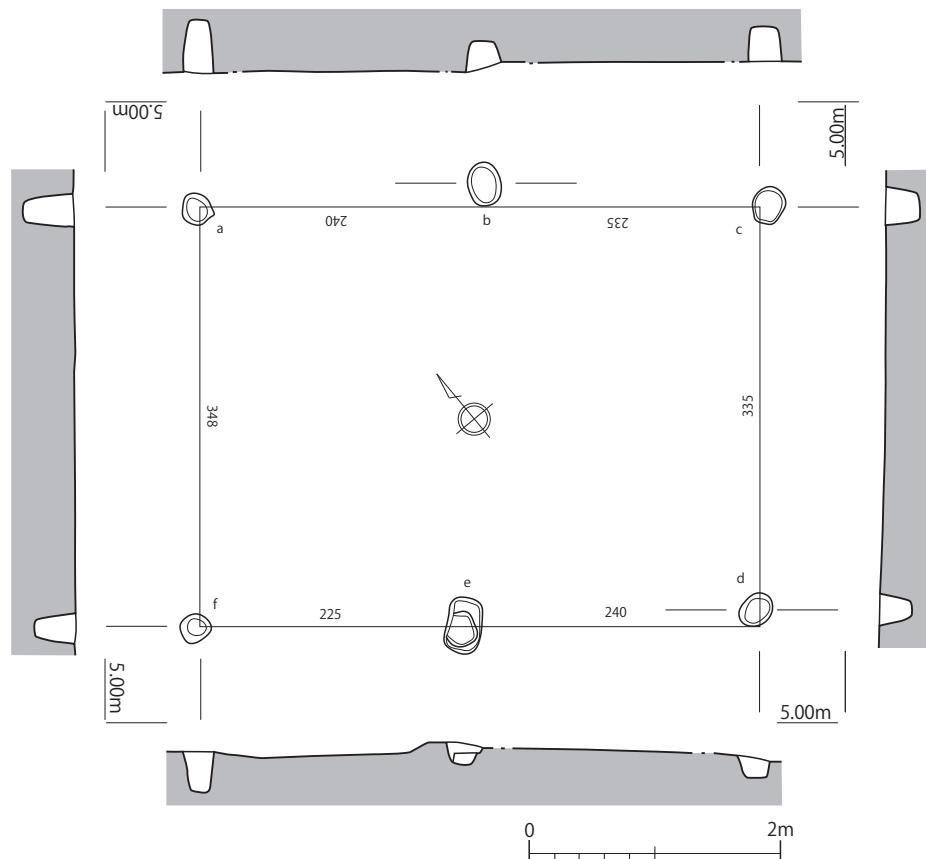
21SD035 (第9図・第11図)

第21次調査区中央南側F6グリッドからE11グリッドにかけて検出した東西方向に延びる溝跡である。21SD030を切り、東端は調査区に切られている。攪乱などで削平されているが、28-1SD025の延長部分と考えられる。ほぼ直線的で、主軸方向はN-11°-Eである。検出長約20.0m、幅約0.4m、深さ0.14mである。断面形状は逆台形を呈する。褐色を基調とする埋土で、黄褐色土粒を含む。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は古式土師器壺・甕、弥生土器壺・甕破片、ミニチュア土器が出土している。出土遺物と21SD030との切り合い関係などから、弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の所産と考えられる。

土坑 (SK)

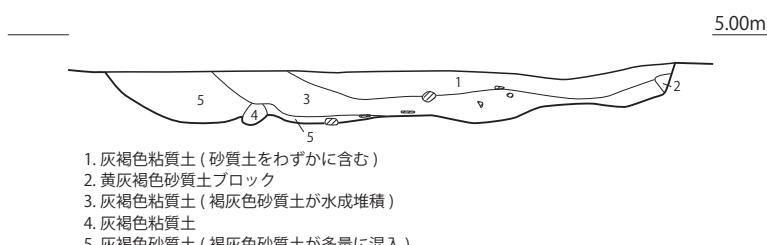
21SK005/34SK005 (第12図)

第21・34次調査区北部P8グリッドからP9グリッドにかけて検出した。北側は調査区に切られている。平面プランは不整形な方形を呈し、長軸約3.7m、短軸は約2.5+αm、深さ約1.5mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土第3層はブロック土を含む黒黄褐色土の混土で埋積されており、人為的に埋められたと考えられる。第4・6層は砂質土、第5層は黒褐色泥質土である。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は弥生土器が主体であるが、第3層で中世の土師器壺破片が出土していることから、最終埋没時期は当該期であると考えられる。



第10図 21SB065 遺構実測図 (1/60)

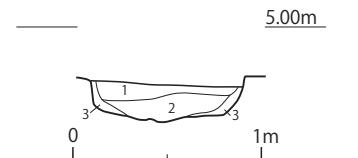
〈SD001〉



〈SD030〉



〈SD035〉



第11図 第21次溝跡土層断面実測図 (1/40)

21SK020/34SK020（第12図）

第21・34次調査区北部O9グリッドで検出した。第21次調査で遺構の東側部分を、第34次調査で西側部分を検出した。平面プランは円形を呈し、長軸約2.5m、短軸約1.86m、深さ1.78mを測る。断面形状はU字形を呈する。埋土は単一層で、土器を多量に含むことから一度に埋められたと推定され、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。遺物は弥生土器高杯・鉢・壺・甕が出土しており、ほぼ完形の状態であった。また、搬入品と思われる高杯や複合口縁壺なども出土しており、外部地域との交流の状況を示している。出土遺物から、弥生時代後期前葉から中葉頃と考えられる。

21SK040（第12図）

第21次調査区中央南西部分F6グリッドで検出した。平面プランは不整形な円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.4m、検出面からの深さは0.86mである。標高4.4m、4.0m付近では壁面が抉れている。埋土は、第2・3層は褐茶色粘質土、第4層から7層は褐色を基調とする砂質土で下位ほど砂質が強い。井戸跡である可能性が考えられる。土層観察から不整合がみられ、少なくとも2回の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は第7層で多く出土する。出土遺物から、弥生時代後期後葉から終末期頃と考えられる。

21SK050（第12図）

第21次調査区中央南西部分G6グリッドで検出した。平面プランは橢円形を呈する。1段のテラスをもち、長軸0.8m、短軸0.63m、深さ0.38mを測る。断面形状は、逆台形を呈する。埋土は褐色を基調とする砂質土で埋積されている。遺物は少量であるが、第1層から複合口縁壺の口縁部、ほぼ完形の甕などが出土している。出土遺物から、弥生時代後期前葉～中葉頃と考えられる。

（4）出土遺物

出土遺物の概要

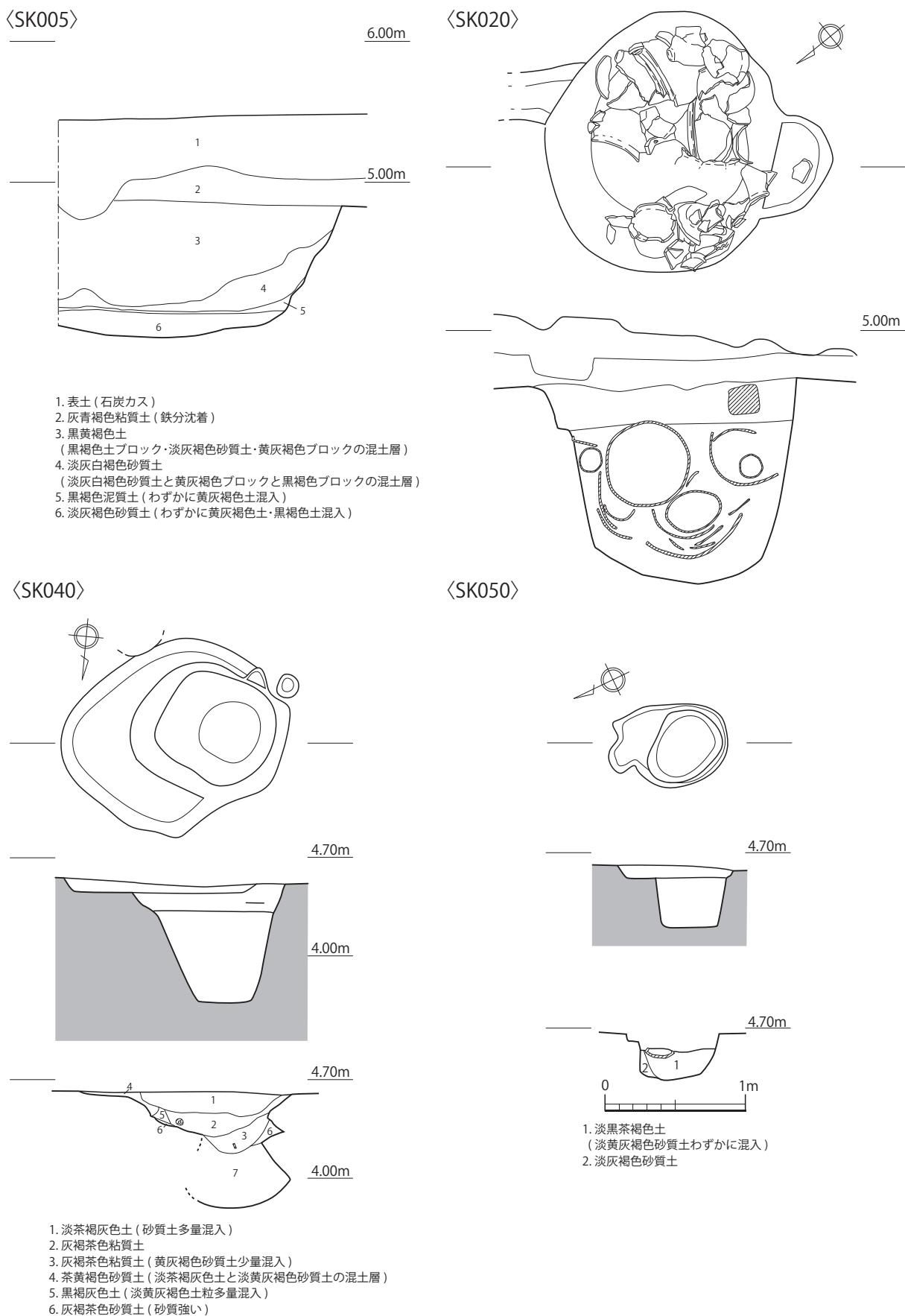
第21次調査では、弥生時代から近代までの幅広い時期にわたる遺物がコンテナ27箱分が出土している。破片資料が多くを占めるが、その中において一括廃棄遺構であるSK020からは、弥生時代後期前葉～中葉頃の所産とされる土器群が良好な状態で出土している。器種は壺・甕・鉢・高杯で構成され、これら土器は、完存もしくは接合後に完形に近い形状まで復元することができる。当該時期の良好な一括資料と評価される。その他、周辺の調査地点と同様に汽車土瓶の破片が認められる。遺跡の立地する環境が、大分駅の周辺であったとことを特徴づける貴重な資料といえる。

以下では、主要な遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載・報告を行う。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表（表16・17参照）にて報告している。また全遺構の出土遺物については、遺構一覧表（表2・3参照）に主なものについて掲載している。ここでは、特に重要と思われる遺物についてのみ述べる。

21SK020出土遺物（第13図～第17図）

高杯（第13図4・5）

4は、外来系要素をもった高杯で、重量感がある。浅い皿状を呈す杯部から、短く直線的に外反して口縁部へと移行する。口縁端部は平坦であるが、中央部分がやや窪む。脚部は全体的に器壁が厚い。裾端部は強いナデの影響か沈線が形成され、そのため短く上下へ突出する。裾端部の側面にも1条の沈線が認められる。最終調整として全体にミガキが施される。杯部内面は中心から放射状に、杯部外面は円弧をおよそ8分割して横方向に、脚部は縦方向に螺旋状のミガキが施されている。穿孔は5箇所あり、外側から内側に向かってあけられている。また、



第12図 第21次土坑遺構実測図 (1/40)

剥落しているものの外面には赤色塗彩が行われていたと判断される。5は在地系の高杯の壺部である。壺部底面から、ラッパ状に口縁部が外反しながら開く。

台付鉢（第13図8・9）

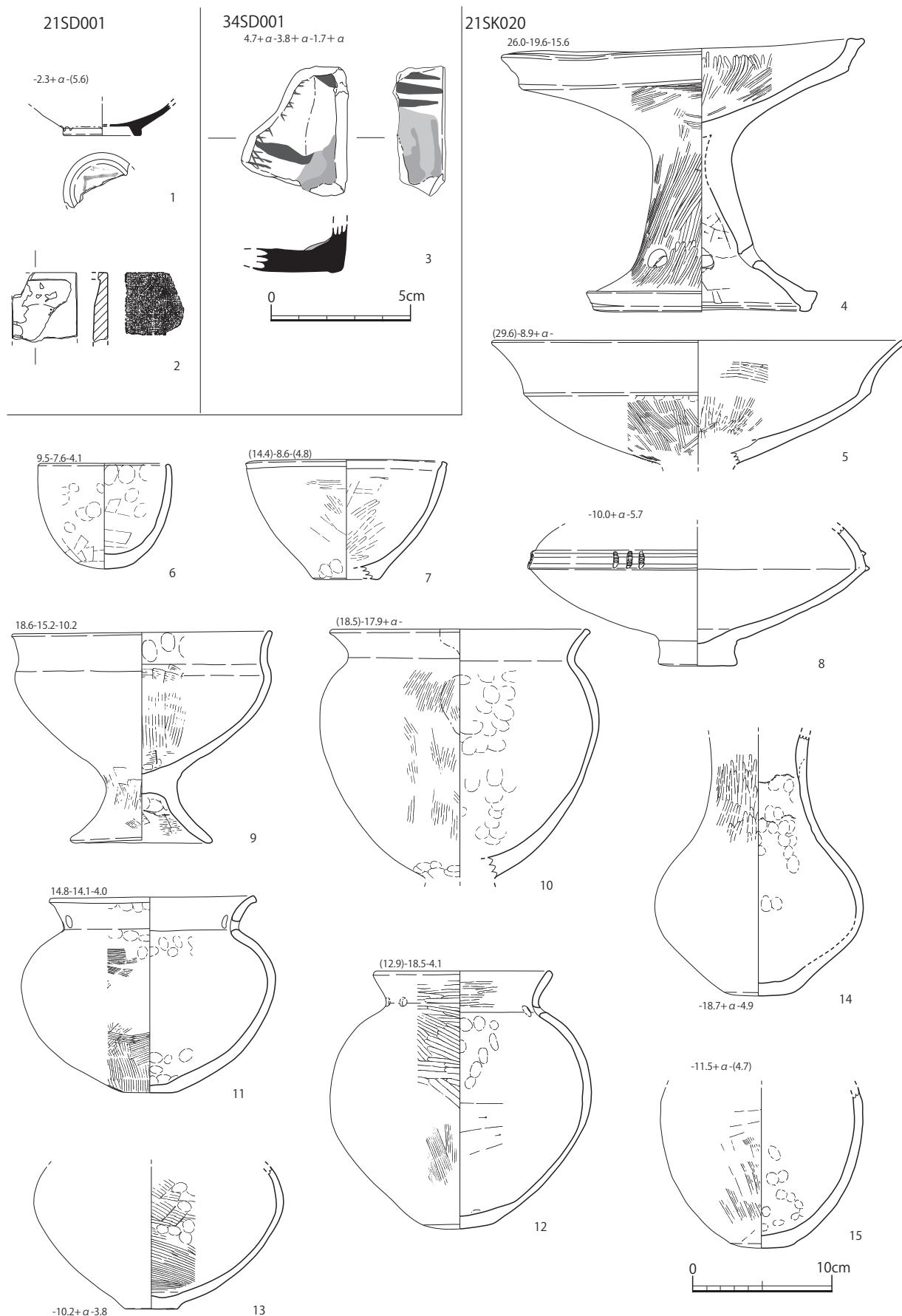
8はしっかりと厚手の平底に浅い皿状の胴部を持つ。胴部中位は強く張り出し、外面は2条の細い突帯で区画した中に、3個を1単位とした草鞋状の浮文が現状で5箇所確認される。胎土は石英が少量含まれているが、全体に混和材は少なく精製土を使用している。器面は大部分が磨耗しているが、残存部の一部から丁寧なミガキで仕上げられていることがわかる。一部において被熱痕が看取される。胴部の残存具合から、蓋の可能性も考えられる。9は口縁部が頸部からやや内側に屈曲して、外方へと反った形状で立ち上がる。内面には底部から縦方向に放射状にハケ目が施される。外面は磨耗しており調整は不明瞭であるが、部分的な痕跡から丁寧なナデを確認することができる。

壺（第13図10～15・第14図・第15図）

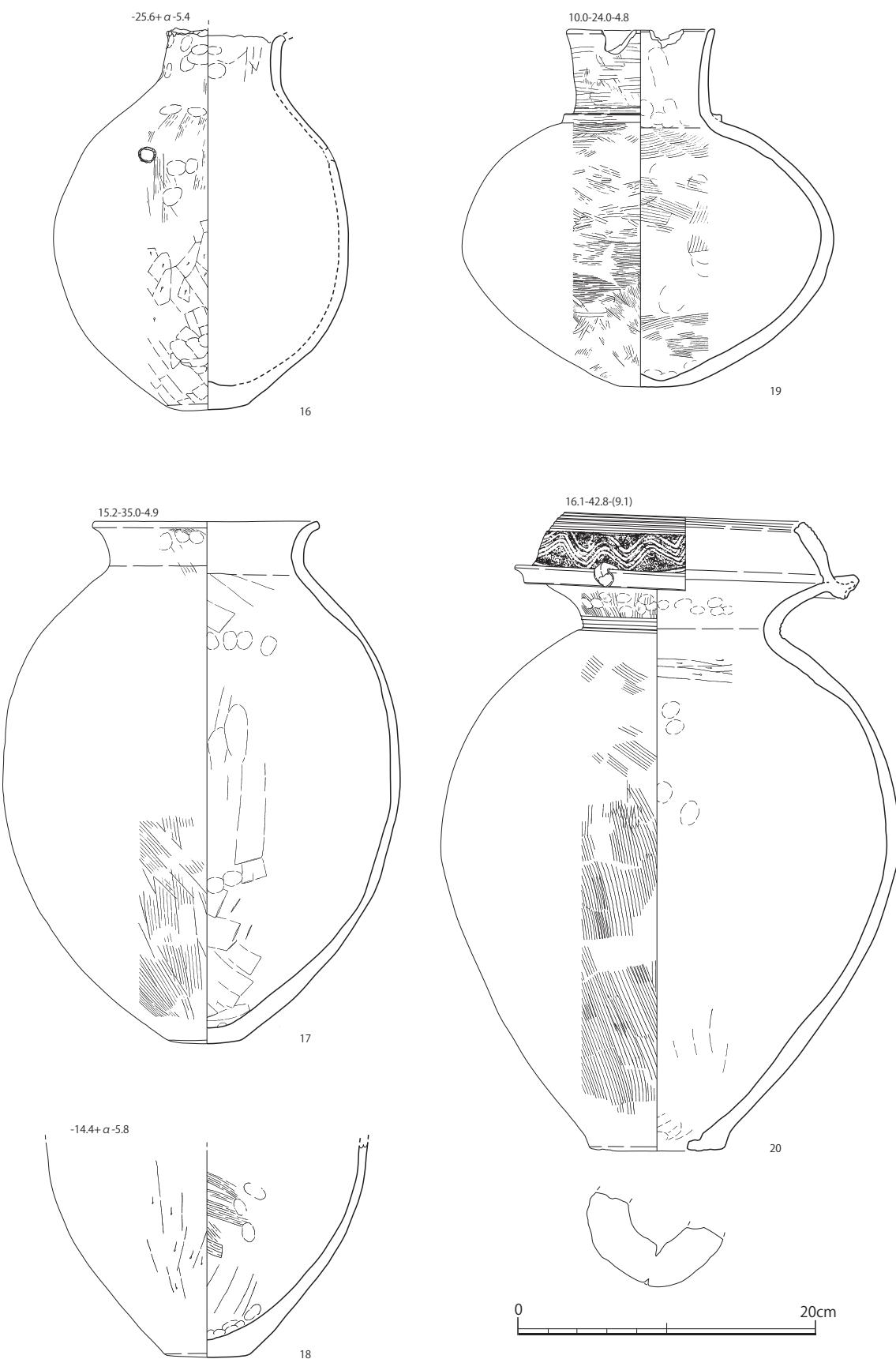
10～13は短頸壺で、全て体部中位が強く張り出す形状をしている。11、12は頸部に2箇所ずつの穿孔が認められる。11は、外面をミガキで仕上げた後に赤色塗彩が施される。12は完存資料である。全体的に丁寧な作りである。底部は凸レンズ気味の平底を呈する。14は長頸壺、16～18は素口縁壺、20～22は複合口縁壺である。14は体部中位が張り出し、緩やかに長く伸びる頸部へと移行する。頸部外面には細かく縦方向のミガキが施される。16はやや下膨れの体部から直線的に短く延びる頸部、口縁部へといたる。口縁端部には打ち欠きが、体部上位には外面から丁寧に穿孔が施されている。体部中位から下位にかけては斜め方向を基調とする細かいヘラケズリを行った後、最終調整のナデにより全体的に丸みをもった器形をなしている。17は体部中位が強く張り出し、直立する口縁部を有す。口縁端部には対面するように小さい穿孔が認められる。体部と頸部の境には断面三角形状の突帯が貼り付けられる。外面は全面ミガキで仕上げられ、赤色塗彩が施される。20は口縁部外面には多重沈線と波状文が刻まれる。複合部分には浮文状の小形の粘土塊が2箇所認められ、あわせて鐸状の突出部も確認できる。口縁端部上面と頸部と体部の境にも沈線が施される。最終的に丁寧なナデで仕上げられている。胴部中位に最大径を有すことから、張り出したような形状になる。底部は内面にユビオサエ痕が顕著に残る。しっかりとした平底で中心部分に穿孔が行われる。21・22は安国寺式の壺である。21は倒卵形の胴部を呈し、底部は平底である。肩部には2条の断面三角突帯が巡り、勾玉状の浮文が貼り付けられている。また、胴部中位には3条の断面三角突帯が認められる。口縁部側面には2単位の波状文の上から1条の波状文を重なるように施している。実測図中には表現されていないが、胴部中央部を大きく破碎している。また、内面は被熱のため表面が痘痕状の剥離が顕著に見られる。22も21と同様の特徴を示すが、胴部の最大径が上位から下位にかけて認められることから、やや橢円形状を呈している。底部は平底である。口縁側面には、2単位の波状文が刻まれる。器表面にはクレータ状の、内面には痘痕状の剥離痕跡が数多く認められる。胴部中央付近は大きく打ち割られている。

甕（第16図・第17図）

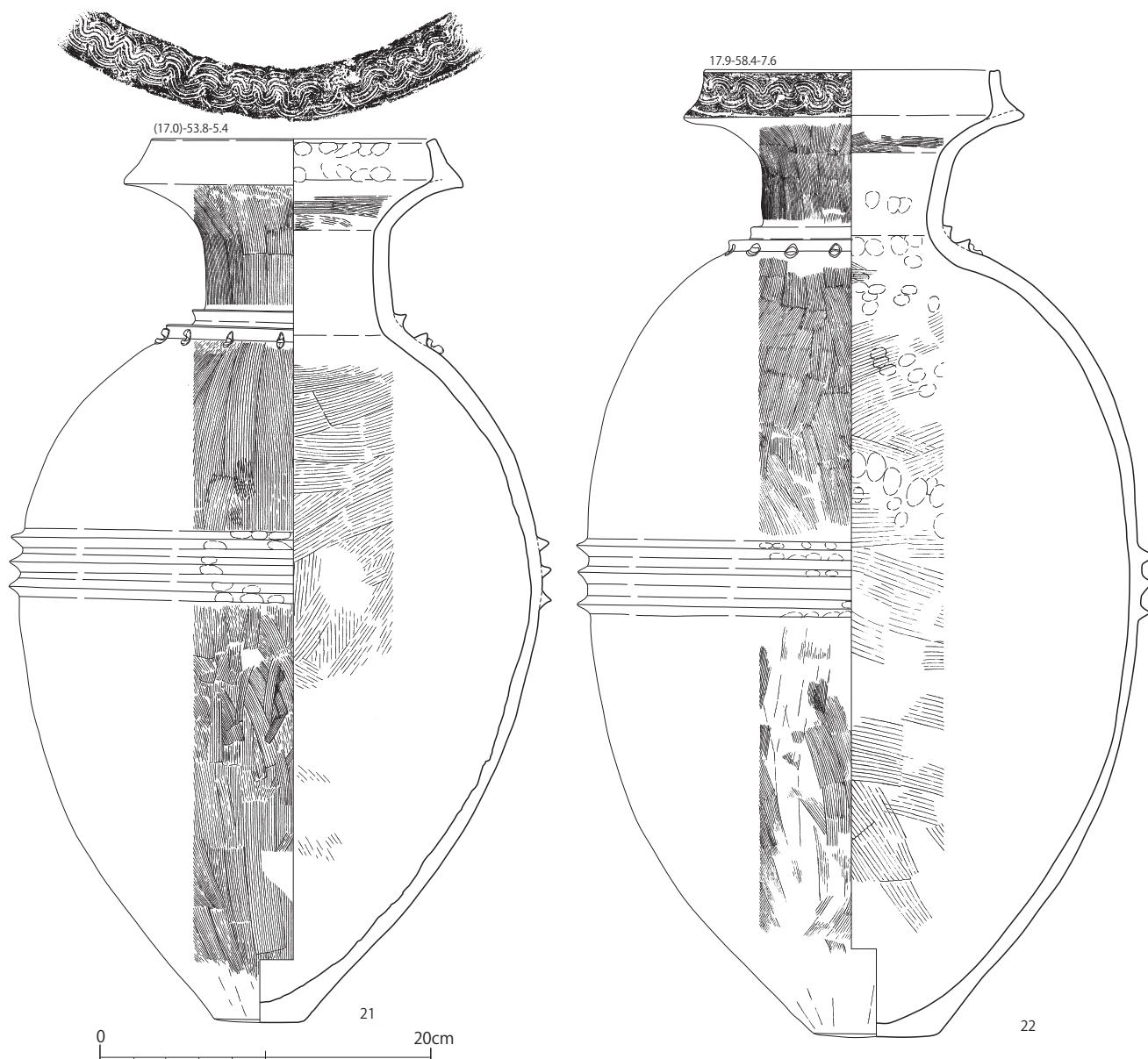
甕は器高から大きく小・中・大の3タイプに区分できる。23～26は器高20cm前後の小タイプ一群である。全て口縁部はくの字に外反するが、25は他と比べ口縁部がやや長く、ラッパ状に開き、端部は鋭角である。また、胴部の形態は上位がやや張り気味である。24は胴部と口縁部の境にユビオサエの影響による段を残す。底部はそれぞれ上げ底状である。27～30は器高30cm前後の中タイプの一群である。小タイプと同様口縁部は全てくの字口縁である。また、底部においては27～29は上げ底状、30はしっかりとした平底である。27と28は全体形状から比較すると底部は小さい。31、32、33は器高40cm前後の大タイプである。底部は上げ底状で、全体形状から比べると小形である。31は内面に縦方向のヘラケズリが行われている。33は胴部中位に最大径を有し、小形の上げ底状を呈す底部に向かって窄まっていく形状をしている。短く直立する頸部から緩く外反する口縁部へと移行する。



第13図 21SD001・SK020 遺物実測図1 (1/4 3のみ 1/2)



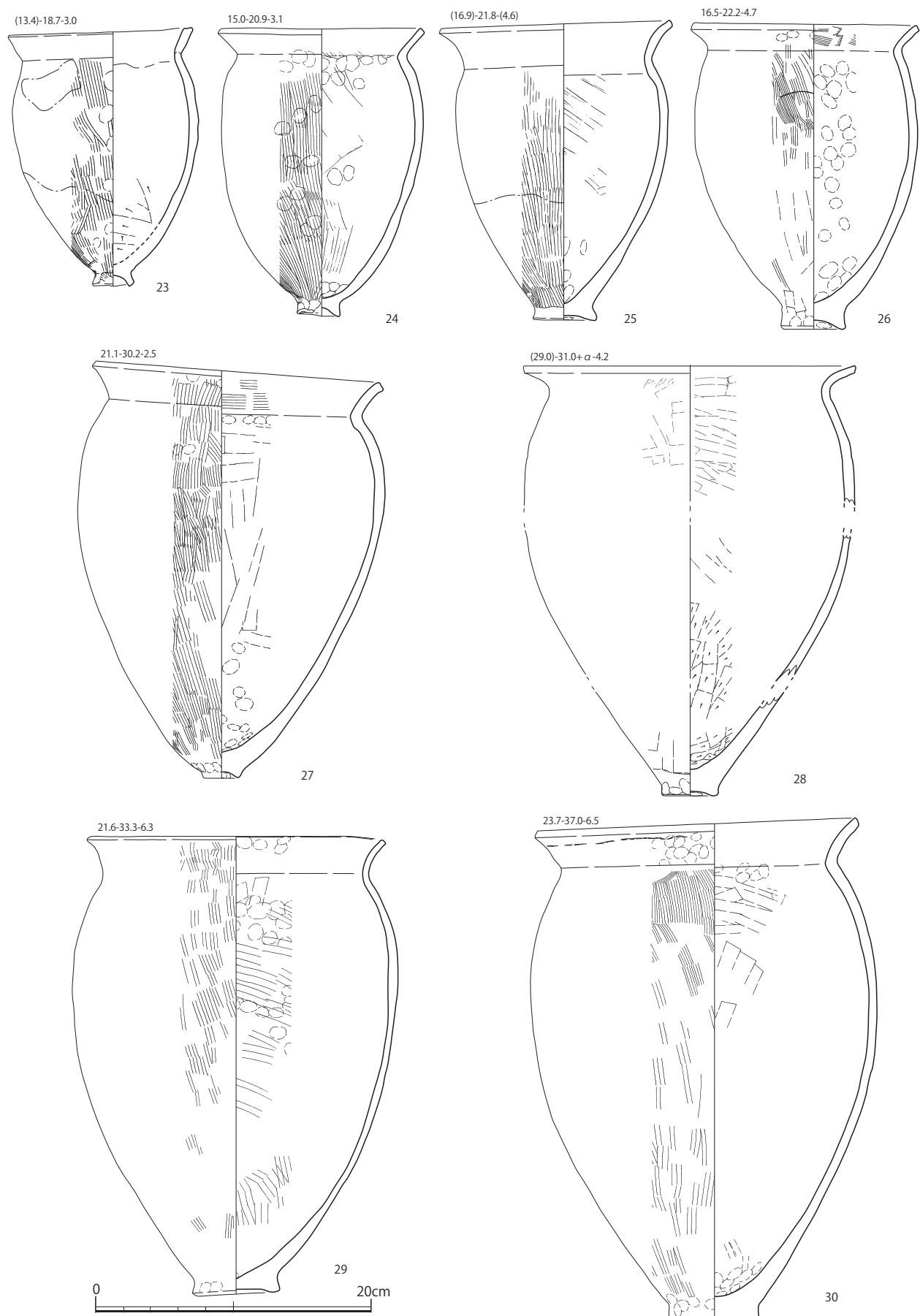
第14図 21SK020 遺物実測図2 (1/4)



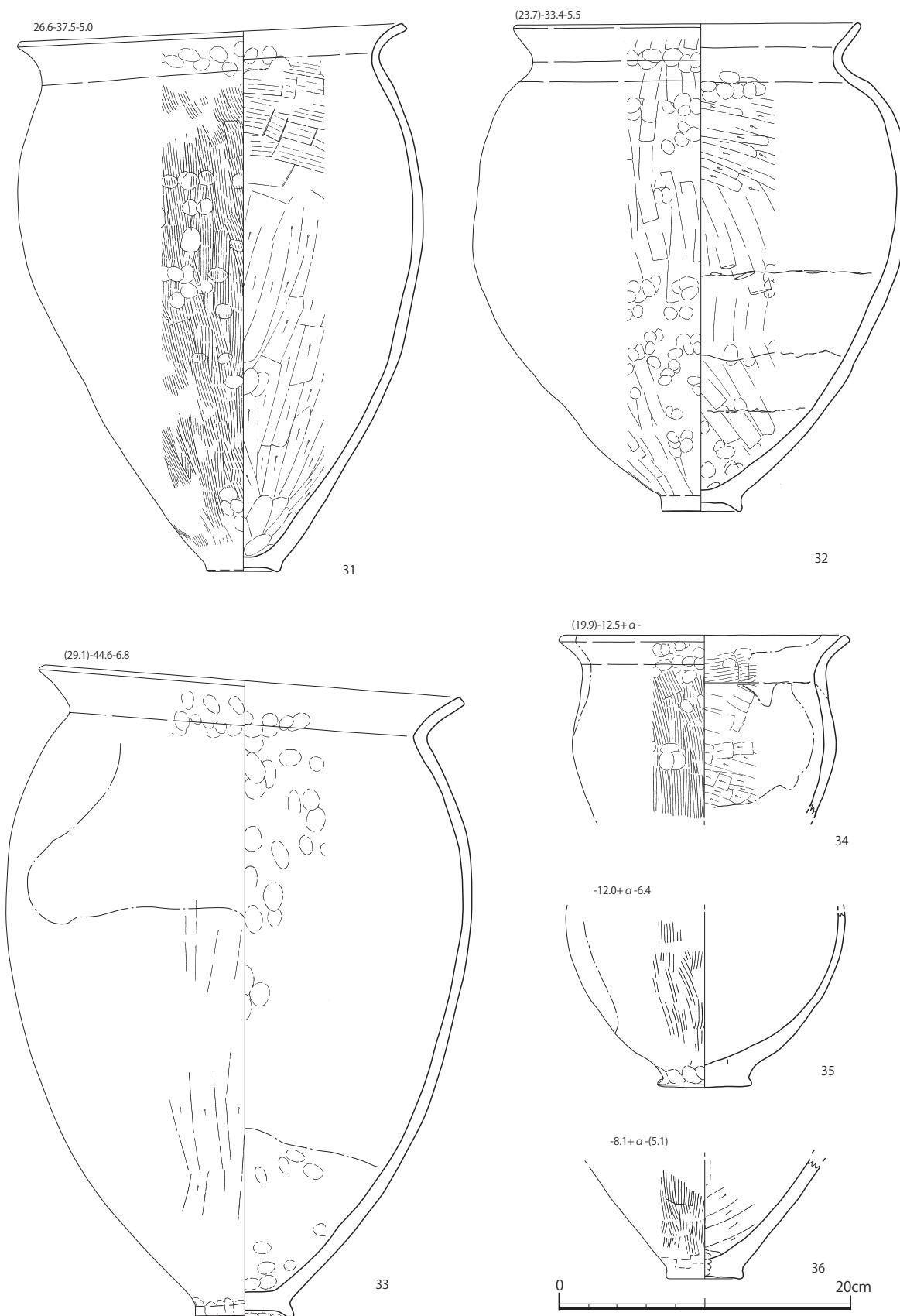
第15図 21SK020 遺物実測図3 (1/4)

土器群の時期であるが、甕については胴部上位が張る形状が目立ち、底部は胴部の大きさに比して小形の上げ底のタイプを主体とする。土器の諸特徴から弥生時代中期末からの名残を残していると判断される。但し、第16図23・24・26・30のような口縁部の屈曲が緩く、胴部中位の径が大きくなるといった新しい様相を示すものも散見される。壺については、21・22は複合口縁部と櫛描波状文のセット関係を示し、頸部周辺には浮文と突帯の貼り付けが目立つといった特徴が認められる。また、全般に安定した平底であるが、16・18はやや凸レンズ状を呈している。甕と壺の特徴を比較すると甕の方が古い段階の特徴を残しており、壺は底部形状等に新出の要素を認める能够といつた特色が窺える。

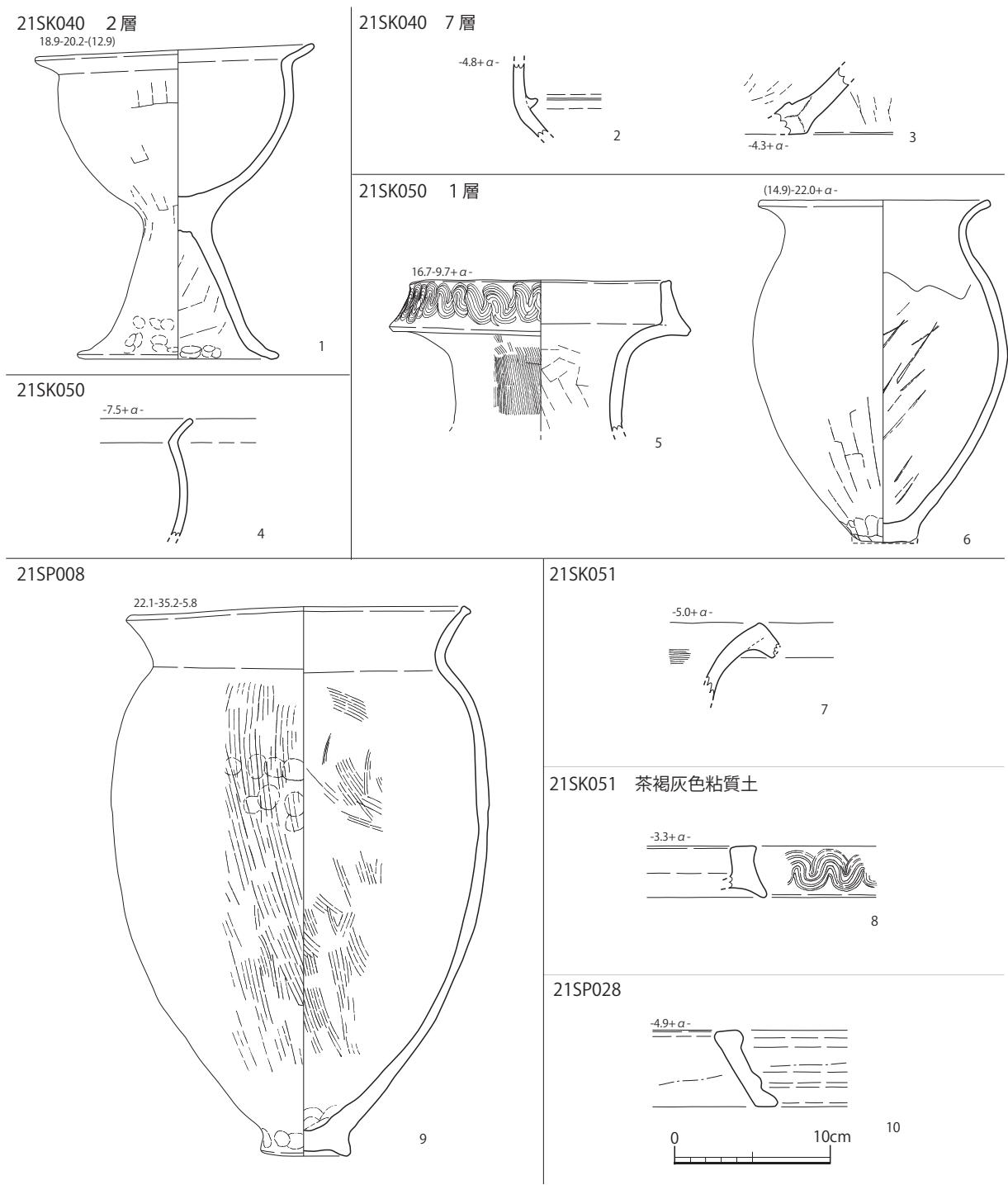
これらの土器群に類似する資料として、下郡遺跡群第120次調査SD1200出土土器群が挙げられる。これらは弥生時代後期前葉～中葉頃として位置づけられており、本資料についてもおおむね同じ時期の所産であると考えられる。



第16図 21SK020 遺物実測図4 (1/4)



第17図 21SK020 遺物実測図5 (1/4)



第 18 図 第 21 次土坑・柱穴遺構遺物実測図 (1/4)

21SK050 出土遺物 (第 18 図)

5 は弥生土器複合口縁壺の頸部から口縁部の破片である。形状や施文等から 21SK020 出土遺物と同時期の所産のものである。

第2表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳1

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
1	SD001	溝状遺構	肥前染付碗 唐津壺 関西系陶器(墨書) 汽車土瓶 石硯 京都系土師器		近現代	E12
2		大型土坑	肥前染付碗・小壺・仏飯具 陶胎染付碗	2→77	18世紀代～	L9
3		ピット	土師器破片			O8
4		ピット	土師器破片			O8
5	SK005	土坑	弥生土器壺・鉢・複合口縁壺 土師器壺・壺底部(中世)		中世?	P8
6		ピット	古式土師器破片			N9
7		土坑	土師器鉢×壺			N9
8	SP008	ピット	弥生土器壺		弥生時代後期 前葉	N9
9		ピット	土師器破片	9→搅乱		N9
10		土坑	土師器破片			N8
11		ピット		11→搅乱		M9
12		ピット				M9
13		土坑				N9
14		土坑	須恵器壺a	15→14	古代?	K10
15	SD015	溝状遺構	土師器高壺・壺 ミニチュア土器鉢		古墳時代後期 後半頃	O10
16			土師器壺a 弥生土器壺・壺・高壺			不明
17			弥生土器壺・壺・高壺		弥生時代	不明
18		ピット	土師器破片			C7
19		ピット	ガラス破片			C7
20	SK020	井戸×土坑	弥生土器壺・外来系高壺・短頸壺	20→不明遺構(溝?)	弥生時代後期 前葉	O7
21		ピット	土器破片			C7
22		ピット	弥生土器破片			D6
23		ピット	弥生土器破片			E7
24		ピット	土器破片	35→24		E8
25		溝状遺構	弥生土器壺・壺			B8
26		ピット				F9
27		ピット	土器破片			F9
28	SP028	ピット	土器破片(器種不明)			F9
29		ピット	土器破片			F9
30	SD030	溝状遺構	弥生土器壺・壺	30→35	弥生時代後期 後半頃	B8
31		ピット	古式土師器高壺			G10
32		ピット	土器破片			G9
33		ピット	弥生土器破片			G9
34		ピット	弥生土器高壺			G8
35	SD035	溝状遺構	古式土師器壺 ミニチュア土器鉢	35→24,71	~古墳時代前期	F7
36		ピット	土器破片			G5
37		ピット	弥生土器破片			D6
38		ピット	土器破片			D6
39		ピット	弥生土器破片			D6
40	SK040	土坑	古式土師器壺・壺・脚付鉢 弥生土器壺×壺底(平)		古墳時代前期	F5
41		土坑	弥生土器破片			D6
42		土坑	弥生土器破片			E6
43		ピット	弥生土器壺頸部 国産陶器皿(混入)			F8
44		土坑				F4
45		土坑	弥生土器壺底(平)・鉢		弥生時代後期	F5
46		土坑				E5
47		土坑	弥生土器破片			E5
48		溝状遺構?	国産陶器蓋 弥生土器壺・壺			F8

第3表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳2

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
49		溝状遺構？	弥生土器壺・壺	49→35		D8
50	SK050	土坑	弥生土器鉢 複合口縁壺 高坏脚		弥生時代後期 後葉	G6
51	SK051	土坑	肥前染付碗 土師器坏c 弥生土器壺口(安国寺祖 型?)		古代？	F6
52		土坑	弥生土器破片			E4
53		土坑	土器破片			E4
54		土坑	古式土師器壺			E5
55		ピット	古式土師器高坏脚			K13
56		ピット	弥生土器破片			F5
57		ピット	土器破片			E5
58		土坑				E6
59		土坑				E6
60		ピット	弥生土器壺頸部			K13
61		ピット	土器破片			C7
62		ピット	土師器破片			C8
63		ピット	土器破片			N8
64		ピット	土器破片			O10
65	SB065	掘立柱建物跡	土器破片		近世	K6
66		ピット				N9
67		土坑？	弥生土器破片			G9
68		ピット	弥生土器高坏			G8
69		ピット	弥生土器破片	69→33		G8
70		ピット？	弥生土器破片			F9
71		ピット	弥生土器破片	35→71		E9
72		ピット	土器破片			F10
73		ピット	土器破片			G10
74		ピット	土器破片			E10
75		土坑？	肥前染付破片		近世	N11
76		ピット	土器破片	76→搅乱？		M9
77		土坑	肥前染付破片			L9
78		土坑	肥前染付皿 関西系陶器破片	78→2	近世	L8
79		ピット	弥生土器破片	79→15		L10
80		ピット	弥生土器破片			不明
81		ピット	土器破片			L11
82		ピット？	古式土師器壺			L11
83		ピット	弥生土器破片			L11
84		ピット	土器破片			L12
85		ピット	土器破片			L10
86		ピット	土器破片			L9
87		ピット	弥生土器破片			L9
88		ピット	土師器破片			K9
89		ピット	古式土師器破片			K9
90		ピット	土師器破片			K9
91			土師器破片			K12
92		ピット	弥生土器壺破片			K13
93		ピット	土器破片			K11
94		ピット	壺破片			K11
95		ピット	土師器破片(古墳)			K10
96		ピット	土器破片			L10
97		ピット	土師器高坏口縁部			L10
98		ピット	弥生土器壺			不明

第4表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳3

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
99		ピット				J9
100		ピット	弥生土器破片			K5
101		ピット	土器破片			J5
102		ピット	古式土師器壺			J6
103		ピット	弥生土器壺			K7
104		ピット	土器破片			J6
105		ピット	土師器壺			J6
106		ピット	土師器高壺			I6
107		ピット	弥生土器破片			I6
108		ピット	古式土師器小型丸底壺			H6
109		ピット	土器破片			I8
110		ピット	国産陶器破片		近世	I8
111		ピット	土器破片			H7
112		土坑	土器破片			H4
113		ピット	土器破片	114→113		G5
114		土坑	弥生土器破片	114→113		H5
115		ピット	弥生土器破片			E4
116		ピット	弥生土器破片			F5
117		土坑	古式土師器壺			E6
118		土坑×ピット	弥生土器			E6
119		ピット	弥生土器			E6
120			弥生土器			不明
121		土坑	土師器壺・鉢			C11
122		ピット	土器破片			D8
123		土坑	汽車土瓶 肥前磁器小壺		近代	F9
124		ピット	古式土師器壺			K14
125		ピット				J13
126		ピット	古式土師器壺			J13
127		ピット	青磁碗破片(中国?)			K7
128		ピット	肥前染付碗 国産磁器水滴×玩具		近世	K7
129		ピット	土器破片			K7
130		ピット	弥生土器破片			G8
131		ピット	土器破片			G8
132						不明
133		土坑	古式土師器壺			G7
134		ピット?	土器破片			D10

第5表 大道遺跡群第34次調査遺構台帳

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
1	SD001	溝状遺構	国産陶器向付(織部)・灯火具(備前)・関西系皿・肥前端 反碗 いぶし瓦	1→カクラン	近現代	O7
2						
3		ピット	土器破片			O10
4		ピット	弥生土器壺破片			O10
5		土坑(21次)	土師器(古墳)破片	15→5		P9
6		ピット	土師器壺口縁部			O10
7		ピット	破片			O10
8		ピット	土器片			P7
9		ピット	高坏脚部片			M6
10		土坑	破片	10→14		J4
11		溝状遺構				L4
12		ピット				K3
13		溝状遺構	破片			K4
14		土坑	国産陶器陶胎染付破片 弥生土器壺口	10→14		J3
15	SD015	溝状遺構(21次)	土師器壺片	15→5	古墳時代?	J10
16		ピット				F2
17		土坑		17→カクラン		M6
18						
19						
20	SK020	井戸×土坑(21次)	弥生土器壺・壺		弥生時代後期 前葉	O8

第3節 大道遺跡群第28次調査

(1) はじめに

第28次調査は、旧駅南グラウンド敷地内を調査地点とする。調査では、掘立柱建物跡・竪穴建物跡・井戸跡・溝跡・廃棄遺構を検出しており、調査区北側及び南側に大きく遺構分布が分かれる。大溝 SD030 (SD130) の周辺からは、道路状又は通路状遺構が想定される連続土坑や波板状凹凸面が確認されており、大溝との関係及び性格を検討する上で留意する必要がある。

調査区中央～西側にかけて長方形土坑群が2列、円弧状に配置している。これは調査地が以前広場として利用されていた際サーカスが開催されており、その会場テントの基礎跡になるものである。第21次調査地でも同様な状況が看取され、総合すると会場テントは直径約70mの規模を有していたことが分かる。

調査は、土置き場を確保するため反転手法で実施し、便宜的に反転前を第28-1次、反転後を第28-2次として行っている。そのため、同一遺構で遺構番号が2つに分かれているものがあるが、報告では併記している。

(2) 基本層序

調査区は、表層から約0.5mにかけて表土や石炭ガラ、客土層があり、それらを除去すると近代～近世にかけての所産と推測される耕作土層を認めることができる。耕作土層を掘り除くと基盤層である黄灰褐色シルト層が現れ、調査はこの黄灰褐色シルト層を遺構検出面として実施した。検出面標高は約5.0mであり、表土から0.7m下位で遺構が確認される。

(3) 遺構

掘立柱建物跡 (SB)

28-1SB055 (第21図)

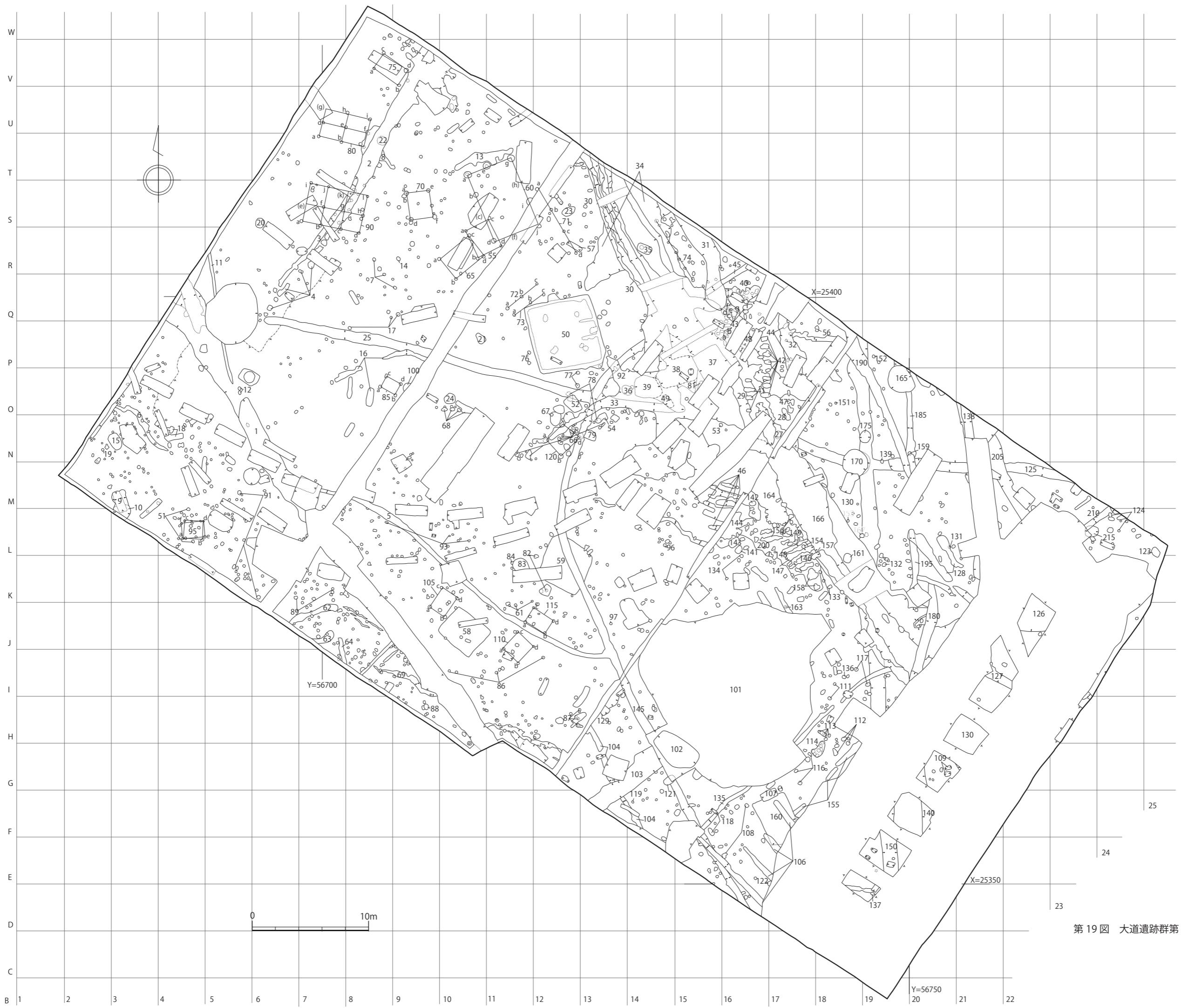
第28-1次調査区北東部分R10グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。28-1SB065と南側が重なって検出した。柱穴55cはサーカステント基礎に切られている。主軸方向はN-26°-Wである。柱間は東西間2.25～2.35m、南北間2.5～2.6mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.2～0.3m、深さは0.15～0.3mを測る。柱穴から遺物は出土していない。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB060 (第21図)

第28-1次調査区北部分S11グリッドで検出した梁行2間、桁行3間の掘立柱建物跡で主軸方向はN-20°-Wの南北棟である。柱穴60c・f・hは攪乱に削平されており確認できていない。柱間は梁行1.74～2.15m、桁行は西側柱穴60a・b間1.8m、東側柱穴i・j間2.2mを測る。柱間総距離は梁行4.15m、桁行6.2mで、身舎面積は25.7m²である。柱穴掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.45～0.6m、深さ0.15～0.4mを測る。深さが浅いことから柱穴の基底部がわずかに残存したものと考えられ、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。建物は28-1SD030に併行しており、関連する建物跡と考えられる。柱穴60b・d・e・gから遺物が出土しているが小破片である。第5次調査や第23次調査で検出した建物跡の主軸方向ともほぼ同じくしていることから、古代の同時期に機能していたと考えられる。

28-1SB065 (第21図)

第28-1次調査区中央北東部R10グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-37°-Wである。柱間は南北間2.2～2.32m、東西間3.16mを測る。柱穴の掘方は円形を呈し、直径約0.3m、深さ0.3



第19図 大道遺跡群第28次調査遺構配置図 (1/300)



第 20 図 大道遺跡群第 28 次調査遺構全体図 (1/300)・調査区北壁土層図 (1/100)

～0.35mを測る。柱穴65cから古式土師器の小破片が出土している。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB070（第22図）

第28-1次調査区北東部分S9グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-10°-Wである。柱間は東西間1.89～2.13m、南北間2.2～2.33mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.3～0.5m、深さ0.35～0.45mを測る。柱穴70a・b・cから古式土師器の小破片が出土している。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB075（第22図）

第28-1次調査区北部V8グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-36°-Wである。柱間は南北間1.45～1.51m、東西間2.45～2.6mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.2～0.35m、深さ0.08～0.25mを測る。柱穴から遺物は出土していない。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB080（第23図）

第28-1次調査区北部U7グリッドで検出した梁行2間、桁行2間の総柱建物跡である。柱穴80gは攪乱に削平され消失している。主軸方向N-15°-Eを指向する東西棟である。柱間は梁行1.25～1.3m、桁行1.84～2.04mを測る。柱間総距離は梁行2.51m、桁行3.88mを測り、桁行の東側の柱間間隔は西側より少し広くなっている。身舎面積は9.7m²である。柱穴の掘方は不整形な円形を呈し、直径約0.25m、深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の掘方が極端に小さく、後述する28-1SB090とあわせて中世段階の建物跡と考えられる。

28-1SB085（第23図）

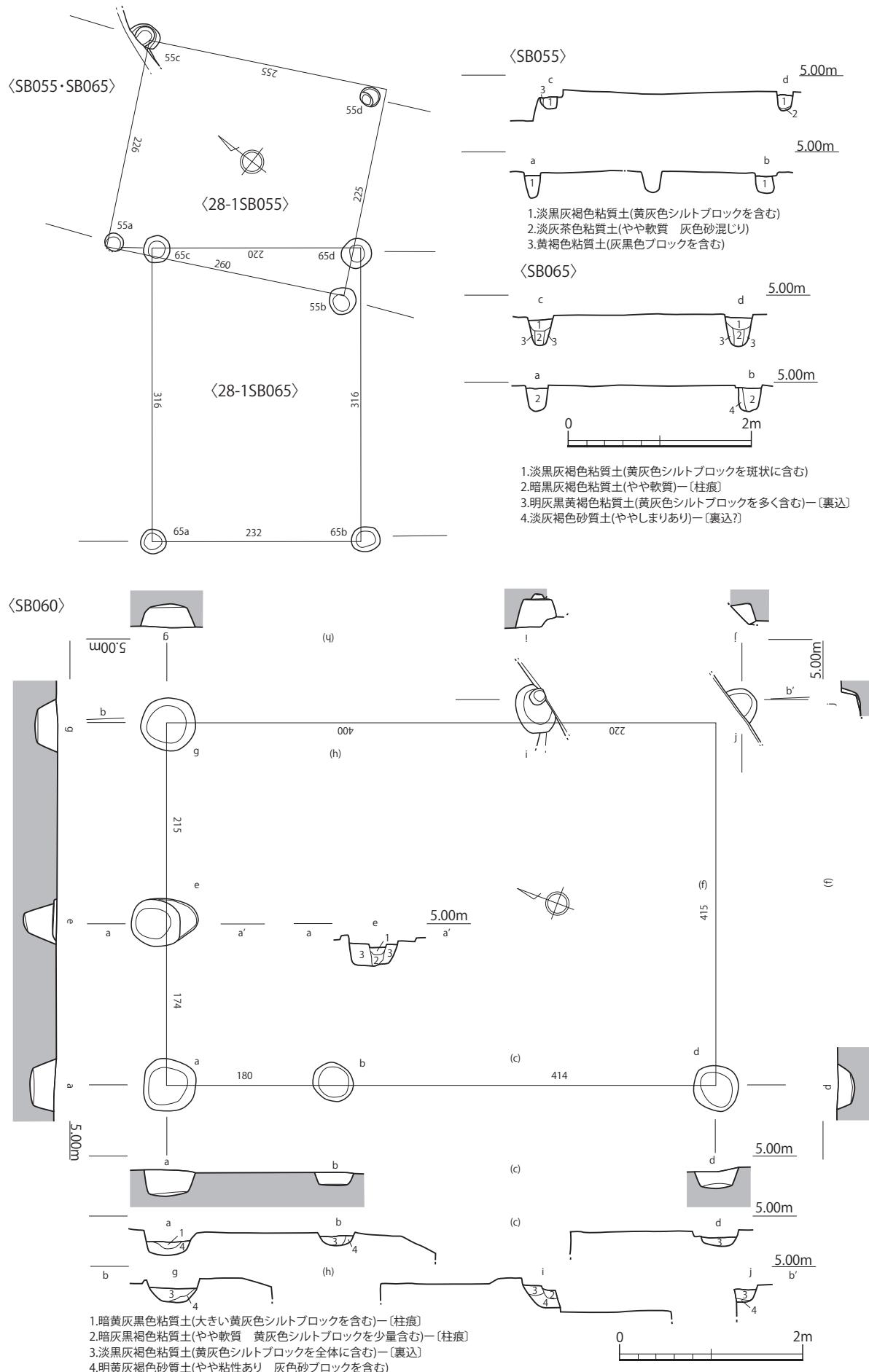
第28-1次調査区中央東側O9グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-28°-Eである。柱間は南北間1.08～1.14m、東西間1.38～1.45mを測る。柱穴の掘方は不整形な楕円形ないしは隅丸方形を呈する。長径約0.3m、深さ約0.3～0.4mを測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高く、東側の28-1SK100は建物の付属施設である可能性が高いと考えられる。

28-1SB090（第24図）

第28-1次調査区北東部S7グリッドで検出した梁行2間、桁行3間の掘立柱建物跡である。柱穴90e・kは攪乱によって削平されており確認できていない。主軸方向N-14°-Eの東西棟である。柱間間隔は梁行1.54～1.73m、桁行1.47～1.73mを測り、柱間総距離は梁行3.31m、桁行4.91mを測る。身舎面積は16.3m²である。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.2～0.25m、深さ0.2～0.35mを測る。28-1SB080とほぼ同じ方位を示し、同一時期の建物の可能性が考えられる。

28-1SB095（第24図）

第28-1次調査区南東部分L4グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向は柱穴95abcdでN-3°-E、柱穴95aedfでN-5°-Wである。柱穴95a・dは重複している。柱間は東西間1.56～1.86m、南北間1.32～0.55mを測る。柱穴の掘方は、柱穴95bは楕円形それ以外は円形を呈し、長径0.18～0.21m、深さ0.15～0.25mを測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高く、重複する各柱穴は建て替えるともうものと考えられる。



第21図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図1 (1/60)

28-1SB105（第25図）

第28-1次調査区中央南寄りJ10グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-35°-Eである。柱間は南北間1.95m、東西間1.52～1.56mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形を呈し、直径0.25～0.3m、深さ0.3～0.5mを測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB110（第25図）

第28-1次調査区南部J11グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-40°-Eである。柱間は南北間1.88～2.0m、東西間1.81mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形を呈し、直径0.18～0.22m、深さ0.15～0.35mを測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB115（第25図）

第28-1次調査区南部J12グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。柱穴115aは28-1SD045によって南側の一部が切られている。主軸方向はN-34°-Eである。柱間は南北間1.27～1.93m、東西間1.78～1.93mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、長径0.2～0.35m、深さ0.15～0.3mを測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB120（第25図）

第28-1次調査区中央東寄りM12グリッドで検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-45°-Eである。柱間は南北間1.94～2.2m、東西間1.8～1.85mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形、楕円形及び隅丸方形を呈する。長軸0.28～0.4m、深さ0.25～0.5mを測る。柱穴からは古式土師器皿が出土している。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

柵跡(SA)**28-1SA071（第26図）**

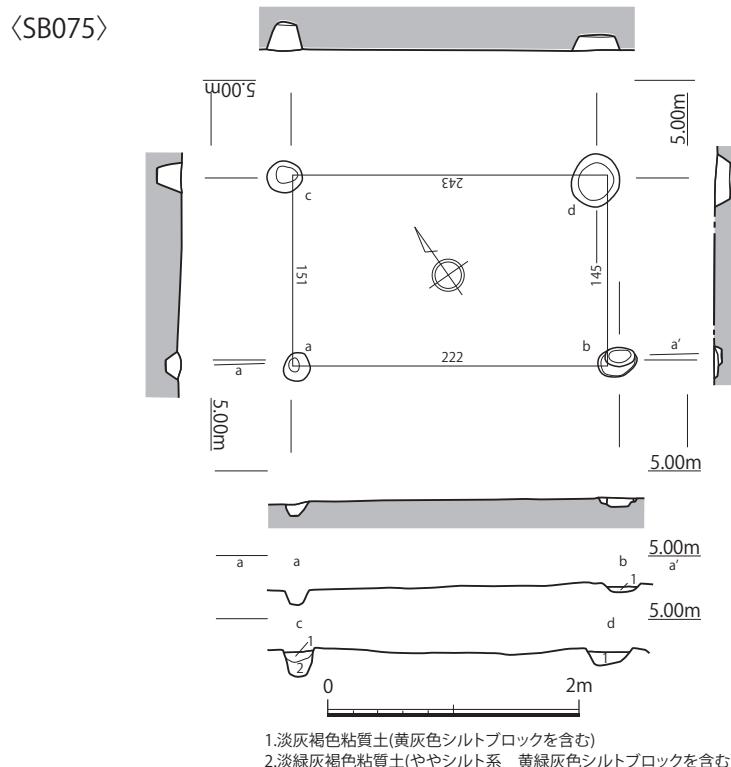
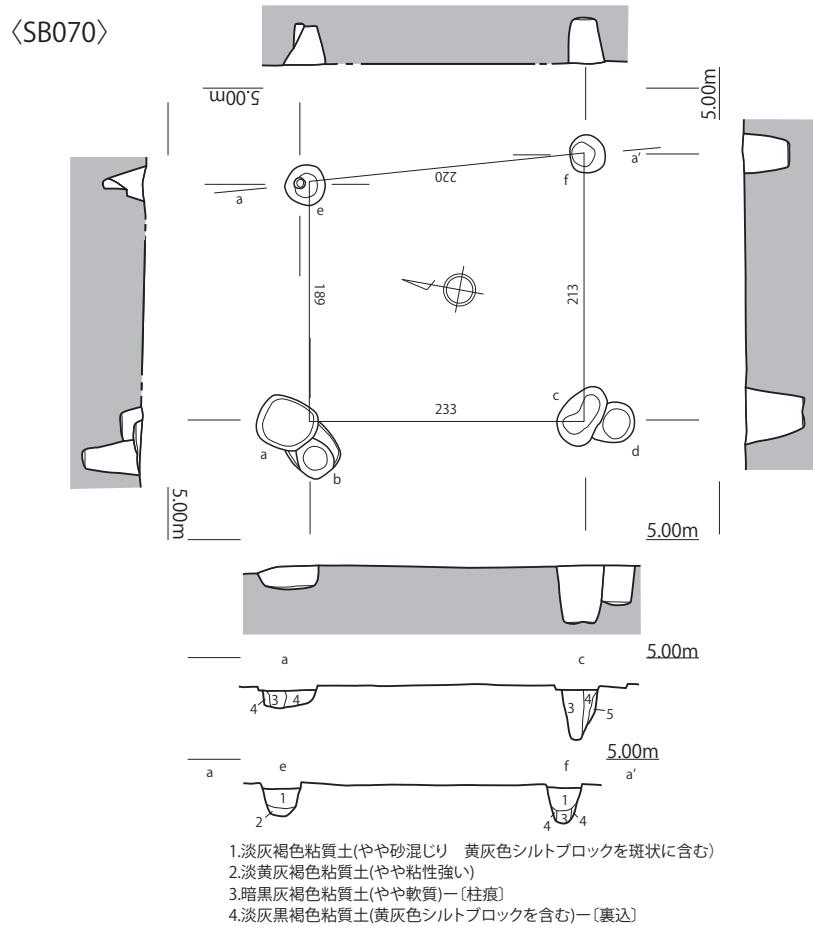
第28-1次調査区北部S11グリッドからR12グリッドにかけて検出した。柱穴4基からなる南北方向の柵状遺構で、柱穴71aは搅乱により一部削平されている。主軸方向はN-30°-Wである。全長6.4mを測り、柱間は北側から2.15m、2.07m、2.17mを測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.2～0.35m、深さ0.23～0.30mを測る。遺物は出土していない。

28-1SA072（第26図）

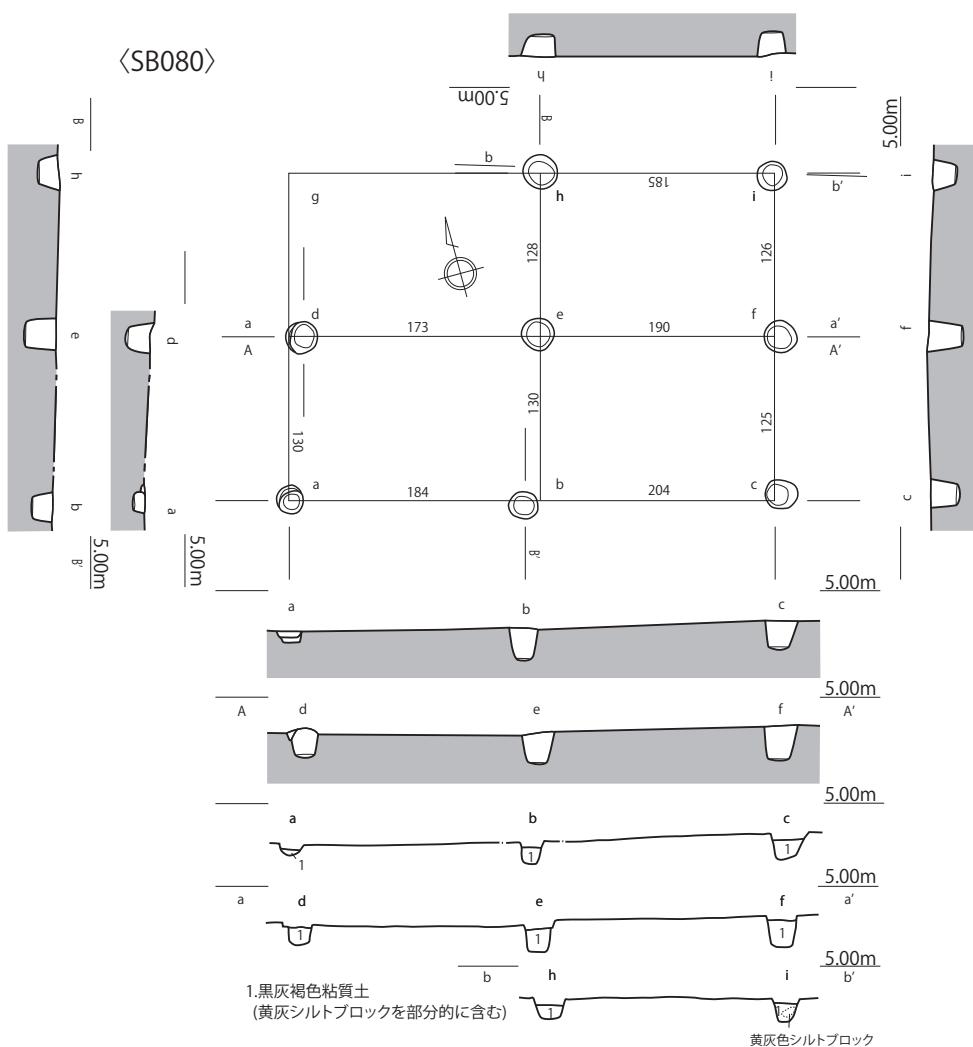
第28-1次調査区中央北寄りQ11グリッドから検出した柱穴3基からなる南北方向の柵状遺構である。主軸方向はN-39°-Wである。全長3.2mを測り、柱間は1.55m、1.62mを測る。柱穴の掘方は、不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.25～0.3m、深さ0.12～0.16mを測る。柱穴から遺物は出土していない。併行する28-1SA073と関連するものと考えられる。

28-1SA074（第26図）

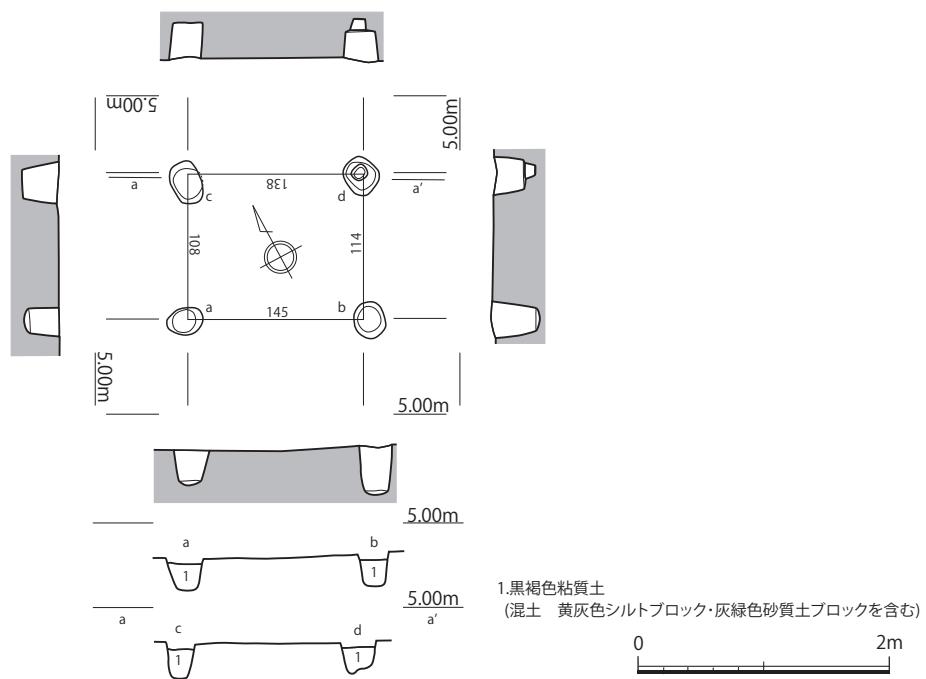
第28-1次調査区北東部分R15グリッドからQ15グリッドにかけて検出した柱穴8基からなる南北方向の柵状遺構である。28-1SD030と28-1SD031の間から検出し、柱穴74hは28-1SD030の中に落ち込んでいる。主軸方向はN-32°-Wである。全長5.7m、柱間0.48～1.16mを測り、柱穴74g・h間は非常に狭くなっている。柱穴の掘方は不整形な円形で多くは楕円形を呈する。直径0.15～0.4m、深さ0.08～0.2mを測る。28-1SD030に併行していることから関連する施設と考えられる。



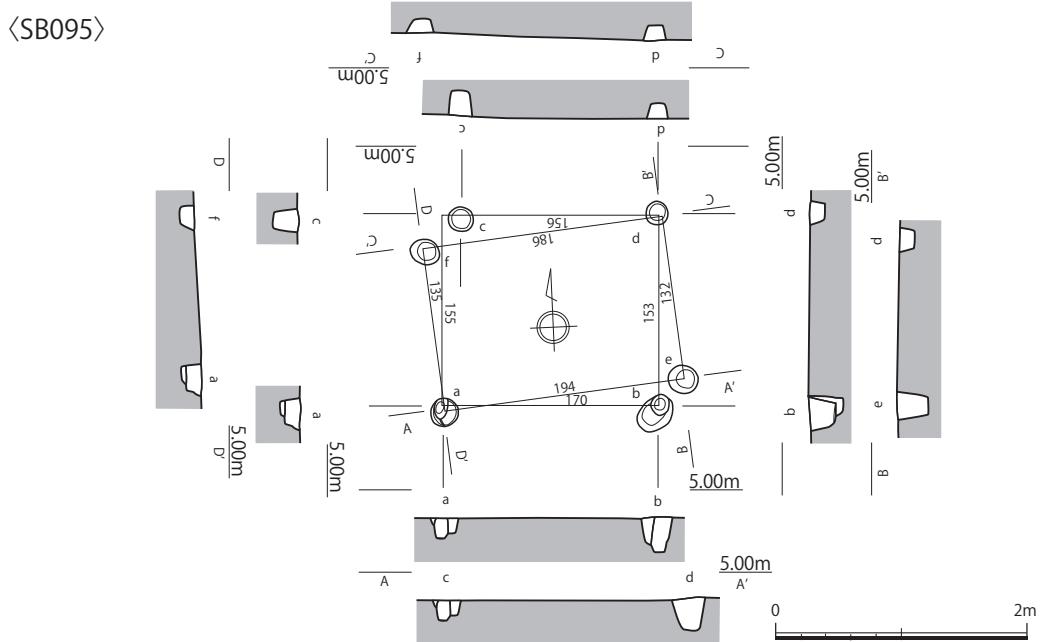
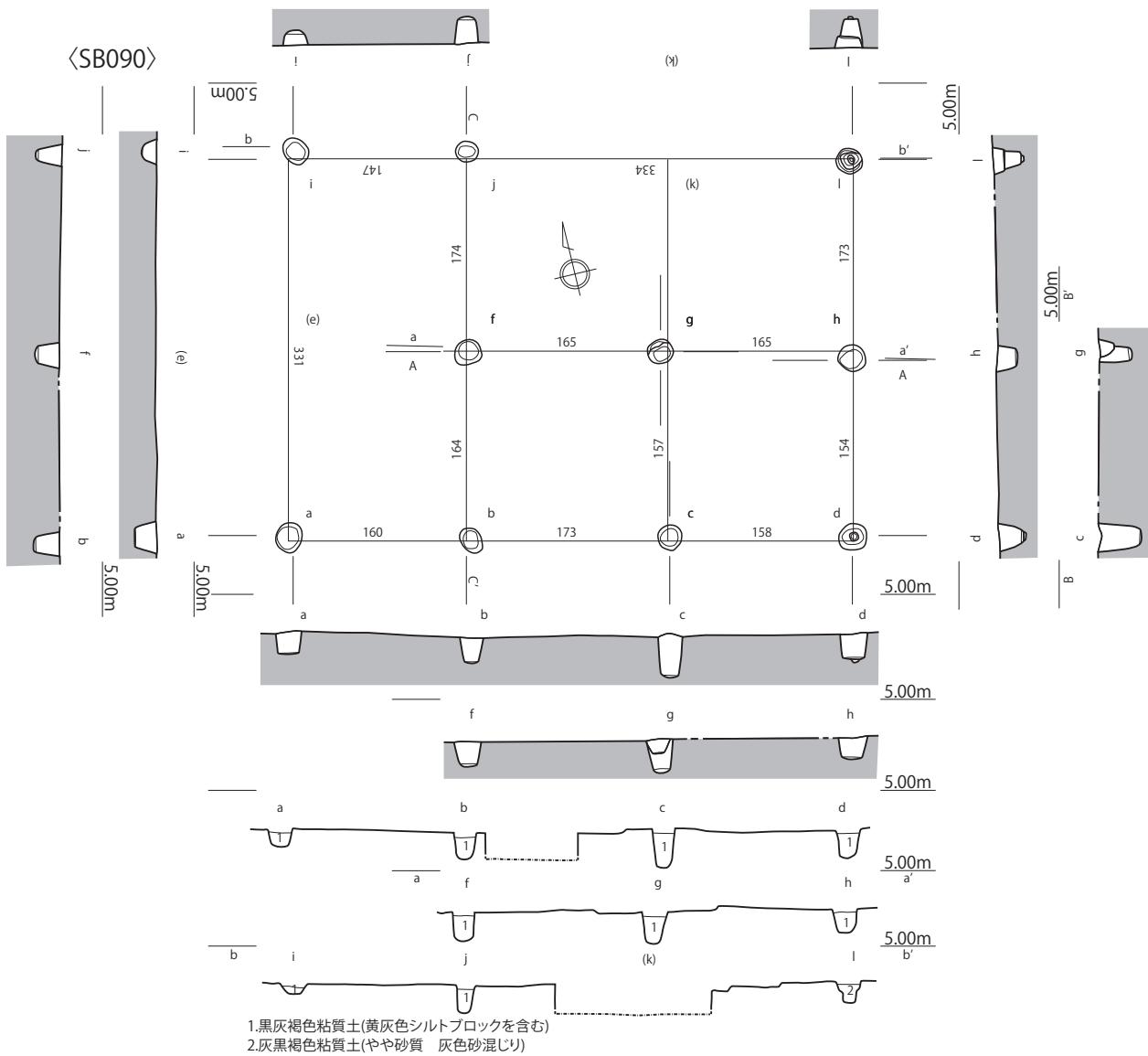
第22図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図2 (1/60)



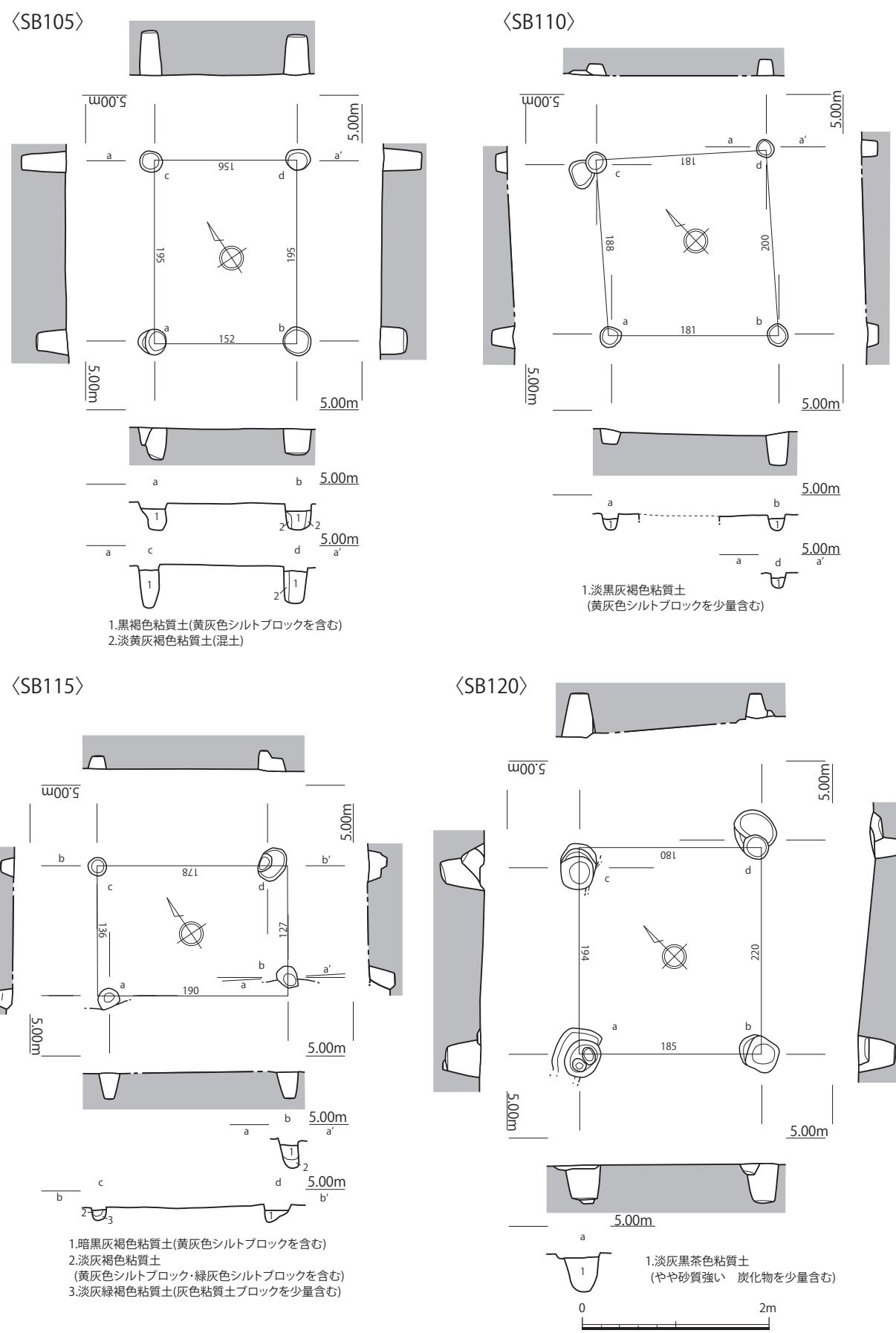
〈SB085〉



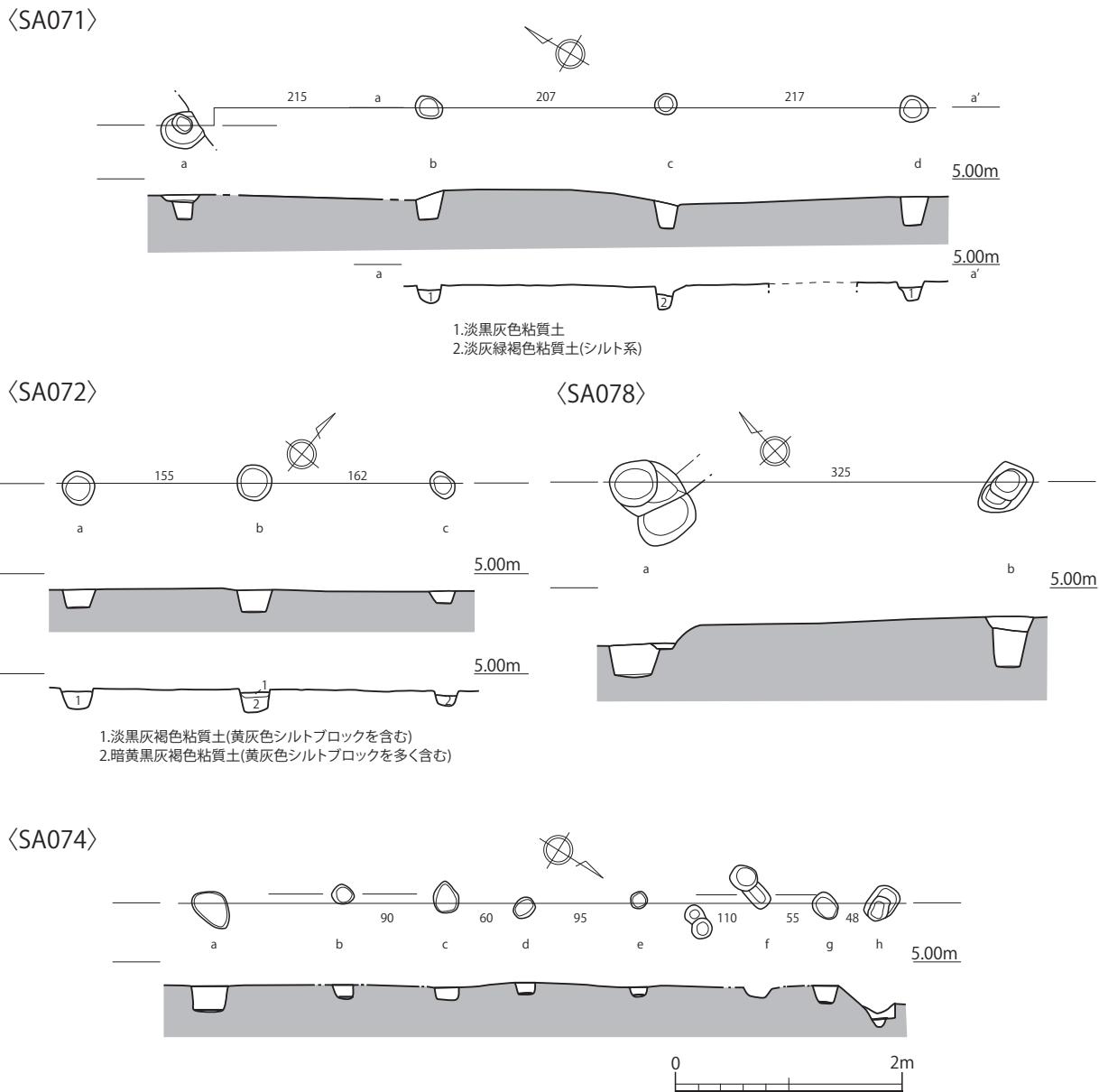
第 23 図 第 28 次掘立柱建物跡遺構実測図 3 (1/60)



第24図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図4 (1/60)



第25図 第28次掘立柱建物跡遺構実測図5 (1/60)



第26図 第28次柵状遺構実測図 (1/60)

28-1SA078 (第26図)

第28-1次調査区中央東寄りO12グリッドからO13グリッドにかけて検出した東西方向の柱穴列である。柱穴2基で構成され、28-1SD025・SP054に切られている。西側に向かって緩やかに傾斜しているが、柱穴基底部の標高約4.3mである。主軸方向はN-43°-Eで、柱間は3.25mを測る。柱穴の掘方は不整形な楕円形ないしは長方形形状を呈し、長径約0.45～0.6m、深さ0.3～0.45mを測る。柱穴78aから古式土師器の小破片が出土している。しっかりととした柱穴であり、軸を同じくする28-1SB120に関連する施設の可能性が考えられる。

竪穴建物跡 (SH)

28-1SH050 (第 27 図)

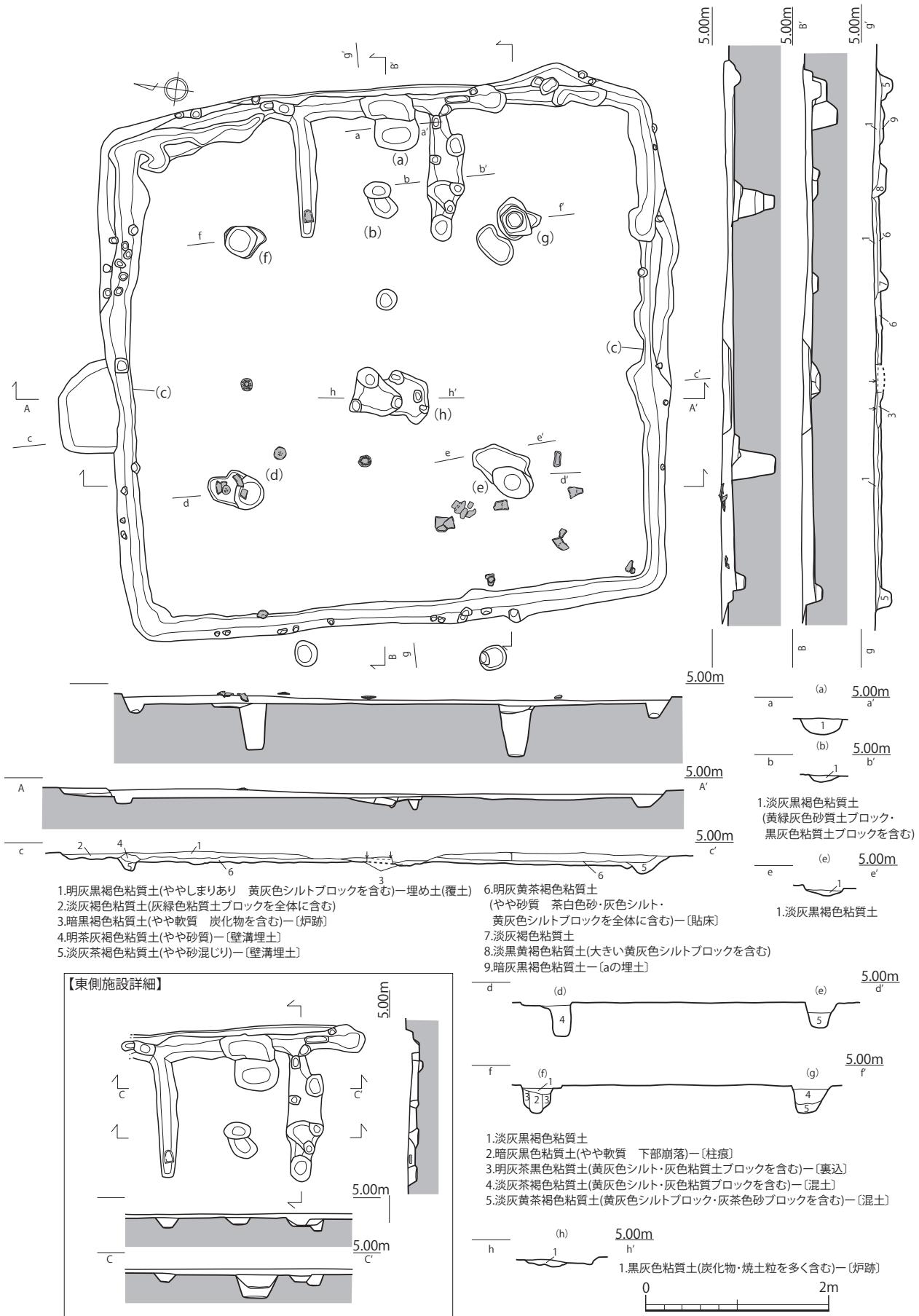
第 28-1 次調査区中央北寄り O11 グリッドから Q13 グリッドにかけて検出した竪穴建物跡である。平面プランは方形を呈する。南北 6.6m、東西 5.85m、検出面からの深さは 0.15m を測る。貼床は第 27 図第 6 層で確認した。内部は主柱穴、壁溝、炉跡、間仕切り遺構と推定される遺構を検出した。主柱穴は 4 基 (d ~ g) 検出した。壁溝 (c) は全辺に掘りこまれており、幅 0.2 ~ 0.3m、深さ 0.15 ~ 0.2m を測る。壁溝内には直径 10cm 前後の杭跡と推定されるピットが多数認められた。北側中央の長軸 1.0m、短軸 0.6m を測る突出部あるいは西側の建物外で確認された柱穴 2 基は出入り口に関連した遺構と考えられる。建物のほぼ中央部分に地床炉 (h) が設けられている。平面プランは不整形の円形を呈する浅い窪みで、長軸 0.6m、短軸 0.45m、深さ 0.14m を測る。埋土には炭化物・焼土粒を含む黒灰色粘質土である。炉跡内には直径約 0.1m、深さ 0.1 ~ 0.15m を測るピットを 5 基検出した。東側中央で壁溝に直交する 2 列の溝状遺構と小穴が確認でき、貯蔵等に関わる屋内施設の可能性が考えられる。壁溝に直交する溝状遺構は、幅 0.2 ~ 0.35m、長さ 1.25 m を測る。壁溝と接する小穴 (a) の平面プランは楕円形状を呈し、長軸 0.5m、短軸 0.3m、検出面からの深さ 0.35m を測る。出土遺物は主に建物内の西側で浮いた状態で検出した。柱穴 50 d 付近では土師器高坏部などが出土している。建物の南西側柱穴 50 e の周辺では土師器高坏脚部、壺口縁部破片などが出土している。他にミニチュア土器やフイゴの破片、石製品（磨石・石錐）が出土している。出土遺物から古墳時代中期初頭頃の所産と考えられる。

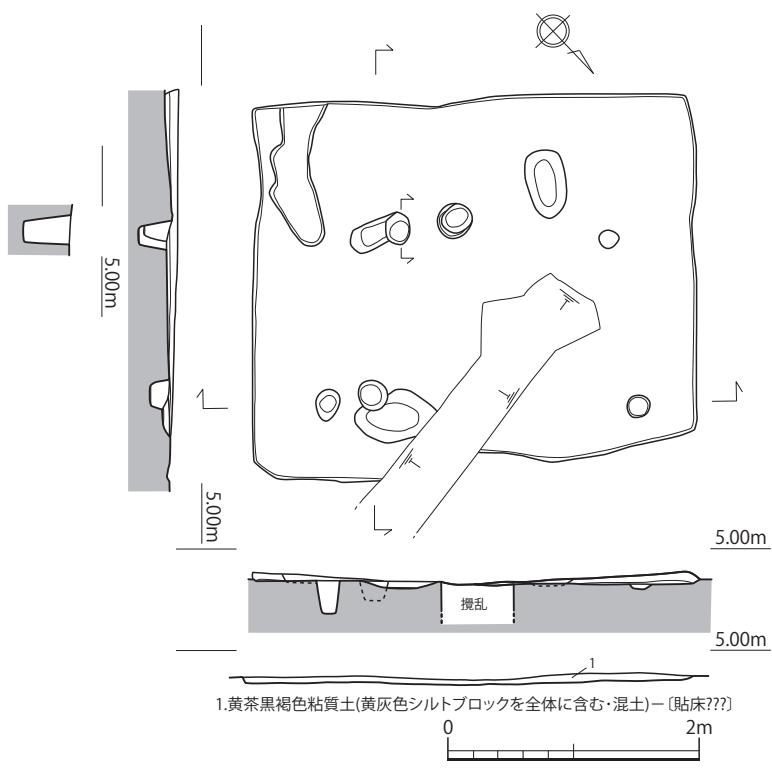
28-1SH058 (第 28 図)

第 28-1 次調査区南部 J10 グリッドで検出した竪穴建物跡である。平面プランはやや東西に長い長方形を呈する。東西軸 2.95m、南北軸 3.45m、検出面からの深さは約 0.1m を測る。埋土は黄灰色シルトブロックを含む黄茶黒褐色粘質土の混土で、一気に埋め戻されたと考えられる。建物の残存状況が不良であるため明確ではないが、貼床の可能性も考えられる。内部では、主柱穴、屋内土坑を検出した。主柱穴は現状 2 基で、北東部分がサーカステント基礎によって削平されて詳細は不明である。不定楕円形を呈する屋内土坑を北東部分と南東部分で 2 基検出した。長径 0.5 ~ 0.6m、検出面からの深さ約 0.08m を測り、断面形状は皿状を呈する。南隅では溝状の浅い掘りこみが認められ、検出長 1.2m、検出幅 0.3m、検出面からの深さ 0.08m を測る。削平によりこれらの屋内土坑の性格は不明である。遺物は少なく、古式土師器甕破片が出土しているが時期比定には及ばない。

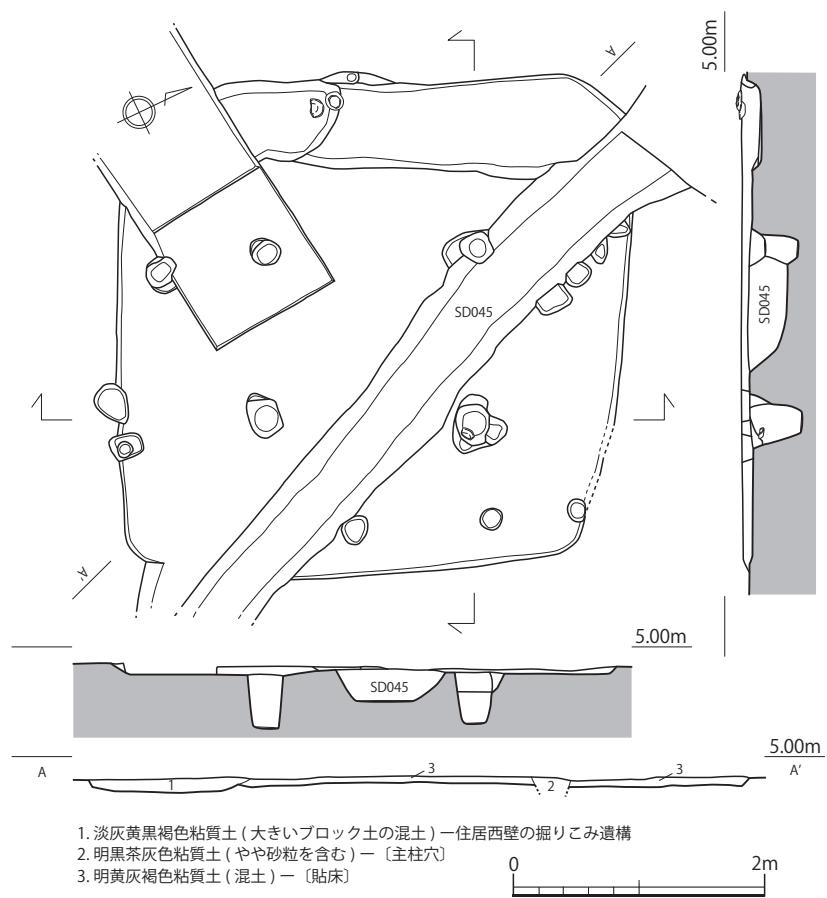
28-1SH059 (第 29 図)

第 28-1 次調査区南東部分 K12 グリッドから L13 グリッドにかけて検出した竪穴建物跡である。建物の北隅から南隅を 28-1SD045 が斜行しており、西隅部分はサーカステント基礎によって切られている。貼床は第 29 図第 3 層で確認した。平面プランは歪んだ方形を呈する。南北軸 4.05m、東西軸 3.95m、検出面からの深さは約 0.08m を測る。内部施設は主柱穴、溝状の掘り込み遺構を検出した。主柱穴は 4 基 (a ~ d) である。建物東側で検出した溝状の掘り込み遺構の平面プランは不定長方形を呈する。床面はフラットで、検出長 3.0m、検出幅 0.63 ~ 0.73 m、検出面からの深さ 0.05m を測る。この遺構の性格については不明である。出土遺物は少ないが、柱穴 59 d では、柱穴上位で白色粘土が充填された土師器碗が出土している。また、西側の溝状の掘りこみ部分では、碗が 2 点浮いた状態で検出した。出土遺物から古墳時代後期頃と考えられる。





第28図 28-1SH058 遺構実測図 (1/60)



第29図 28-1SH059 遺構実測図 (1/60)

井戸跡 (SE)

28-1SE010 (第 30 図)

第 28-1 次調査区南西部 M3 グリッドで検出した。28-1SX009 の攪乱により切られているが、同攪乱の出土遺物には 28-1SE010 の遺物が多く含まれていた。平面プランは南側が調査区外に延びるため検出していないが、不整円形を呈すると考えられる。直径約 1.5m、深さ 0.7 m を測る。第 4 層付近で湧水点が認められ、滯水によるものか壁面の崩落土である淡黒緑灰色シルト質土がラミナ状になっている。井戸枠などは認められなかつたため、素掘りの井戸跡と考えられる。第 3 層で多量の遺物が出土している。出土遺物は、古式土師器ではほぼ完形のものが多く、穿孔が認められる安国寺式タイプの複合口縁壺や外来系の甕の底部片が打ち欠かれているものなどが出土している。井戸廃絶時に何らかの祭祀行為があったと考えられる。出土遺物から古墳時代前期前葉～中葉頃と考えられる。

28-1SE020 (第 30 図)

第 28-1 次調査区西部 S6 グリッドで検出した。平面プランは円形を呈する。検出面では直径約 0.8m、深さは 0.65m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は黒褐色を基調とし、掘り返しが行われたと考えられる。第 1 層では部分的に炭層が認められ、廃棄の際の祭祀が行われた可能性が考えられる。井戸枠などは認められず、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物は丁寧な作りで、外来系の要素が強い。最終埋め戻しの時期は、古墳時代前期後葉頃と考えられる。

28-2SE165 (第 30 図)

第 28-2 次調査区北側 O19 グリッドで検出した。28-2SD180 を切っている。平面プランは不整円形を呈する。長径約 2.6m、短径 2.0+ α m、深さ 0.9 m を測る。断面形状はボウル状を呈する。土層観察から 2 回の掘り返しが行われたと考えられる。井戸枠などは検出されていない。出土遺物に黒色土器 A 類椀や須恵器鉢など 9 世紀頃に比定されるものが出土している。埋土については、第 28 次調査で確認された各遺構埋土と比較すると、やや新しい時期の遺構の埋土と類似しており、出土した遺物は、当該遺構の埋土に混入した可能性も考えられる。また、下位に湧水等の痕跡が認められず、井戸跡というよりは水溜め遺構の可能性が高い。

28-2SE170 (第 31 図)

第 28-2 次調査区中央北西部 N19 グリッドで検出した。28-2SD125 と 28-2SD0150 との交点を切る形で検出した。平面プランは不整円形を呈する。長径約 2.4m、短径約 2.0m、深さ 1.1m を測る。第 2・3 層の壁面はオーバーハングしており、標高 3.8m 付近では湧水が認められた。井戸枠などは検出されていないため、素掘りの井戸跡と考えられる。少なくとも 1 回以上の掘り返しが行われたと考えられる。第 2 層ではほぼ完形の古式土師器甕やスヌが付着した甕の底部などが検出した。遺物は上層に多量の土器が集中しており、器種も多様で、外来系の要素の強いものが多くみられる。出土遺物から、古墳時代前期中葉～後葉頃に位置づけられる。

28-2SE175 (第 31 図)

第 28-2 次調査区中央北西部 O18 グリッドから検出した。28-2SD150 を切る。平面プランは不整円形を呈する。長径約 1.1m、短径 0.9 m、検出面からの深さ 0.7m を測る。断面形状は逆台形を呈する。第 2 層では壁面が滯水のためかオーバーハングしている。井戸枠などは検出されていない。埋土は灰色土を基調とし、レンズ状に堆積している。遺物は、底部付近から白色研磨土師器塊（浅碗タイプ）が出土している。埋没時期は、12 世紀中頃と考えられる。

28-2SE215（第31図）

第28-2次調査区北東部分L23グリッドで検出した。28-2SD205と攪乱に切られている。平面プランは不整形な円形を呈する。長径約1.2m、短径1.1m、検出面からの深さ0.85mを測る。断面形状は逆台形を呈する。南側の壁面はオーバーハンプングしている。遺構の下層は砂層であり、自然堆積したと考えられるが、その上層では不整合がみられ、2回の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物から、古墳時代前期頃の所産と考えられる。

28-2SE220（第31図）

第28-2次調査区中央東側J19グリッドで28-2SD130を掘り下げた後に検出した。平面プランは円形を呈し、直径約1.0m、深さ0.5mを測る。断面形状は逆台形を呈する。遺物は僅少であり土師器壺cなどが検出されているが、28-SD130からの混入の可能性が考えられる。

土坑(SK)**28-1SK015（第32図）**

第28-1次調査区西部N3グリッドで検出した。平面プランは楕円形を呈する。断面形状は逆台形を呈する。長径約1.4m、短径0.9m、深さ0.65mを測る。埋土は灰褐色を基調とし、ブロック土を含む混土で埋積されており、人為的に埋め戻されたと考えられる。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。当該調査区内の埋土の状況からは、比較的新しい時期の遺構と考えられる。

28-1SK021（第32図）

第28-1次調査区中央P11グリッドで検出した。平面プランは不整円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、北側部分が一段深く掘り下げられている。長径約1.0m、短径0.7m、最大深度0.6mを測る。断面形状は歪んだ逆台形を呈する。黒褐色を基調とした埋土で埋積されており、第3層では炭化物が認められた。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物は、古式土師器甕片、叩き石などがある。下部の抉れや階段状のテラスの状況などから井戸跡や水溜め遺構の可能性が考えられる。

28-1SK022（第32図）

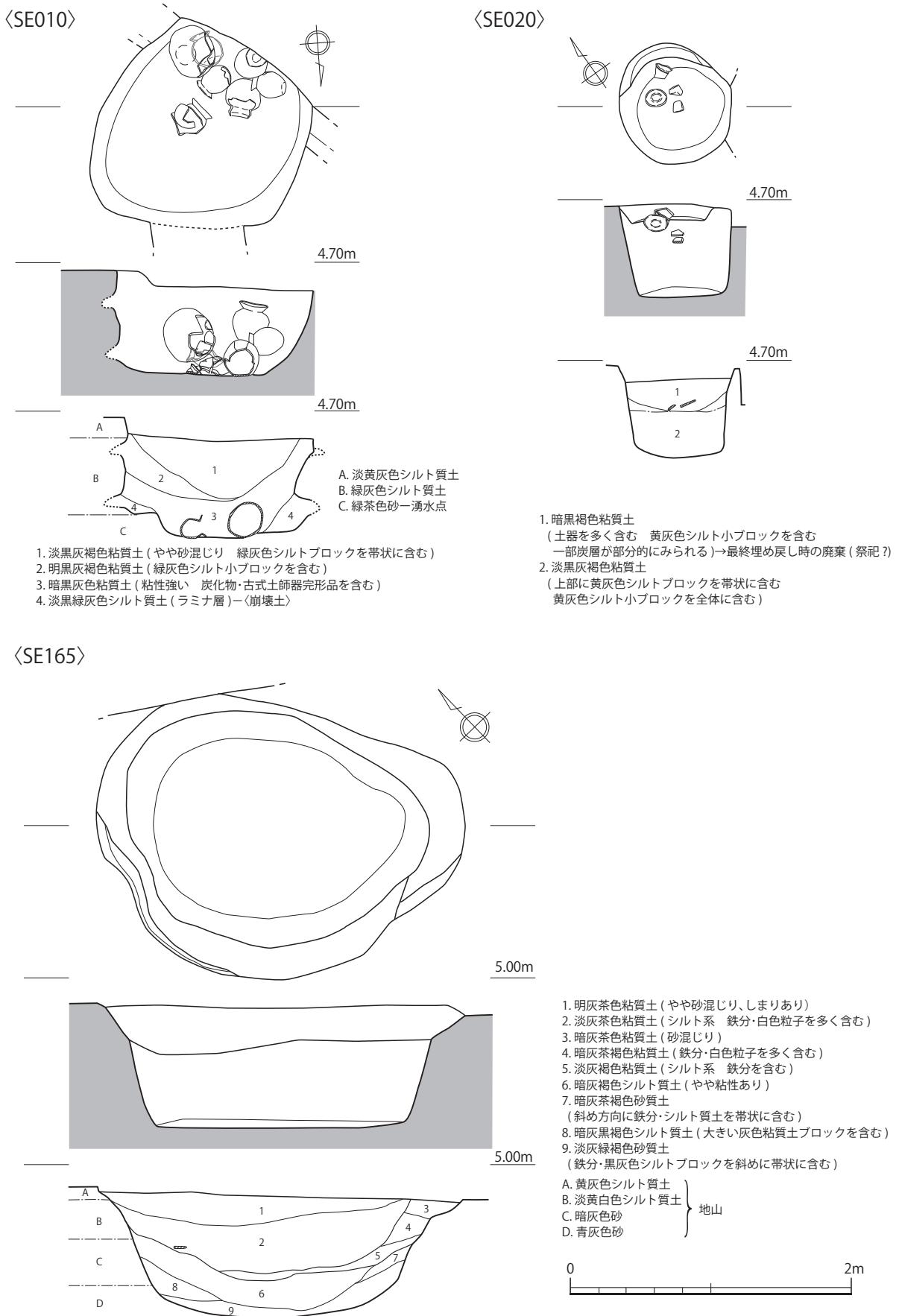
第28-1次調査区北部U8グリッドで28-1SD002の基底部から検出された。平面プランは円形、断面形状は袋状を呈する。直径約0.8m、最大深度0.6mを測る。埋土は黒灰色粘質土を主体とし、一部28-1SD002による掘りこみが確認できる。標高4.2m付近では湧水が認められ、滯水のためか壁面はオーバーハンプングしている。井戸跡の可能性が考えられる。出土遺物から古墳時代前期前葉頃の所産と考えられる。

28-1SK023（第32図）

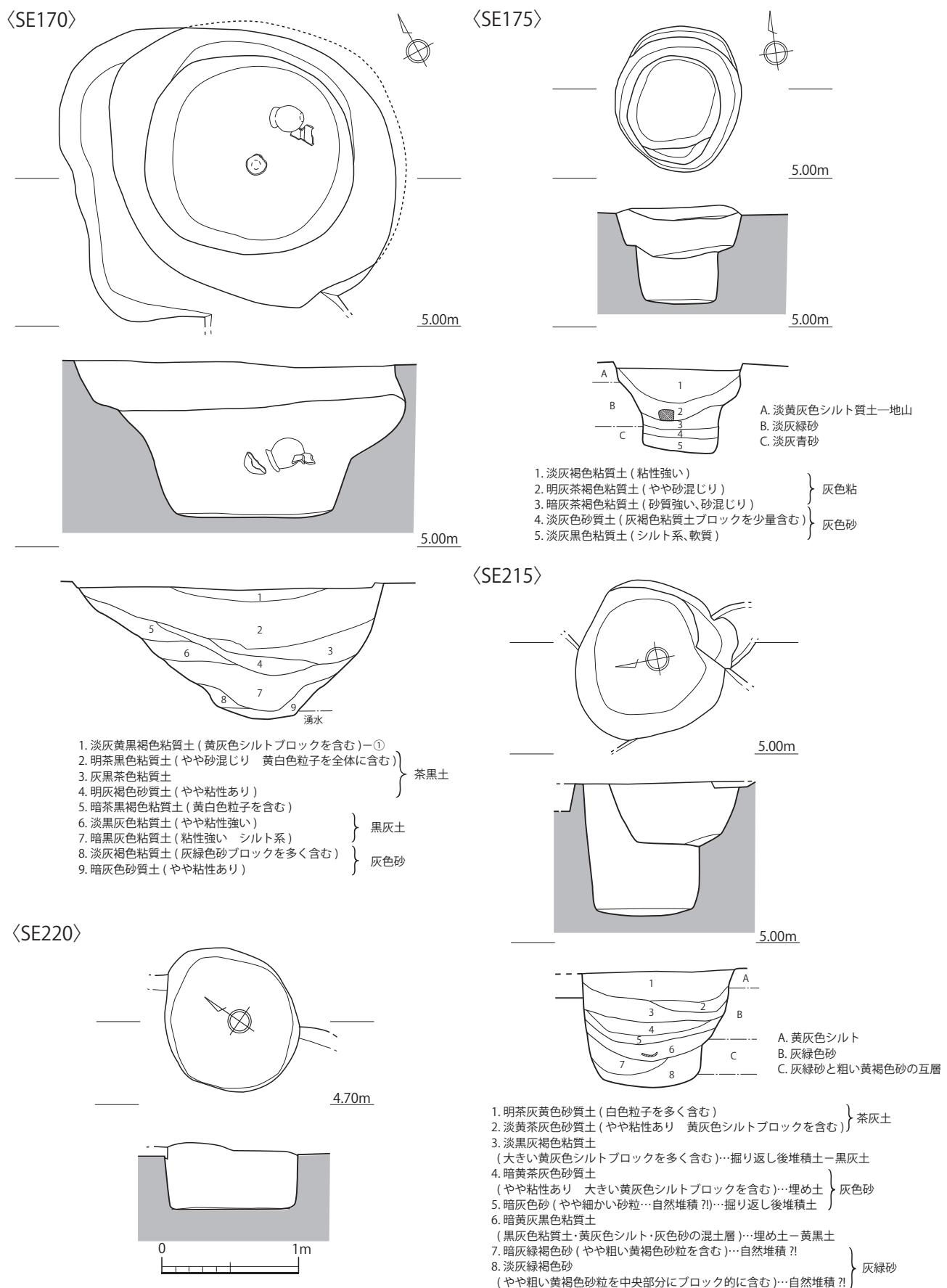
第28-1次調査区北部S12グリッドで検出した。平面プランは楕円形を呈する。長径約1.2m、短径約0.7m、深さ0.15mを測る。断面形状は皿状を呈する。底面はフラットで、黄灰色シルトブロックを含む埋土で埋積されている。出土遺物は僅少で、ミニチュア土器高壺脚破片が1点である。遺物からの時期比定は困難である。

28-1SK024（第32図）

第28-1次調査区中央O10グリッドで検出した。平面プランは円形を呈する。遺構の東側半分は一段掘り下げており、長径1.1m、短径0.9m、最大深度0.52mを測る。断面形状は逆台形を呈する。遺構の西側で複合口縁壺が伏せた状態で検出した。他にも穿孔を有する完形の甕なども出土しており、何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。出土遺物から、古墳時代前期前葉～中葉頃に位置づけられる。



第30図 第28次井戸跡遺構実測図1 (1/40)



第31図 第28次井戸跡遺構実測図2 (1/40)

28-1SK035 (第32図)

第28-1次調査区北部R14グリッドで28-1SD030の基底部から検出した遺構である。平面プランは東西にテラスを持つ隅丸方形状を呈し、西側の検出面から0.35mの地点から一段掘り下げられている。長軸約1.2m、短軸0.6m、最大深0.86mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土はブロック土を含む灰黒色粘質土で、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は出土していない。28-1SD030内で検出されたことから、古代以前の遺構であると考えられる。

28-1SK100 (第32図)

第28-1次調査区中央西側O9グリッドで検出した。東側半分は搅乱によって切られており全容は不明である。南北長約0.8m、東西長4.2+αm、深さ0.15mを測る。埋土は暗黒灰褐色粘質土の単一層で、炭化物・焼土塊を含む。西側に近接する28-1SB085に付属する施設である可能性が考えられる。遺物は、検出面で古式土師器鉢、大型壺上半部、小型甕、甌が出土している。出土遺物から古墳時代中期末～後期前半頃と考えられる。

溝跡 (SD)

28-1SD002 (第20図・第33図)

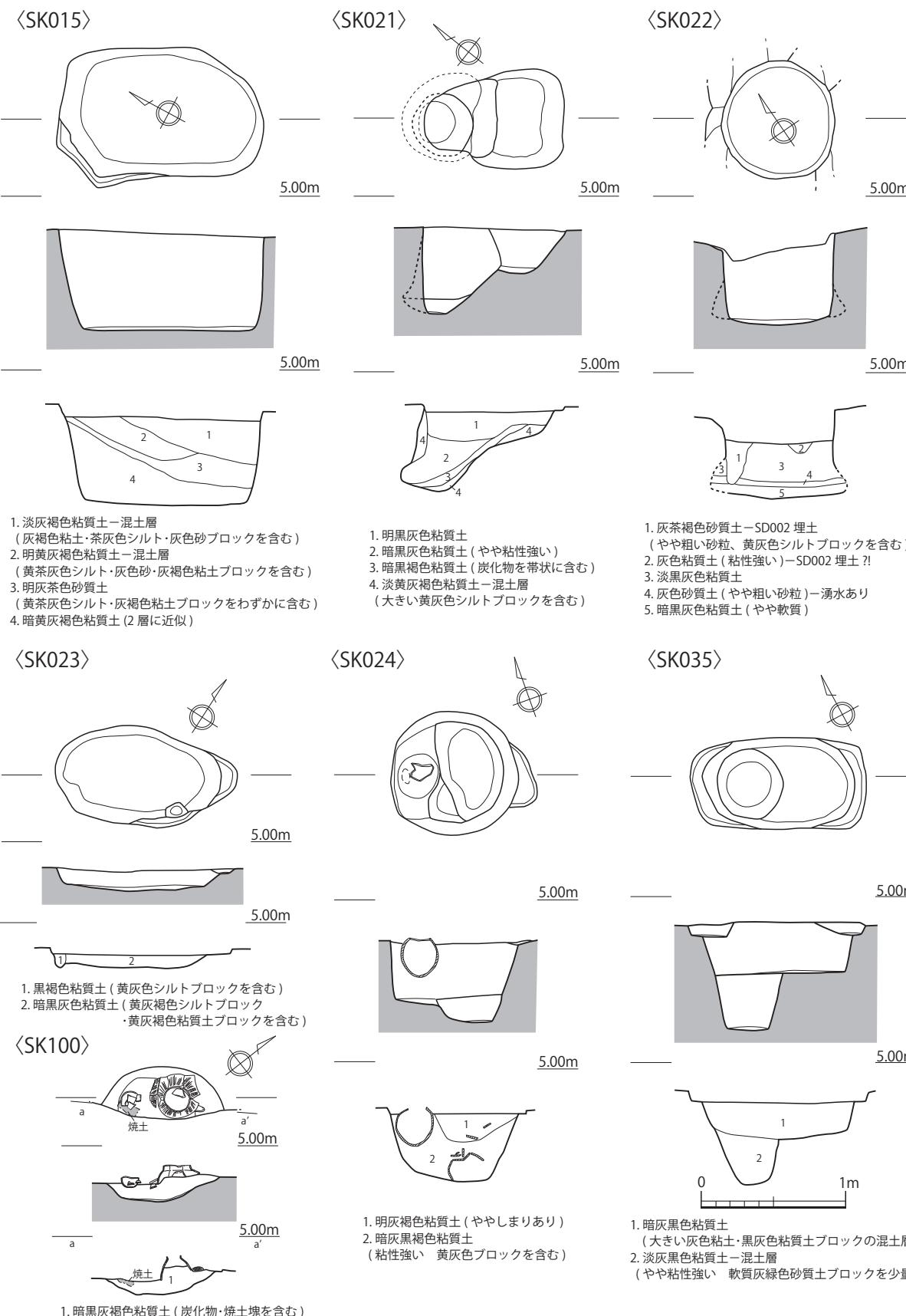
第28-1次調査区北西部R7グリッドからV10グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端は第4次調査(平成15年度)では検出されていないが、第28次調査区南壁の土層観察において、同様の埋土を持つ遺構を確認しており、調査区を南北に縦断する形で展開していたと考えられる。T7グリッド付近から併行する28-1SD003に切られている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-33°-Wである。検出幅約1.2m、検出長約23.0m、深さ約0.2mである。断面形状は逆台形を呈するが、底面は不定形のピットによる凹凸が見られ、人為的に掘り起こされたと考えられる。出土遺物に古代・中世の土師器の細片などが確認できるが、当該調査内の埋土の状況からは比較的新しい時期のものと考えられる。

28-1SD005 (第20図・第33図)

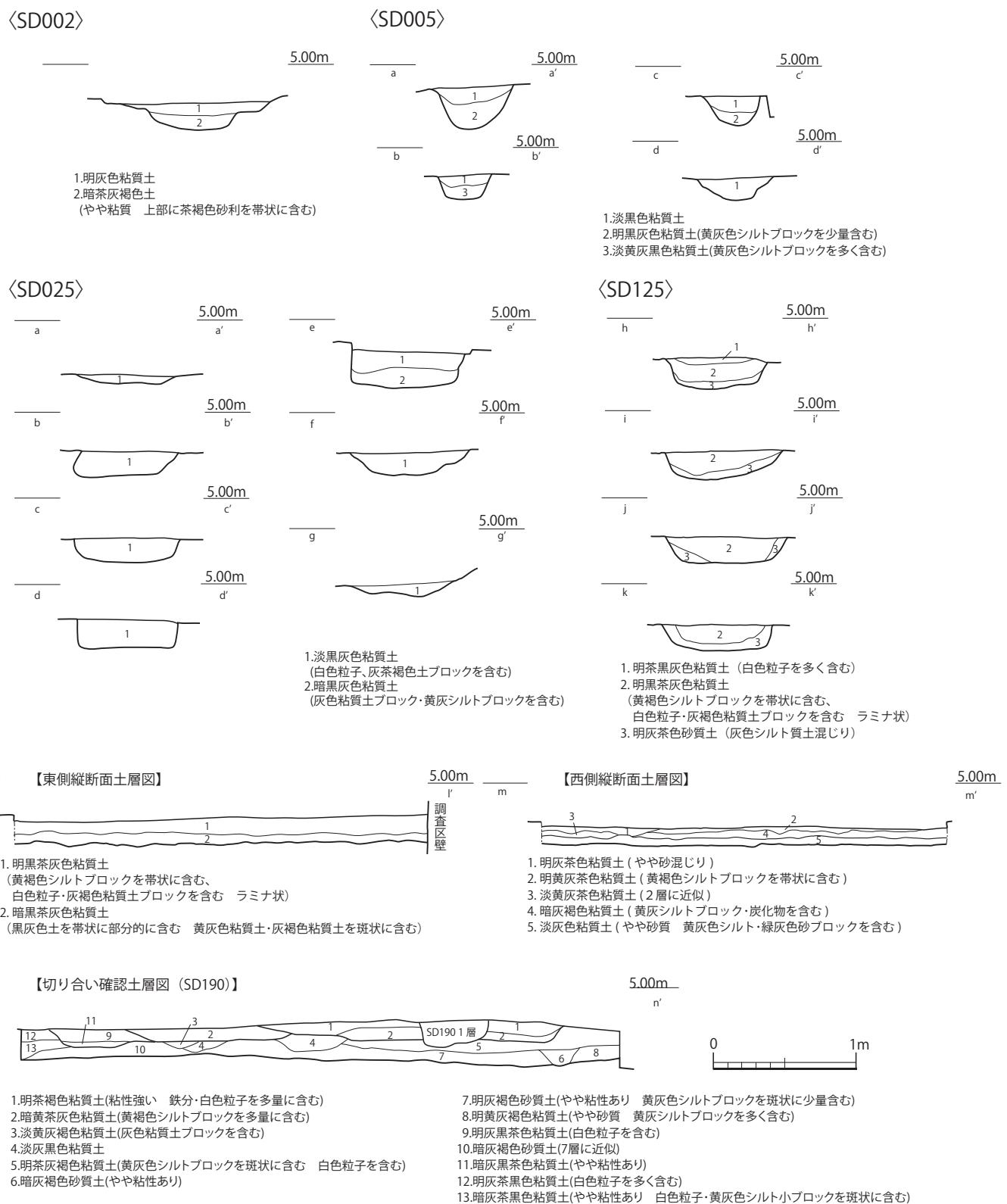
第28-1次調査区中央南部M7グリッドからJ13グリッドにかけて検出した東西方向に延びる溝跡である。東端は28-1SD045から分岐しており、西端はサーカステント基礎により削平されているため全容は不明である。主軸方向はN-11°-Wである。検出長約28.0m、検出幅0.4～0.6m、深さは東側約0.3m、西端約0.15mである。断面形状はU字状を呈する。埋土は黒色を主体とした粘質土が堆積している。出土遺物は、土師器碗、高坏脚柱部片などが出土している。出土遺物から古墳時代後期、6世紀後半以降の所産と考えられる。当遺構は28-1SD045・28-2SD135・145や北側の調査区(第4・5次調査)で確認されている4SD017・5SD007・141・142・144・161とあわせて小区画を形成しているものと考えられる。

28-1SD025/28-2SD125 (第20図・第33図)

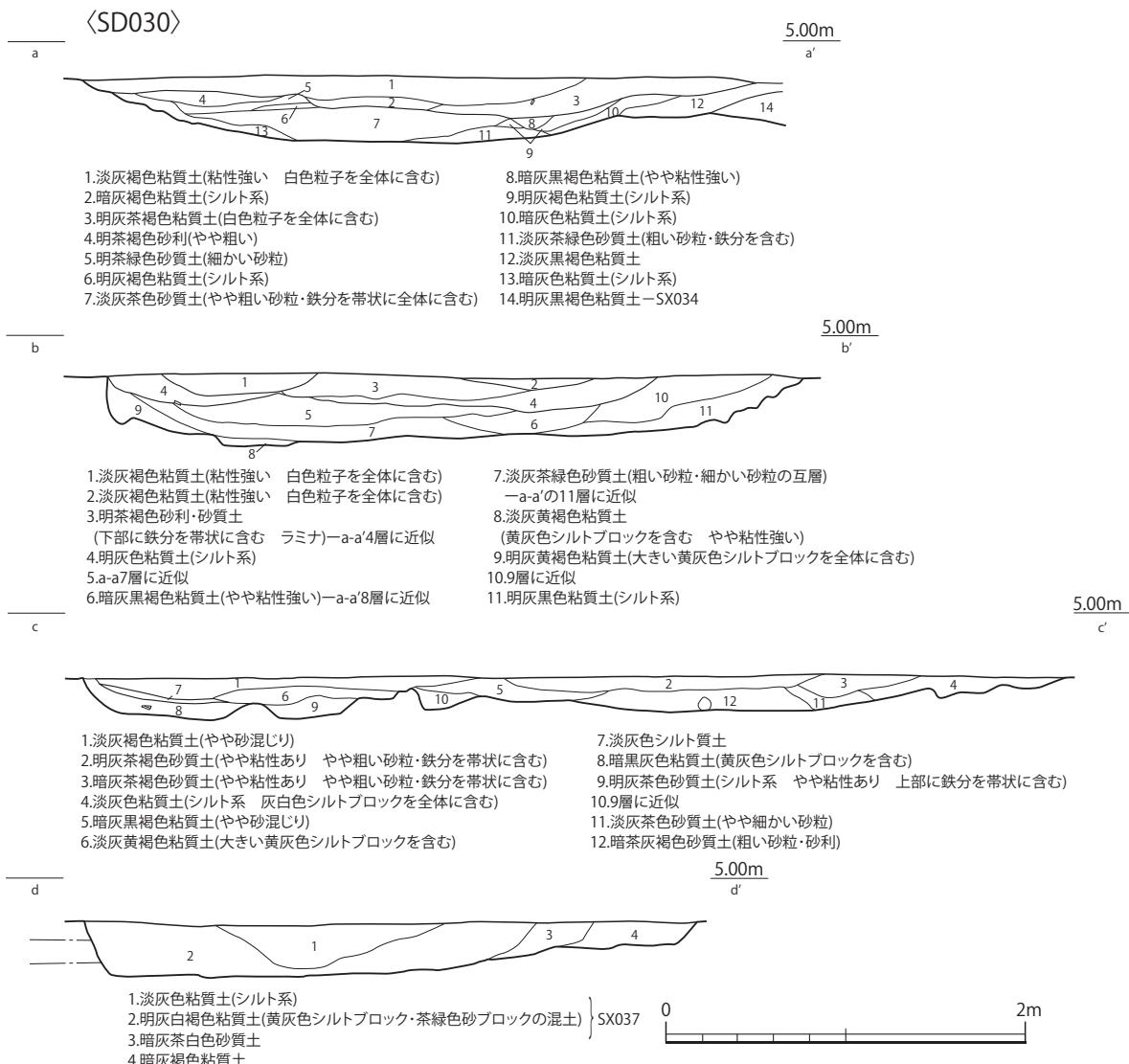
第28次調査区中央北部分をQ6グリッドからN23グリッドにかけて東西方向に横断する溝跡である。後述する28-2SD150の南北方向の溝跡と十字に交わるが、調査段階で切り合い関係は不明瞭であった。28-1SD025は28-1SD045と28-1SD030に切られ、第28-2次調査区では28-2SE170・28-2SD185に切られている。西端は第21次調査との境界付近で搅乱などに削平されているが21SD035に接続すると考えられる。東端は一部第5次調査で検出されているが調査区外に延びている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-12°-Eである。検出幅約0.7～0.8m、検出長約70.0mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は茶灰色を基調とし、黄灰色シルトブロックなどを含むことなどから人為的に埋め戻されたと考えられる。土層観察からラミナ構造が認められることから水路として機能していたと考えられる。基底部の標高は28-1SD025で約4.57m、28-2SD125では約4.52mを測り、わ



第32図 第28次土坑遺構実測図 (1/40)



第33図 第28次溝跡遺構実測図1 (1/40)

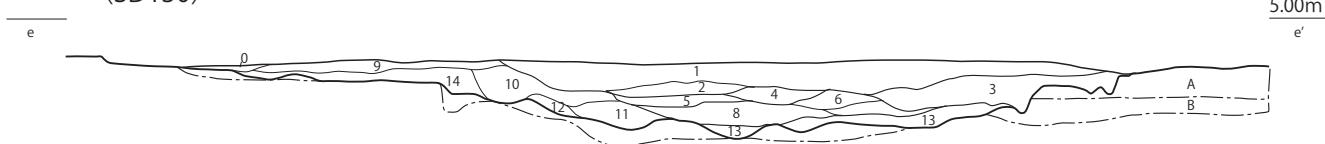


ずかであるが西側から東側に低くなっていることがわかる。出土遺物は弥生土器、古式土師器などの細片、腰岳産・姫島産黒曜石などがあるが、遺物から時期の比定は困難である。28-2SE170に切られていることから、古墳時代前期以前の所産が考えられるが、28-2SE170との位置関係から同時併存していた可能性も考えられる。

28-1SD030/28-2SD130 (第20図・第34図・第35図)

調査区北部T12グリッドからH21グリッドにかけて検出した調査区を南北方向に斜行する大溝である。北西端は4SD003、5SD003、8SD001、12SD010で検出した古代大溝と接続する。南東端は36SD025、31SD025と接続する。主軸方向はN-29°-Wで、ほぼ直線的である。遺構の幅は28-2SD130e-e'付近で最大約5.5m、それ以外の地点では約3.4~3.7mを測る。基底部の標高はSD030・SD130ともに約4.4mで、e-e'付近では約4.36mとやや深くなっている。断面形状は逆台形を呈する。埋土は基底部付近では砂やシルト系の灰色土で、ラミナ構造が認められ、水路として機能していたと考えられる。第4・5次調査と同じく溝として機能していたのは北東部分3.0~4.0m程であると考えられる。溝の両岸には、第4次調査と同様、溝肩部の斜面に沿って多数の不定形ピット群が検出した。R13グリッドからO16グリッドにかけては、溝に関連すると思われる遺構(28-1SX034・SX038・SX039)や溝の南北にそれぞれ道路状遺構(28-1SF040・28-2SF200)を検出しておらず、水路と陸上を繋ぐ何らかの施設であったと考えられる。出土遺物は、他調査区と同様に9世紀初頭を中心とした古

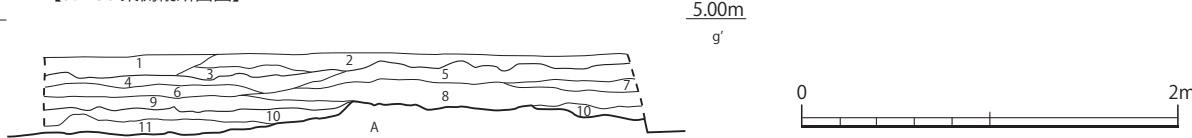
〈SD130〉



- | | |
|---------------------------------------|---|
| 0. 明灰色砂 (しまりあり) 一波板 | 8. 淡灰茶色砂 (細かい砂粒、炭化物・淡褐色粘質土ブロックを帯状に含む) |
| 1. 明灰色砂質土 (細かい砂粒) | 9. 暗茶灰褐色砂質土 (細かい砂粒、鉄分・マンガンの沈着著しい) |
| 2. 暗灰色砂質土 (ややシルト系 鉄分・マンガンを含む) | 10. 暗黒灰褐色粘質土 (白色粒子を少量含む) |
| 3. 暗灰褐色粘質土 (シルト系 白色粒子・鉄分を少量含む 炭化物を含む) | 11. 暗灰茶色砂質土 (粗い砂粒・細かい砂・灰色粘質土の混層) |
| 4. 明茶灰色砂 (粗い砂粒 下部に灰色シルトを帯状に含む) | 12. 暗灰色粘質土 (シルト系 細かい砂粒) |
| 5. 明灰色砂質土 (細かい砂粒 シルト系 鉄分を含む) | 13. 暗灰褐色砂質土 (シルト系 細かい砂粒 ラミナ状) |
| 6. 明灰褐色砂質土 (灰色粘質土・茶灰色砂を帯状に含む) | 14. 暗灰黑褐色粘質土 (大きい黄灰色シルトブロックを含む 黄色粒子・鉄分を帯状に含む) |
| 7. 淡灰色砂質土 (細かい砂粒 シルト系 5層に近い) | |

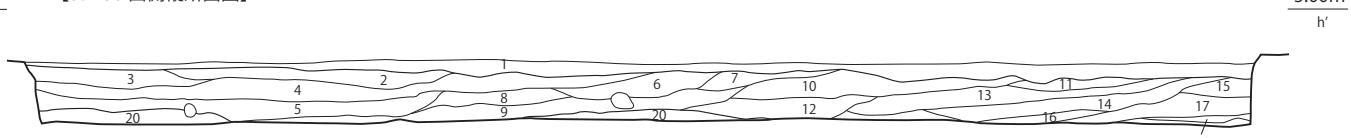
- | | |
|---|--|
| 1. 明灰色砂質土 (細かい砂粒) | 8. 淡灰褐色粘質土 (シルト系 粗い砂粒を含む) |
| 2. 明灰褐色粘質土 (ややしまりあり 白色粒子・鉄分を全体に多く含む) | 9. 明灰茶色砂質土 (粗い砂粒・細かい砂粒・シルト質土の混層) |
| 3. 淡灰褐色粘質土 (砂混じり 白色粒子・鉄分を全体に多く含む)
—2層に近似 | 10. 淡灰茶色砂 (細かい砂粒、炭化物・淡褐色粘質土ブロックを帯状に含む) |
| 4. 明茶灰色砂 (粗い砂粒、下部に灰色シルトを帯状に含む) | 11. 暗灰茶色粘質土 (灰褐色粘質土を帯状に少量含む) |
| 5. 淡灰茶褐色砂 (粗い砂粒、鉄分を多く含む) | 12. 淡灰黑褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックを含む) |
| 6. 暗灰褐色粘質土 (やや砂混じり 白色粒子を含む) | 13. 暗黃灰褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックを多く含む) |
| 7. 淡灰褐色粘質土 (シルト系 白色粒子・鉄分を少量含む 炭化物を含む)
—6層に近い | 14. 暗灰黃色粘質土 (黄灰色シルトブロックを含む) |
| | 15. 淡黃灰褐色粘質土 (黄灰色シルト・灰色粘質土の混層)—SD150下層 |

【SD130 東側縦断面図】



- | | |
|---|--|
| 1. 暗灰褐色粘質土(白色粒子・鉄分を全体に含む) | 7. 淡茶灰砂(粗い砂粒 灰色砂、灰色シルトを帯状に含む)—6層に近似 |
| 2. 暗灰褐色粘質土(やや砂混じり 白色粒子・鉄分を全体に含む) | 8. 暗茶灰褐色砂
(やや粗い砂粒 灰色砂、灰色シルトを帯状に含む(ラミナ) 鉄分を多量に含む) |
| 3. 淡灰褐色粘質土(シルト系) | 9. 明茶灰褐色砂
(やや細かい砂粒 灰色砂、灰色シルトを帯状に含む(ラミナ) 鉄分を多量に含む) |
| 4. 暗灰茶色砂
(灰色シルトブロックを少量含む やや細かい砂粒) | 10. 暗灰褐色粘質土(シルト系 鉄分・炭化物を少量含む) |
| 5. 暗茶灰色砂
(やや粗い砂粒 灰色シルト・灰色砂を帯状に含む(ラミナ) 鉄分を含む) | 11. 淡灰褐色粘質土
(砂混じり やや粗い茶色砂を含む 黄灰色シルトブロックを斑状に含む) |
| 6. 明茶灰色砂(粗い砂粒 下部に灰色シルトを帯状に含む) | |
| A. 緑灰白色砂(シルト系)—地山 | |

【SD130 西側縦断面図】



- | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 暗灰褐色粘質土(やや砂混じり) | 11. 淡灰茶色砂質土(粗い砂粒 鉄分を多く含む) |
| 2. 暗灰褐色砂質土(シルト系 細かい砂粒) | 12. 暗灰褐色砂質土(粗い砂粒) |
| 3. 明灰褐色砂質土(やや粗い砂粒) | 13. 明茶灰色砂質土(シルト系 極めて細かい砂粒)—ラミナ状 |
| 4. 淡灰茶色砂質土(やや粗い砂粒 鉄分を含む) | 14. 暗灰色シルト質土(粗い砂粒を上部に含む) |
| 5. 明茶灰色砂質土(細かい砂粒 灰色シルトを帯状に含む・ラミナ) | 15. 暗茶褐色砂質土(粗い砂粒 鉄分を含む) |
| 6. 淡灰茶色砂質土(やや粗い砂粒 鉄分を多く含む) | 16. 明灰色シルト質土(軟質) |
| 7. 明灰茶色砂質土(シルト系 細かい砂粒) | 17. 明灰白職砂質土(シルト系 細かい砂粒 粗い砂粒をブロック状に含む) |
| 8. 明灰茶色砂質土(やや細かい砂粒 鉄分を多く含む) | 18. 暗灰褐色シルト質土(やや粘性あり) |
| 9. 暗灰色砂質土(細かい砂粒 シルト系 灰色シルト ラミナ層) | 19. 淡黃灰褐色砂質土(黄色粒子を含む) |
| 10. 明灰色砂質土(細かい砂粒 下部に灰色シルトをラミナ状に含む) | 20. 明黄茶灰色砂質土(大きめの黄茶色粒子・白色粒子を多量に含む) |

第35図 第28次溝跡遺構実測図3 (1/40)

代の遺物が多量に検出されている。中には、「厨」と刻まれた刻書土器小壺底部破片、越州窯系青磁椀、石帶の巡方なども出土している。

28-1SD045/28-2SD145（第20図・第36図）

第28次調査区中央を南北に湾曲する溝跡である。北端は5SD142に接続し、南端は調査区外に延びる。28-1SD030に切られ、28-1SD025・28-1SH059を切る。また、I13グリッドで28-1SD005と連結する。b-b'ベルトにて28-1SD005との切り合い関係を土層観察で確認したが一連の土層堆積であり、当遺構と28-1SD005は一連の溝跡と考えられる。検出幅0.4～0.8m、深さ0.14～0.42mを測るが、基底部の標高は南北ともに約4.5mであり、高低差は認められなかった。また、28-1SD005の基底部の標高は約4.58mであり、若干高い傾向にある。断面形状は逆台形を呈する。土層観察からラミナ状の構造も見られ、水路であった可能性が考えられる。遺物は28-1SD045からは土師器椀・甕口縁部破片、砂岩製砥石、円盤状石製品、28-2SD145からは土師器椀、弥生土器破片、ミニチュア土器鉢などが出土している。出土遺物から6世紀後半頃と考えられる。

28-2SD135（第20図・第36図）

第28-2次調査区南東部E15グリッドからJ19グリッドにかけて検出した南北方向に斜行する溝状遺構である。南端は攪乱に切られており、28-2SD145との切り合い関係は不明であるが一連の溝跡の可能性が考えられる。主軸方向はN-41°-Eで、ほぼ直線的である。検出長約21.0m、検出幅約0.3～0.4mで、深さは約0.1～0.14mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単一層であるが、一部においてラミナ構造がみられることから水路として機能していたと想定され、機能停止後一気に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は僅少であり、遺物からの時期比定は困難である。

28-2SD140（第20図・第36図）

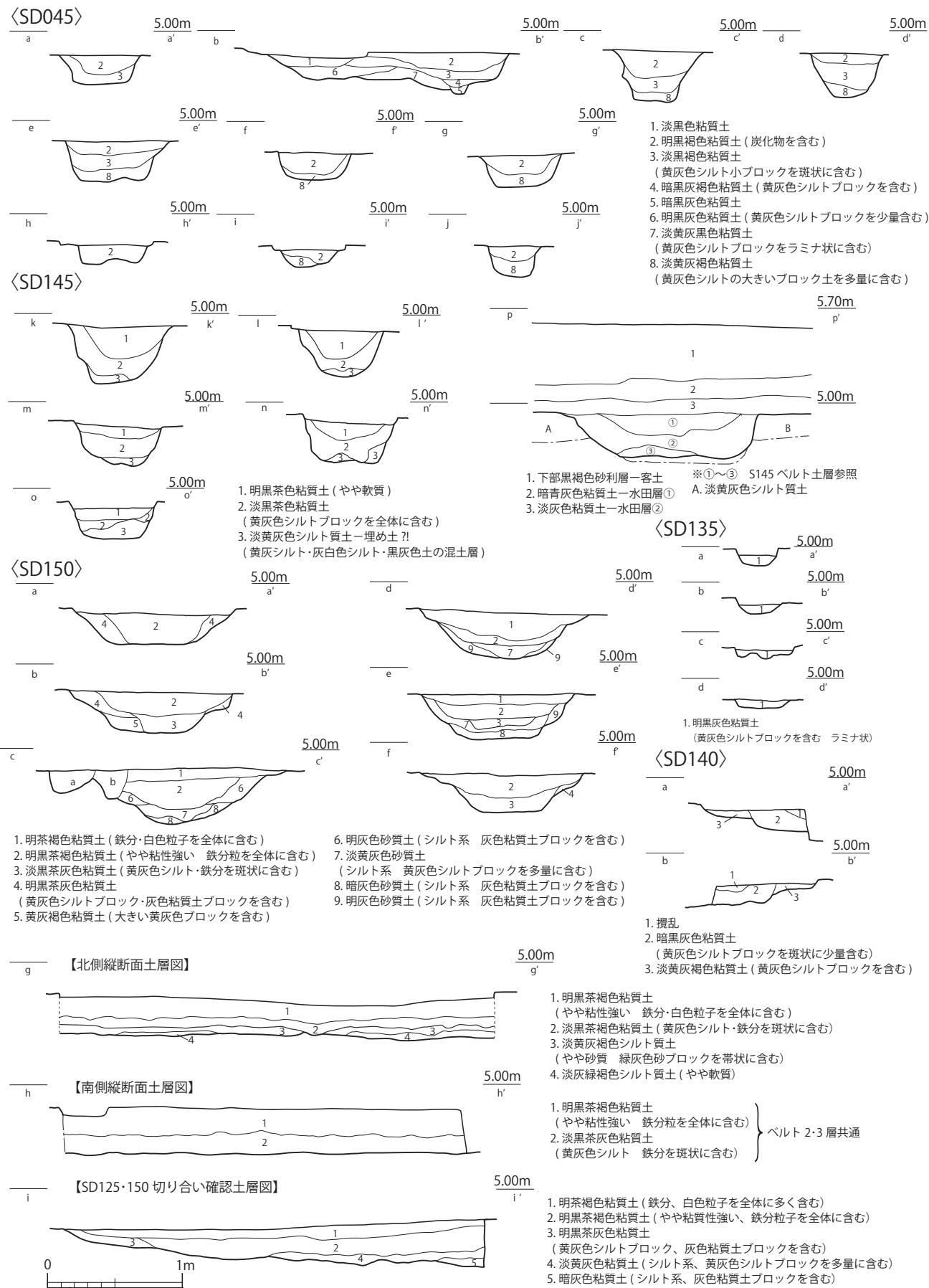
第28-2次調査区東部F20グリッドからG20グリッドにかけて検出した溝跡である。周囲が建物基礎による攪乱により欠失し、溝の規模は不明である。主軸方向はN-8°-Wで、検出幅0.74～0.84m、深さ0.14～0.16mを測る。埋土は黄灰色シルトブロックを含む粘質土で、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は土師器蓋口縁部片が出土しており、埋没時期は8世紀中頃から9世紀ごろと考えられる。

28-2SD150（第20図・第36図）

第28-2次調査区北側P19グリッドからE19グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-2SE175・SD130・SD135・SD190に切られている。28-2SD125とほぼ直角に交わっており、その交点を28-2SE170が切っている。28-2SD125との切り合いは不明瞭であった。北端は5SD005と、南端は37SD001と接続する可能性が考えられる。ほぼ直線的で、主軸方向はN-3°-Wである。検出長約61.2m、検出幅約1.1～1.4m、深さ約0.28～0.41mを測る。基底部の標高は北側で4.3m、南側では約4.4mを測り、やや北側に低くなっている。断面形状は逆台形を呈する。上層は茶灰色を基調とした粘質土で鉄分・シルトブロックなどを含み、下層はシルト系の砂質土で埋積されている。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は、破片資料が主体で土師器高坏・甕口縁部の破片、古式土師器・弥生土器・縄文土器の破片などが出土している。

28-2SD155（第20図・第37図）

第28-2次調査区南東部分F17グリッドからH19グリッドかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。攪乱に削平されており、検出した部分は少なく全容は不明である。主軸方向はN-43°-Eである。検出長8.2m、検出幅0.3～0.8m、深さ0.12～0.14mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単一層で基底部付近はラミナ構造が認められ、水路として機能をなしていたと想定できる。また機能停止後人為的に埋め戻され



たと考えられる。遺物は僅少であるが、土師器蓋が出土している。大半が搅乱に削平されているが、土層観察と出土遺物から 28-2SD210 と同一の溝跡である可能性も考えられる。出土遺物から、8世紀末から9世紀初頭頃の所産と考えられる。

28-2SD180（第20図・第37図）

第28-2次調査区東部J20グリッドからK20グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-2SD130に切られている。主軸方向はN-13°-Wで、ほぼ直線的であるが北側でやや西寄りに曲がる。検出長約10.5m、検出幅は北端で約0.6m、南端で約1.2m、深さは1.6～2.2mを測る。基底部の標高はおおむね4.6mを測る。断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は土師器椀・壺、須恵器壺などの古代の遺物で、埋没時期は8世紀頃と考えられる。

28-2SD185（第20図・第37図）

第28-2次調査区北部M20グリッドからN20グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端は調査区外へ延び5SD151に接続すると考えられ、一連の溝跡である可能性が考えられる。北側部分では28-2SE165に切られている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-20°-Wである。検出長約7.4m、検出幅北側で約0.4m、南側で約0.74m、深さは約0.12～0.34mを測る。基底部の標高は、南側で4.5m、北側で4.6mとやや南側に低くなっている。断面形状は逆台形を呈する。上層は黄灰色ブロック土を含む褐色を基調とする埋土で、下層では粘土を含む灰褐色土が堆積している。出土遺物は僅少であり、時期比定は困難である。

28-2SD190（第20図・第37図）

第28-2次調査区北部P18グリッドからM20グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端は調査区外へ延びており、南端はM20グリッドで収束している。28-2SD150の上面から検出され、28-2SD125・185を切っている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-23°-Wである。検出長約12.4m、検出幅北端約1.9m、南端約0.5m、深さ約0.2mを測る。基底部の標高は4.6mを測り、北側は28-2SD150との切り合いによって低くなっている。断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は土師器甕b・甌、黒色土器A類椀などで8世紀後半～9世紀頃の所産と考えられる。

28-2SD195（第20図・第37図）

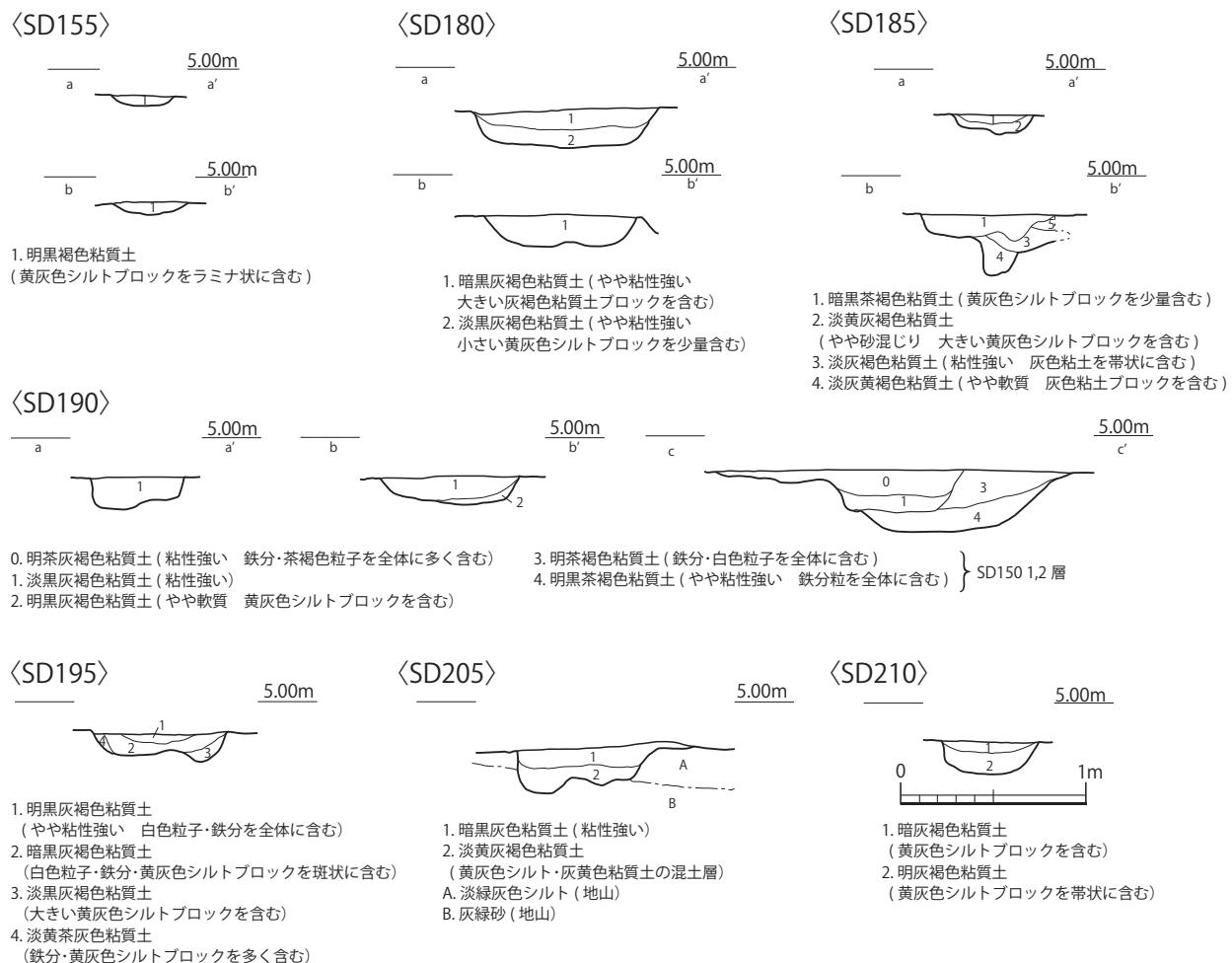
第28-2次調査区中央K20グリッドからL20グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端はL20グリッドで収束し、南端は搅乱と28-2SD130に切られている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-6°-Wである。検出長5.0m、検出幅約0.7m、深さ0.18mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は黒灰褐色を基調とし、黄灰色シルトブロック・鉄分を含む。出土遺物は、黒色土器A類椀、須恵器高壺片など古代の遺物で、8世紀後半から9世紀頃の所産と考えられる。

28-2SD205（第20図・第37図）

第28-2次調査区北部N21グリッドからM22グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-2SD125を切っている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-25°-Wである。検出長約7.0m、検出幅約1.0m、深さ0.26mを測る。断面形状は逆台形を呈する。遺物は土師器壺ほか、焼土塊なども出土している。出土遺物から8世紀後半から9世紀前半頃と考えられる。

28-2SD210（第20図・第37図）

第28-2次調査区東部L23グリッドからL24グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-



第37図 第28次溝跡遺構実測図5 (1/40)

2SE215を切っている。ほぼ直線的で、主軸はN-41°-Wである。検出長約3.0m、検出幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。断面形状はU字形を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、黄灰色シルトブロックを含む。遺物は、土師器甕b口縁部破片が出土しており、埋没時期は8世紀後半から9世紀頃と考えられる。土層観察と出土遺物から28-2SD155と同一の溝跡である可能性が考えられる。

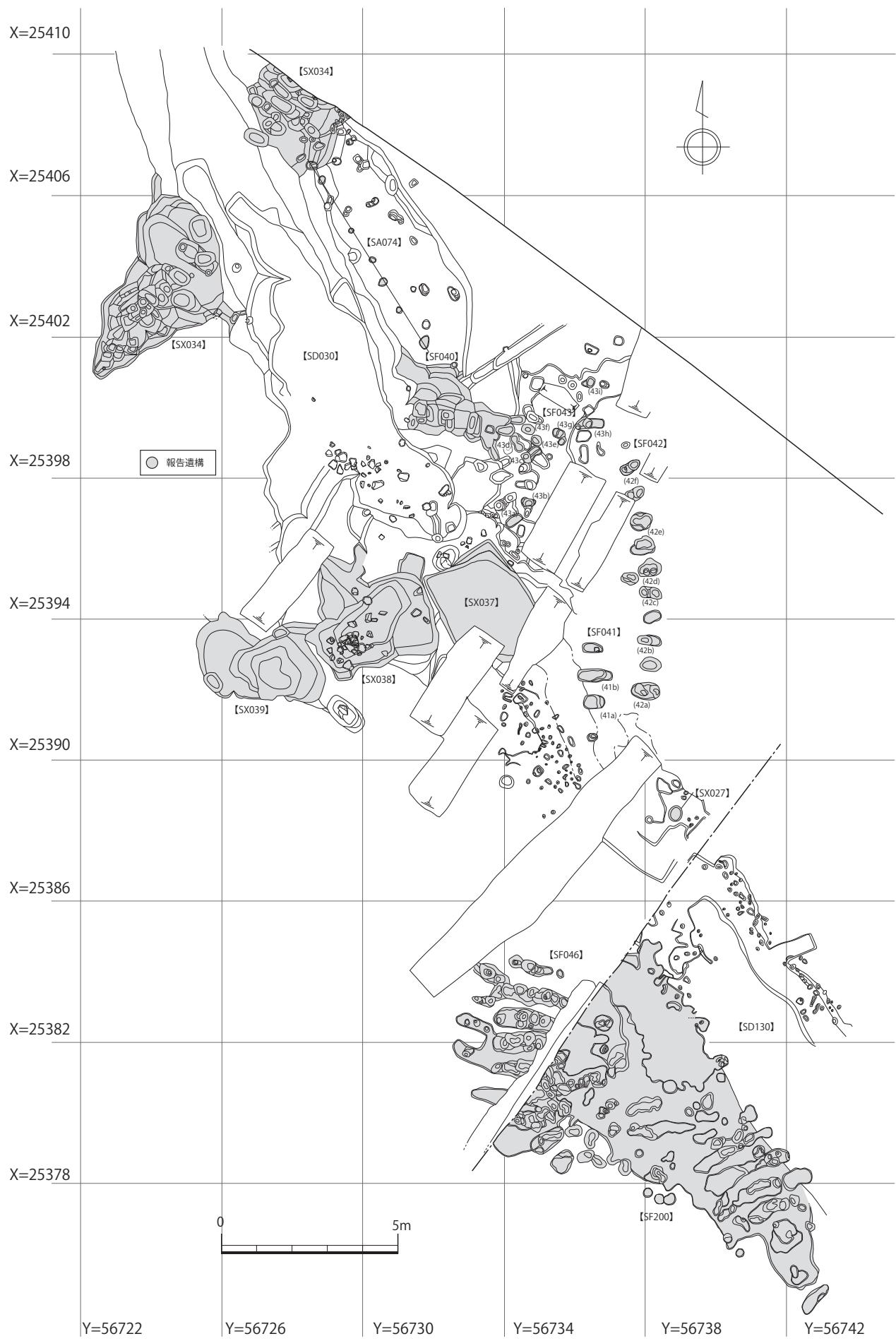
道路状遺構(SF)

28-1SF040-043 (第39図)

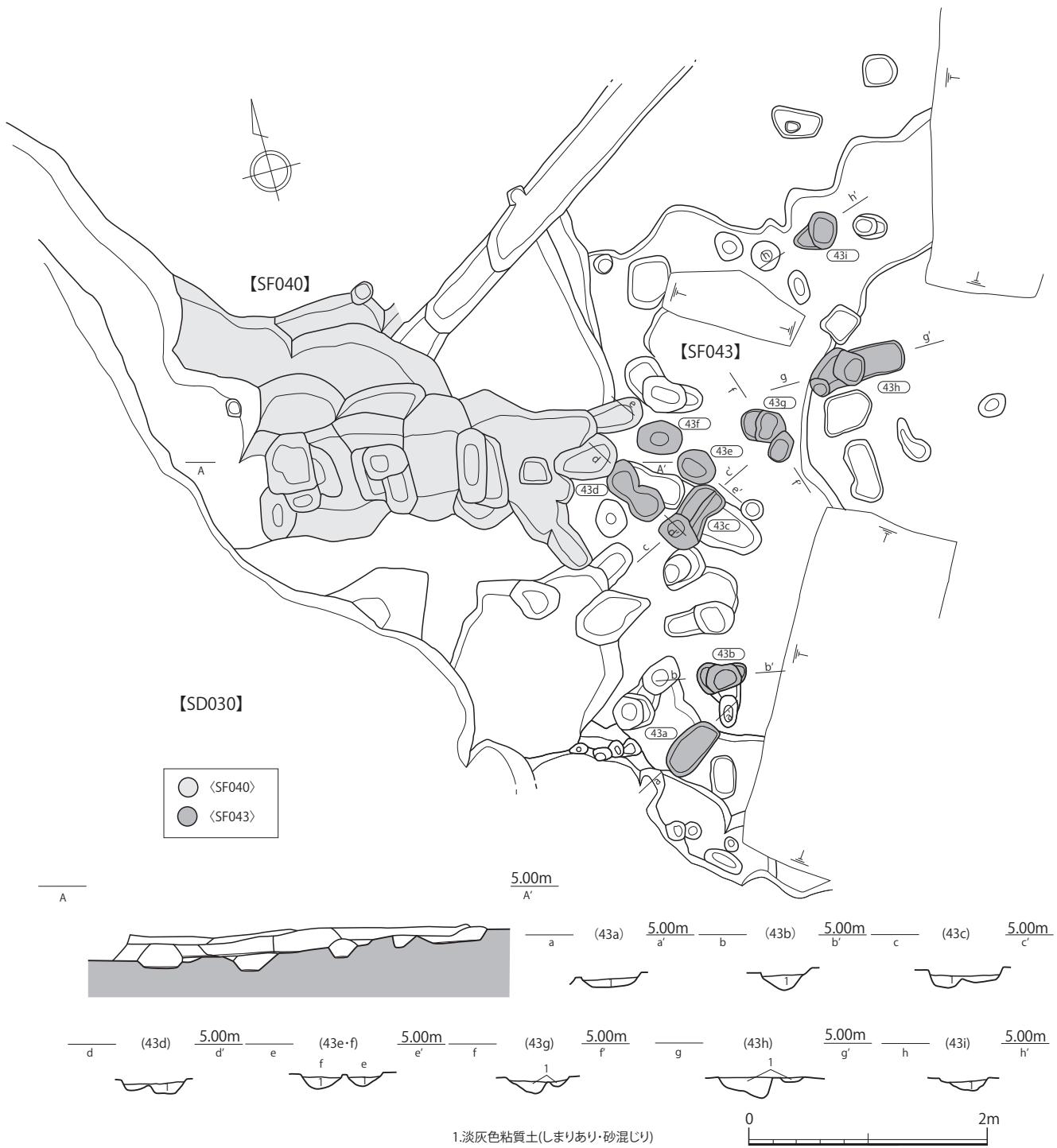
第28-1次調査区北部P15グリッドからQ16グリッドにかけて検出した。28-1SD030の北側に沿うように構築されている。28-1SF041・042・043は同一の性格をもつ不定円形の連続土坑であり、サーカステント基礎により削平されているため、全てを確認出来ていないが一連の道路状遺構(28-1SF040)であると推定される。

28-1SD030と28-1SF043を繋ぐ遺構は、逆台形状に溝を掘りこみ、底面に連続する不定橢円形の土坑を構築したと考えられる。東西長3.1m、検出幅1.3~2.0mを測る。西端標高4.4m、東端4.7mで、28-1SD030から東方向へと高くなっている。スロープ状に傾斜している。底面に認められる連続する土坑は、長軸0.5~0.6m、深さは0.08~0.14mを測り、それぞれ0.3~0.4mの間隔で配されている。この遺構内では遺物は出土していない。

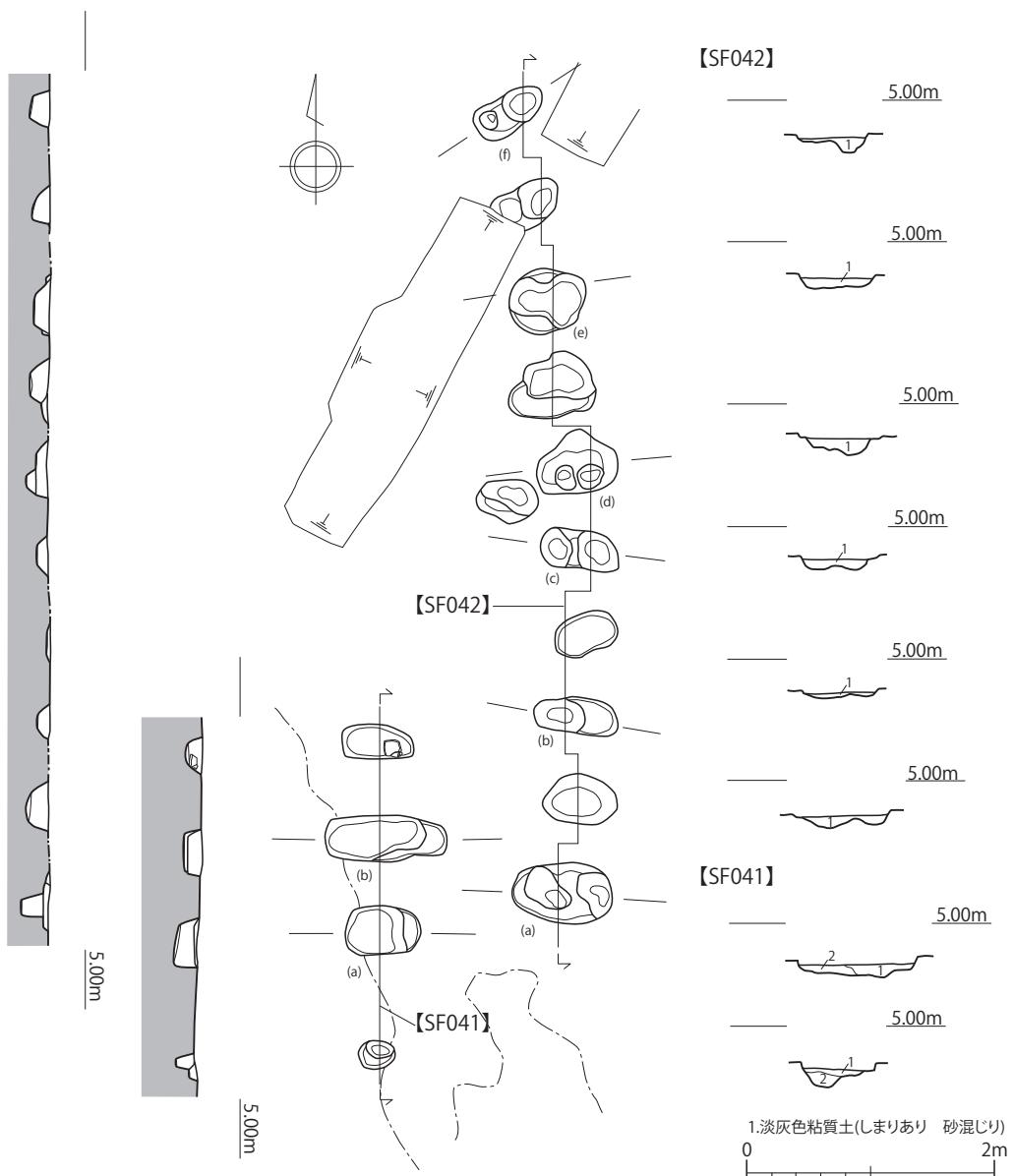
28-1SF043はスロープ状の遺構の東側に接続する連続土坑である。それぞれの土坑の平面プランは不定橢円形を呈し、長軸0.42m~0.7m、深さ0.08m~0.14mを測る。① 28-1SD030(南)方向(43a~c・f) ②



第38図 道路状遺構及び関連遺構全体図 (1/150)



第39図 28-1SF040・043 遺構実測図 (1/50)

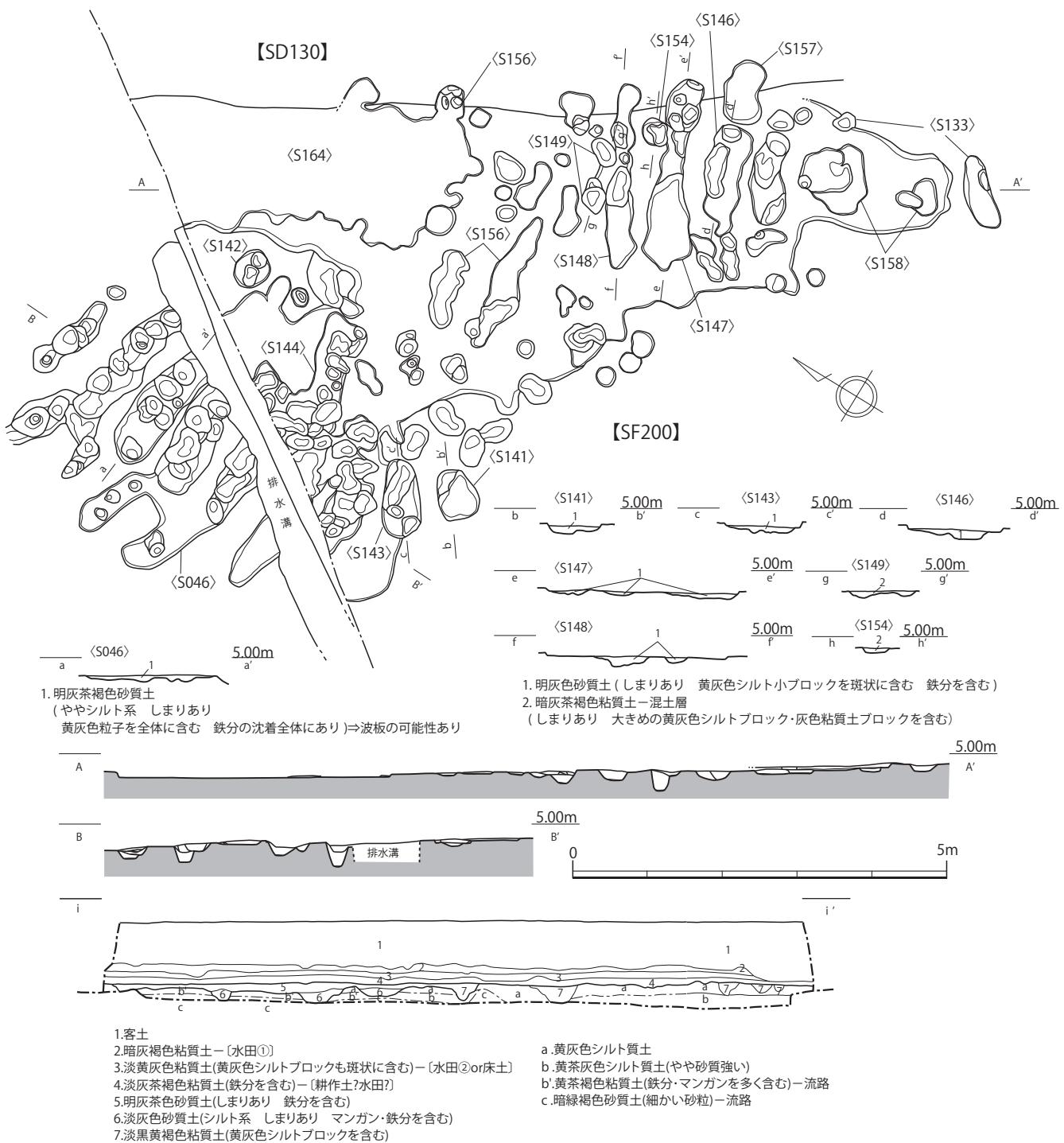


第40図 28-1SF041・042 遺構実測図 (1/50)

28-1SF041・042（東）方向（43 d・e・f・g・h）③北側調査区外（北）方向（43 i）の3通りがあると推定されるが、搅乱に削平されているので詳細は不明である。①②ともにおおむね0.3m～0.4mの間隔で配されている。埋土は砂・土器破片などが混じるが淡灰色粘質土で充填される単一層で、しまっている。遺物は少量であるが、須恵器坏H、土師器高坏脚部破片、椀、玉砂利などが出土している。

28-1SF041・042（第40図）

第28-1次調査区北東部分O16グリッドからP16グリッドで検出した28-1SD030の北側に位置する連続土坑である。真南北方向に延び、平面プランは不定円形ないしは橢円形状を呈する波板状の土坑である。28-1SF041は、28-1SF042の南端の3基の土坑間に配置され併行している。28-1SF041は全長約2.75m、28-1SF042は約6.73mを測る。地山を皿状に浅く掘りこんだ土坑で、長軸0.6～0.9m、深さ0.15～0.2mを測り、約0.3mの間隔で配されるが、土坑42d～fの間は緩やかにカーブしており、間隔が0.15mと狭くなっている。埋土は、28-1SF043と同様の淡灰色粘質土で充填されており、しまっている。28-1SF041では土師器坏片、須恵器甕破片、牛馬歯などが出土しており、28-1SF042で遺物は出土していない。



第41図 28-2SF200 遺構実測図 (1/80)

28-2SF200（第9図・第41図）

第28-2次調査区西端M16グリッドからK17グリッドで検出した28-2SD130の南側に位置する連続土坑である。第28-1次調査で28-1SF046を検出し、第28-2次調査で関連遺構を検出した。①28-1S046・28-2S141・143・144②28-2S146・147・148・149・154・156・157・164の2通りが想定できる。①の連続土坑は、真南北方向に延びる波板状の土坑で、一部現代の排水溝に削平されている。平面プランは不整形な長楕円形状を呈する。長軸0.7～2.0m、深さ0.1～0.3mを測る。全長5.9m、連続土坑の間隔は0.1～0.3mを測る。灰色砂質土を基調としたシルト系の埋土で充填されており、しまっている。土層観察から、波板状の土坑を明灰色砂質土で充填した後、明灰茶色砂質土で被覆している。遺物は少量であるが、土師器壺a破片（28-2S144）、須恵器甕（28-2S142）が出土している。主軸方向からも28-1SF040と一連の道路状遺構の可能性が考えられる。②の連続土坑は、全長10.3m、主軸方向N-32°-Wをとり南北方向の波板状土坑である。28-2SD130の西岸を切る。平面プランは不整形な長楕円形状ないしは不定円形を呈する。土坑の規模は不揃いで、長軸0.4m～2.4m、深さ0.15m～0.3mを測る。28-2S164は他の波板状土坑より規模が大きく、検出長4.2m、検出幅2.2m、深さ0.05mを測る。土坑の間隔は、狭くなる部分もあるが、おおむね0.2～0.4mを測る。埋土は、S146・147・148では灰褐色砂質土、S149・154・164では暗灰茶褐色粘質土であり、どちらもしまっている。遺物は須恵器壺a・皿破片（28-2S156）、盤底部片（28-2S146）などが出土している。道路として機能していたか不明であるが、水路と陸上を繋ぐなんらかの施設であった可能性が考えられる。

性格不明遺構(SX)

28-1SX027（第44図）

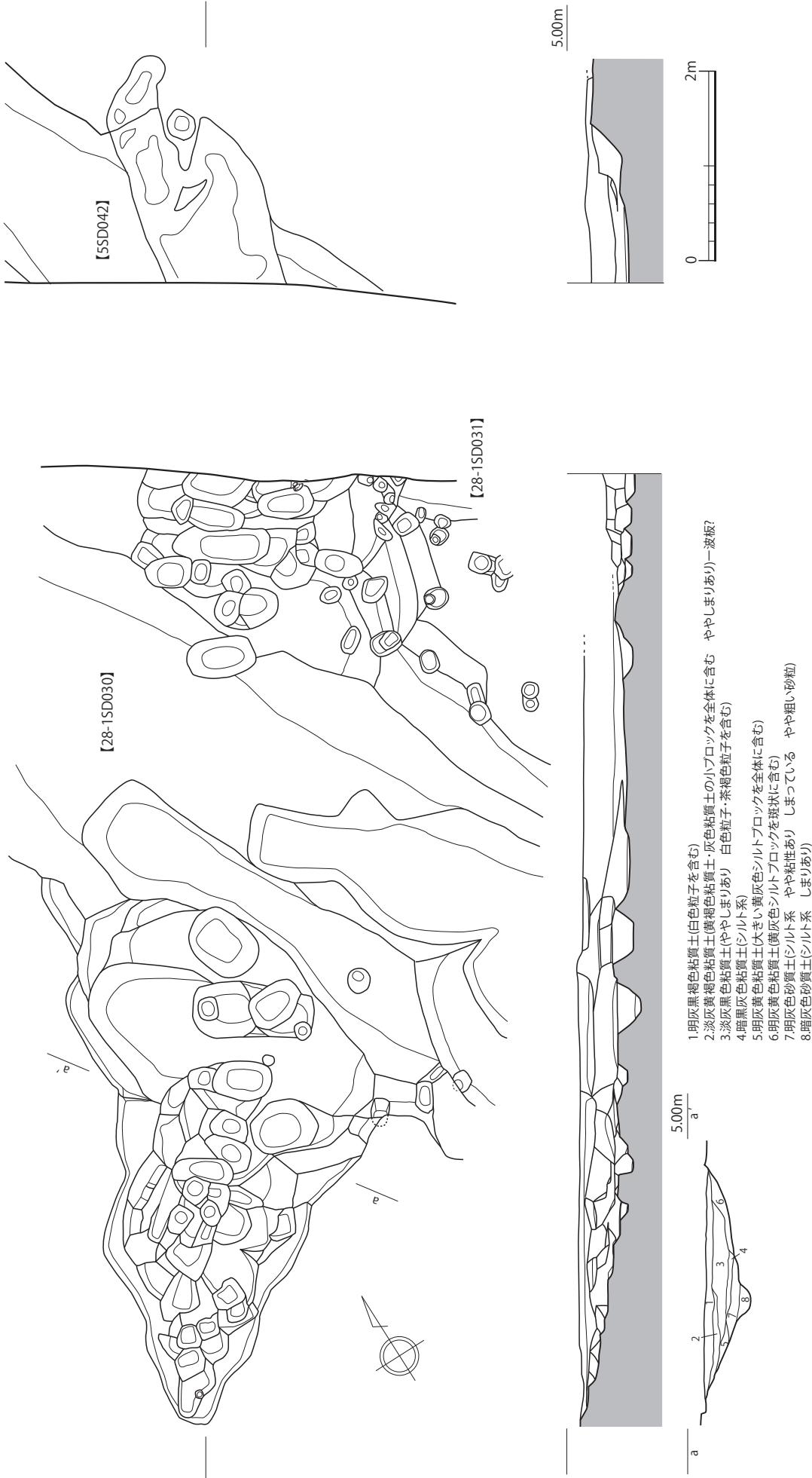
第28-1次調査区東端M16グリッド、28-1SD030内で検出された。平面プランは不整な円形を呈し、長径0.58m、短径0.52m、深さ0.1mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は軟質な灰褐色土である。出土遺物は土師器壺×甕、須恵器蓋などである。出土遺物から埋没時期は8世紀前半頃と推定される。

28-1SX034（第42図）

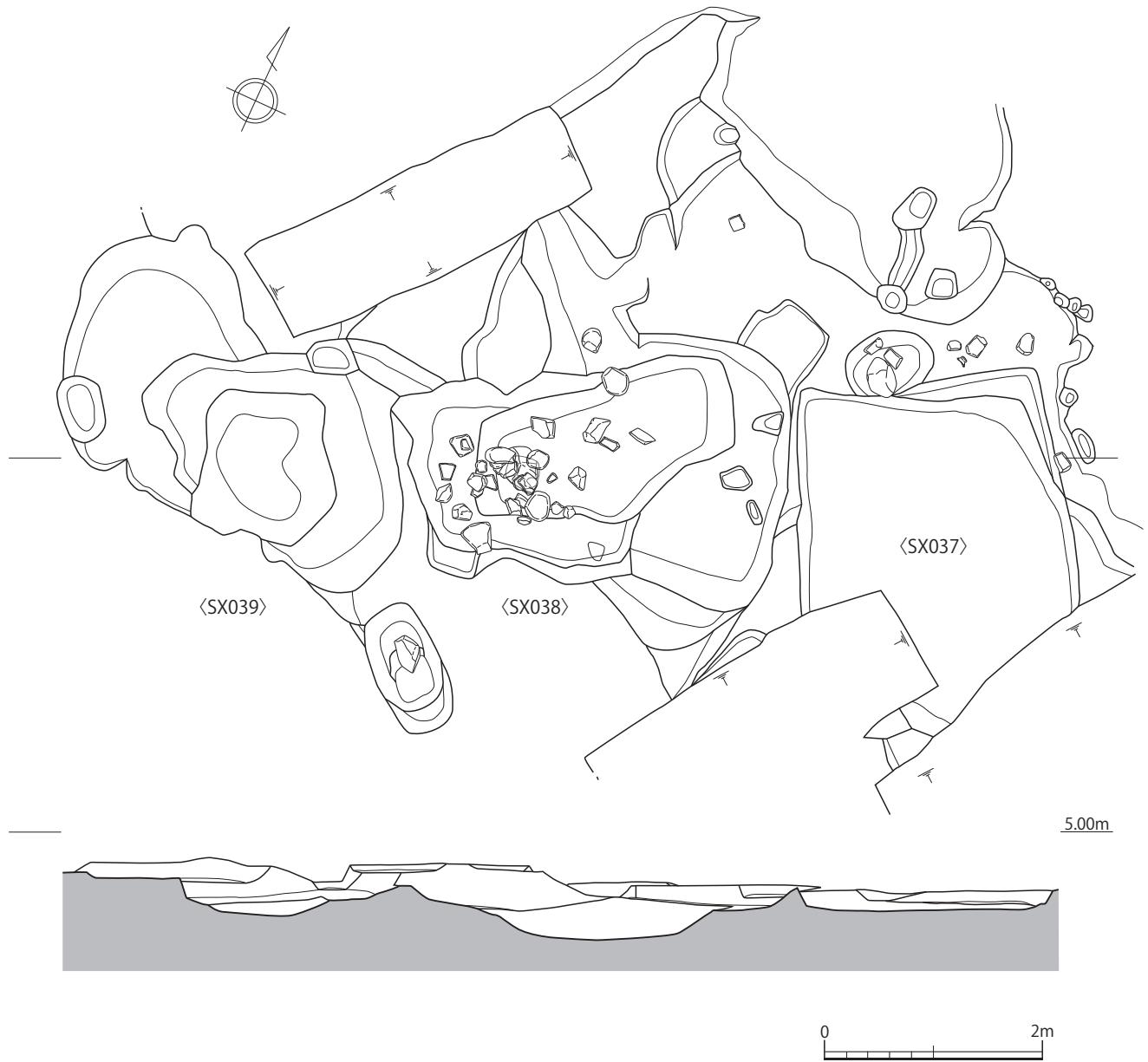
第28-1次調査区北部R14グリッドで28-1SD030の両岸で検出した。北端は調査区外に延び第5次調査で検出した。28-1SD031を切っている。南北長14.5m、最大幅4.5mを測る。南側最大深度0.55m、北側最大深度0.4mを測り、28-1SD030の底面と同様に標高は4.3mである。平面プランは溝の外側に向かって狭くなる二等辺三角形状を呈する。断面形状はV字形を呈する。掘りこみ部分の中央には多数のピットが検出されており、橋を構築するための支柱などの施設である可能性が想定される。中央部分のピットは不定円形ないしは長楕円形状を呈する。不定円形のピットは直径0.2～0.3m、長楕円形状のピットは長径0.6～0.9mを測る。28-1SD130内部では同様のピットは検出していない。埋土はシルト質の灰色砂質土で、しまっている。検出面からピットまでの埋土は、ブロック土を含む粘質土である。土層観察から不整合がみられるため、1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物は、土師器甕b・甕、須恵器高壺脚部、メンコ状加工土器片などがある。出土遺物から28-1SD030と同時期の8世紀後半～9世紀初頭頃機能していたと考えられ、同時併存していた可能性が高い。

28-1SX037（第43図）

第28-1次調査区北東部分O15グリッドからO16グリッドにかけて検出した。28-1SD030内で検出し、一部攪乱に削平されている。平面プランは、南東部分が攪乱に削平されているため詳細は不明であるが、方形を呈し、北東部分に1段のテラスが認められる。検出長約3.15m、検出幅2.5m、深さ0.2mを測る。底面の標高は4.3mで、28-1SD030・28-1SX039と同じくしている。断面形状は平たい逆台形を呈し、底面はフラットである。埋め土はややしまったブロック土を含む粘質土である。28-1SD030に関連する遺構であるが、性格は不明である。遺



第 42 図 28-1SX34 遺構実測図 (1/60)



第43図 28-1SX037・038・039 遺構実測図 (1/60)

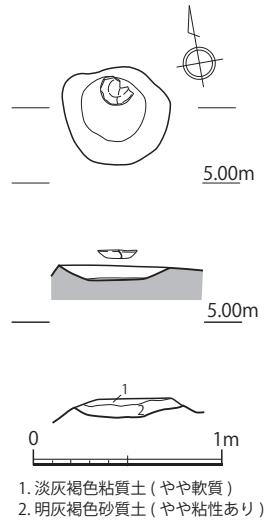
物は、土師器壺c、須恵器蓋・壺片の他、須恵器転用硯（猿面硯）が出土している。出土遺物から28-1SD030と同時期の8世紀後半～9世紀初頭頃機能していたと考えられる。

28-1SX038（第43図）

第28-1次調査区北東部分O14グリッドからO15グリッドにかけて検出した。28-1SD030のやや南側に位置し、28-1SX037に隣接する。平面プランは不整形な隅丸方形形状を呈する。長軸3.5m、短軸2.8m、最大深度0.6mを測る。断面形状は逆台形を呈し、段掘り状になっている。底面の標高は4.0mであり、28-1SD030や28-1SX037よりも深くなっている。西半分の標高4.5m付近では15cm～25cm超の礫を多数検出した。底面では30cm超の礫が検出されている。北側には28-1SD030に接続すると推定される溝状の掘り込みが認められる。28-1SD030に関連する何らかの機能をもった遺構であるが性格は不明である。出土遺物は土師器壺d、甕b口縁部破片、須恵器蓋、石斧などがある。28-1SD030と同時期の8世紀後半～9世紀初頭頃に機能していたと考えられる。

28-1SX039（第43図）

第28-1次調査区北東部分O14グリッドで検出された。28-1SD030の南側に位置し、28-1SX038に隣接す

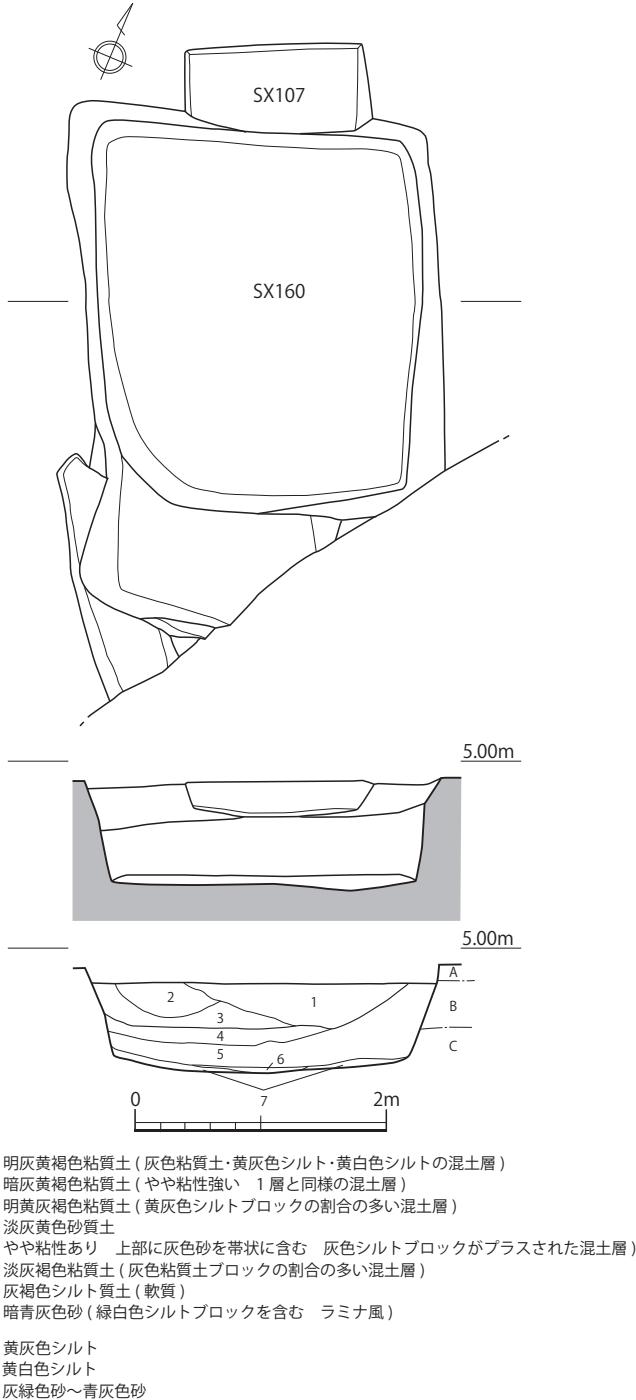


第44図 28-1SX027 遺構実測図 (1/40)

る。平面プランは不整形な橢円形状を呈する。長軸約2.6m、短軸1.9m、深さ0.45mを測る。断面形状は逆台形を呈する。底面の標高は約4.3mで、28-1SD030や28-1SX037と同様である。埋土は単一層で一気に埋め戻されたと考えられる。SX037、SX038と合わせて、SD030に関連した遺構群と考えられる。遺物は少量であるが、土師器壊a・須恵器甕片などが出土している。出土遺物から28-1SD030と同時期の8世紀後半～9世紀初頭頃の遺構と考えられる。

28-2SX160 (第45図)

第28-2次調査区南部F17グリッドで検出した。28-2SD106・SK107に切られている。平面プランは長方形を呈し、南側にテラスを持つ。長軸4.2m、短軸2.6m、深さ0.8mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は下層ではシルト質土と砂層で、その上位層はシルトブロックなどを含む粘性のある混土で埋積されている。土層観察から不整合がみられ、少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物は須恵器壊aなどがあり、下層では縄文土器・姫島産黒曜石が出土している。第28次調査で確認した各遺構埋土と比較すると新しい時期の遺構埋土に類似しており、出土した遺物は、他からの混入の可能性も考えられる。



第45図 28-2SX160 遺構実測図 (1/60)

(4) 出土遺物

出土遺物の概要

第28次調査区全体からは、コンテナ48箱分の遺物が出土している。遺物は、古墳時代前期から古代に該当するものが大部分を占めている。第28次調査から出土した古墳時代前期の土器群は、本調査区に近接する第20・23・32次で環濠と推定される溝跡出土資料と同時期の様相を示している。その他、古墳時代後期の遺物が少数ながらも出土している。大道遺跡群内では、当該時期の資料は極めて少ないとから重要な所見である。古代については、大溝（28-1SD030・28-2SD130）の埋土から8世紀末～9世紀前半頃を中心とする遺物の出土が顕著である。構成は土師器・須恵器の供膳具が主体的であるが、長頸壺や甕といった貯蔵具も散見される。また、石帶の巡方や銅製の鑷、「厨」と刻書された土師器小壺、転用硯といった官衙的要素を持つ遺物を含んでおり、第28次調査地を含む周辺地点の遺跡の性格や特徴を示す好資料といえる。

以下では、主要遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載・報告を行う。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表（表2・3参照）にて報告している。遺構の時期認定に関わる遺物も表に掲載するのみとなっているものもあるが、出土遺物の全容についてはこれを参照していただきたい。ここでは、特に重要な遺物についてのみ詳述する。

28-1SH050 出土遺物（第46図2～30・第47図1～3）

全て古式土師器である。高壺、鉢、小型丸底壺などが主体を占める。高壺は壺部下位に明確な稜が見られ口縁部が外反するタイプ（3・4・6・7）と壺部外面の稜が曖昧で口縁部が直線的に伸びるタイプ（5・8）があり、脚部はラッパ状に開くもの（5・10・11）、と柱状部と裾部に明確な稜を形成するタイプ（12～15）、柱状部が短いタイプ（9）がある。24は壺の口縁部であるが、複合口縁状を呈す。土器群の特徴から古墳時代中期初頭頃の所産と考えられる。

28-1SH059 出土遺物（第47図4・5）

4・5は土師器椀Bである。ともに口縁部は丸く内彎しており、4は丸底状の底部を有すものと推測される。古墳時代後期後半頃の特徴を示す。

28-1SE010 出土遺物（第48図6～15・第49図～第51図）

全て古式土師器である。10は長い口縁部を有すタイプの小型丸底壺と思われる。12は頸部と胴部の境が鋭く尖った広口壺の破片である。頸部内面は横方向に連続したケズリが行われる。口縁部は直線的に伸び、平坦に仕上げられる。16・17は球形胴部を呈す広口壺で、16は口縁部にU字状の打ち欠きが、底部には円形の打ち割りが施されている。壺には複合口縁壺も散見される。18は球形の胴部に屈曲の緩い複合口縁を有する。頸部には方形の打ち割り痕が、底部は大きく打ち欠きが行われている。内外面には縦方向のミガキが顕著である。口縁側面の波状文は1条で、非常に稚拙に刻まれている。20～41は甕である。様相としてナデ肩気味で球形胴部を呈すものが目立ち、布留式系の影響を受けているものが多く見られる。23・24・26・38・39は口縁形状や器形に布留式系の特徴が現れている。26は肩がやや張っており、胴部中位に最大径を有し球形に近い形状をしている。口縁端部は鋭く平坦に仕上げられる。外面は縦方向のハケ目調整の後、胴部上位に横方向のハケ目調整が施される。底部内面にはユビオサエが顕著である。全体的に器壁が薄い。38は布留式系甕口縁部である。器壁は薄く、端部は外面に若干突出する。また、23・24・26・28は頸部と胴部の境に一旦段が生じる傾向が看取される。甕についてはやや古相とも思われる資料が含まれるが、壺の特徴や10のタイプの小型丸底壺が共伴していることから、古墳時代前期前葉～中葉頃に位置づけられると考えられる。

28-1SE020 出土遺物（第 52 図 1～7）

1 は布留式系と考えられる高坏部で、口縁部が上方に向かって立ち上がる。2 は外来系の要素をもった二重口縁壺である。7 は磨石と思われる。両面中心部には打痕のような窪みが認められる。側面には帯状に石本来の表面が表出している。蛇紋岩製である。

28-2SE0170 出土遺物（第 52 図 11～22・第 53 図・第 54 図 45～55）

出土した資料は全て古式土師器である。13 は弥生時代後期から見られる鉢である。口径に比して器高が高い形状をしている。15 は小形の二重口縁壺である。胴部中位に最大径をもち、胴部上位はナデ肩で下膨れの形状を呈している。畿内系の影響を受けたものと考えられる。19 は布留式傾向の甕である。ナデ肩で、左右歪んだ球形胴部を呈し、底部は平底気味である。24 は有段式の高坏の坏部で、口縁部は直線的に大きく開く。外来系と思われ、やや古相に位置づけられる。30 は口縁部が長く、浅鉢状の胴部をもつ小型丸底壺である。口縁内面には横方向に細かく連続したハケが施される。31 は 15 と同様の形状を呈し、二重口縁壺と思われる。両資料とも内面ユビオサエが顕著である。35～43 は甕の破片である。口縁端部に布留式系の特徴を示すものが認められる。これらの時期であるが、全体的に古い様相が看取されるが 30 のような新しい様相をもつ小型丸底壺が含まれることから、古墳時代前期中葉～後葉頃に該当すると考えられる。

28-2SE175 出土遺物（第 54 図 56）

白色研磨土師器塊である。口縁端部は丸く収められ、高台は断面三角形を呈す。いわゆる浅塊タイプに該当し、12 世紀中頃に位置づけられる資料である。

28-1SK024 出土遺物（第 55 図 67～71・第 56 図 72・73）

67 は複合口縁壺である。球形に近い倒卵形の胴部に頸部には 1 条突帯が貼り付けられる。直立気味のやや長い口縁側面には、大きく 2 単位の波状文が刻まれる。68 は布留式系の高坏である。坏部は深く、内面に縦方向を基調とする密なミガキが施される。69 は内面に明瞭な稜をもつ小型丸底壺である。70 は高坏又は二重口縁壺の口縁部である。72 は在地系の甕で、胴部下位に円形の穿孔が施される。73 が短く屈曲する口縁部に球形胴部を呈する甕である。胴部上位には円形に打ち割られた痕跡が認められる。これらの土器群は、おおむね古墳時代前期前葉の範疇で捉えられる。

28-1SK100 出土遺物（第 56 図 74～77）

74 は内彎する体部、口縁部を有する土師器椀 B である。75 はナデ肩で下膨れの胴部を持つと思われる広口壺である。77 は土師器甕で、底部穿孔部付近の内面にはユビオサエ痕が顕著に残る。これらの土器は古墳時代中期末頃～後期の所産と位置づけられる。

28-1SD002 出土遺物（第 57 図 78）

78 は棒状の磨石で、磨り面には細かい擦り痕が確認できる。

28-1SD005 出土遺物（第 57 図 80～87）

80～82 は口縁部が内彎する土師器椀 B である。87 は甕 E に該当すると考えられ、屈曲が緩く下膨れ形状になると思われる。これらの土器群は古墳時代後期後半以降に該当するものである。

28-1SD029 出土遺物（第 57 図 88～104）

88 は緑釉陶器椀で、防長産と考えられる。89・90・96 は須恵器坏蓋と坏 H で、小田編年 IV A 期に該当する

ものである。91は大分市内では比較的出土数が少ない須恵器蓋bである。94は須恵器坏aの底部破片である。99～103は土師器の破片資料であり、皿cや蓋4等が見られる。これら資料の位置づけであるが、古いものも含まれているが須恵器坏aや蓋b、土師器蓋4が認められることから主体は9世紀初頭頃の資料と位置づけられる。

28-1SD030/28-2SD130 出土遺物（第58図～第62図 157～177）

SD030とSD130は同一の溝跡である。遺物は須恵器・土師器の供膳具が圧倒的に出土量の割合を占めるが、壺や大型の甕も認められる。須恵器については蓋・坏の破片は硯に転用されたものが複数見られる。特徴として、破片の縁辺部を加工している。また、越州窯系青磁碗や漆付着土師器、刻書土器、鑷と思われる銅製品、巡方といった特殊製品も出土しており、これらは本遺跡を特徴づけるものと言える。図示している資料は、遺物選別時に遺構の時期を決定し得るものから代表的に選り出した資料又は上記にある特殊遺物、大道遺跡群内で出土事例が少ないのであり、全出土数から見ると極一部に過ぎない。また、資料中にはミニチュア製品が多数含まれていた。これらは溝祭祀等に使用されたと推測することができるが、明確な時期比定には資料の増加が望まれる。器種判断が困難で、報告で器台としている資料の中に古墳時代の製塙土器に該当するものが含まれる可能性があることを断っておく。遺物群の時期であるが、5世紀代・8世紀前半頃を所産とするものが含まれるが、主体は8世紀末～9世紀初め頃になると考えられる。

1は越州窯系青磁碗の破片である。8は須恵器横瓶の胴部破片である。内面に閉塞部の痕跡が確認できる。15は土師器坏と思われる破片である。器面にはユビオサエ痕が顕著であり、外面には2条の波状文が描かれている。18は土師器小壺cの高台部である。底部外面に「厨」の文字が刻書されている。20～25はミニチュア土器の器台であり、SD030・130からは比較的多く出土している。28・29は銅製品であり、28は鑷、いわゆる毛抜きと考えられる。29は用途不明であるが、両先端部に取り付け用と考えられる穴が認められる。

30は須恵器坏蓋で、九州須恵器編年ⅠB期～Ⅱ期の範疇に該当する。31は須恵器蓋1、36は須恵器坏Hで、これらは九州須恵器編年ⅣB期～Ⅴ期に位置づけられる。46は須恵器長頸壺の胴部で、中位の稜は鋭角である。48は須恵器甕a口縁部で、外面下位に段があり、縁は幅広になる。51は土師器皿aで底部内面には渦巻き状にヘラミガキが施される。60は黒色土器A類碗である。体部～口縁部は直線的に伸びる。61は弥生土器甕口縁部で、側面には多数の沈線が認められる。西部瀬戸内系のものと考えられる。62・63は製塙土器である。62には内面に布目痕を見る能够である。64～69はミニチュア土器で鉢・器台である。64は口径が5cm未満の極小品である。70はフイゴの羽口の破片である。径は10cm程度の小形品と思われる。72は小形の砥石である。仕上げ用砥石と考えられる。78は柱状部が長いタイプの須恵器高坏A類である。81は製塙土器口縁部で、森田分類I類に該当する。外面のユビオサエは顕著である。83は土製の玉である。中央に小さな穿孔があるが貫通はない。85は土師器坏eの底部である。薄手の円盤状の底部を呈し、白みがかった色調をなす。

87は須恵器坏蓋で口縁部と体部の境に突帯状の段が認められる。九州須恵器編年ⅠB期～Ⅱ期の資料と判断される。99は石帶の巡方である。黒色で、蛇紋岩を材料とする。丁寧に磨かれている。裏面に4箇所、細い錐状工具による穿孔された装着痕が認められる。

104は須恵器坏c高台部である。底部と体部の境が屈曲し、明瞭な段が形成される。胎土は白灰色、外面の色調は淡灰黒色を呈し、軟質で焼成が良くない状態である。底部外面には「×」状の線刻が施されている。111は須恵器壺で大宰府系分類の壺eに区分されるものである。頸部から口縁部はラッパ状に大きく開く。大宰府政序VI A期に該当する。122は土師器坏dの破片である。内外面は密なミガキにより滑らかな仕上がりである。内面に漆と推測される黒茶色の植物性有機質が付着している。123はやや古手の土師器碗aで外面は手持ちヘラケズリが行われ、内面には放射状のミガキが施される。129は平瓦の破片である。外面には格子目風のタタキが、内面には布目が見られる。135はやや大形の砥石である。図の左側の面は石材を成形するために切断されたためか、直線的な形状である。石材は安山岩と思われ、使用面は非常に滑らかである。

138は約40cmの器高を有す須恵器の甕aである。頸部から外側に開く口縁部を有す。端部上面や外面は平坦面をなし、端部下位に稜をつける。全体に同じ厚みをもつ。器形は、胴部上位の径が大きく底部へと窄まり、外面のタタキ痕は頸部～胴部上位が縦方向、胴部中位が斜方向、胴部下位～底部が縦方向と製作工程の影響か単位が分かれている。

144～156は須恵器蓋の破片である。坏蓋IV、蓋1～4の各形態が含まれる。172～177はミニチュア土器の鉢、器台である。176は製塙土器の可能性も考えられる。

28-1SD045/28-2SD145 出土遺物（第62図180～192）

SD045とSD145は遺構の確認状況から同一遺構と判断される溝跡である。180は丸底の底部から内彎する口縁部をもつ土師器椀Bである。181・182は口縁部が短く外反するタイプで、これらは古墳時代後期に該当するものと思われる。186は非常に薄い結晶片岩を丁寧に研いで仕上げられた円盤状石製品である。中央に2箇所、小さく穿孔が行われる。重さ5.2gを量る。192は弥生土器の器台脚部と思われる破片である。

28-1SD150 出土遺物（第62図193～199）

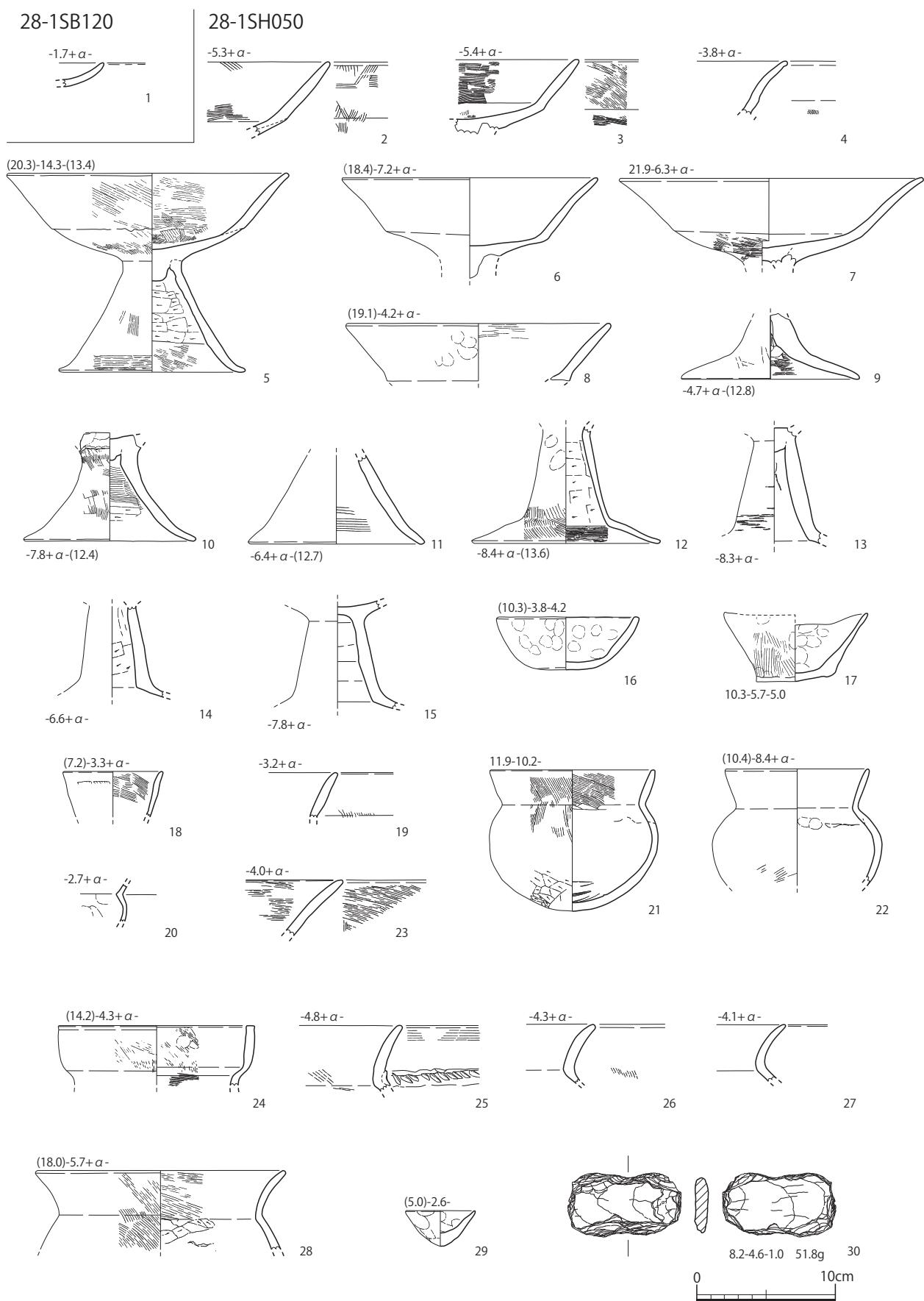
193は口縁端部に刻み目が施される深鉢である。194は口縁部下位と胴部屈曲部分に浅い沈線が見られる深鉢である。199は小形の剥片の縁辺部を加工した剥片石器である。重量は5.7gを量る。

28-1SD166 出土遺物（第62図200・201）

201は土師器高坏の柱状部の破片である。表面は面取り風に整形されており平面六角形を呈している。都城系土師器に該当するものである。

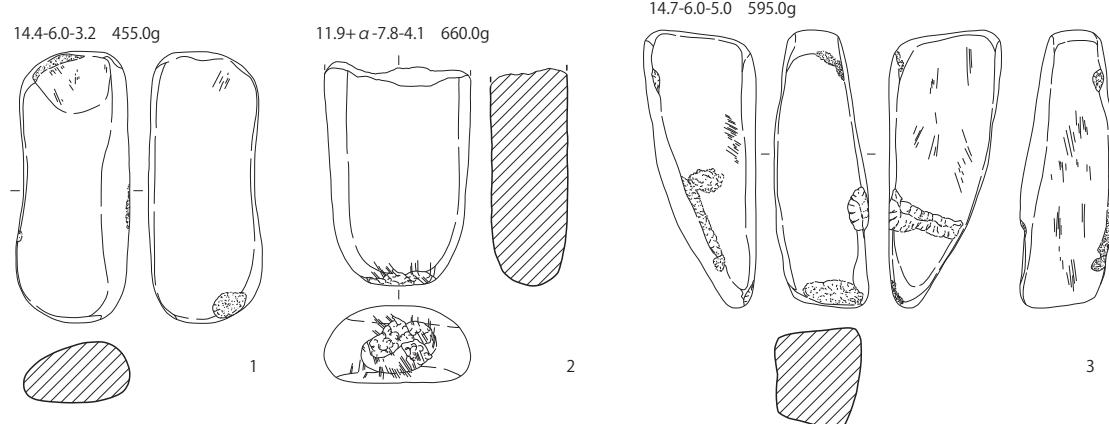
その他遺構の出土遺物（第63図）

3は28-1SX027から出土した土師器の壺又は甕の胴部から底部の破片である。茶白色を呈し、胎土中の混和材は比較的少ない。底部は平底に近く、下膨れの形状をなす。大宰府分類の小甕aの一群に該当すると考えられる。7は28-1SX028から出土した高盤aである。口縁端部は短く突出し、沈線状に窪む。9は28-1SX028から出土した製塙土器の脚部である。古墳時代の所産である。20は28-1SX036から出土した須恵器円面硯の脚部と思われる資料である。26は28-1SX037から出土した須恵器甕破片からの転用硯である。内外の縁辺部を打ち欠き、風字状になるように加工している。内面の当て具痕は使用のために磨耗している。



第 46 図 第 28 次掘立柱建物跡・竪穴建物跡遺物実測図 (1/4)

28-1SH050

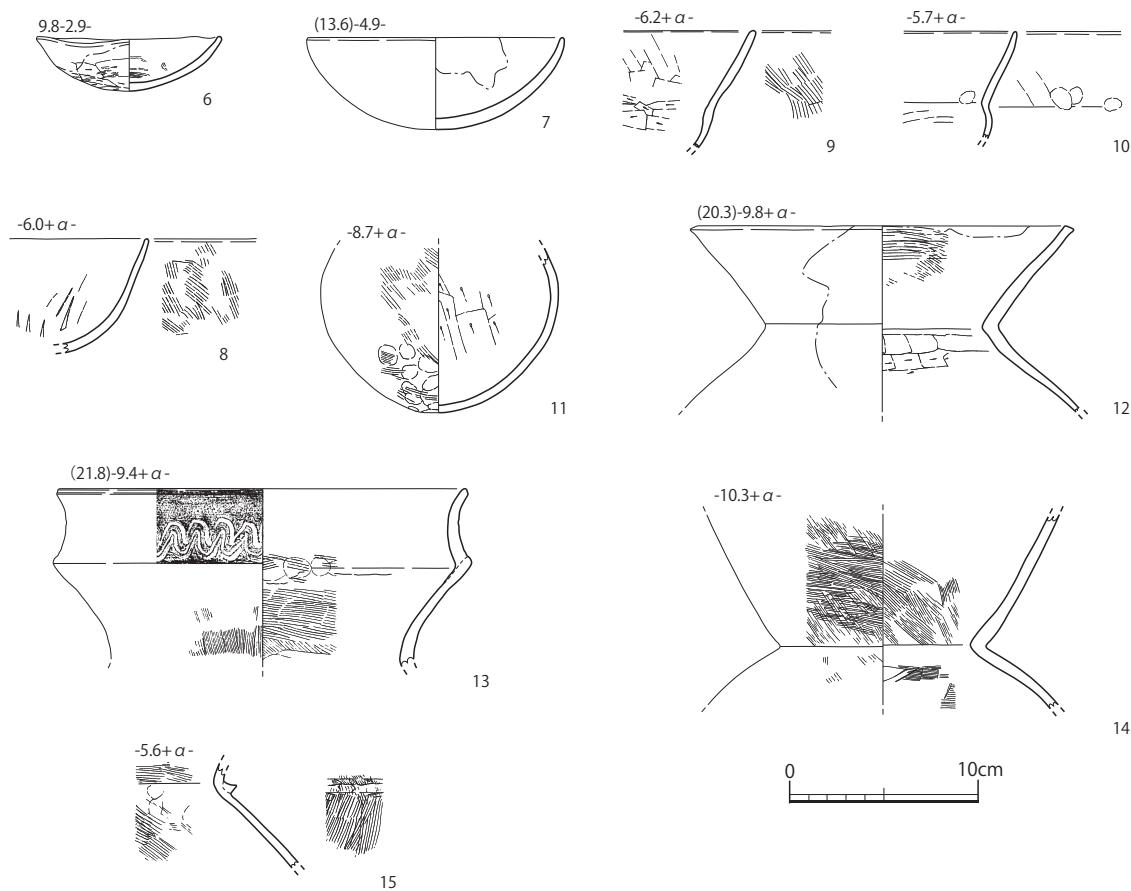


28-1SH059



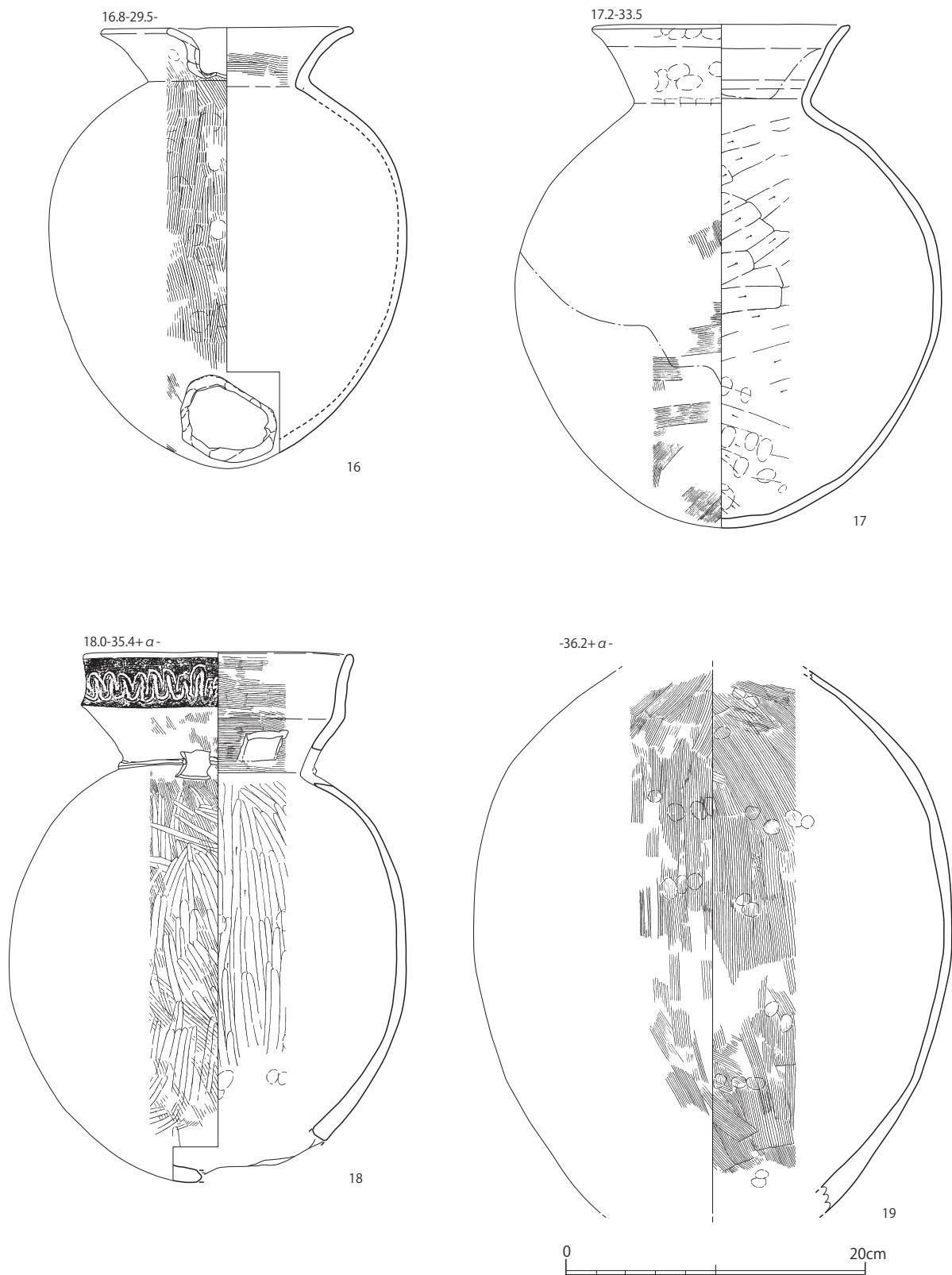
第47図 積穴建物跡遺物実測図 (1/4)

28-1SE010

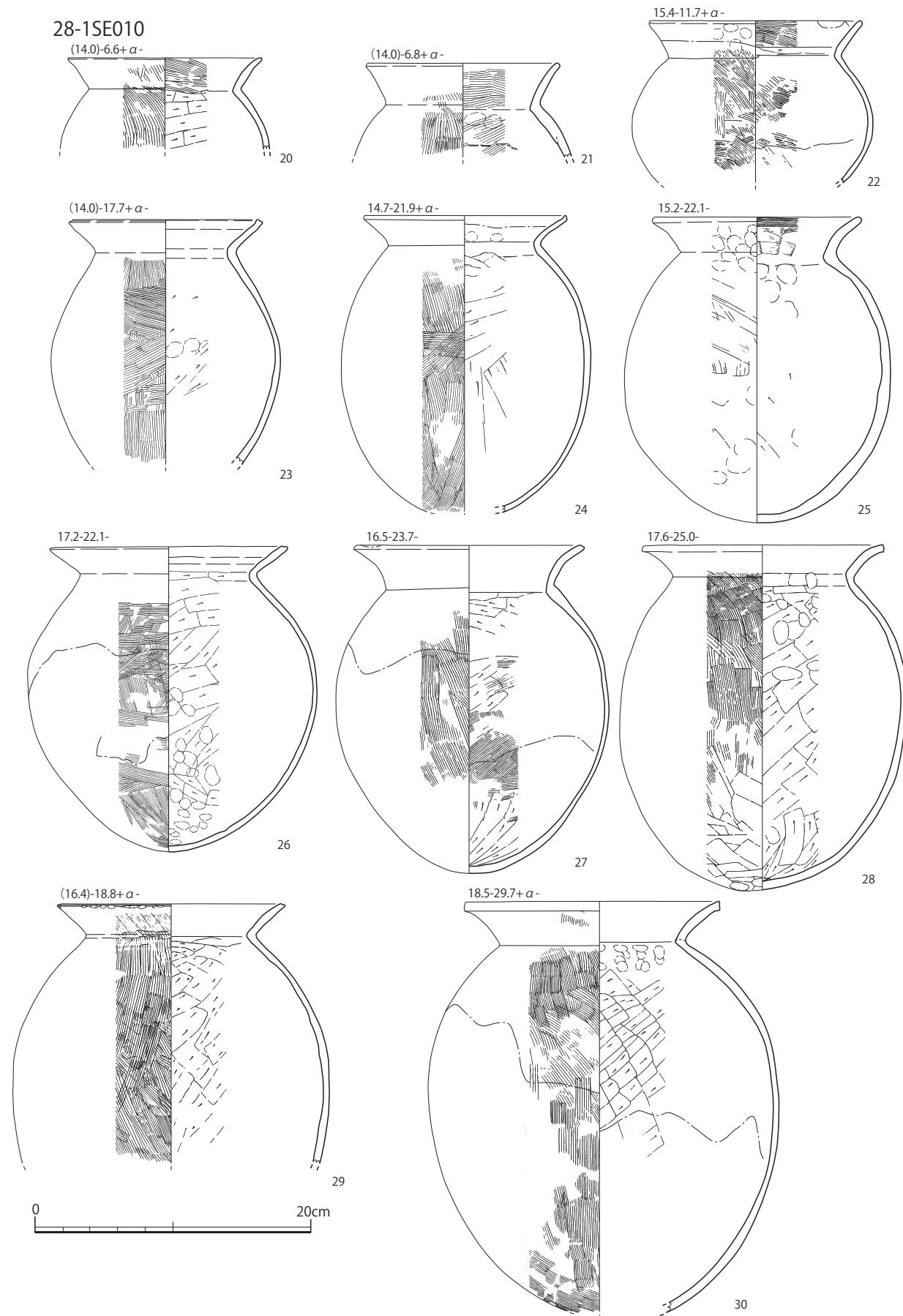


第48図 第28次井戸跡遺物実測図1 (1/4)

28-1SE010

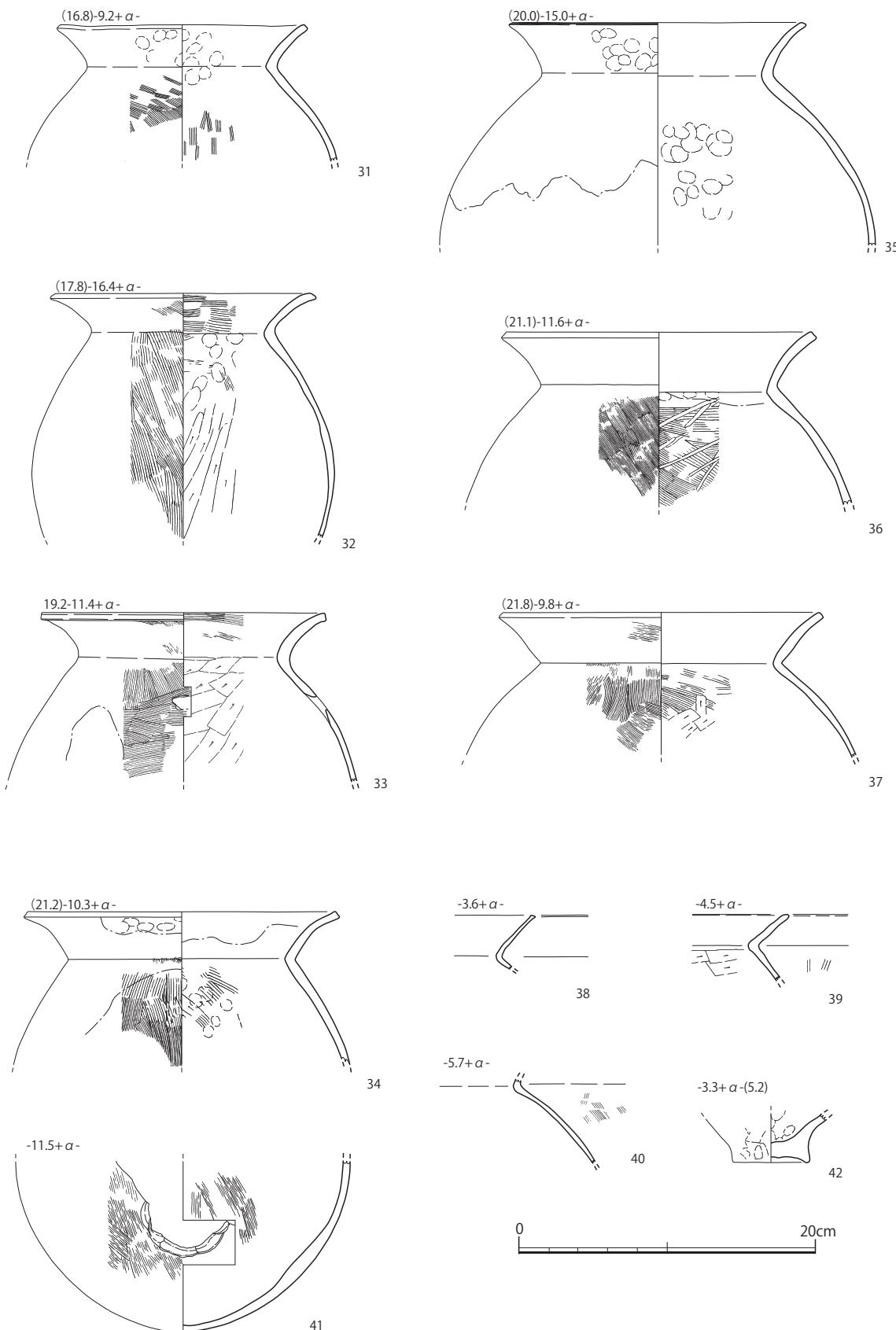


第49図 第28次井戸跡遺物実測図2 (1/4)

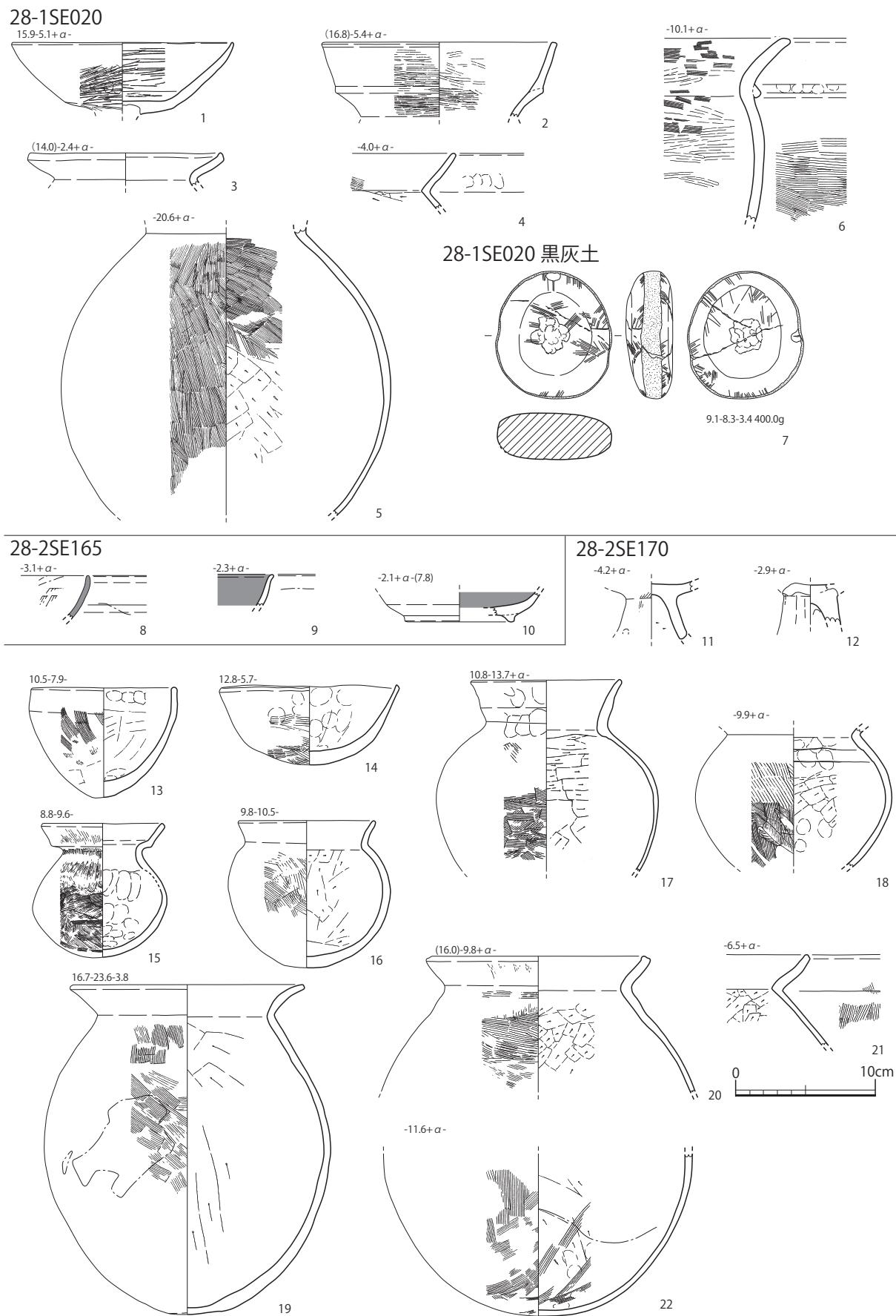


第50図 第28次井戸跡遺物実測図3 (1/4)

28-1SE010

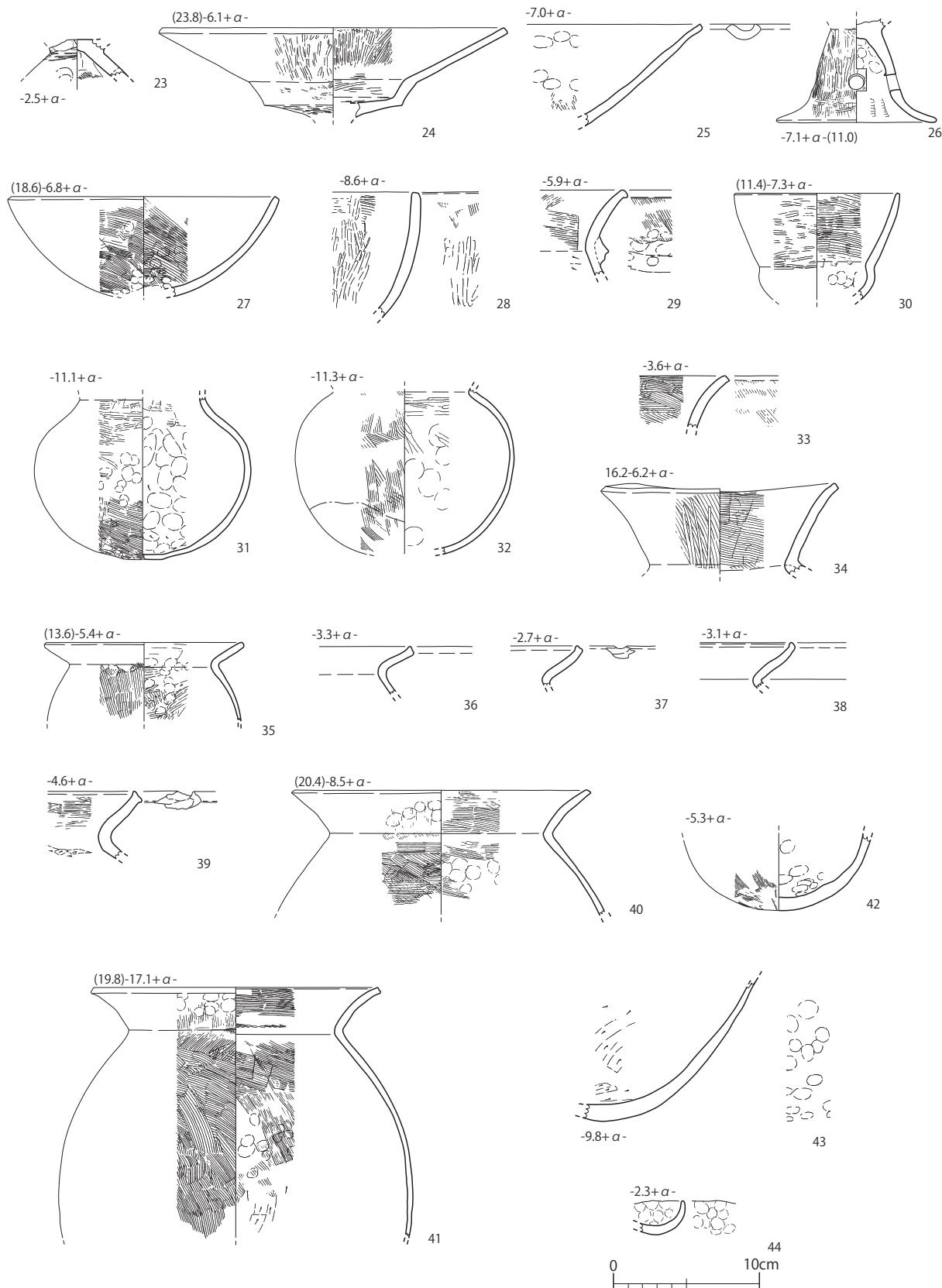


第51図 第28次井戸跡遺物実測図4 (1/4)

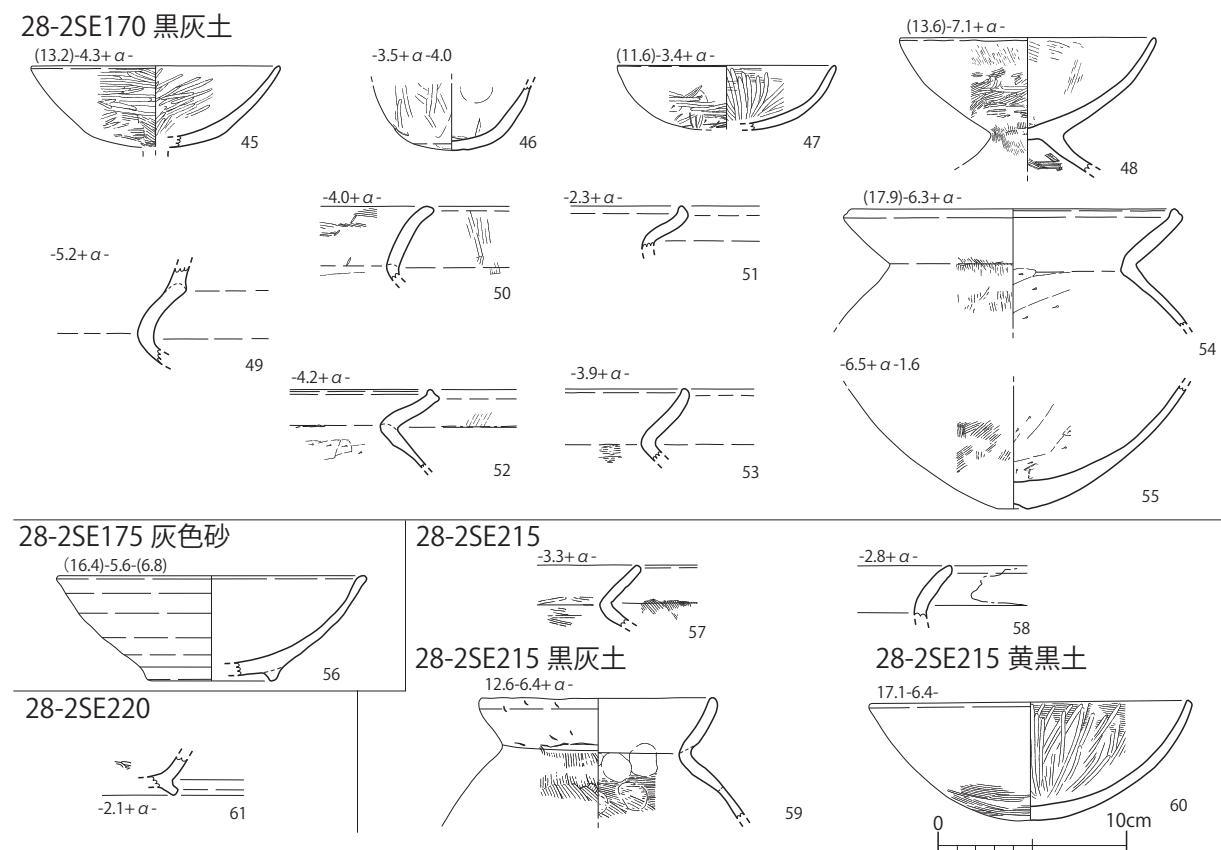


第52図 第28次井戸跡遺物実測図5 (1/4)

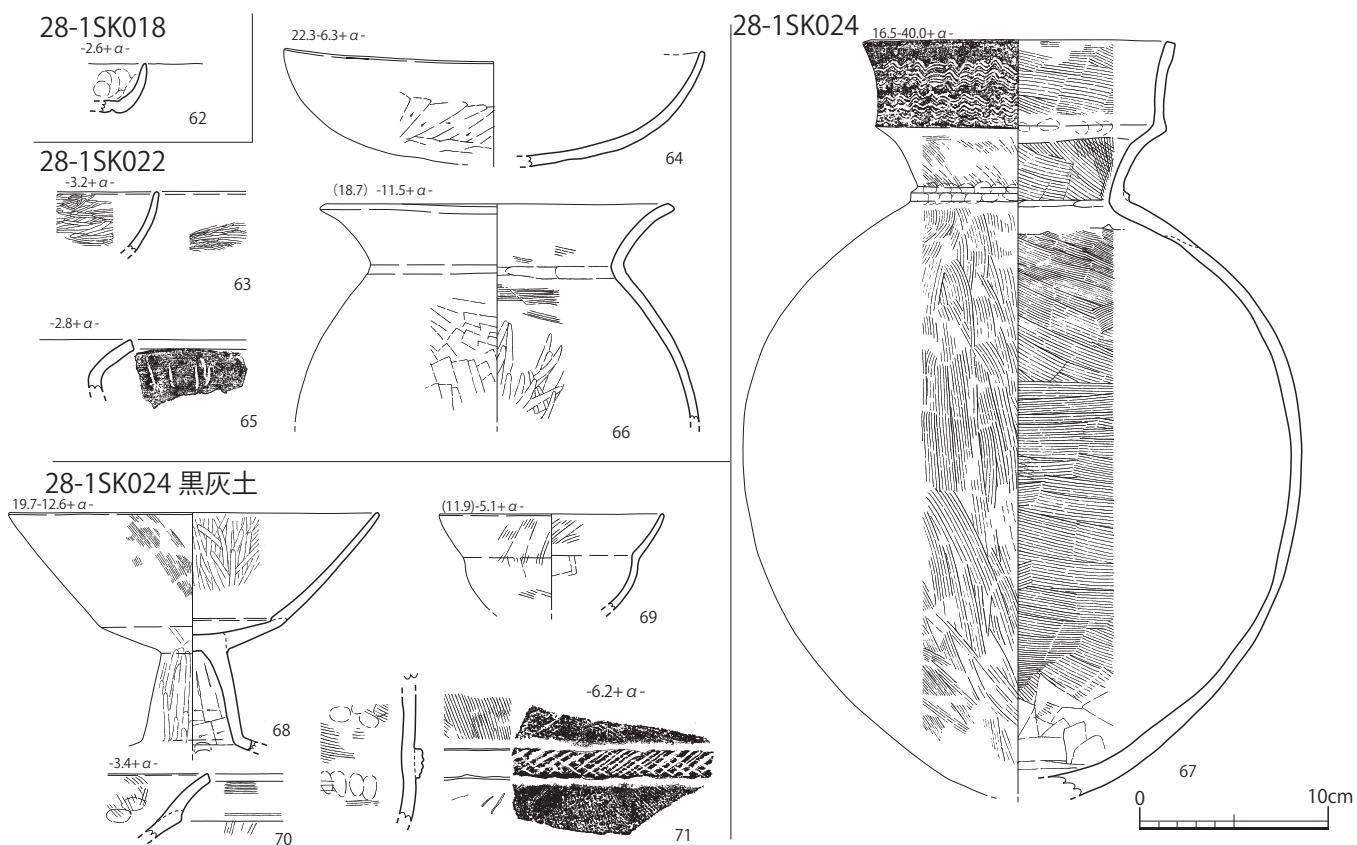
28-2SE170 茶黒土



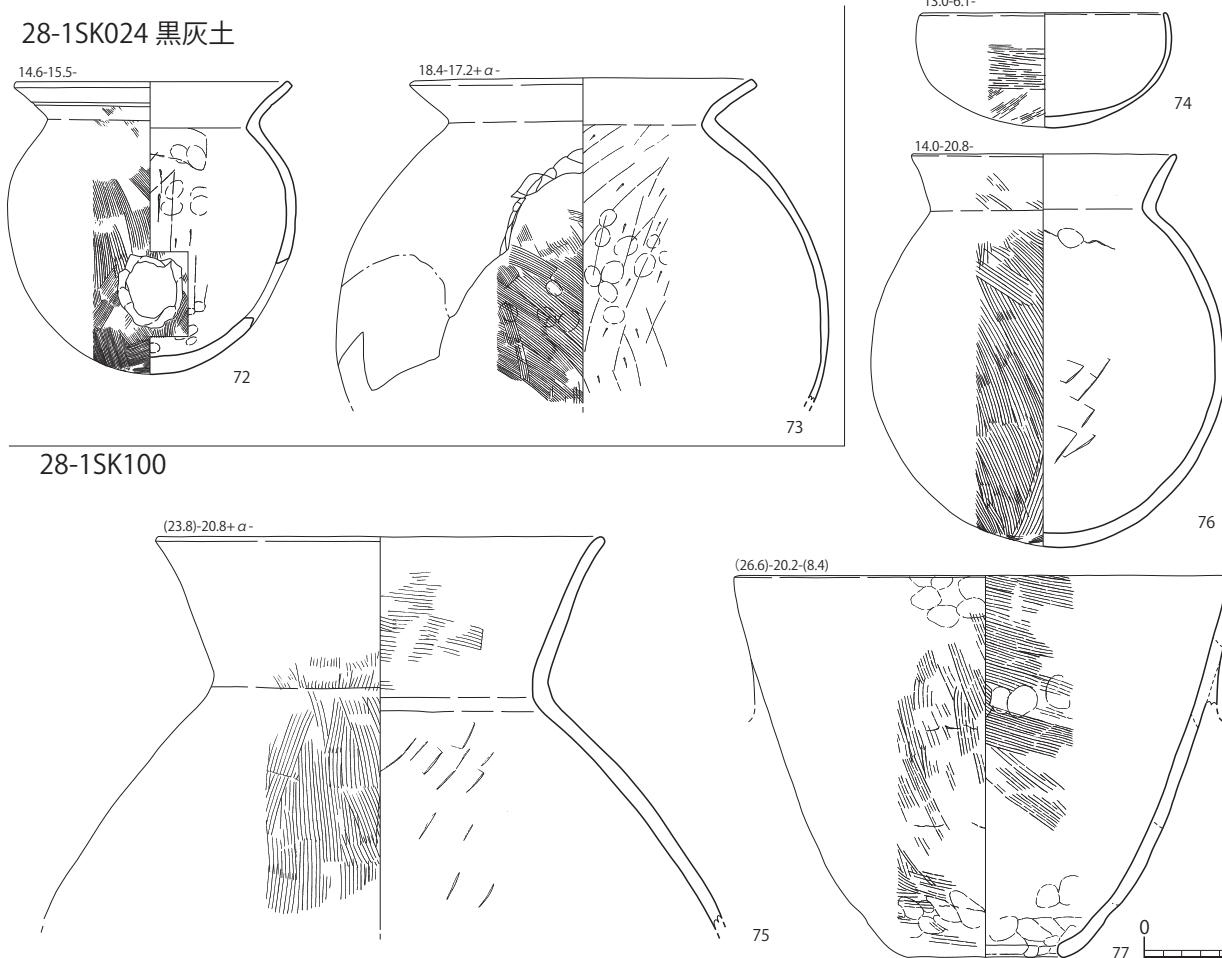
第 53 図 第 28 次 井戸跡 遺物実測図 6 (1/4)



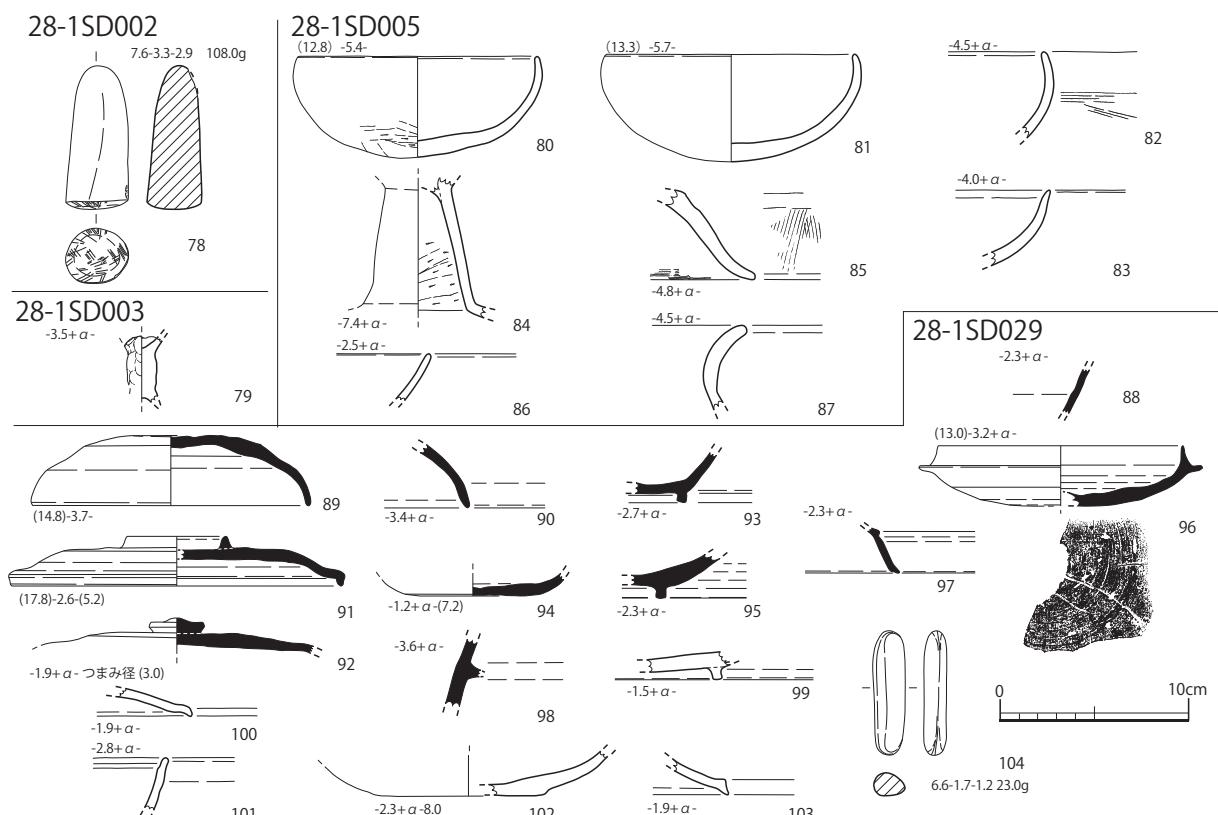
第54図 第28次井戸跡遺物実測図7 (1/4)



第55図 第28次土坑遺物実測図1 (1/4)

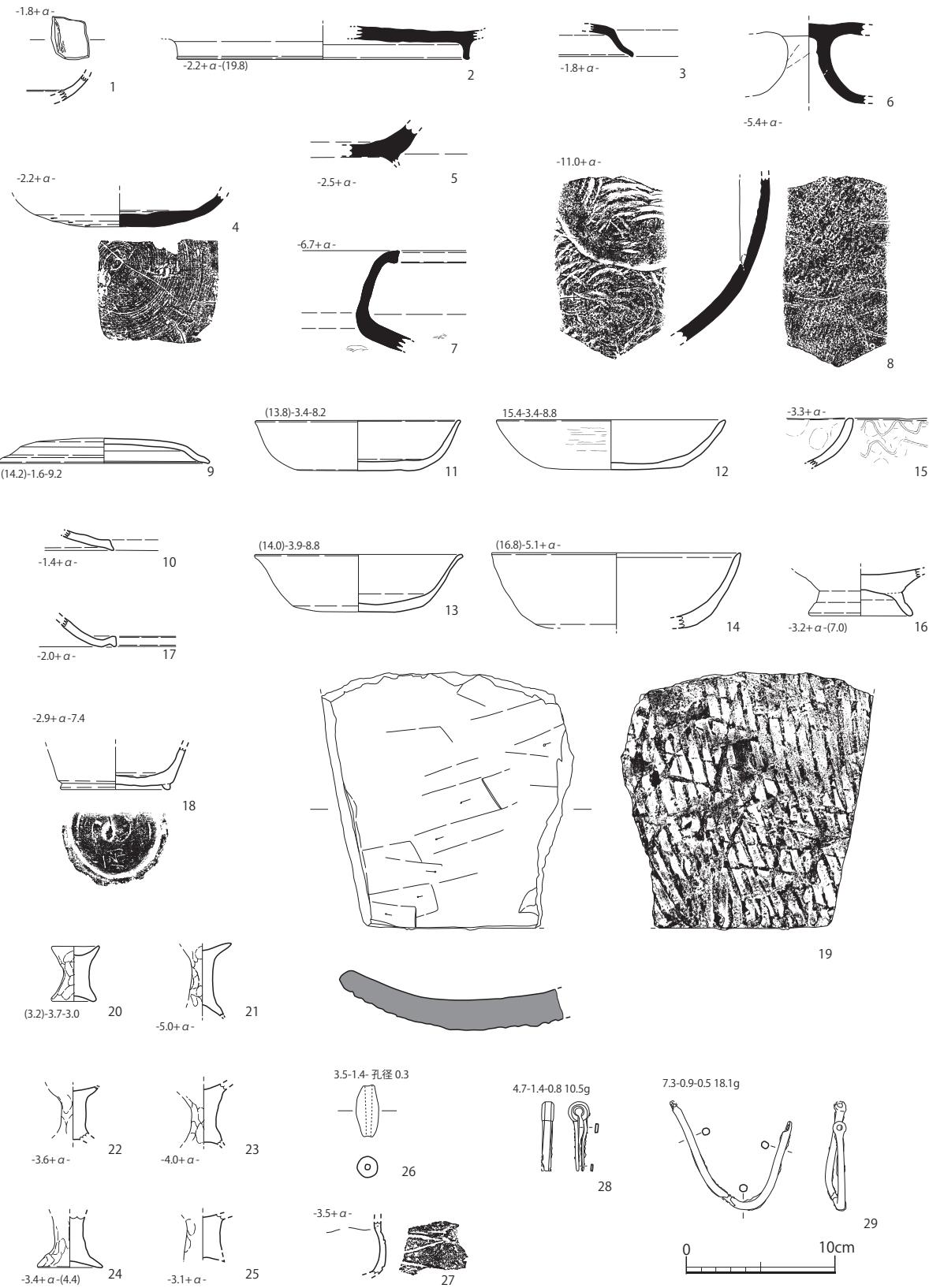


第56図 第28次土坑遺物実測図2 (1/4)

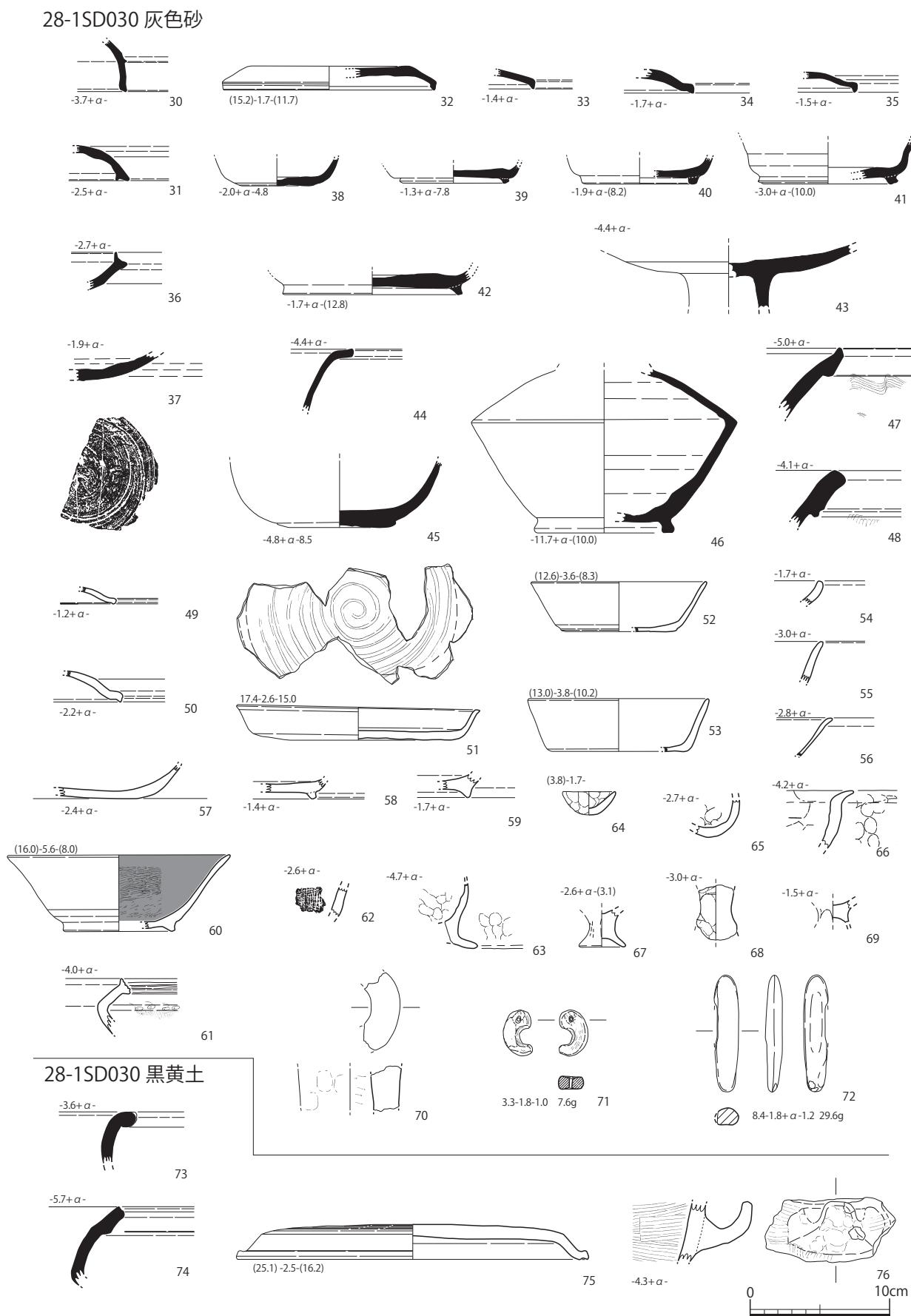


第57図 第28次溝跡遺物実測図1 (1/4)

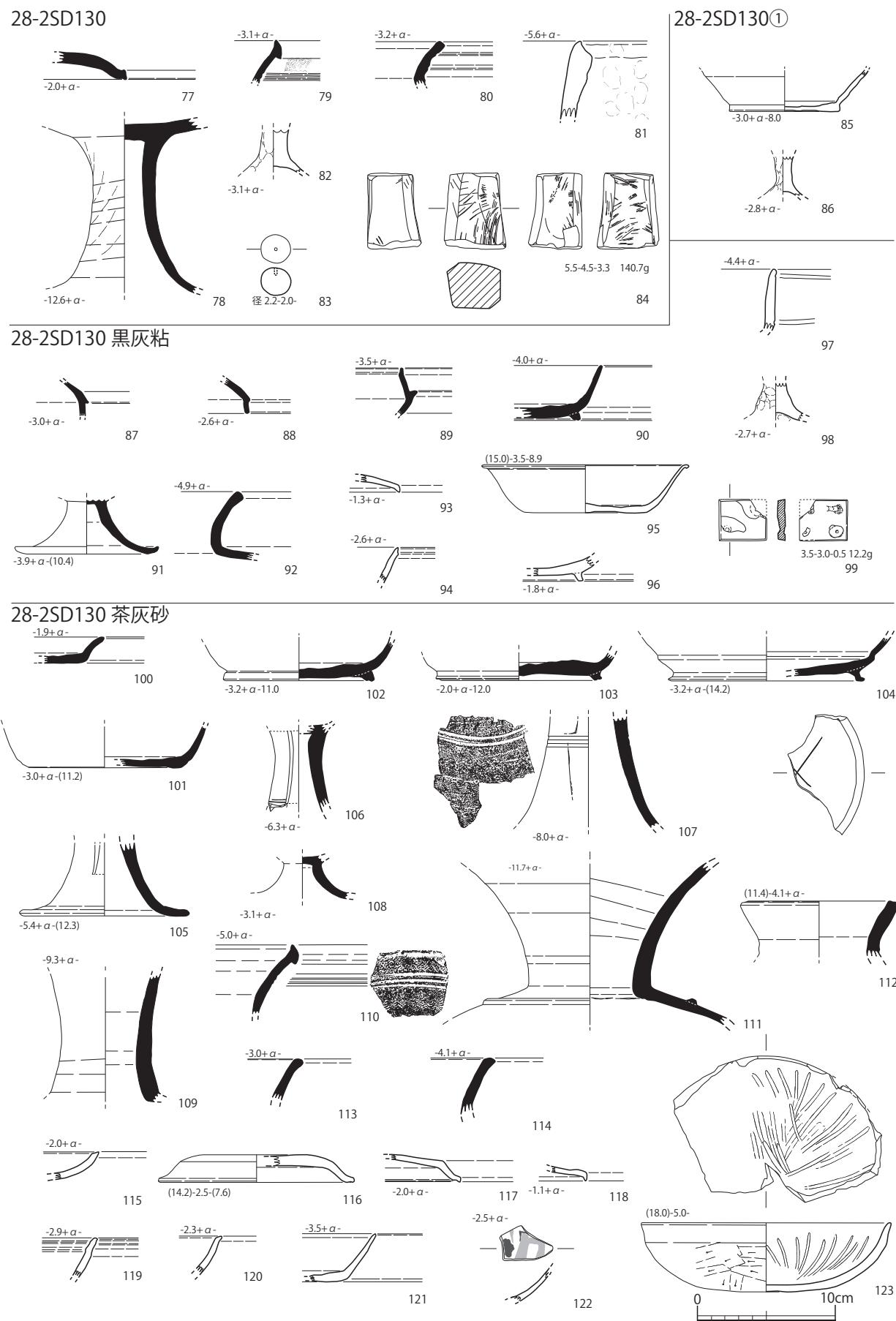
28-1SD030



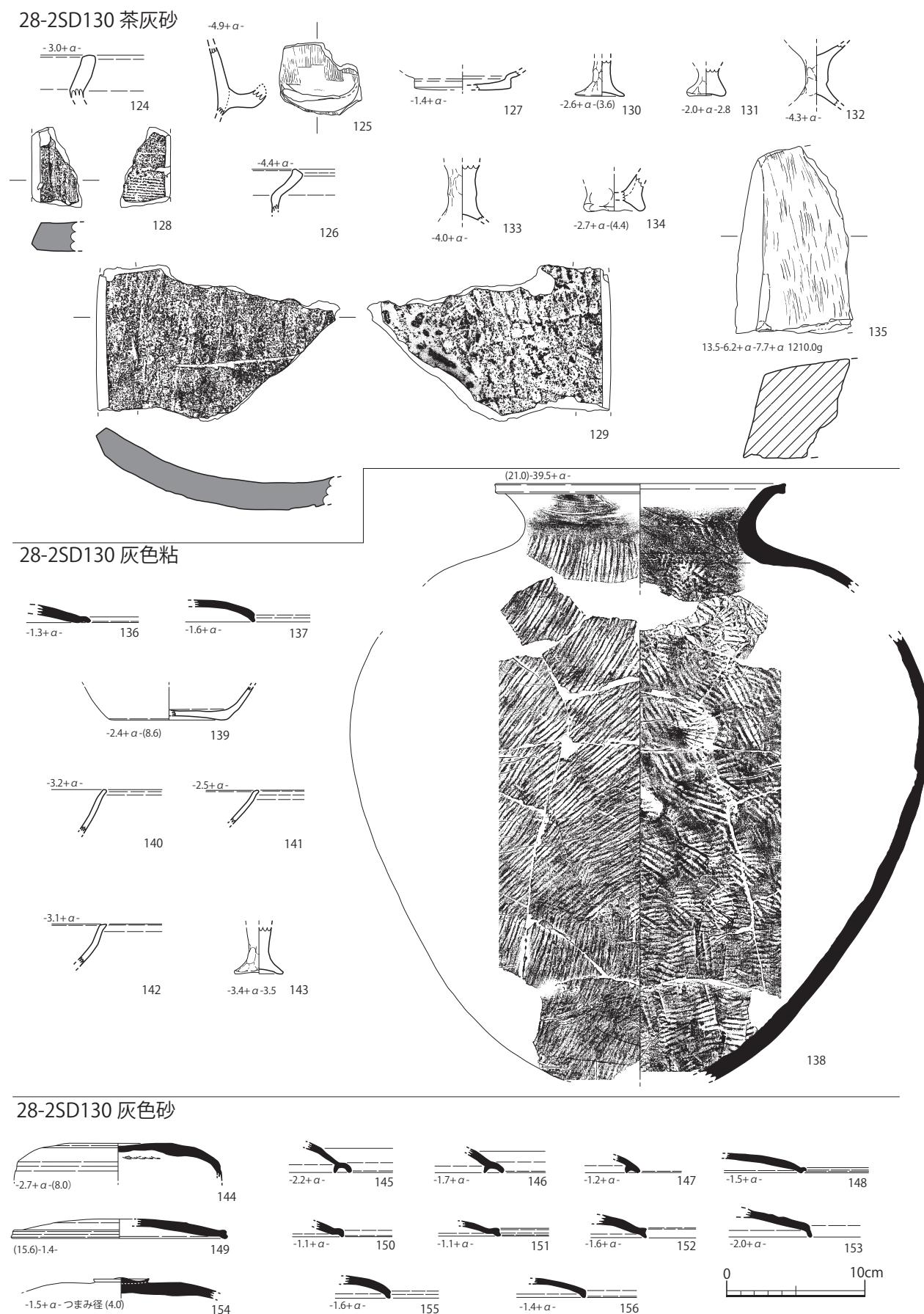
第 58 図 第 28 次溝跡遺物実測図 2 (1/4)



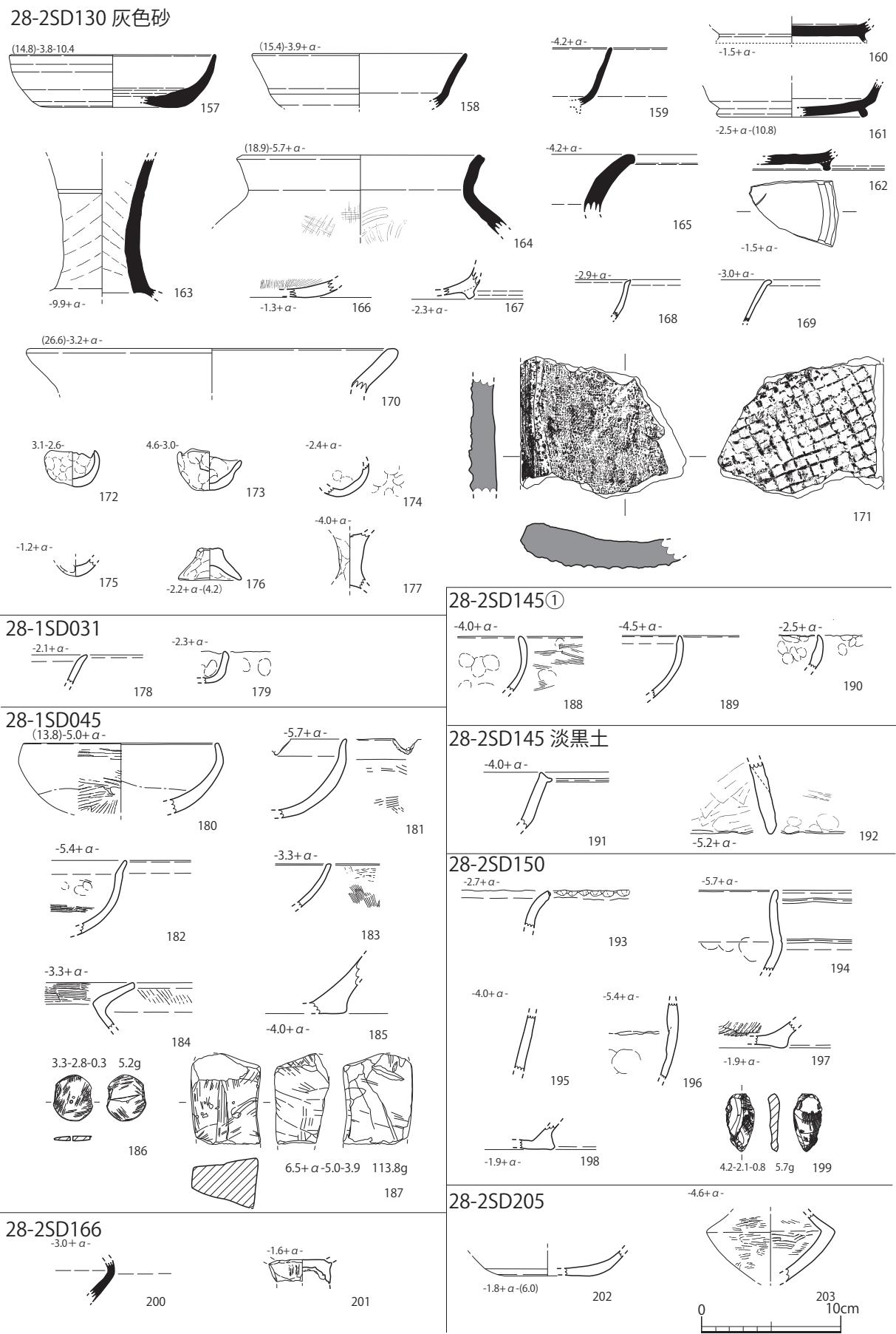
第 59 図 第 28 次溝跡遺物実測図 3 (1/4)



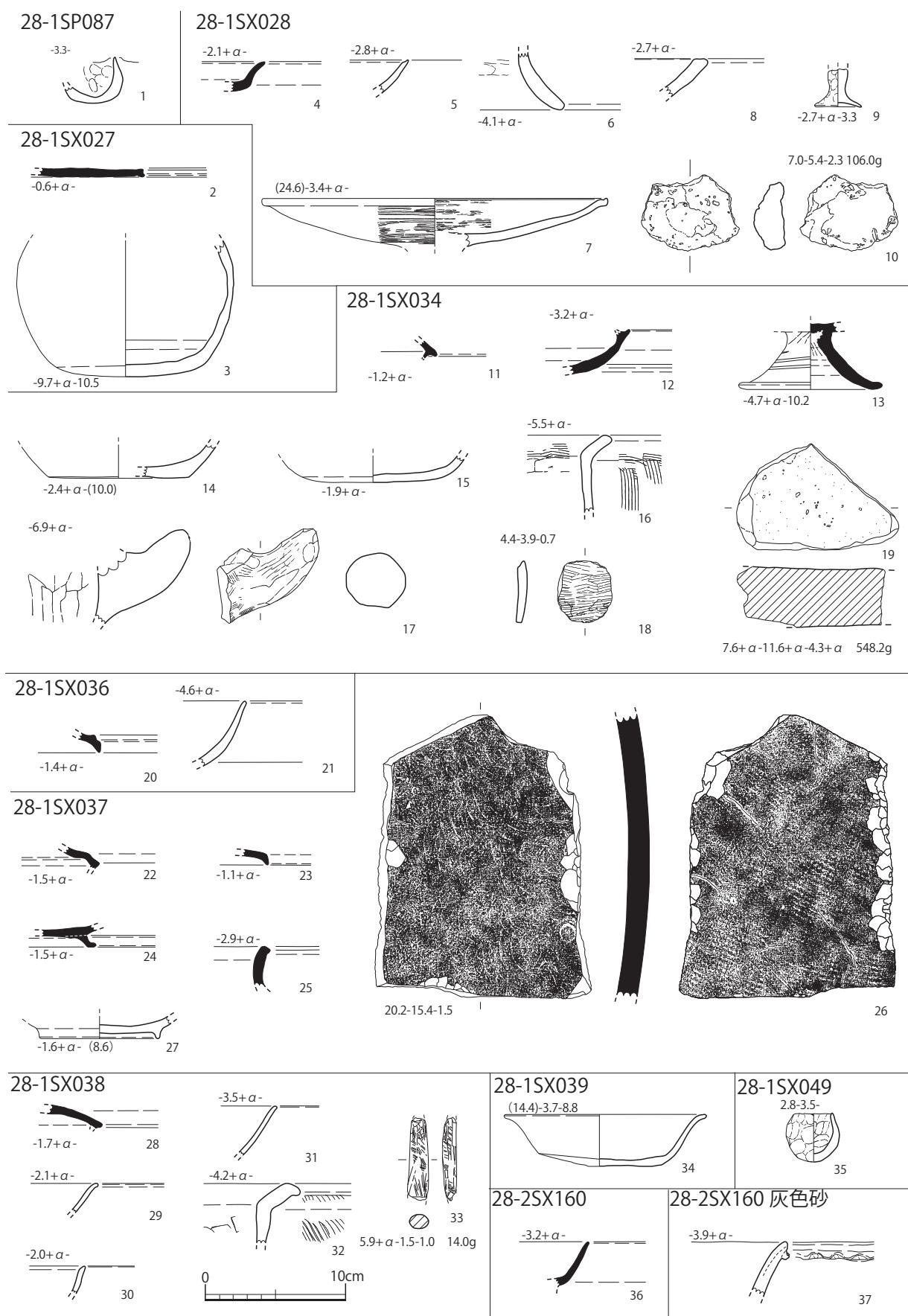
第60図 第28次溝跡遺物実測図4 (1/4)



第 61 図 第 28 次溝跡遺物実測図 5 (1/4)



第62図 第28次溝跡遺物実測図6 (1/4)



第63図 第28次その他の遺構出土遺物実測図 (1/4)

第6表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳1

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
1		溝		1→カクラン	近現代	N6
2	SD002	溝跡	磨り石?	22,8→2→3		T8
3		溝状遺構	ミニチュア土器器台×製塩土器	2→3		R7
4		溝状遺構	古式土師器破片 不明土製品			R7
5	SD005	溝跡	土師器椀B	5→90	6世紀後半~	L8
6		溝状遺構				N3
7		pit群	古式土師器壺破片			R8
8		溝状遺構?	弥生土器破片	8→2		T8
9		攪乱	(S10の遺物を多く含む)	10→9		M3
10	SE010	井戸跡	古式土師器壺(布留式系)・複合口縁壺・小型丸底壺	10→9	古墳時代前期	M3
11		溝状遺構	古式土師器破片	11→カクラン		R5
12		凹み S1残り	肥前染付碗 国産陶器破片		近世	O5
13		溝状遺構	古式土師器破片			T10
14		pit	古式土師器破片			R9
15	SK015	土坑	古式土師器破片			N3
16		溝状遺構	土師器壺a 須恵器破片 古式土師器破片		古代?	O8
17		pit群	土師器壺b(企救型)		古代?	Q9
18		溝状遺構	須恵器破片 ミニチュア土器椀	18→カクラン	古墳時代後期?	N4
19		pit	古式土師器壺破片			N3
20	SE020	井戸跡	古式土師器高壺 二重口縁壺 磨り石		古墳時代前期	S6
21	SK021	土坑	古式土師器破片(波状文あり)		古墳時代前期?	P11
22	SK022	土坑	古式土師器鉢・壺		古墳時代前期	T8
23	SK023	土坑	ミニチュア土器×高壺脚			S12
24	SK024	土坑	古式土師器複合口縁壺・小型丸底壺		古墳時代前期	O10
25	SD025	溝跡	古式土師器破片 弥生土器(刻目突帯)	25→52		P8
26						
27	SX027	土坑状	土師器壺・鉢 須恵器蓋?	27→30	古代	N17
28		S30	土師器壺d・椀c・蓋5・壺b 須恵器皿a 鉱滓		8世紀末~9世紀前半	N17
29	SD029	溝状遺構	須恵器蓋b・壺c 壺(荒尾産)・転用硯 緑釉陶器	30→29	9世紀頃	O16
30	SD030 (=SD130)	溝跡	須恵器壺c・蓋3・黒色土器A類椀 銅製品鑷	27,34,35→30→29	~9世紀前半頃	S13
31	SD031	溝状遺構	土師器壺 ミニチュア土器椀	45→31	古代	R15
32		溝状遺構	古式土師器破片	44→32→カクラン		P17
33		溝状遺構	土師器蓋5 須恵器高壺	25,36,39,49,92,145 →33	8世紀末~9世紀前半	O13
34	SX034	溝状遺構	土師器甌・壺a 須恵器蓋1・高壺	34→30	8世紀末~9世紀前半	R13
35	SK035	土坑		35→30		R14
36		凹み	土師器壺d 須恵器円面硯?	36→30		O14
37	SX037	方形プラン	須恵器猿面硯・盤・蓋3 土師器椀	37→30	8世紀後半~	P15
38	SX038	S30関連遺構	土師器壺d・壺a・壺b 須恵器蓋1・壺蓋 棒状石製品	38→30	8世紀末~9世紀前半	O14
39	SX039	S30関連遺構	土師器壺a	39→30	~9世紀初頭	O14
40	SF040	道路状遺構				P15~
41	SF041	道路状遺構(波板凹凸面?)	獸骨(牛歯) 土師器壺 須恵器高壺脚・壺		古代	O16
42	SF042	道路状遺構(波板凹凸面?)				P17
43	SF043	道路状遺構	土師器椀c・高壺脚 須恵器壺H 玉砂利		古代	Q16
44		凹み 波板	土師器大形土器破片	44→32		P17
45	SD045 (=SD145)	溝跡	土師器椀B 須恵器壺H 円盤状石製品	31→45	6世紀後半頃	R16
46		波板?(新しい?)	土師器破片	46→攪乱		M16

第7表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳2

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
47		凹み	古式土師器壺(布留式系) 不明石製品			O17
48		波板続き?	土師器破片	48→攪乱		P16
49			須恵器壺 ミニチュア土器壺 フレーク(サヌカイト?)			
50	SH050	竪穴建物	古式土師器高壺・小型丸底壺・磨り石		古墳時代中期 初め頃	Q12
51		pit群	古式土師器破片			L4
52		凹み	古式土師器破片	25→52		O12
53		凹み	古式土師器破片			N16
54		pit				O13
55	SB055	掘立柱建物跡 竪穴建物柱穴のみ	古式土師器壺破片			R11
56		pit	古式土師器壺破片			P18
57		攪乱	陶胎染付碗			R13
58	SH058	竪穴建物?	古式土師器壺破片	58→攪乱	古墳時代前期?	J10
59	SH059	竪穴建物	土師器椀B	59→145	古墳時代中期 ~後期	K12
60	SB060	掘立柱建物跡	土師器壺破片			S11
61		pit群	古式土師器破片			K12
62		溝状遺構				J7
63		溝状遺構				J7
64		溝状遺構				J7
65	SB065	掘立柱建物跡 竪穴建物柱穴のみ	古式土師器破片			R10
66		pit群	土師器壺d・蓋5 砂利		8世紀末~9世紀前半	N12
67		へこみ	古式土師器小型丸底壺・壺破片			O12
68		凹み	土師器壺 須恵器壺破片		古代	O10
69		溝状遺構?				I9
70	SB070	掘立柱建物跡 竪穴建物柱穴のみ	古式土師器壺破片			S9
71	SA071	柱列				S12
72	SA072	柱列				Q11
73		柱列	古式土師器壺口縁			Q11
74	SA074	柱列の建物?				R15
75	SB075	掘立柱建物跡 竪穴建物柱穴のみ				V8
76		pit S-50関連か	古式土師器壺破片			P11
77		pit群	古式土師器壺破片			O12
78	SA078	pit群 かなり深い2本柱の主柱穴か	古式土師器壺破片	78→25,54→52		O12
79		凹み状土坑	古式土師器壺破片	79→145		N13
80	SB080	掘立柱建物跡	古式土師器破片	80→2?		T8
81		土坑 凹み S30関係	古式土師器壺破片	81→30		O15
82		pit群 しっかりしたpitの竪穴主柱穴?	古式土師器壺破片			L12
83		土坑	青花碗(小野分類D群)	84→83→攪乱	16世紀後半頃	K11
84		pit	羽口破片	84→83		K11
85	SB085	掘立柱建物跡 竪穴建物柱穴のみ				O8
86		pit群	土師器破片			I10
87		pit群	古式土師器小形壺 ミニチュア土器鉢×椀			H12
88		pit群	肥前染付碗(ミニチュア)		近世	H9
89		pit群	古式土師器破片			K6

第8表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳3

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
90	SB090	掘立柱建物跡 穴建物柱穴のみ	古式土師器破片			S8
91		pit群				M6
92		凹み?	古式土師器破片	92→33		O13
93						L10
94			古式土師器小形壺			
95	SB095	掘立柱建物跡				L4
96			古式土師器破片			
97		pit	古式土師器破片			J13
98						
99						
100	SK100	S85(土坑)関連か	土師器椀B・壺・甕・甌?		古墳時代中期 末後期初め頃	O9
28-2						
101		池	国産磁器破片 国産陶器破片 瓦(須恵質)	103→101→102	近代~	I16
102		丸形土坑	白色研磨土師器 黒色土器A類椀	103→101→102		G15
103		溝	陶器破片 瓦(須恵質・土師質)	103→101	近代	G14
104		溝状遺構		104→103		H13
105	SB105	掘立柱建物跡				K10
106		溝状遺構	国産陶磁器破片 土師器坏Bn	160→106	新しい	E17
107		搅乱?	古式土師器高坏脚	160→107		F17
108		搅乱?	関西系陶器破片		新しい	F16
109		搅乱	須恵器破片			G20
110	SB110	掘立柱建物跡	土師器破片	5→110		I11
111		pit群	土師器破片			I18
112		pit群	土師器破片			G18
113		pit群	土師器破片			H18
114		pit群	土師器破片			G18
115	SB115	掘立柱建物跡				J12
116		pit群	土師器破片			G17
117		pit群	須恵器坏a			I18
118		pit群	土師器破片	135→118		F16
119		pit	土師器破片			F14
120	SB120	掘立柱建物跡	古式土師器椀 土師器破片	120→145,33		N12
121		土坑	瓦	145→121→101		G14
122		pit	弥生土器破片			E17
123		凹み	肥前磁器破片		近世	L25
124		pit群 灰褐色土	土師器破片	210→124		L24
125	SD125 (=SD025)	溝跡(SD025の延長)	土師器破片 剥片(姫島産黒曜石)	125→205		M21
126		超大形土坑	肥前磁器碗 国産陶器碗 王冠 磨り石		近世?	J22
127		搅乱	国産磁器破片 弥生土器破片			I21
128		溝状の凹み	土錐	131,195→128	新しい?	L21
129		搅乱	土師器坏d 国産陶器碗		近世?	H13
130	SD130 (=SD030)	溝跡(SD030の延長)	須恵器坏c・壺e 漆付着土師器坏 石帶 製塙土器		8世紀末~9世紀前半	H21,L19
131		pit	古式土師器破片	131→128		L20
132		pit	古式土師器破片			K19
133		pit群	古式土師器破片	30→133		K18
134		pit群	古式土師器破片			K16
135		溝跡	弥生土器破片	135→118,101		F16
136		pit	古式土師器破片			I18

第9表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳4

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
137		pit	古式土師器破片			D19
138		攪乱	国産陶器破片 瓦破片	138→カクラン		O21
139		pit	須恵器蓋	125→139		N19
140	SD140	溝跡	土師器蓋4		8世紀後半～	F20
141		凹み 灰色シルト 波板？	土師器破片	166→141		L16
142		凹み 灰色シルト 波板？	須恵器蓋破片			M16
143		波板関係	土器破片			L16
144		波板関係	土師器坏a	144→カクラン	8世紀後半～	L16
145	SD145 (=SD045)	溝跡	土師器楕B	103,121→145→ 101	6世紀後半頃	I14
146		波板関係	須恵器盤		古代	L17
147		波板関係	土師器破片			L17
148		波板関係	土師器破片			L17
149		波板関係				L17
150	SD150	溝跡	土師器蓋口 繩文土器深鉢 黒曜石(腰岳)		古墳時代	E19
151		pit	土師器破片			O18
152		pit	土師器破片			P19
153		pit				L18
154		波板関係				L17
155	SD155	溝跡	土師器蓋4	155→160	8世紀末～9世紀前半	F18
156		波板関係	須恵器坏a・皿		古代	L17
157		波板関係	土師器破片			L17
158		波板関係	土師器破片			K18
159		pit	土師器破片	185→159		N20
160	SX160	大形方形遺構	須恵器坏a 繩文土器深鉢	155→160	～8世紀前半	F17
161		凹み S130内	須恵器蓋	130→161		L18
162		S130内下部検出 土坑 凹み	土師器高坏(都城系)・坏d 須恵器坏 繩文土器深鉢	?	8世紀末～9世紀前半	J19
163		下部pit	国産磁器破片		近世	J17
164		S200関連	土器破片	200→164→166		M17
165	SE165	井戸跡	瓦器楕 黒色土器A類楕		古代？	P20
166		S130最下層＝ S200	土師器坏c・坏d 須恵器坏c・坏蓋・坏H 剥片(安山岩)	200→164→166→ 130		M18
167		攪乱 pit				L19
168						
169						
170	SE170	井戸跡	古式土師器壺・蓋・有段高坏・小型丸底壺	125→170	古墳時代前期	N19
175	SE175	井戸跡	白色研磨土師器楕	溝(125?)→175	12世紀中頃	N20
180	SD180	溝跡	関西系陶器碗	166?130?→180	近世	J20
185	SD185	溝跡	土器破片	165→185→159		O20
190	SD190	溝跡	黒色土器A類楕 須恵器蓋c 土師器蓋4×5 繩文土器	125→190	～9世紀前半頃	O19
195	SD195	溝跡	黒色土器A類楕 須恵器高坏	195→128	～9世紀前半頃	K20
200	SF200	道路状遺構？	土師器破片 鉄滓 同安窯系青磁皿 繩文土器	200→ 140,142,144,146～ 149,156,158		L16
205	SD205	溝跡	土師器坏a 繩文土器壺(注口土器) 燃土塊	125→205	古代	N22
210	SD210	溝跡	国産陶器碗(混入？) 土師器蓋b	215→210→124	古代	L23
215	SE215	井戸跡	古式土師器蓋・鉢	215→210	古墳時代前期	L23
220	SE220	井戸跡	土師器坏c		古代	J19

第4節 大道遺跡群第31次調査

(1) はじめに

第31次調査区は文化交流機能の拠点として、平成25年度オープンをめざして建設中である「ホルトホール大分」の敷地の東側に該当する場所であり、平成20年度及び21年度に実施された第28次調査、第36次調査の東側に隣接する。

区画整理事業以前は遊興施設が存在しており、そのため調査区内の中央～北側にかけてはコンクリート基礎杭や撤去時の掘削による搅乱坑が顕著であった。

遊興施設が撤去後、客土・砂利で整地され長期間日数が経っていたことから埋土がかなりしまっており、平成21年3月に行った本調査に係る事前の確認調査ではバックホーによる掘削は困難な状態であった。この確認調査では溝跡を中心にピットなどが検出されたが、分布が疎らであったことから遺構密度は低いと推測された。

平成21年6月19日～24日に機械掘削を行い、終了後、受託業者による座標測量・調査グリッドの設定作業がなされ、同月29日より遺構検出作業を実施したが、6月末～7月前半にかけては梅雨終盤期間であったことから度重なる大雨により調査区が水没することもあった。

調査では、古代に位置づけられる東西方向の溝跡やL字状に屈曲する溝跡、掘立柱建物跡、井戸跡のほか、古墳時代前期初め頃の土器廃棄遺構、古墳時代後期の竪穴建物跡、近世の水溜め状遺構、耕作に関わる溝跡などが検出された。後述するが東西溝SD025は第28次・第36次調査から延長するものであり、平面プランや立地環境・分布状況から考えると、古代の大通地域の様相を知る上で重要な遺構といえる。

調査面積は約1119m²を測り、遺構全体図作成に伴う空中写真測量・個別図面の作成作業を終えた後、埋め戻しを行い、平成21年8月31日に調査を終了した。

(2) 基本層序

調査区は、区画整理事業以前は遊興施設が存在していたことから、調査地内に分布する土層の大部分が建物解体後の処理土層であった。その解体処理土を除去すると炭化物やコーチス等が含まれる層が認められた。その下位には削平されてはいるが耕作土が、調査区南エリアに分布しており、これらの層を取り除くと基盤層である黄褐色土が確認される。この黄褐色土を遺構検出面として調査を実施した。検出面の標高はおおむね5.0～5.1mである。

(3) 遺構

掘立柱建物跡(SB)

掘立柱建物跡の復元については現場での検討を基本に行ったが、担当者の力量及び時間的制約から十分とは言えない結果となっている。報告書作成段階で図上で再度検討を試みたが、搅乱坑により遺構間が寸断されていることで建物を構成する柱穴が部分的であり、そのため図上では柱穴が広範囲に規則的に配置されるように見え、どれが現実的な案か定かではない状態となってしまった。今回報告するものは柱穴配置、規模、方位などを可能な限り考慮しているが、一つの復元案として提示するものも数例含まれていることを断わっておきたい。

31SB005(第66図)

調査区南東部のI5グリッドで検出された。梁行2間、桁行3間以上、身舎面積12.8m²+αの掘立柱建物跡で、建物主軸方向N-18°-Wの南北棟である。柱穴は直径0.4～0.6mのおおむね円形を呈する。柱穴b、fにおいて柱痕が検出されており、直径0.15～0.2mの円形である。柱痕の位置において、柱筋はほぼ中軸線上に揃っており、ぶれは少ない。柱間は梁行1.5～1.7m、桁行1.1～1.5mで桁行の柱間がやや狭い。西側柱列は、近世の遺構により削平されていること、調査区外へと伸びるため確認することができなかった。柱穴c～eでは柱痕



第 64 図 大道遺跡群第 31 次調査遺構配置図 (1/250)



第65図 大道遺跡群第31次調査遺構全体図 (1/250)

が検出されなかったが、断面形状から柱が据えられたと推測される痕跡が認められる。柱穴底面において歪みは小さいものの、掘方は不整形で段掘り状を呈していることから、おそらく一度柱穴を掘り返してから柱を抜き取ったと考えられる。出土遺物には、都城系土師器Ⅲがあるが破片資料であることから時期を断定するには困難である。8世紀以降に建てられたものと推定される。

31SB010 (第 67 図)

調査区南東部の J5 グリッドで検出され、梁行 2 間、桁行 1 間以上、身舎面積 $14.8 \text{ m}^2 + \alpha$ の掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-35° -W の南北棟である。柱穴は直径 0.5 ~ 0.6 m のおおむね円形を呈する。柱穴 a、d、e、f において柱痕が確認されており、直径約 0.2 m の円形を呈する。柱痕の位置から柱筋は揃っており、ぶれは少ない。柱穴 c では底面に根石が置かれている。断面形状を見ると、柱穴 d、e の柱痕は先細りであり杭の様な形をなしており、打ち込まれて据えられた感がある。柱穴 c、f はフラットな底面からほぼ直角に直線的に立ち上がり、柱はほぼ中心付近に建てられる。柱間は梁行 1.9 ~ 2.0 m、桁行 1.9 m と各寸法に大差ないことから規格性をもって建てられたと推測される。柱穴 a、c の間は近世に比定される遺構により掘削されており検出することができなかった。出土遺物は土師器破片であることから、詳細な時期については不明である。

31SB055 (第 68 図)

調査区中央 G7 グリッドで検出され、梁行は北側では 1 間、南側は 2 間、桁行 2 間の掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-27° -W の南北棟である。柱穴は直径 0.3 ~ 0.8 m の円形または不整形プランを呈する。特に柱穴 c、f においては平面形状が歪であり、柱の抜き取り行為が行われたことにより生じた可能性が考えられる。柱痕は明確には検出されなかったが、底面で据えられていた痕跡を見ることができ、直径約 0.15 m に復元できる。柱間は南側梁行 1.7 ~ 1.9 m、北側梁行 3.5 m、桁行 1.9 ~ 2.3 m で、身舎面積 15.1 m^2 を測る。

31SB055 は北側に位置する 31SB075 と建物西筋を揃えるように配されており、両建物の間にある 31SP159 により 2 棟は繋がるような状況も想定される。この 31SP159 の対になる場所は搅乱坑で掘削されているため柱穴は検出できかったが、ここに柱穴が存在したと仮定するならば 31SB055 ~ 31SB075 は南北方向に長い、梁行 2 間・桁行 6 間の規模を有した一つの建物となることが推測できる。そうであるとすると、現状で SB055 の北側が 1 間であることの理解が可能となる。

柱穴の埋土から土師器坏 a が出土していることから、時期については、おおむね 9 世紀前半頃に位置づけられる。

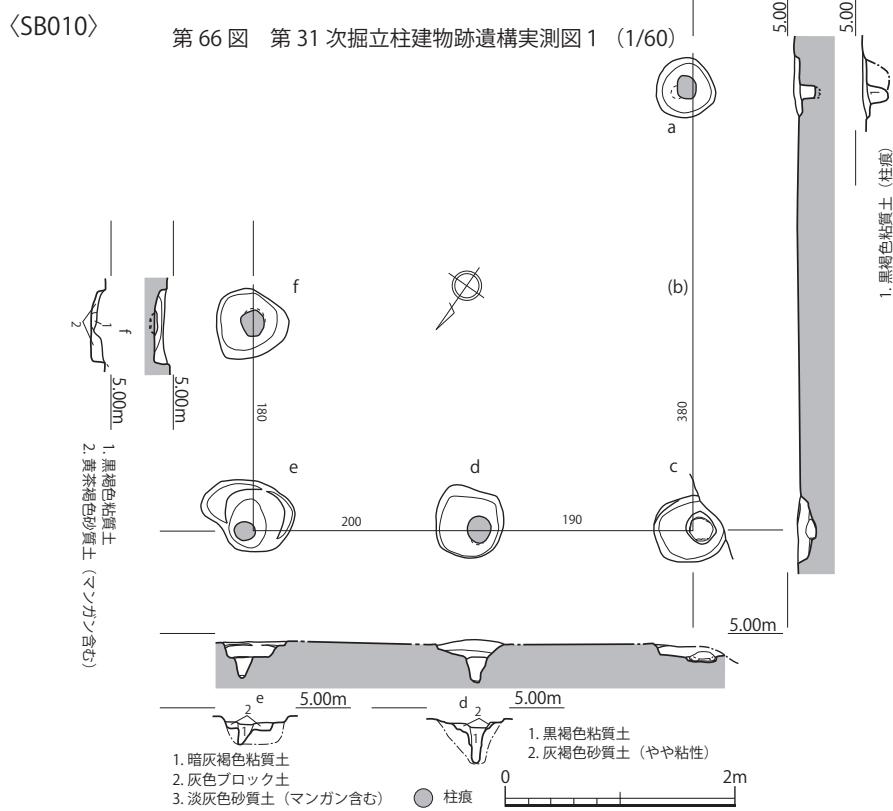
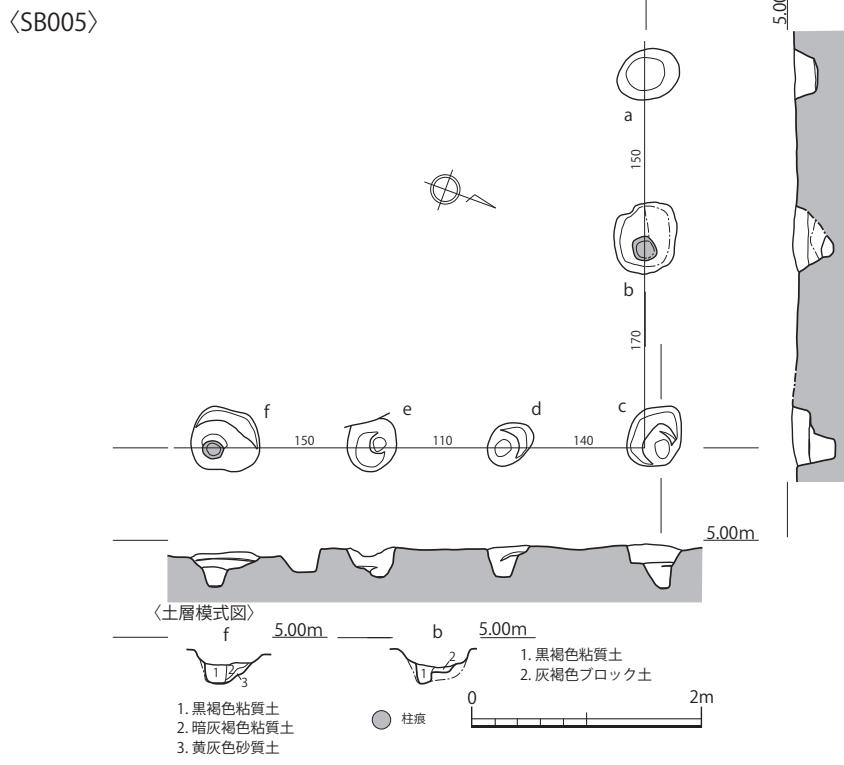
31SB060 (第 68 図)

調査区中央 G5 グリッドで検出され、東側柱穴列が 31SE035 により削平される。南北 2 間、東西 2 間の総柱と推測される掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-28° -W をとる。各柱間は北辺で 1.8 m、西辺で 1.6 • 1.65 m、南辺は 1.45 • 1.65 m、中心辺 1.65 • 1.55 m、身舎面積約 10 m^2 と柱間は近似する寸法であるが、小規模である。柱穴は直径 0.45 ~ 0.6 m のほぼ円形を呈し、深さ約 0.15 ~ 0.3 m を測る。柱穴 a、b、c、e、i において柱痕が確認され、直径約 0.15 ~ 0.2 m の円形である。柱穴の多くが段掘り状をなすが、おそらく柱の抜き取り行為によるものと考えられる。柱筋については南側及び西側は比較的揃っている。

出土遺物に土師器坏 a が見られること及び 31SE035 との新旧関係から 9 世紀前半頃には機能を停止したものと考えられる。

31SB075 (第 69 図)

調査区西側中央 F9 グリッドで検出され、梁行 2 間、桁行 2 間 + α の掘立柱建物跡である。建物の主軸方向は N-58° -E をとる東西棟である。搅乱坑により一部を掘削されているが、これ以上柱穴列が東西方向に延長されないことから桁行は 3 間でおさまるものと推測される。柱間は北辺で 1.9 • 4.1 m、西辺で 2.2 • 2.15 m、南辺で



第67図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図2 (1/60)

1.9・2.25 m、身舎面積 24.9 m²を測る。柱穴は約 0.5～0.7 m の不整円形もしくは隅丸長方形を呈す。柱穴 a、h では断面形状から柱の抜き取りが行われたと考えられる。その他の柱穴でも柱痕は確認できなかったが、柱穴 f や i の掘り方などから 0.15 m 程度であったと思われる。南側と西側の柱穴列は底面の掘削深度にムラがなく安定している。

出土遺物から 8 世紀後半以降に構築されたと考えられる。

31SB080 (第 69 図)

調査区北西付近 H10 グリッドで検出され、東西 1 間、南北 2 間の掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-22° -W をとる南北棟である。北側柱列については、西側に位置する 31SP189 まで延長する可能性もあるが、このピットに対して対になるものが見られなかつたことから現状規模に留めておきたい。また南側柱列も東にある 31SP131・146 まで延長される可能性もある。柱間は 3.5 m と 4 m の 2 つの寸法が存在し、身舎面積は 32 m² である。柱穴は約 0.5～0.7 m の不整円形や隅丸長方形で、柱穴 e は複数重なり合っているため一部建替えが行われた可能性が考えられる。残存深度は約 0.2～0.5 m を測る。柱穴 b、c、e において柱痕跡は確認でき直径約 0.15～0.2m の円形である。その配置については南北方向に揃えている状況である。

出土遺物には黒色土器 A 類椀・土師器坏があることから、9 世紀前半頃に比定される。

31SB085 (第 70 図)

調査区北東部 K9 グリッドで検出され、現状東西 1 間、南北 3 間の掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-13° -W をとる南北棟である。但し、北側及び南側柱穴列は攪乱坑により削平されており、柱間寸法が 3.4 m、3.9 m と広いことから間に柱穴が存在した可能性もある。桁行は 1.3～2.0 m で規格的ではない。身舎面積約 20 m² である。柱痕は検出されなかつたが、掘方の形状から柱が配された状況が推測でき、やや不揃いであり若干のぶれがある。また、柱穴 a、g の断面形状を見ると柱の抜き取りが行われたと考えられる。

各柱穴からは土師器坏 d 破片、手持ちヘラケズリを施す坏破片が出土しており、帰属年代から 8 世紀末～9 世紀初頭に位置づけられる。

柵状遺構 (SA)

31SA070 (第 71 図)

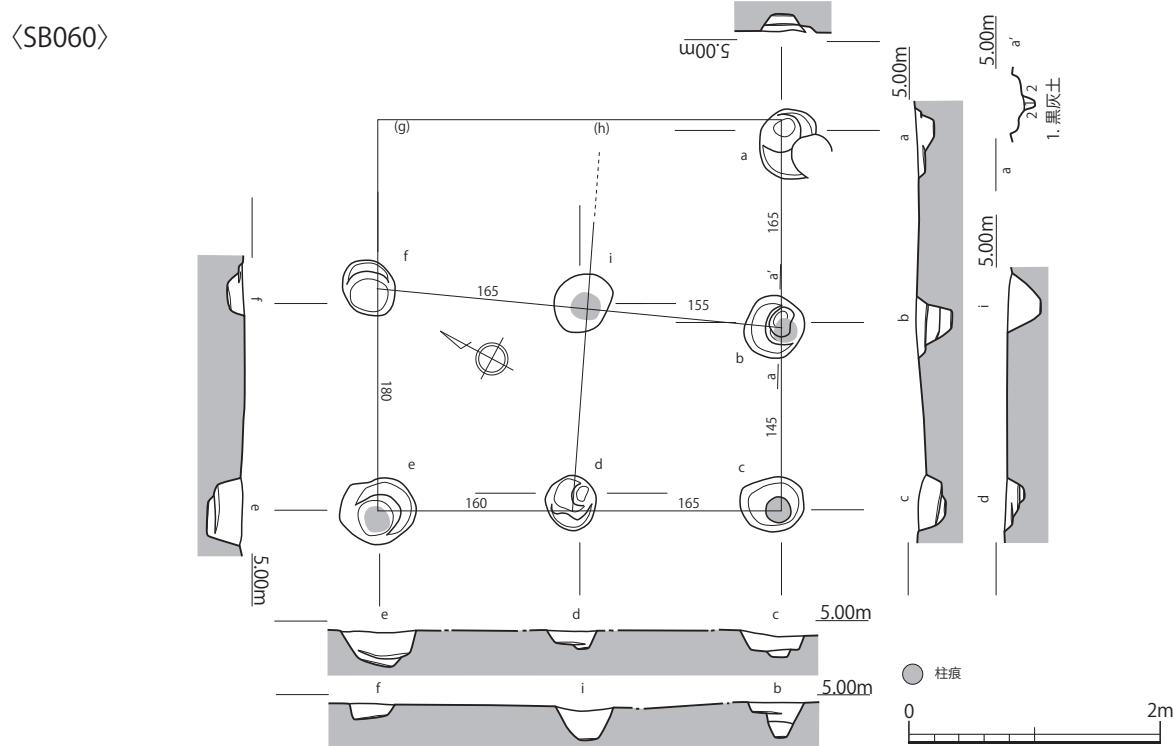
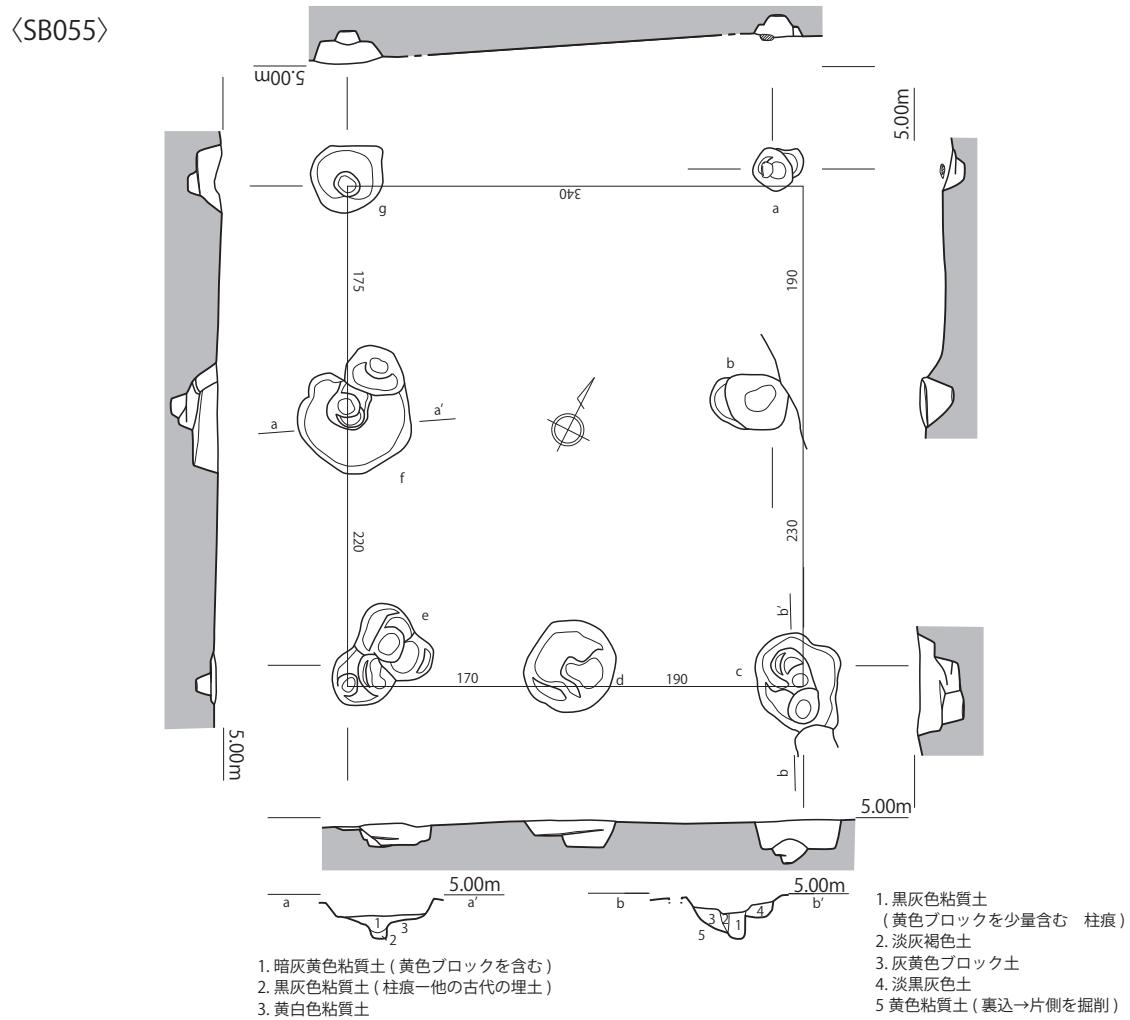
調査区中央東側 J7 グリッド、SB085 の南東部で検出された、柱穴 4 基からなる延長 5.6 m の柵状遺構である、主軸方向 N-24° -W をとり、南北方向を指向する。柱穴径は 0.5～0.8 m と規模が大きいこと、柱穴 a (SP096) の東にある 31SP109 との配置状況から掘立柱建物跡を構成する可能性もある。柱穴の掘方から、柱痕は 0.1～0.15 m と考えられ、比較的ぶれは少ない。

柱穴からは須恵器坏破片、土師器坏 a・甕破片が出土しており、その帰属年代から 8 世紀末～9 世紀前半頃に位置づけられる。

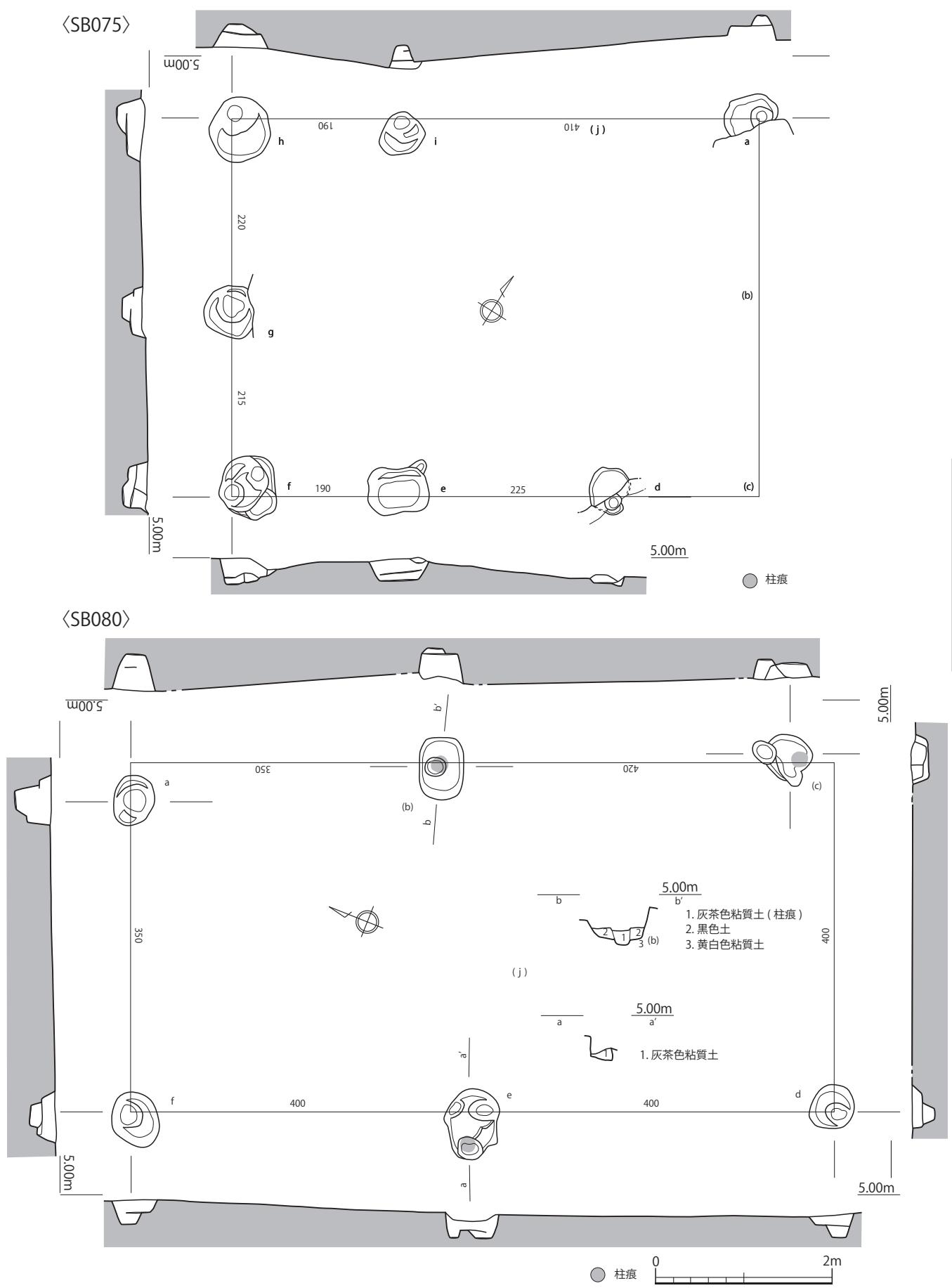
31SA090 (第 71 図)

調査区北東部 K9 グリッドで 31SB085 と重なるように位置しており、南北方向に柱穴 4 基、全長 5.5 m の柵状遺構である。主軸方向は N-4° -W をとる。柱間寸法は 1.6～2.1 m であり不規則である。柱穴は直径 0.35～0.5 m の円形を呈する。柱痕は確認されていないが掘方から柱の配置が推測可能であり、やや不揃いである。

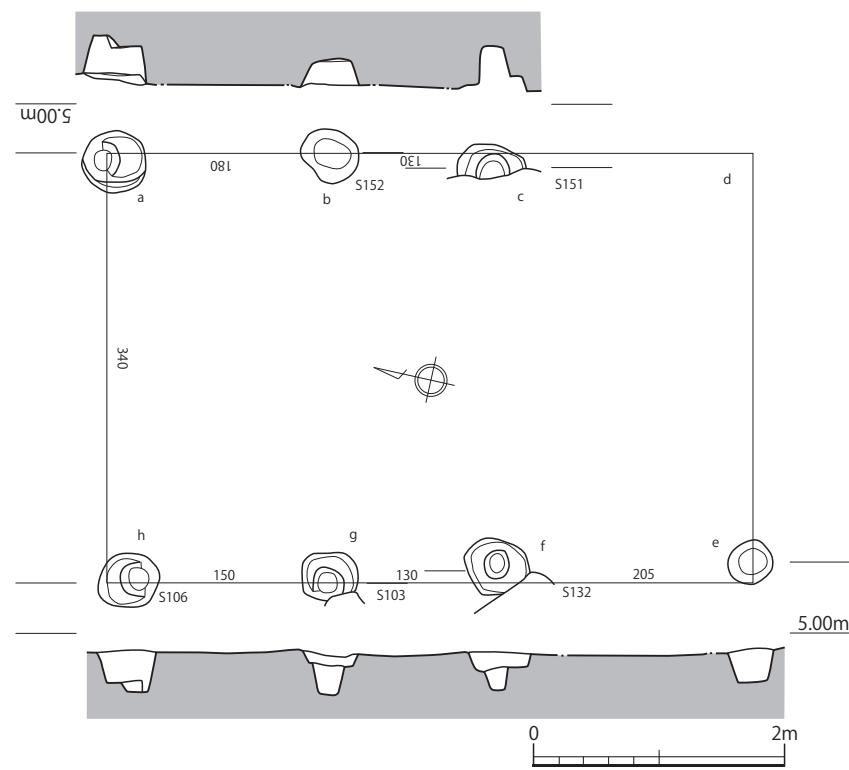
柱穴からは須恵器蓋破片が出土しており、その帰属年代から 8 世紀頃に位置づけられる。



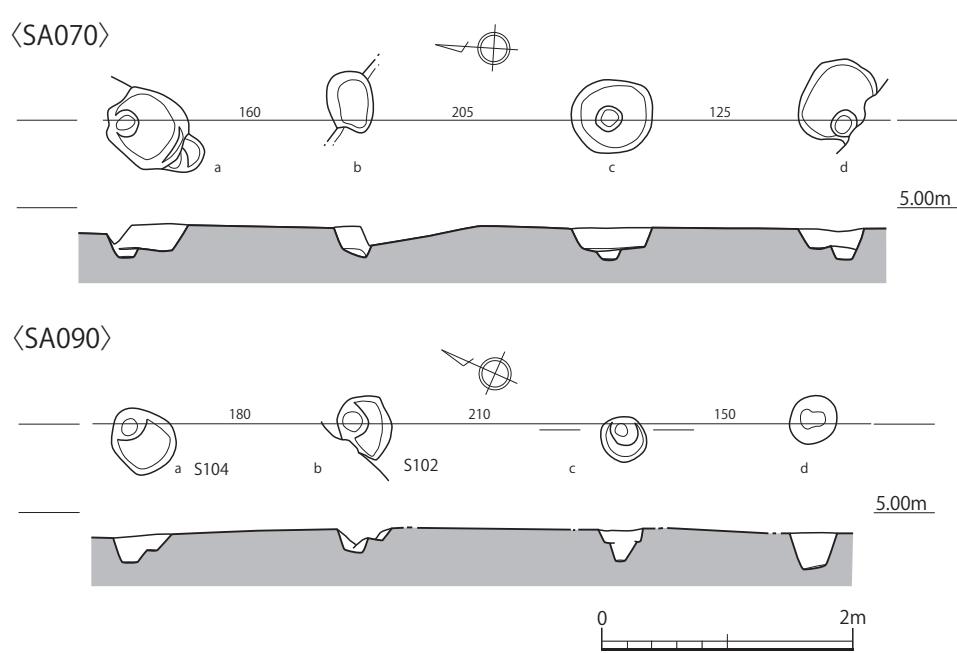
第68図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図3 (1/60)



第 69 図 第 31 次掘立柱建物跡遺構実測図 4 (1/60)



第70図 第31次掘立柱建物跡遺構実測図5 (1/60)



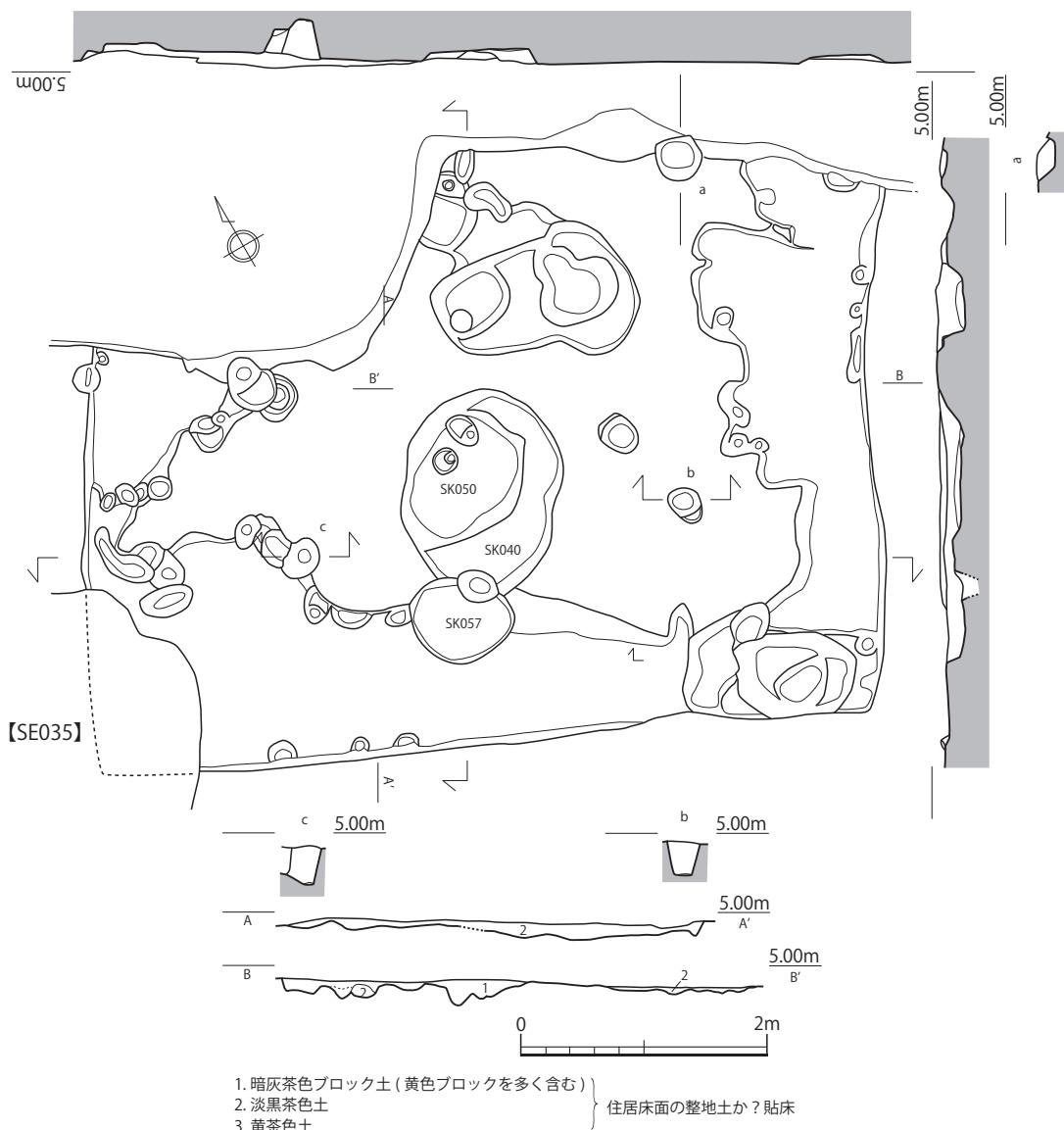
第71図 第31次柵状遺構実測図 (1/60)

竪穴建物跡 (SH)

31SH030 (第 72 図)

調査区中央付近 I6 グリッドで確認され、1 辺約 6.4 m の平面方形プランを呈す竪穴建物跡で、最大深度は 0.2 m である。検出段階から貼床面や基盤層が表出しており、このことから覆土は削平されていると考えられる。床面は、SH030 の縁辺沿いを溝状に浅く掘り窪め、その中に淡黒茶土を充填して形成している。その際棒状工具により突き固めたような痕跡が小穴となって不規則に分布している状況が貼床面除去後の黄褐色土で確認できる。その痕跡は SH030 西辺にかけて比較的多く認められる。

内部施設としては、主柱穴 3 基 (a～c) が検出された。出土遺物は極めて少ないが、SH030 より古く位置づけられるピットから須恵器坏 H の破片が出土していることから、おおむね古墳時代後期の範疇で捉えられる。



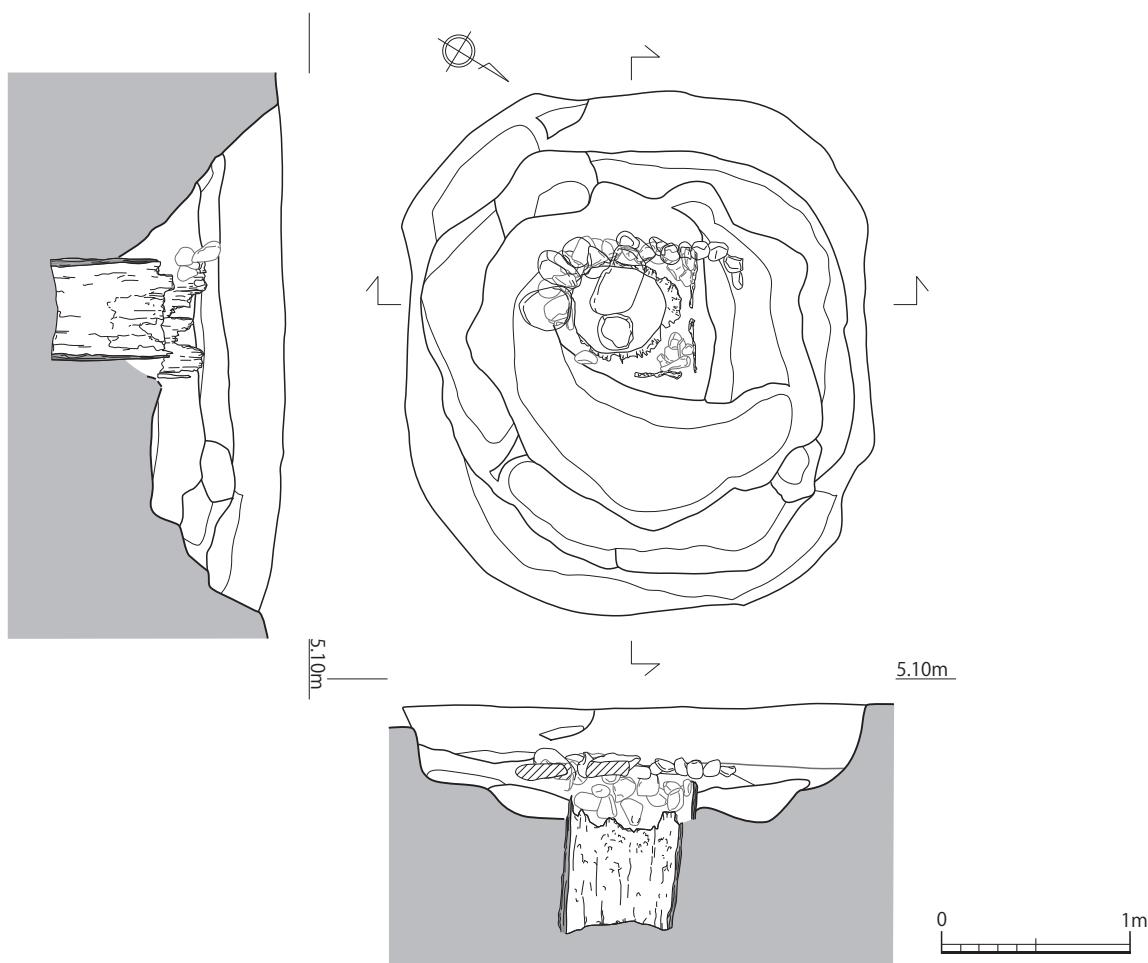
第 72 図 31SH030 遺構実測図 (1/60)

井戸跡 (SE) 31SE035 (第73図)

調査区中央 H6 グリッドで検出された。31SB060 と切り合い関係を有す。検出面での掘方は長軸 2.8 m、短軸 2.5 m の平面隅丸長方形を呈す。内部には木製の井筒部が設置されており、設置するための作業場と推測される幅 0.2 m 程の平坦部がつくられている。最深部の標高は 3.8 m である。埋土は大きく黒灰土と黒茶粘土、灰色砂に分けられる。黒灰土は検出時の土層で、黒茶粘土は井筒内部に溜まった土、灰色砂は最下層の湧水層である。灰色砂は井戸として機能段階、黒茶粘土と黒灰土は機能停止後の堆積土と考えられる。

検出段階から遺構の南側付近に礫が表出していた。掘り下げを行うと拳大から人頭程度の集石エリアが認められた。但し、石の配置が乱れて一部流れ落ちていることから現位置を保っていないと判断し、石を除去しながら掘り進めた。再び、拳大の礫による集石が表れ、やや不規則ながらも大きく 3 段の石積みが行われていた。石積みは南側が顕著であり、その他は石が点在する程度である。そして、石積みが無いまたは作りが無造作の部分は木製の板材が据え付けられていた。この石積みと板材の内側に木製の刳り貫き材による井筒が確認された。井筒部は、厚さ約 5 cm、高さ約 80 cm を測り、水分を含んでいたためか取り上げる際は男性 3 ~ 4 名でやっと持ち上がるほどの重量を有していた。調査中、最下層の灰色砂は湧水が激しく、作業中は常時水中ポンプを可動しなければ瞬時に水が溜まる状態であった。灰色砂からは土器や木製品、木切れなどが出土したが、水の湧き上がりにより現位置を保っているものは少ない。

出土遺物には土師器の壺 a や壺 d、黒色土器 A 類椀などがあり、31SB060 との新旧関係及び土器の特徴から 9 世紀初め～9 世紀中頃までの範疇で捉えられる。



第73図 31SE035 遺構実測図 (1/40)

土坑 (SK)

31SK001 (第 74 図)

調査区南壁 F1 グリッドで攪乱坑を除去後に検出された土坑で、調査区外へと延び、第 31 次調査では遺構の 1/2 を検出した。現状長径 1.2 m の平面半円形を呈し、深さ 0.5 m を測る。埋土は暗黒褐色粘質土の単一層で、常に水が染み出るような状況であったことから粘性を多く含んでいた。底面はレンズ状をなし、壁面は比較的緩やかに立ち上がり、水の浸食作用などによる壁面の崩れは認められない。検出段階から複合口縁壺や甕の破片が表出しておらず、埋土の上面と下面に分かれるように分布していた。全て形状は把握できるものの破片資料であり、大道遺跡群で顕著にみられる完存資料が重なり合うような出土状態ではない。おそらく土と一緒に土器が廃棄されたものと考えられる。

出土遺物には安国寺式の複合口縁壺や在地系の甕・鉢の他に、布留式系甕、有段式の高坏といった外来系要素を有すものも多く含まれる。これら土器の特徴から、古墳時代前期前葉頃に埋没したと考えられる。

31SK053 (第 74 図)

調査区東側中央付近 J5 グリッドで検出され、調査区外へと延びる。現状で、長辺 1.5 m、短辺 1.2 m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.5 m を測る。水平な底面から壁面は急傾斜で直線的に立ち上がる。埋土は黒黄色ブロック土の単一層である。大道遺跡群では、長方形プランを呈す大形の掘り込み遺構が多く調査地点で確認されている。共通する特徴として、埋土がブロック土のほぼ単一層で埋められていることと出土遺物が極めて少ないといった点が挙げられる。用途は判然としないが、耕作にともなう水溜め遺構といった可能性が指摘されており、31SK053 も同様の特徴を有す。

出土遺物中には手持ちヘラケズリを有す土師器坏や古代の土師器蓋が見られるが、同特徴をもつ遺構は周辺の調査所見により中世段階に位置づけられていることから、時期については検討が必要である。

31SK065 (第 74 図)

調査区中央 H8 グリッドで検出され、遺構の北辺を攪乱坑に掘削される。東西 1.2 m、南北 $0.9 + \alpha$ m の隅丸長方形を呈し、深さ 0.3 m を測る。底面の中央付近がやや膨らみ、壁面は緩やかに段を有しながら、西壁は直線的に、東壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は、全体に炭・焼土を多く含み、その差異が平面では円弧上に広がるように確認された。また、土層観察では、焼土・炭層とこれらを含まない層が交互にレンズ状堆積をなしている。第 3 層では炭化物が帶状に堆積しており、第 4 層（灰茶褐色土）上面で何かを燃やしたと考えられる。その後、第 2 層（灰茶色土）で埋められるが、2 層上面でも第 3 層と同じような状況である。但し、壁面及び底面には焼成痕跡は認められない。31SK065 周辺にはピットが数多く存在しており、攪乱坑により掘削されていなければ、建物が展開していたことが推測され、本遺構は建物に付属する施設であった可能性も指摘しておきたい。

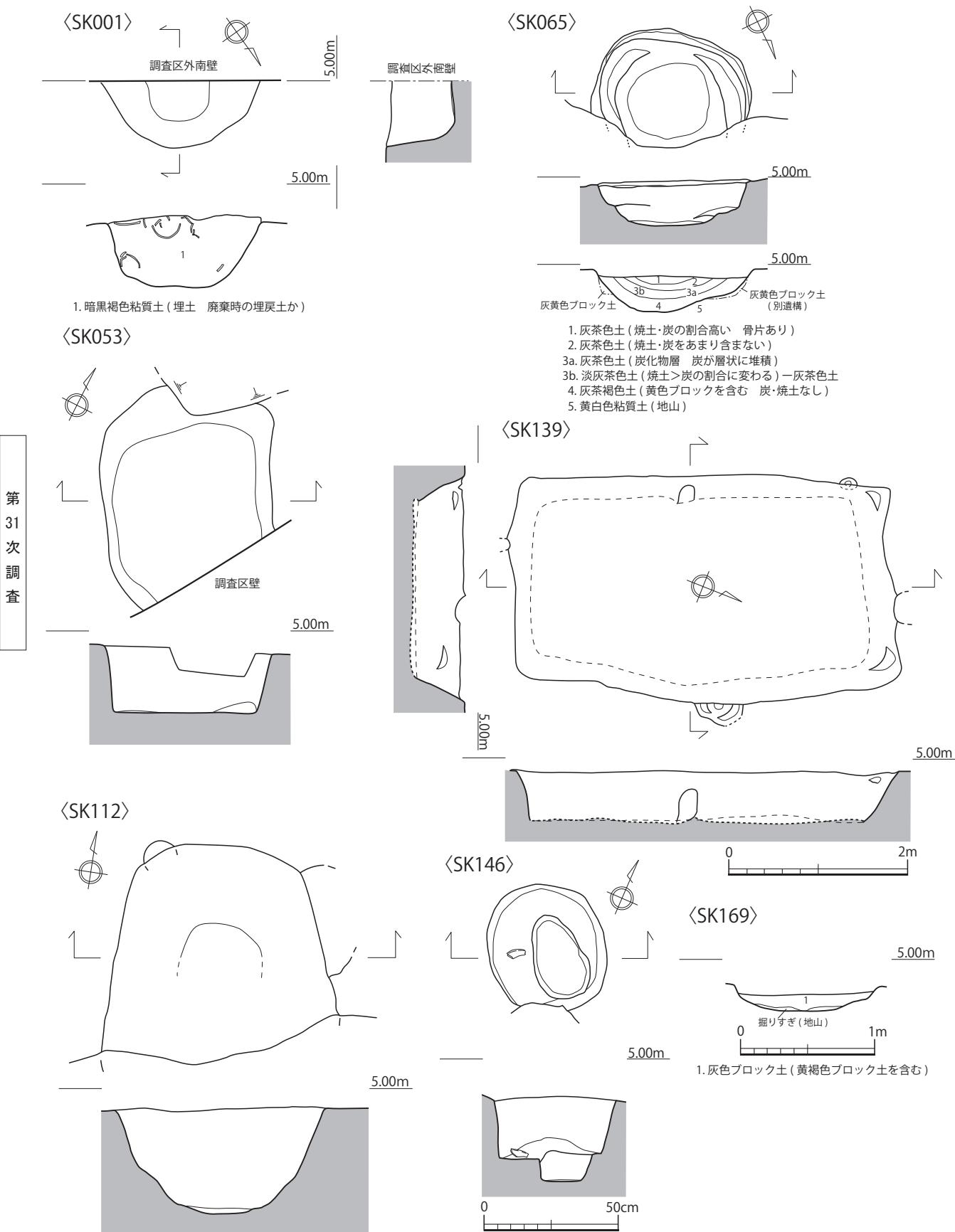
出土遺物に土師器坏 d・坏蓋などが見られる。それらの特徴から 9 世紀前半頃には埋没していたと考えられる。

31SK112 (第 74 図)

調査区東側 K8 グリッドで検出され、南側を攪乱坑により掘削される。現状南北 1.6 m、東西 1.6 m の平面隅丸方形を呈し、深さは 0.8 m を測る。底面はややレンズ状で丸みをもち、西壁は屈曲しながら、東壁は直線的に立ち上がる。31SK053 と同じような特徴を有す。出土遺物が無いことから、時期については不明である。

31SK139 (第 74 図)

調査区北東部 K9 グリッドで検出され、31SK112 の北側に近接する。長辺 4.1 m、短辺 2.5 m の平面隅丸長方形を呈し、深さ $0.55 + \alpha$ m を測る。埋土は黄白色ブロック土の単一層である。大道遺跡群と共に確認されるタイプの土坑である。



第74図 第31次土坑遺構実測図 (1/40 SK146 1/20・SK139 1/60)

出土遺物には、土師器壺 a、須恵器壺 c、黒色土器碗とともに縁釉陶器の皿または碗の高台部がみられる。遺物は9世紀代が主体であるが、周辺の調査状況からは同様の特徴を示す遺構が中世段階と推測されていることから時期を決定するには検討が必要である。

31SK146（第74図）

調査区中央やや北寄り J10 グリッドで検出され、径 0.8 m を有す平面円形プランを呈し、深さ 0.6 m を測る。底面には長径 0.6 m、短径 0.4 m の不定形な楕円形をなすピット状の掘り込みが認められる。ピットが確認されるテラス部分には、須恵器壺 a の破片が 1 点置かれるように出土している。

時期については、出土遺物から 9 世紀前後と考えられる。

31SK169（第74図）

調査区中央やや北寄り J10 グリッドで検出された。長辺 1.2 m、短辺 1 m の平面隅丸長方形を呈し、深さ 0.18 m を測る。埋土中には基盤層である黄褐色土がブロック状に混入することから、人為的に埋め戻されたと推測される。

出土遺物は、全て土師器破片であり、時期を決定することはできなかった。

溝跡 (SD)

第31次調査では、主に調査区中央付近において古代及び近代の溝跡を確認した。これらの溝跡群は、ほぼ同一地点にあり、同一方向を指向している。

SD015・020 は粘質土、砂層を埋土とするものである。硬くしまっており、溝が埋没した後、道として使用された可能性がある。SD015 では木杭に木製板を横に据え付けた調水施設が確認された。肥前陶磁器が出土していることから江戸時代に位置づけられる。

31SD025（第65図・第75図・第76図）

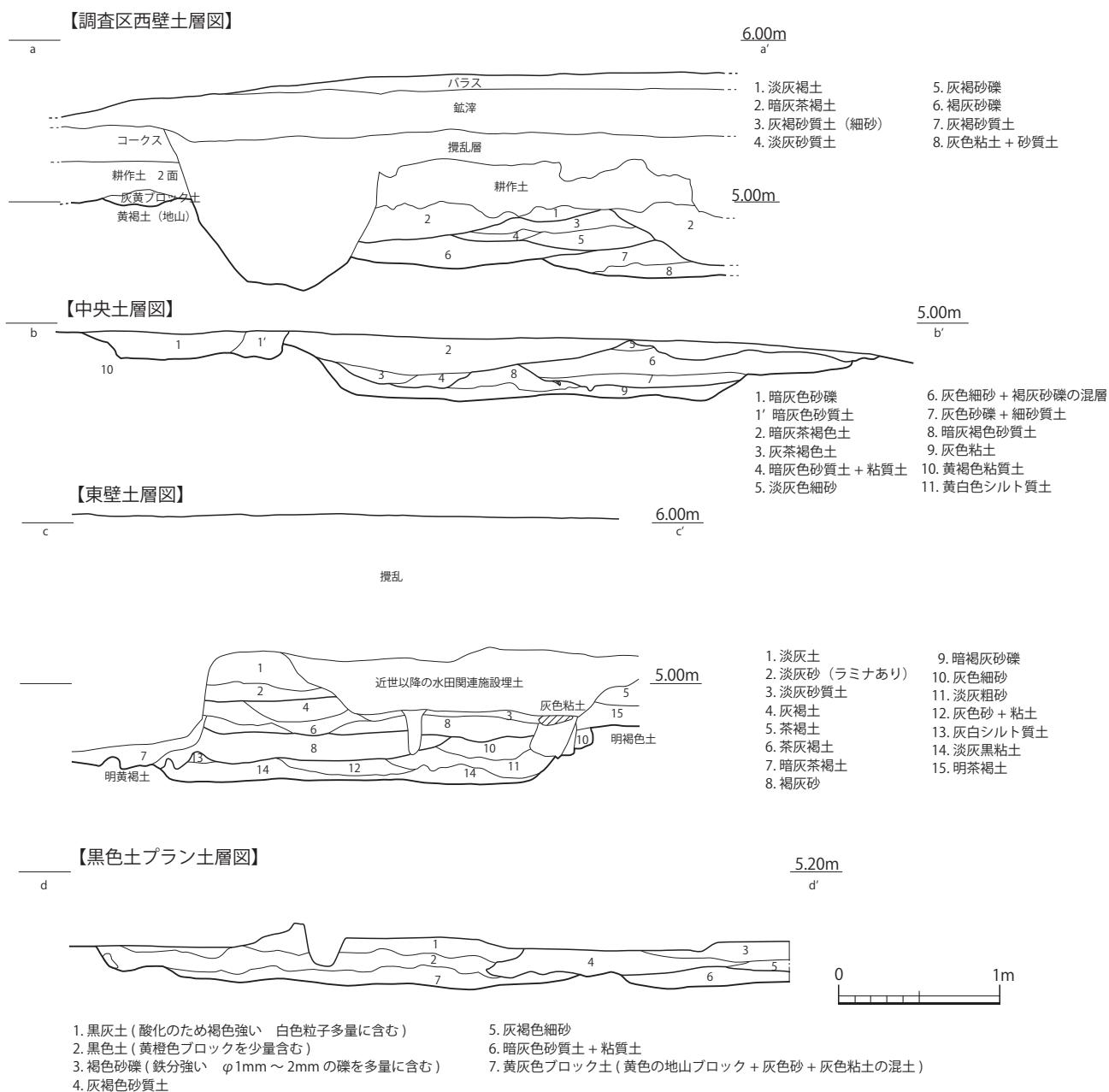
隣接する第28次調査 (SD030・130) からの延長部であり、調査区中央南側を東西方向に斜行する溝跡で、周辺の調査状況から総合すると、長さ 200 m 以上にわたって直線的に延伸している。

幅 4 m、検出面からの最大深度は 0.5 m、主軸方向 N-29° -W である。底面の標高は 4.5 ~ 4.6 m で、F6 グリッド付近がやや深く、東に向かって浅くなっていくが、全体的にはフラットな状態といえる。断面は安定した逆台形状で、北辺は急傾斜で直線的な壁面をなし、南辺は段掘り状をなしている。

土層の様子から一度掘り返しが行われている可能性がある。第75図調査区西壁土層図の第3~6層、第75図中央土層図の第5~7層が該当するものである。これらの層は、31SD025 の最も下位で表出する灰色粘土層の上位に堆積するものである。多量の粗砂が主体を占めていることから、かなりの水流があったと推測される。砂層群の上面には暗灰茶褐土があり、焼土や炭化物が含まれることから、埋土と考えられる。31SD025 南辺沿いにおいては、底面に多数の小穴が分布している（写真図版参照）。これらは水流により動いた礫や砂により削られた痕跡と考えられ、その水流の方向は、縦断土層の観察により西から東へ流れていたと判断される。

E5 グリッド付近では一部方形状の張り出しプランが確認された。張り出し内の最下層である黄灰色ブロック土の上位に粗砂層群が堆積しており、31SD025 剥削時、少なくとも掘り返しが行われる段階には張り出し部が存在していたことになる。しかし、このプラン内では砂層の広がり看取されないことから、31SD025 で想定される程の水流は無かったと思われる。このような張り出しあは第28次調査においても確認されており、機能については検討が必要である。

遺物は暗灰茶褐土とその下位の砂層群から出土している。土師器、須恵器の供膳具が顕著であり、回転台利用



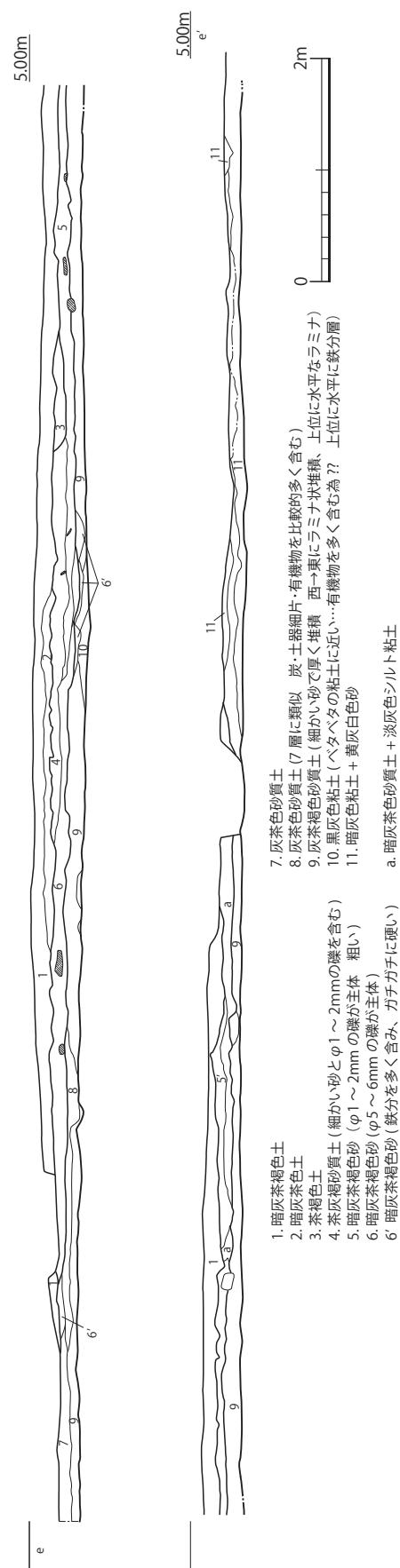
第75図 31SD025 土層断面実測図 (1/40)

の律令期的様相を有すものが多数であるが、その中に手持ちヘラケズリの土師器壊・皿類も見られる。貯蔵具については、須恵器甕の破片が数としては多いが、個体数として捉えると少量といえる。また、感覚的ではあるものの須恵器長頸壺が多いことは特徴として挙げられる。その他、特筆するものとして土師器横瓶や瓦破片、石帶の金具である銅鞘などがある。出土遺物から9世紀初め頃には埋没していたと考えられる。

31SD089 (第77図)

調査区北西端のI13グリッドからL9グリッドにかけて直線的に延び南側へ屈曲する平面逆L字状を呈す溝跡である。幅0.7~0.8m、検出面からの最大深度0.4m、直線部での主軸方向N-29°-Wである。断面は逆台形状で、底面には掘削時の痕跡と思われる凹凸が認められた。埋土には水流を示す痕跡ではなく、区画的な機能を有していたと推測される。遺物は全般に少ないが、古代の須恵器壊破片が出土している。

第 76 図 31SD025 土層断面実測図 (1/60)



(4) 出土遺物

出土遺物の概要

第31次調査区からは、コンテナ28箱分の遺物が出土している。第28次調査区に隣接することから、同様の遺物様相を示しており、古墳時代前期から古代に該当するものが大部分を占める。古墳時代前期の土器群は、第28次調査から出土したものより、やや古相に位置づけられる。古代の遺構に混入する状態で、古墳時代後期の遺物が少數ながらも確認される。古代については、第28次調査区から延長する大溝(SD025)の埋土から8世紀末～9世紀前半頃を中心とする遺物が数多く出土している。

以下では、主要遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載・報告を行う。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表(表2・3参照)にて報告している。遺構の時期認定に関わる遺物も表に掲載するのみとなっているものもあるが、出土遺物の全容についてはこれを参考していただきたい。ここでは、特に重要な遺物のみ詳述する。

掘立柱建物出土遺物（第78図1～20）

1は31SB005cから出土した土師器皿の破片である。内面に細く線描き状の暗文が数条確認できる。精製した胎土をもち、都城系土師器と考えられる。2～12は31SB055から出土したものである。5を除き全て土師器の壊破片である。壊a・壊dが混在している。5は甕bで、いわゆる企救型甕の口縁部である。14は31SB075から出土した土師器小皿と思われる口縁部破片である。端部は断面三角形を呈し、面取り風に稜が形成される。16は古手の土師器壊で、外面には横方向のミガキが確認される。20は31SB080fから出土した黒色土器A類椀口縁部である。直線的に開き、口縁端部は外反する。

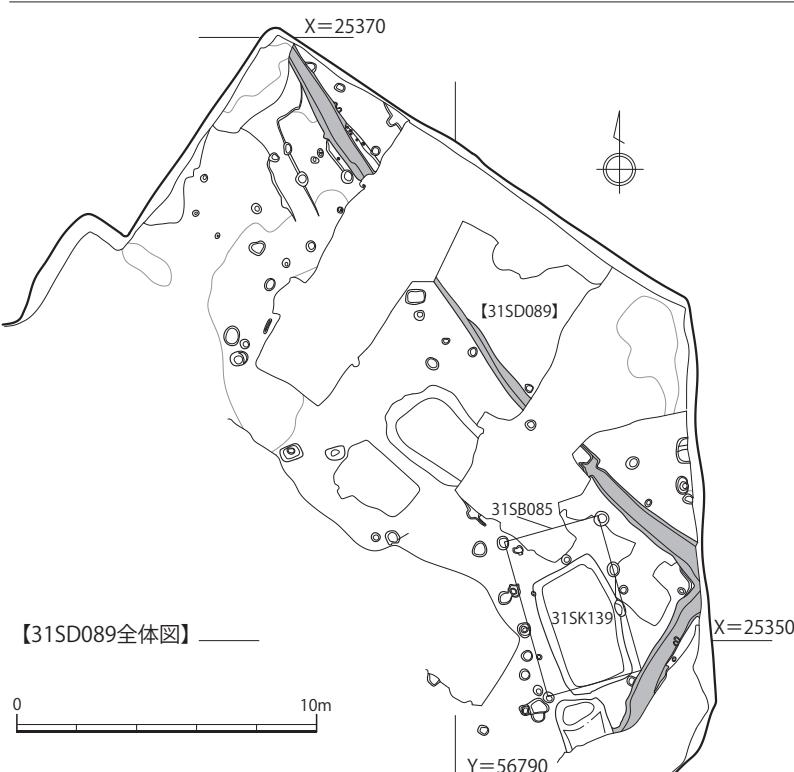
柵状遺構出土遺物（第78図21～25）

21、22は31SA070cから出土したものである。21は須恵器の壊蓋口縁部である。九州須恵器編年のⅢA期に該当するものと思われる。22は土師器椀Bで、外面にはハケ目が施される。23・24は31SA070dから出土した須恵器の蓋1と壊口縁部の破片である。25は31SA090bから出土した須恵器蓋2の口縁部である。

竪穴建物跡及び周辺遺構出土遺物（第78図26～28）

第31次調査で唯一検出された竪穴建物跡31SH030からは時期を確定できる遺物は出土しておらず、図示したものは、31SH030を掘り込む溜まり状遺構(26・27)及び31SH030

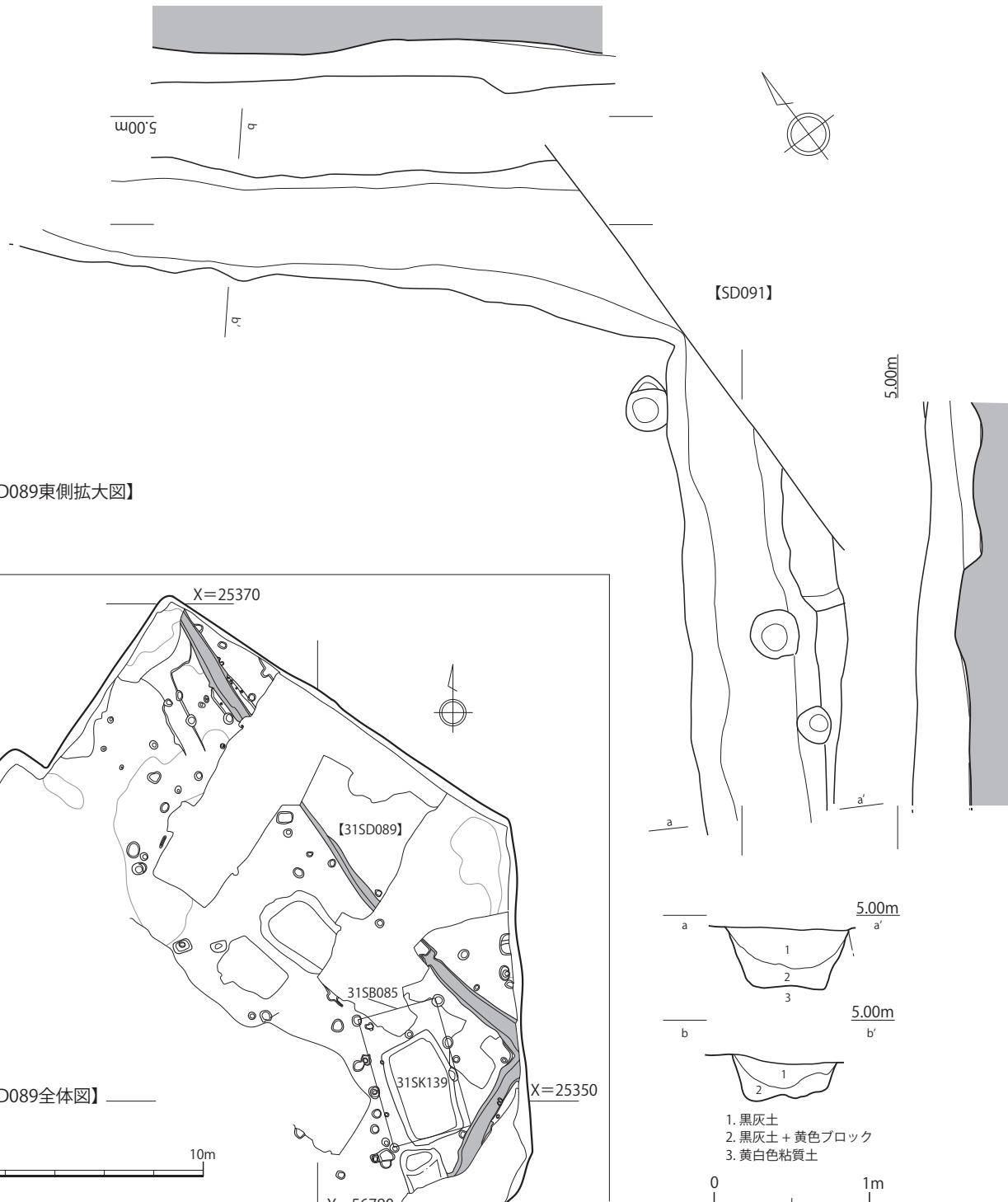
【31SD089東側拡大図】



【31SD089全体図】

0 10m

第77図 31SD089 遺構実測図 (1/250・1/40)



の埋土除去後確認された柱穴から出土した遺物である。26は器種不明の土製品の破片である。耳皿状に体部は曲がっており、外面にはユビオサエも認められる。27は土師器坏aの口縁部～体部の破片である。28は須恵器坏Hの底部破片である。

31SE035 出土遺物（第79図29～46）

SE035からは図示した遺物の他に木製品が少数ながらも出土している。その中には、ツゲ製の木櫛も含まれていたが、諸般の事情により図化は今回行っていない。

上位層である黒灰土からは、土師器蓋5(30・31)、皿c(29)、坏d(36・37)、坏a(32・33)、黒色土器A類椀(39～41)などが出土している。38は土師器小壺の高台部である。外面にはミガキa2が施される。39～41は黒色土器A類椀の破片である。39は外反しながら直線的に大きく開く形状をする。内外面には横方向を基調とする丁寧なミガキが行われる。40・41は椀の高台部である。断面三角形状をなし、体部との境目付近に接合される。丸みを有した椀部になると思われ、他の土器と比較するとやや新しく位置づけられる。42は丸瓦の破片である。外面には格子目風のタタキが確認できる。43は土師器蓋a5の完形資料である。端部は丸く退化傾向が窺える。44は土師器坏aで、口縁端部は短く外反する。46は黒色土器A類椀の高台部である。高台部と体部との接合部は打ち欠きが行われている。高台は高く、断面三角形状を呈す。

31SK001 出土遺物（第80図・第81図11～13）

1～10は全て古式土師器である。2は有段式の高坏である。外面にはミガキが施される。形状・胎土から外来系のものである。3～5は複合口縁壺である。全て口縁部は長く直立する。側面には2～3条の波状文が刻まれる。5は胴部が球形をしており、内外面はミガキが密集している。6～9は布留式系甕である。6は口縁端部の形状は異なるが、大道遺跡群7SK007出土の甕に類似する。外面は縦方向後横方向のハケが施される。7～9はナデ肩で、胴部中位からやや下位に最大径が見られ、球形胴部を呈すものである。13は大形の鉢で、頸部にユビで摘みながら整形された突帯が1条貼り付けられている。これらの土器群は、全体的には古墳時代前期前葉頃の所産に位置付けられるものである。

31SD020 出土遺物（第82図1）

1は円面硯の脚部破片である。脚端部には嘴状に屈曲する。透かしの間に1条の沈線が認められる。類似資料が市内松岡古窯跡群出土事例にあることから、流通域を示す資料と考えられる。

31SD025 出土遺物（第82図2～39・第83図～第86図126～141）

31SD025は第28次調査区で確認されているSD030・130から延長する溝跡である。よって、時期や遺物構成は類似していることから、第31次調査区において発見された特徴的な遺物のみ詳細な報告を行う。その他の遺物については、遺物観察表を参照していただきたい。

2～6は31SD025を検出後、切り合い関係や上位に堆積する耕作土等を除去するため一段下げを行った段階で出土した遺物である。6は土師器の鍋口縁部と思われるが、他の遺物と時期差が看取される。内外面はユビオサエが顕著に見られ、鍔部は断面コ字状を呈す。全体的に内彎する器形をしている。

7～41は現段階で最終埋没土である暗灰茶褐色から出土したものである。7は陶器皿の高台部である。底部外側は露胎で、その他は全て褐色釉がかけられる。胎土は淡灰白色である。混入品と考えられる。10は須恵器坏cである。全体的に器壁は薄くシャープな器形をしており、金属器模倣を感じさせる。体部中位から口縁部は緩やかなS字状をなしており、口縁端部は外反する。高台部は低く外側へ丸く突出する。16～18は土師器皿である。全て手持ちヘラケズリが行われ、17はその痕跡が明瞭であり、体部下位は鋭く屈曲する。16、17は平底、18は丸底を呈し、内面は縦方向の細いミガキが確認される。20は土師器椀Aで、外面には手持ちヘラケズリが施

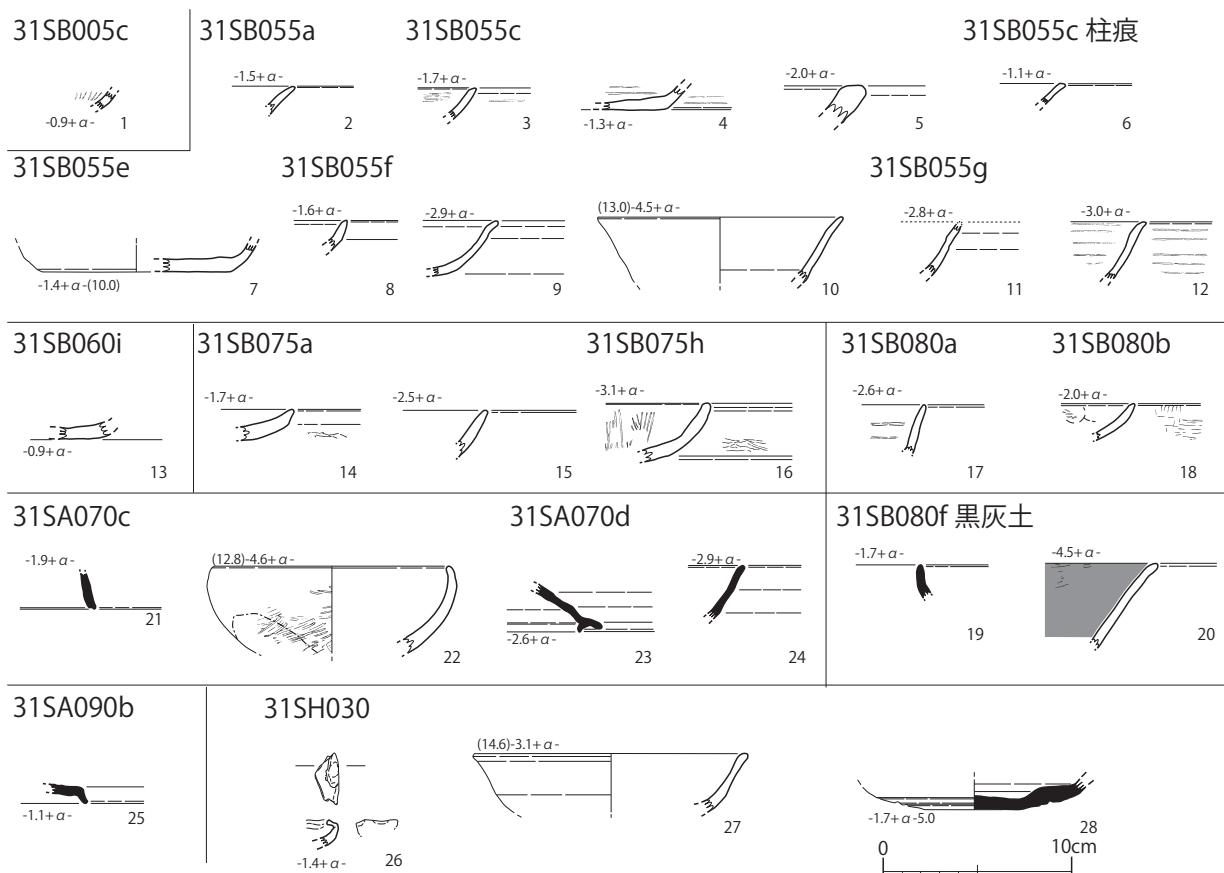
される。21は土師器壺aで、内面には横方向のミガキが、外面体部下位においては回転台を利用したヘラケズリが行われる。22は、土師器壺であるが、丸底状を呈すと推測される。古手のタイプと考えられる。27は土師器碗Aの系譜をもつものと思われ、体部下位には手持ちヘラケズリが認められる。24～26は土師器壺dで、26は精製土を使用して作られており、赤色を呈す。口縁端部が短く外反し、鉢状の体部を有する。28は土師器の壺口縁部であるが、横瓶の可能性もある。31は土師器甕又は鉢である。口縁端部上面は平坦で、外側に短く突出する。若干屈曲しながら胴部へと移行する。32は白色をしており、焼成不良の態をなす甕aである。外面にはタタキ痕が認められ、内外面にはユビオサエが顕著である。底部は平底に復元される。須恵器模倣と推測される。34は丸瓦の破片で、凹面の布目痕、凸面には工具状ナデ痕が認められる。焼成堅緻である。39は鉄製品で、木質が残る。錆びが付着しており器種は断定しづらいが、断面形が鋭利な三角形をしていることから刀子の可能性が高い。

42～108は、水流痕跡を示す暗灰茶褐砂質土から出土した遺物群である。42は磁器で、花瓶もしくは壺の破片と判断される。外面には草文が貼り付けられる。釉調は淡緑黃灰色を、胎土は混入物が少なく淡灰黄色を呈しており、一見、龍泉窯系青磁に類似する。現段階では産地・時期ともに不明である。43～46は須恵器壺蓋である。九州須恵器編年のIV A～IV B期に該当する。47は須恵器蓋cで、縁辺部を大きく打ち割って加工を施している。転用硯の可能性がある。49～51は須恵器蓋1である。50は一部に微細に連続した打ち欠きが行われており、硯として転用されたと考えられる。これらは九州須恵器編年のV～VI期に位置づけられる。52～57は須恵器蓋の破片で、それぞれ蓋2～5に分類される。58は淡灰白色をしている須恵器壺cで、一見すると瓦質土器のようにも見え、胎土は白灰色をしており、還元不十分な焼成具合となっている。高台はやや高く、踏ん張るような形状をしており、端部は平坦面を有す。底部と体部の境付近は器壁が最も薄く、屈曲も強い。薄い体部から口縁端部は若干肥厚しながら丸くおさめられる。全体的にシャープな器形をしている。見込み部分は滑らかで、図示できていないが、剥離個所は打ち欠き加工が行われており、硯として2次利用されたと推測される。63～66は須恵器甕で、63は口縁端部下位に段があり、端部上位は外方へと突出する。64は端部が断面雲状をしている。65は大甕の口縁部で、端部が短く上方へ突出する。66は器高約38cmを有す甕aである。

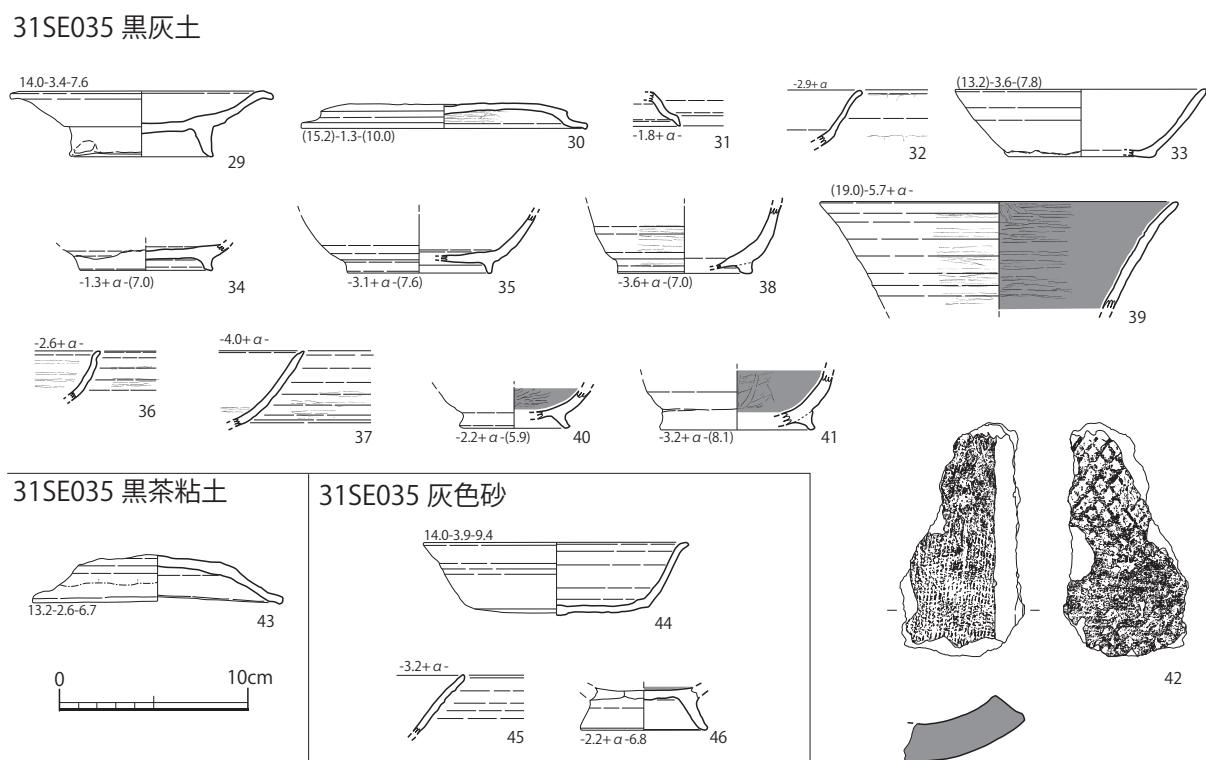
67は土師器皿と考えられるが、全体的に器壁は厚く口縁部は短く直立する。69は土師器壺aで、底部は手持ちヘラケズリが認められる。70は土師器蓋cで、天井部から体部にかけて2条の直線が刻まれる。76～80は土師器壺d、78～80は体部が内彎気味になる。82・83は高壺の脚柱状部で、82は壺部との接合部、83は脚裾部に打ち欠きが施される。94は軟質で茶白色をしており、成形具合から土師器と判断した。横瓶の体部で、頸部付近は横方向の細かいケズリが見られ、内面に1箇所閉塞部が認められる。外面は工具によるナデが行われる。95は丸瓦で凸面は横方向の工具ナデ、凹面は布目痕が確認される。96は凸面に格子目状のタタキが見られる。101は球状を呈す金属品である。重量は11.1gを量る。102は銅製の瓶である。厚さ0.2～0.3mmを測る。28-2SD130からは石帶の巡方が出土していることから注目される。103は用途不明の銅製品である。端部と思われる部分は尖り気味になっている。五徳のような脚か、又は銅鏡の破片と考えられる。106～108は砥石である。全て小形で、仕上げ用として使用されたと考えられる。108は使用面に細かい擦り痕が確認される。

109～132は31SD025の下部に堆積する灰茶褐砂質土から出土したものである。109は須恵器皿c、110は壺cで、ともに見込み部は滑らかで、高台接合部は打ち欠きにより整形されている。転用硯と判断される。111・112は須恵器壺cで体部中位には3条の沈線が見られる。形状や調整から同一個体であろう。114は須恵器高壺で、壺部と脚裾部は打ち欠きが施される。壺部は硯として転用された可能性が高い。123は、鉢状を呈す土師器壺dである。全体的に器壁は薄く、胎土中に混和材は少なく色調は暗橙色をなしている。内外面には横方向を基調とした細かいヘラミガキが施されている。精製品である。128～131は瓦破片である。31SD025からは、第28次地点と比較し、瓦の出土が多いといった特徴が挙げられる。また、第31次地点では凸面をハケ状のナデが施されているものが主体を占める。また、全て焼成堅緻といえるものである。

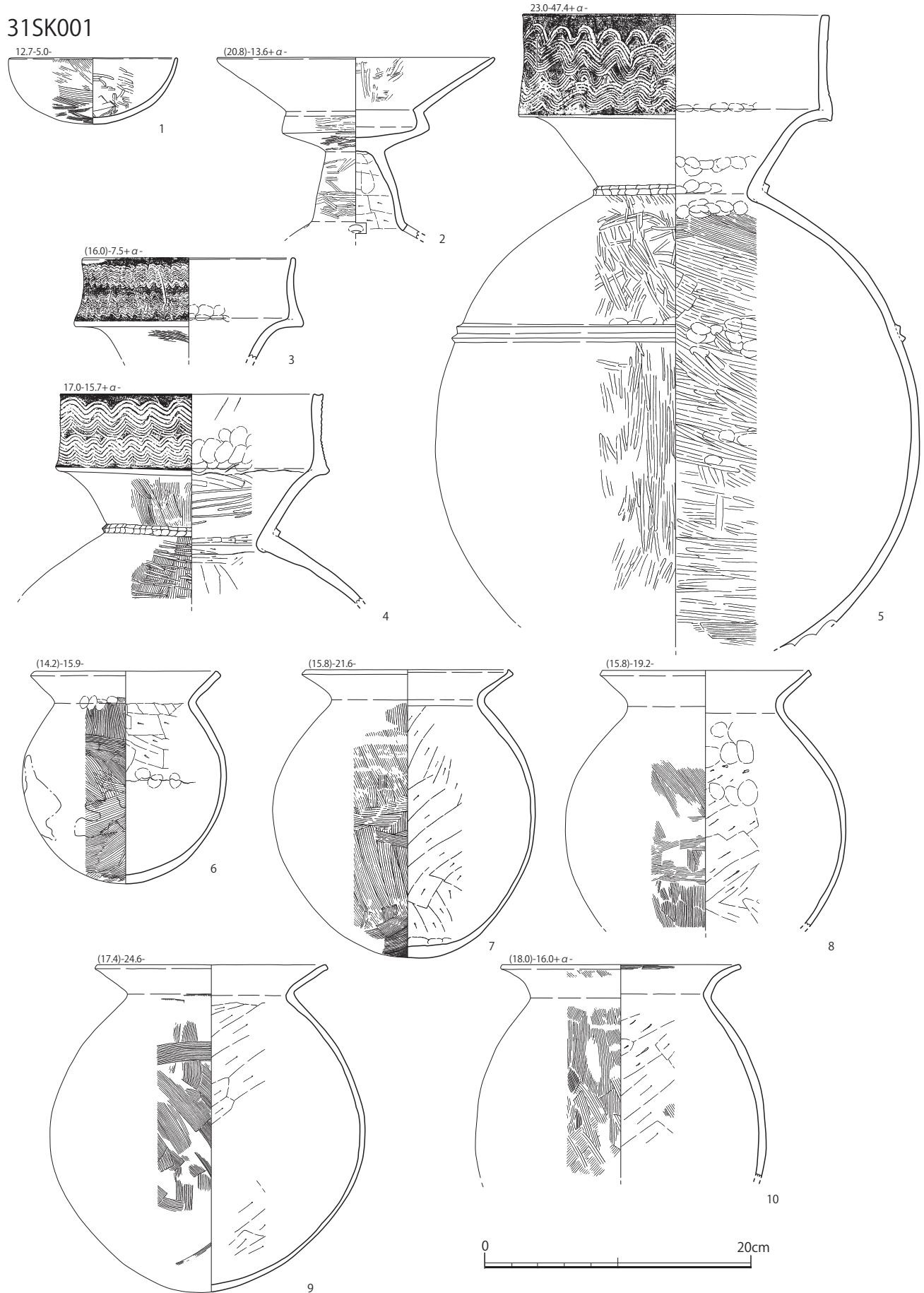
150は台状の製品である。石製品のような表面色調・重量感であるが、ユビオサエのような窪みが顕著に見られることから断定できない。用途は不明であるが形状からトチン等の窯道具の可能性が考えられる。



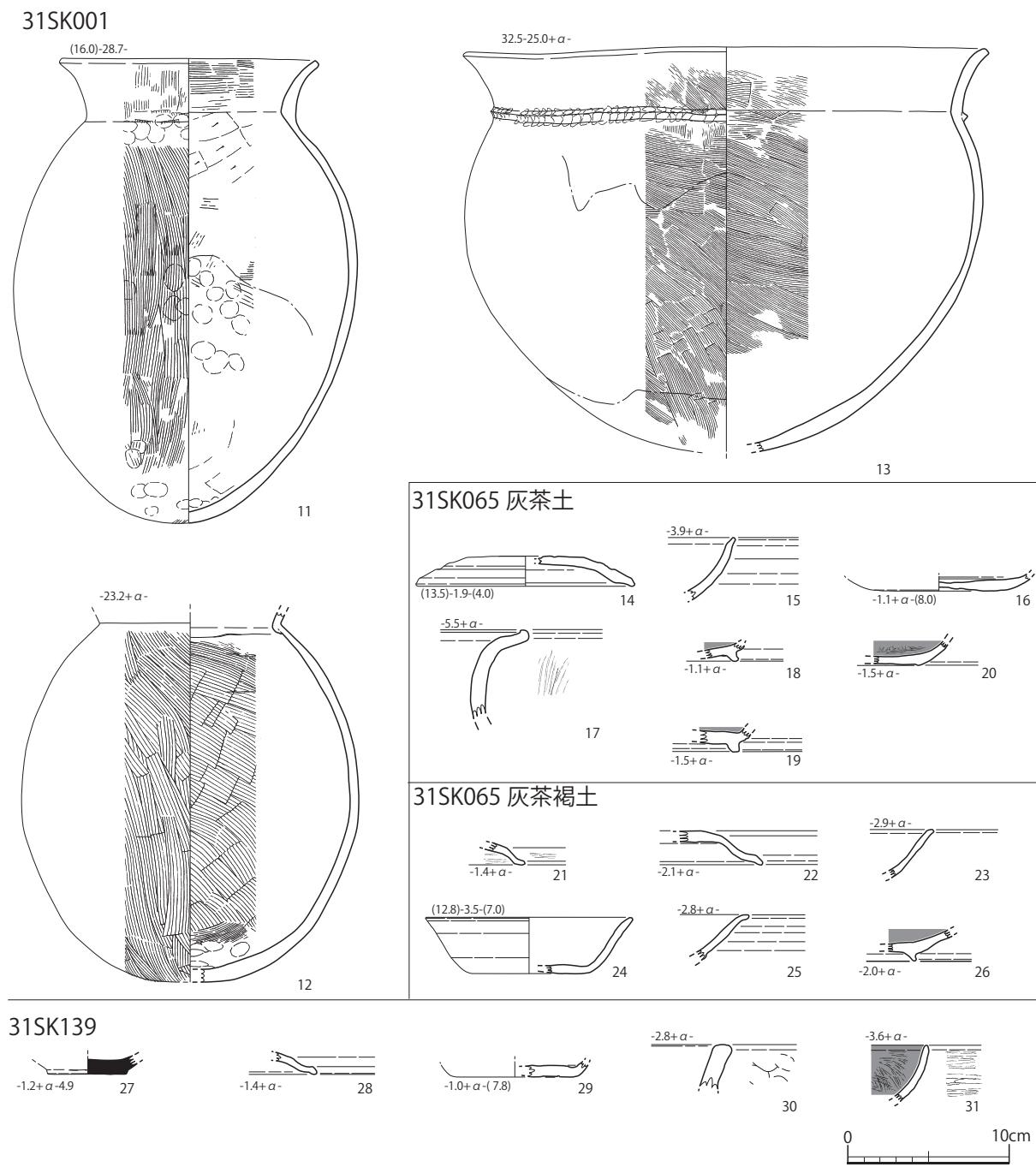
第 78 図 第 31 次建物跡・柵状遺構遺物実測図 (1/4)



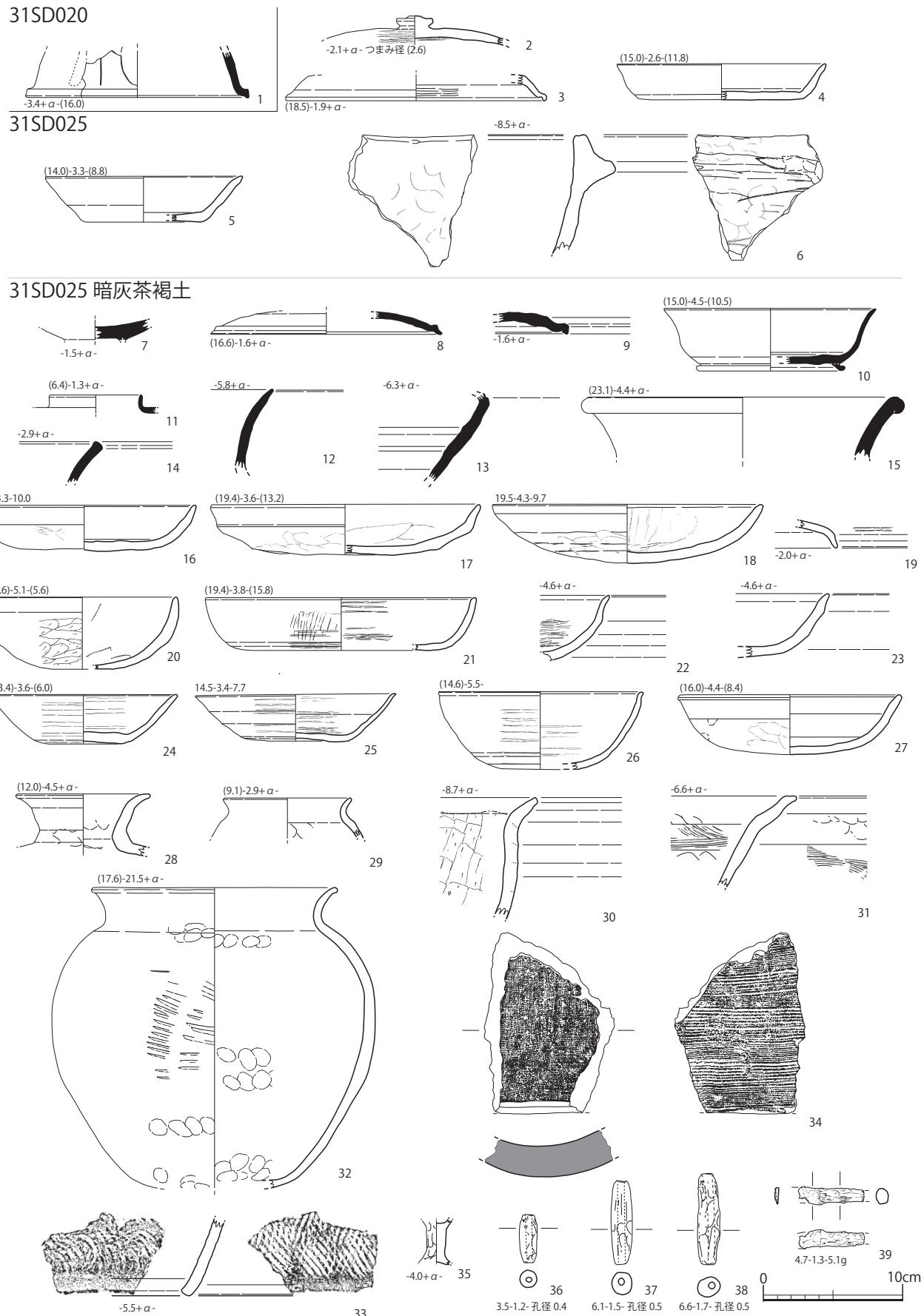
第 79 図 第 31 次井戸跡遺物実測図 (1/4)



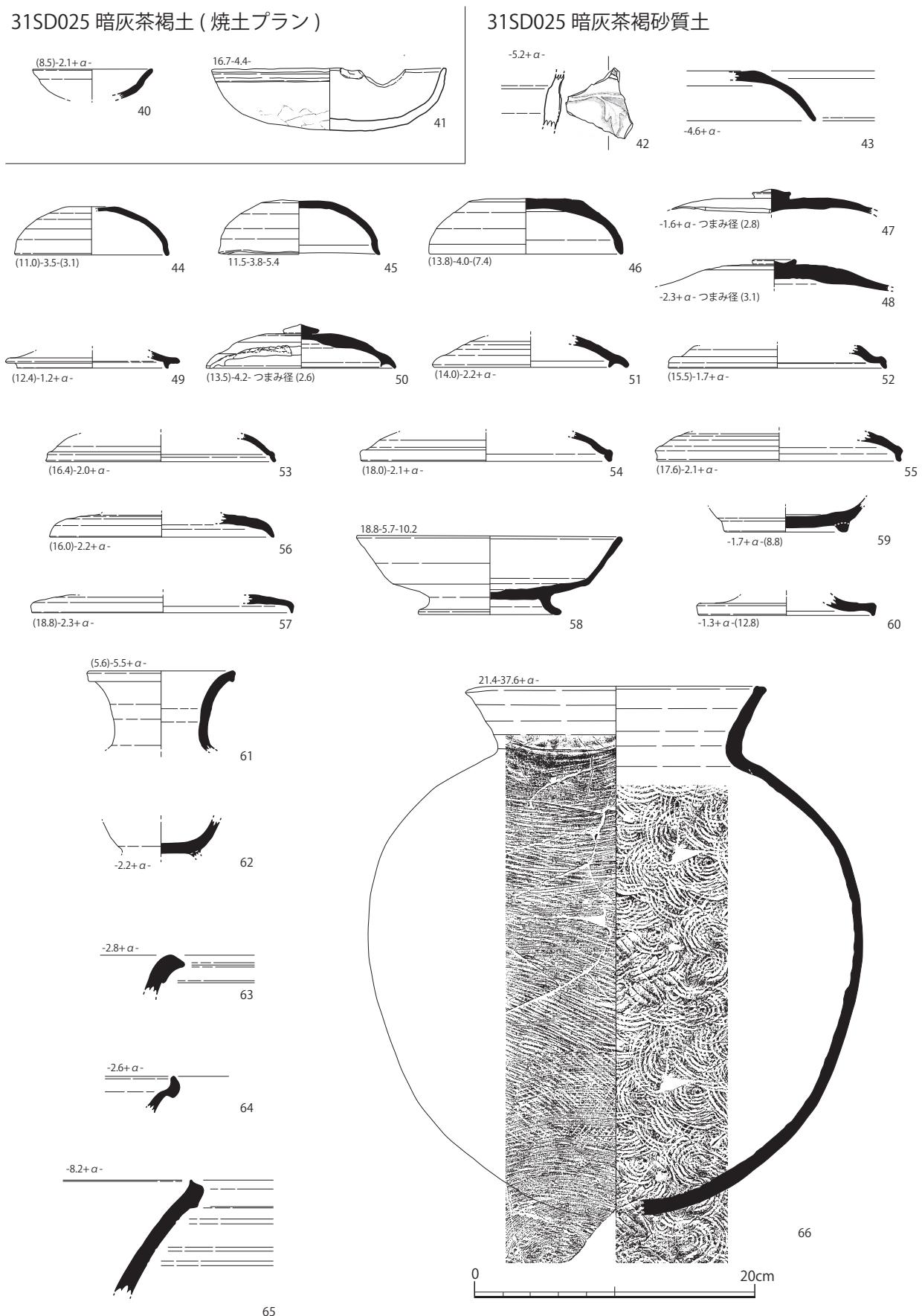
第80図 第31次土坑遺物実測図1(1/4)



第 81 図 第 31 次土坑遺物実測図 2 (1/4)

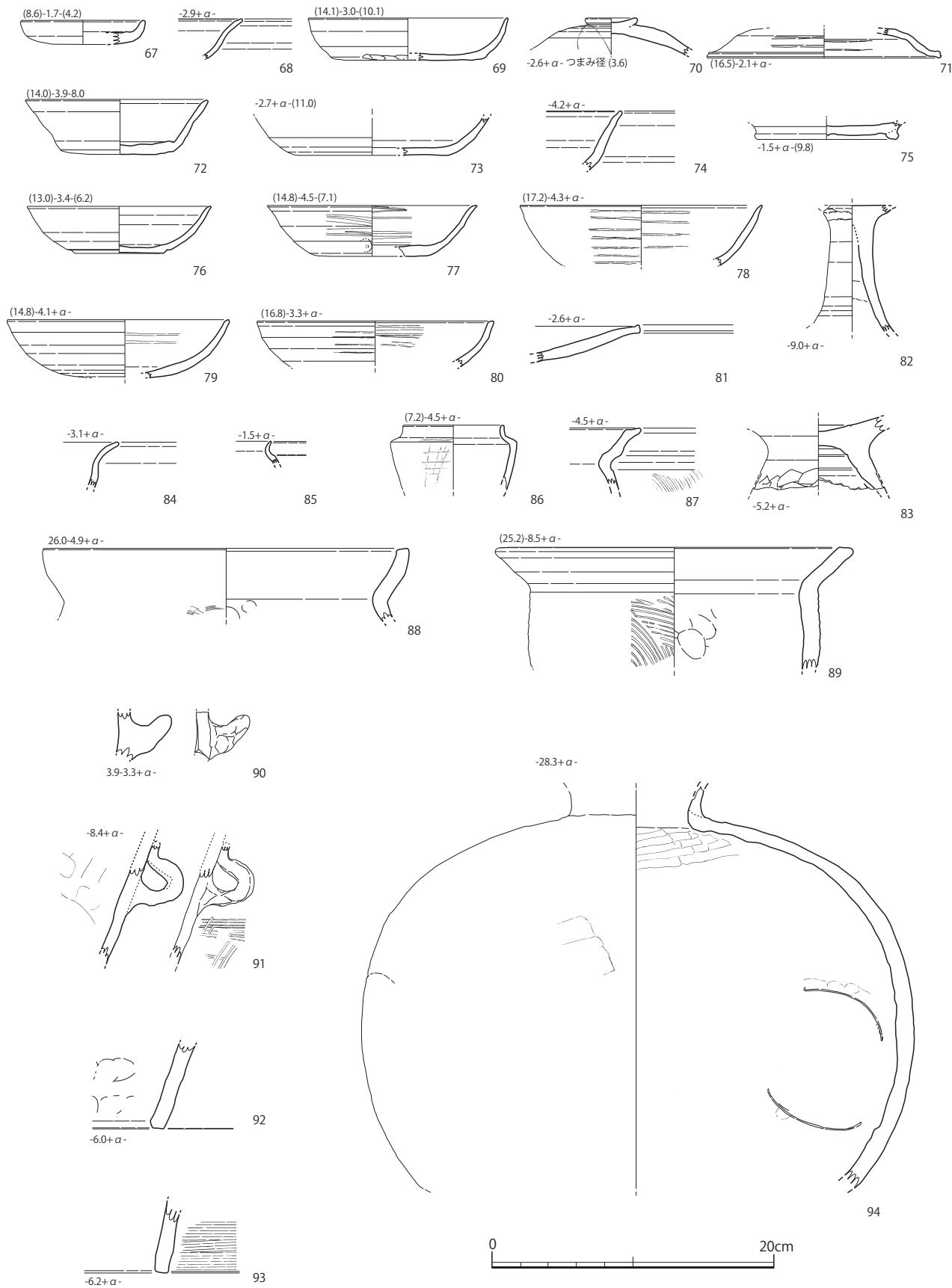


第82図 第31次溝跡遺物実測図1 (1/4)



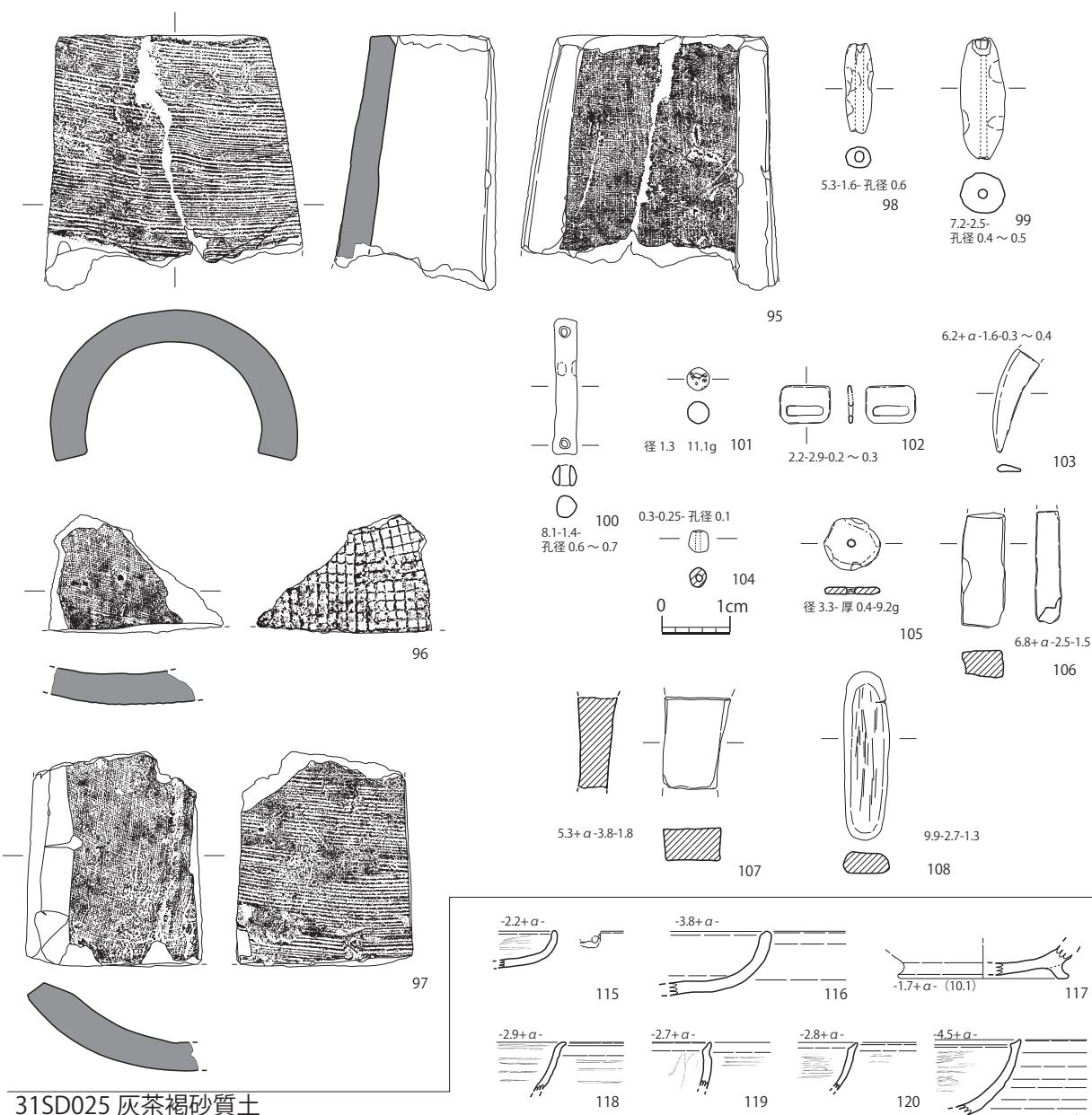
第 83 図 第 31 次溝跡遺物実測図 2 (1/4)

31SD025 暗灰茶褐砂質土

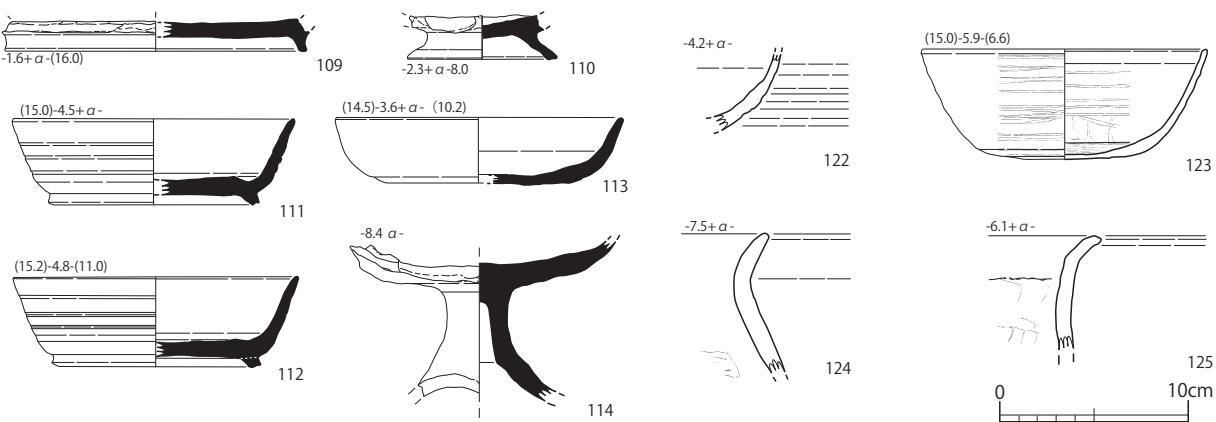


第 84 図 第 31 次溝跡遺物実測図 3 (1/4)

31SD025 暗灰茶褐砂質土

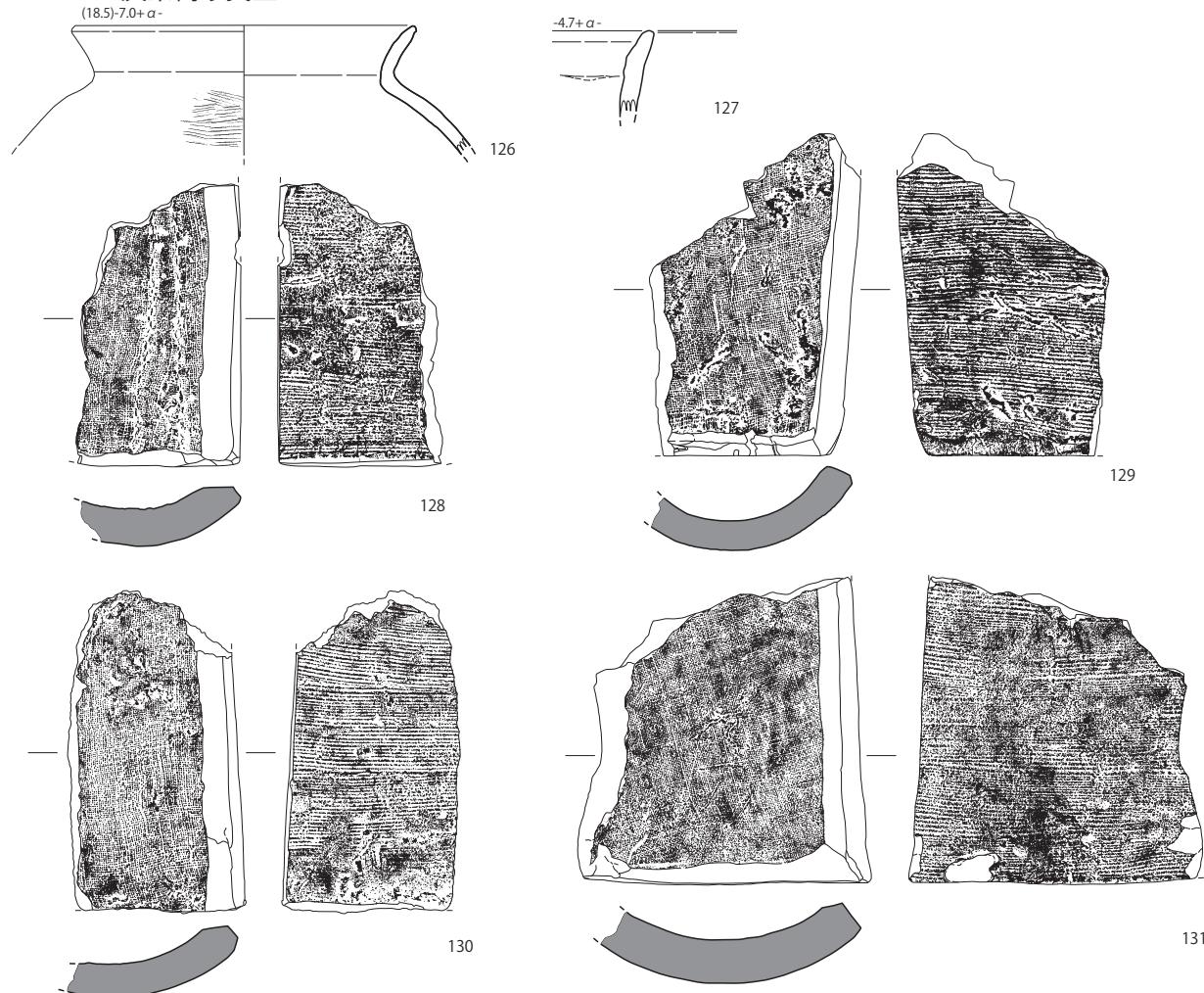


31SD025 灰茶褐砂質土

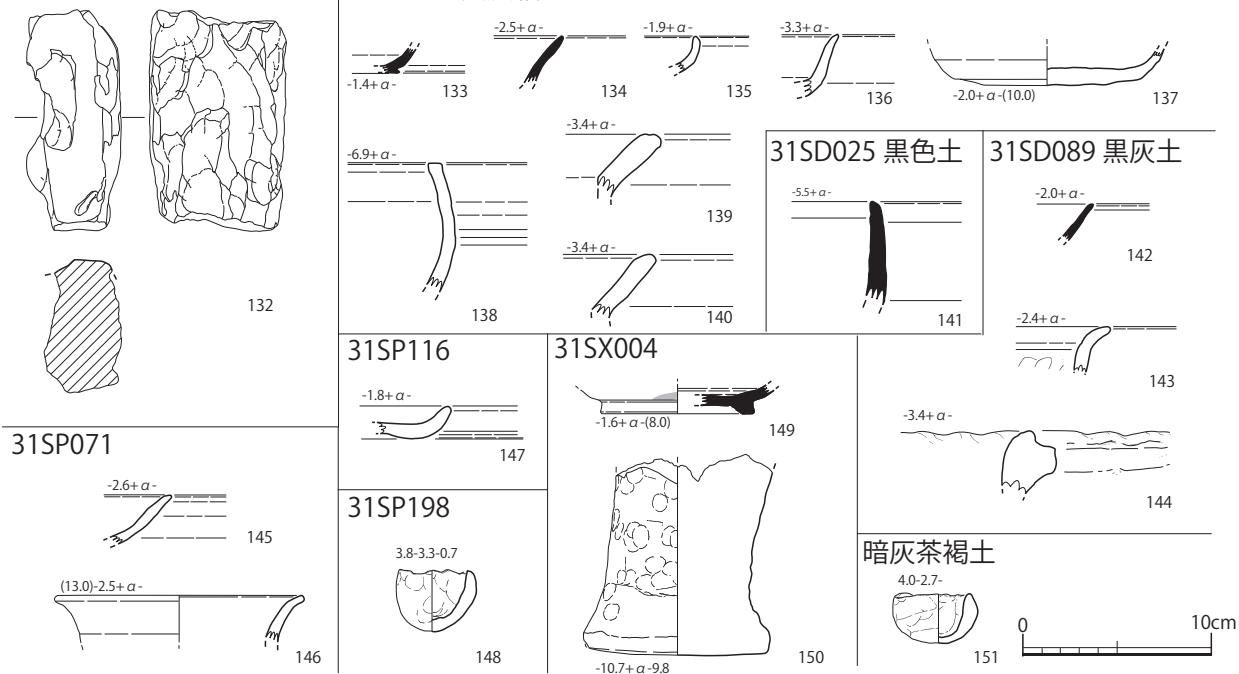


第 85 図 第 31 次溝跡遺物実測図 4 (1/4・1/1)

31SD025 灰茶褐砂質土



31SD025 黑灰粘土



第86図 第31次溝跡・その他の遺構遺物実測図 (1/4)

第10表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳1

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
1	SK001	廃棄土坑	古式土師器複合口縁壺 布留式系甕 有段式高坏		古墳時代前期 前葉	F2
2		土坑	関西系陶器碗 肥前染付碗		近世?	G2
3		ピット	弥生土器破片			E4
4	SX004	大型土坑	国産陶器擂鉢(壠・肥前) 唐津皿(砂目) 陶胎染付碗 ミニチュア擂鉢 備前擂鉢(近世1期) 高取上野産碗 煙管		~近代	H4
5	SB005	掘立柱建物跡	都城系土師器皿?	5→27	8世紀代~	I5
6		土坑	土師器坏破片 甕b破片(企救型甕)		8世紀後半~	F3
7		ピット	肥前染付碗 瓦質土器破片		近世	H5
8		ピット	土師器破片			H5
9	SB005a	柱穴	弥生土器複合口縁壺		8世紀~	H5
10	SB010	掘立柱建物跡		10→27	古代	J5
11		大型土坑	肥前染付碗 関西系陶器碗 平瓦		18世紀代~	I3
12		ピット	弥生土器破片			F4
13		ピット群	白磁破片(近代)		近代~	F4
14		ピット	平瓦(格子目タタキ)			F4
15	SD015	溝跡	白磁碗(太宰府分類IV類) 不明金属製品(貝殻状) 肥前磁器端反碗 国産磁器鉢(プリント) 石硯 チャート剥片		近代~	G4
16		ピット群	土師器破片			F5
17		ピット	弥生土器破片			F4
18		土坑	丸瓦 錘(石製)	18→19	近世?	H5
19		ピット	国産陶器破片		近世	H5
20	SD020	溝跡	肥前染付蓋碗 端反小坏 皿C(京都系) 龍泉窯系青磁碗 青磁破片(产地不明) ガラス製玉 銅製鉢	20→32・44	19世紀代?	G3
21	SB010f	柱穴	土器破片		古代	J5
22	SB010d	柱穴	土師器破片		古代	J5
23	SB005d	柱穴	土師器破片		8世紀代~	I5
24	SB005c	柱穴			8世紀代~	I5
25	SD025	溝跡	土師器坏d・横瓶 須恵器坏c 銅製瓶 転用硯 瓦	25→15・20・44	8世紀末~9世紀前半	F5
26	SB005b	柱穴	土師器甕×壺口縁部		8世紀代~	I5
27		大型土坑	レンガ 染付皿(近代)	27→4・36	~近代	H4
28	SB060i	柱穴	土師器破片		~9世紀前半	H6
29	SB060b	柱穴	須恵器壺 土師器破片		~9世紀前半	H5
30	SH030	竪穴建物	土師器破片	30→81・86・50・57・40・45・58・66・68・74・87	古墳時代中期~	I6
31	SB060a	柱穴	土師器破片		~9世紀前半	H6
32		土坑	肥前染付碗 仏飯具 いぶし瓦		近代~	G3
33		ピット	弥生土器壺口・甕口			J4
34	SB010c	柱穴	土師器破片	34→27	古代	I5
35	SE035	井戸	土師器坏a・蓋a・黒色土器A類椀 木櫛(ツゲ?)		~9世紀中頃	H6
36		溜状遺構	肥前染付碗	36→4	近世	H4
37		ピット	土師器破片			
38	SB060e	柱穴	弥生土器破片			G5
39	SB005e	柱穴	土師器破片	27→39		I4
40		土坑?	土師器坏d 坏a 須恵器甕破片		8世紀後半~	I6
41	SB060c	柱穴	古式土師器破片			G5
42	SB060e	柱穴	土師器破片			G6
43		溝状遺構		43→15		F6
44		溝状遺構	白磁瓶(肥前)	44→4	近世	F4
45		土坑?	土師器鉢 須恵器破片		古墳時代後期?	I7
46		溝状遺構				F7
47		ピット	弥生土器壺×甕			G7
48	SB055f	柱穴	土師器坏		8世紀後半~9世紀前半	G7

第11表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳2

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
49	SB055g	柱穴	土師器壺d・蓋		8世紀後半～9世紀前半	G8
50		土坑	土師器壺a・皿×壺	50→40	8世紀後半～9世紀前半	I6
51	SB055e	柱穴	土師器壺a			G7
52		ピット		52→51		G7
53	SK053	土坑	土師器皿・壺a 須恵器壺c		8世紀後半～	K6
54		ピット	土師器壺a・蓋×壺破片	54→88	8世紀代～	J7
55	SB055	掘立柱建物跡			8世紀後半～9世紀前半	H7
56		ピット	土師器甕破片		古代	K7
57		溜状遺構	土師器鉢破片	57→40	古墳時代	I6
58		溜状遺構	須恵器甕破片		古墳時代	I7
59		ピット	土師器壺a底部 黒色土器A類破片		9世紀代？	J6
60	SB060	掘立柱建物跡			～9世紀前半	G5
61		ピット	土師器壺破片		古代	H7
62		ピット	土師器破片			G7
63	SB055b	柱穴			8世紀後半～9世紀前半	H7
64		ピット	土師器壺口縁部 須恵器高壺脚部		古代	H7
65	SK065	土坑	土師器壺d・壺a・蓋・甕破片 須恵器壺c 黒色土器A類椀		～9世紀前半	H8
66		ピット	弥生土器破片	66→58		I7
67	SA070d	柵状遺構	土師器壺口縁部・須恵器壺 須恵器蓋1		8世紀後半～	K7
68		ピット(柱痕あり)	弥生土器破片	68→58		I7
69		ピット	弥生土器破片			K6
70	SA070	柵状遺構			8世紀後半～	J7
71		ピット	土師器壺a	71→48	古代	G7
72		ピット	弥生土器破片			G8
73		ピット	弥生土器破片			G8
74		ピット	古式土師器高壺(外来系)・壺破片			I7
75	SB075	掘立柱建物跡			8世紀後半～	F9
76		ピット	土師器皿×壺		古代	I7
77	SB055c	柱穴	土師器壺a・甕b(企救型) 須恵器蓋破片		8世紀後半～	H7
78	SB055d	柱穴				H7
79		ピット	須恵器蓋破片		古代	G7
80	SB080	掘立柱建物跡			9世紀前半～	H10
81		ピット	土師器甕破片		古代	J6
82		ピット	土師器甕破片	82→61	古代	G7
83	(欠番)					
84		ピット	土師器壺a・皿	84→48	古代	F6
85	SB085	掘立柱建物跡			8世紀末～9世紀初頭	K9
86		溜状遺構？	須恵器蓋a		古代	I6
87		ピット	土師器壺×甕			I7
88		ピット	弥生土器破片	88→54		J7
89	SD089	溝状跡	土師器甕a・壺d? 須恵器甕・壺 黒曜石剥片・石核	89→91	古代	I13
90	SA090	柵状遺構			8世紀頃～	K9
91		溝状×溜状	土師器鉢a・皿 須恵器壺H	91	古代	L10
92		ピット	弥生土器破片			
93		ピット	黒色土器A類破片		9世紀代？	J9
94		ピット	弥生土器破片			J9
95	(欠番)					
96	SA070a	柱穴	土師器壺a・甕口縁部		8世紀後半～	K8
97		ピット	弥生土器破片			J8
98		ピット	土師器椀 須恵器壺口縁部		古代	K8
99	SA070c	柱穴	土師器壺 須恵器壺		8世紀後半～	K8

第12表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳3

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
100		(欠番)				
101		ピット	弥生土器壺破片			K8
102	SA090b	柱穴	須恵器蓋		古代	K9
103		ピット	土師器破片	103→102		K9
104	SA090a	柱穴	弥生土器破片			K10
105		(欠番)				
106	SB085h	ピット	土師器壺d 土師器椀(古墳)		古代	K10
107		ピット				H9
108		ピット				H9
109		ピット	土師器破片			K8
110		(欠番)				
111		ピット	弥生土器破片			K9
112	SK112	土坑	土師器壺a 須恵器蓋・壺		古代?	K8
113		ピット	土師器壺a 弥生土器破片		古代	J7
114	SB085d	柱穴	土師器壺破片	114→89	古代	L9
115		(欠番)				
116		ピット	弥生土器壺口			J9
117		ピット	土師器壺a		古代	I9
118		ピット	須恵器壺破片			I9
119		ピット	土師器壺a・壺c 須恵器蓋		8世紀後半~	I10
120		(欠番)				
121		ピット	土師器壺a	122→121	古代	I9
122		柱穴	土師器壺破片	122→121		I9
123		ピット	土師器壺a		古代	I9
124	SB080d	柱穴	土師器壺a・壺d		8世紀後半~9世紀前半	H9
125		(欠番)				
126		ピット	土師器破片		古代?	H9
127		ピット	土師器破片			I10
128		ピット	土師器壺把手		古代	L10
129	SB080e	ピット	土師器壺・壺破片 須恵器破片		8世紀後半~9世紀前半	H10
130		(欠番)				
131	SB080 c	柱穴	土師器壺破片			I10
132	SA090	柱穴	土師器破片			K9
133		ピット	土師器破片			I8
134	SB075d	柱穴	土師器破片		古代	G9
135		(欠番)				
136	SB055s	柱穴	土師器壺a		8世紀後半~	H8
137		ピット	土師器破片	137→178		H8
138		ピット	土師器破片	157→138		I8
139	SK139	土坑	緑釉陶器椀 黒色土器A類椀 土師器壺d 須恵器壺c		9世紀代?	K9
140		(欠番)				
141	SB085e	柱穴	土師器壺口縁		8世紀末~9世紀初頭	K8
142		ピット	土師器破片			K8
143		ピット	土師器壺a		古代	I11
144	SB080b	柱穴	土師器皿a・壺×皿・壺 須恵器壺破片	144→搅乱	9世紀前半~	I11
145		(欠番)				
146		ピット	須恵器壺a 土師器破片		古代?	J10
147		ピット	須恵器壺a 土師器破片	147→148	古代?	J12
148		溜状遺構	土師器破片	147→148		J11
149		ピット	須恵器壺			J11
150		(欠番)				
151	SB085a?	柱穴	土師器破片 土師器壺a(手持ちヘラケズリ)		8世紀末~9世紀初頭	L9

第13表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳4

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
152	SB085b	柱穴	土師器破片		8世紀末～9世紀初頭	L10
153		ピット	土師器壺破片			
154		溜状遺構	土師器壺a 土師器壺破片			I8
155		(欠番)				
156		溜状遺構	土師器破片			H9
157		ピット	土師器破片	157→138		I8
158		ピット	土師器壺a・壺		古代	G9
159		溜状遺構	土師器壺			G8
160		(欠番)				
161		ピット	土師器破片			I8
162	SB075f	柱穴	土師器壺a		8世紀後半～	F8
163		ピット				F8
164	SB075g	柱穴	須恵器破片 土師器破片		8世紀後半～	F9
165		(欠番)				
166		溜状遺構	弥生土器破片			F9
167	SB075h	柱穴	土師器壺a(手持ちヘラケズリ)		8世紀後半～	F9
168	SB075i	柱穴				F9
169	SB075i	柱穴	土師器破片		8世紀後半～	J10
170		(欠番)				
171		柱穴	土師器破片			F8
172		柱穴	土師器破片			G8
173		柱穴	土師器破片	173→133		I8
174		ピット	土師器	176→174		I13
175		(欠番)				
176		溜状遺構	土師器破片 須恵器破片	176→174		I13
177	SB080a	柱穴	土師器皿 須恵器壺		9世紀前半～	I11
178		ピット	弥生土器破片	137→178		H8
179		ピット	土師器破片	89→179		J13
180		(欠番)				
181		ピット	弥生土器壺(下城式)			L9
182		土坑	土師器破片	182→91		L11
183		ピット	土師器壺頸部・壺	183→91		L10
184		柱穴	土師器壺	184→186		F8
185		(欠番)				
186		溜状遺構	土師器破片	184→186		F8
187		ピット				F9
188	SB075a	柱穴	土師器壺・皿・椀		8世紀後半～	F9
189		ピット	土師器壺a			G10
190		(欠番)		189→搅乱		G11
191		柱穴	土師器壺a		古代	
192		ピット	土師器壺	191→搅乱		H11
193		土坑	土師器破片	139→192		K9
194	SB075f	柱穴	土師器短頸壺 須恵器壺×壺 黒色土器A類椀		9世紀代?	J10
195		(欠番)				H10
196		柱穴	弥生土器破片			
197		ピット	土師器破片	196→搅乱		I11
198		ピット	ミニチュア土器	198→89?		J11
199		ピット	土師器壺 須恵器壺?			L9

第5節 大道遺跡群第36次調査

(1) はじめに

第36次調査区は第28次調査区と第31次調査区の間に南北に延びる市道部分を調査したものである。調査対象範囲の中ほど～北側地点については、隣接調査区の状況により大規模な搅乱坑が存在することが判明していることから遺跡は残存していないと判断した。そのため、調査の対象となる敷地の中ほどから南側部分を調査エリアとして設定し、実施している。調査では、隣接調査区で検出されている古代の大溝（36SD025）が、予想通り発見された。その他、南北方向に延びる掘立柱建物跡も確認されているが、全体としては遺構密度が低い状況であった。

調査面積は約150m²を測り、個別図面及び遺構全体図作成に伴う空中写真測量の撮影作業を終えた後、埋め戻しを行い、第34・37次を含め平成22年3月16日に調査を終了した。

(2) 基本層序

調査区は、旧市道敷きであったことからアスファルト舗装されており、調査にあたっては対象エリアの舗装切断作業から開始した。アスファルト除去後、厚さ約0.2mの碎石整地層が表出し、碎石層を除去すると耕作土層が認められ、耕作土層を取り除くと基盤層である黄褐色土が確認される。遺構群は黄褐色土から掘り込まれていたことから、当該土層を遺構検出面とし調査を開始した。遺構検出面の標高はおよそ5.0～5.1mであり、周辺調査区とほぼ同様であった。

(3) 遺構

掘立柱建物跡(SB)

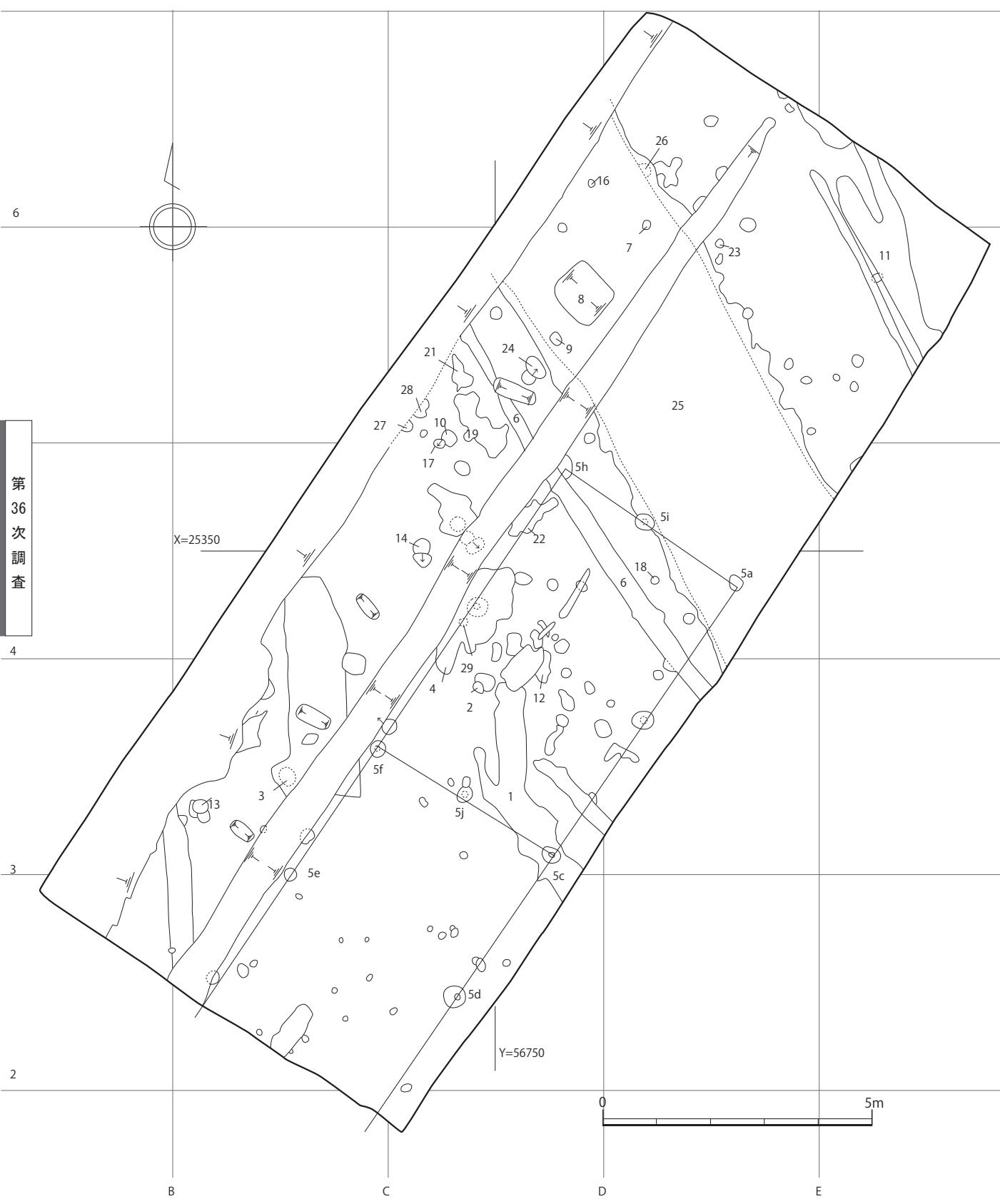
36SB005(第88図)

調査区南部分B1グリッドからD3グリッドで検出した梁行2間、桁行3間以上の掘立柱建物跡である。南側は調査区外のため、全体の規模は不明である。主軸方向はN-31°-Eを指向する南北棟である。柱間は梁行1.8m～0.9m、桁行3.08m～3.16mを測る。柱間総距離は梁行3.76m、桁行9.34m+αである。身舎面積は現状で35.1m²である。柱穴の掘り方は不整形な円形を呈し、直径0.2m～0.4m、深さは0.25m～0.4mを測る。建物中央から柱穴a・dにむけて傾斜しているが、柱穴の基底部の標高はおよそ5.0mである。出土遺物は柱穴bから土師器片と国産磁器稜花皿片が検出されている。

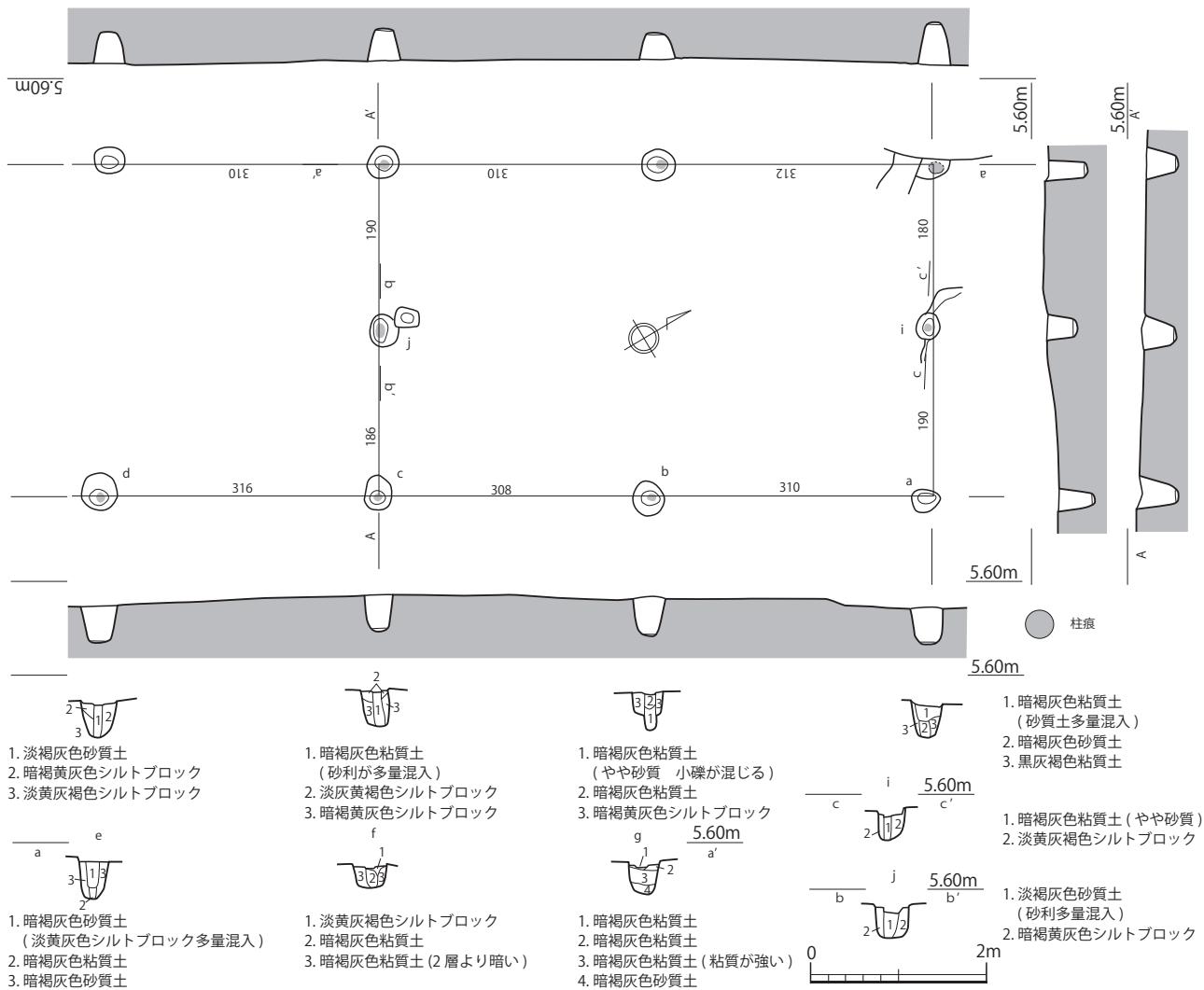
溝跡(SD)

36SD025(第89図)

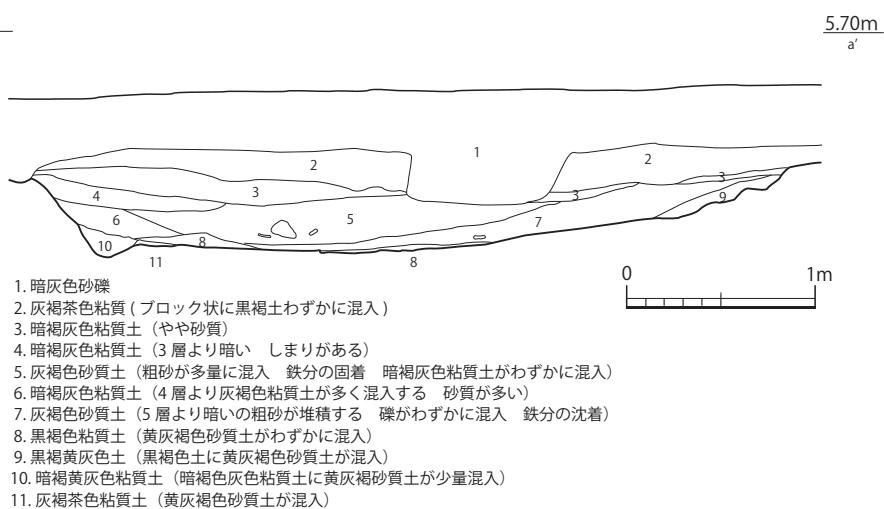
調査区中央北側A6グリッドからD3グリッドにかけて検出した南北方向に斜行する大溝である。北西端は28-2SD130に接続し、南東端は31SD025接続する。主軸方向はN-29°-Wで、ほぼ直線的である。検出長約8.0m、幅約4.0m、深さ0.6mを測る。底面の標高は約4.4mである。断面形状は緩い逆台形を呈する。埋土の上位は褐灰色土を基調とした粘質土、第5～7層では褐灰色土で、砂質が強く粗い砂を多く含んでおり流水があったことが推定され、水路として機能していたと考えられる。土層観察から不整合が認められ、掘り返しが行われたと考えられる。他調査区と同様に8世紀後半から9世紀初頭を中心とした古代の遺物が検出されており、廃絶時期は当該期と推定される。



第87図 大道遺跡群第36次調査遺構配置図 (1/100)



第88図 36SB005 遺構実測図 (1/80)



第89図 36SD025 土層断面実測図 (1/40)

(4) 出土遺物

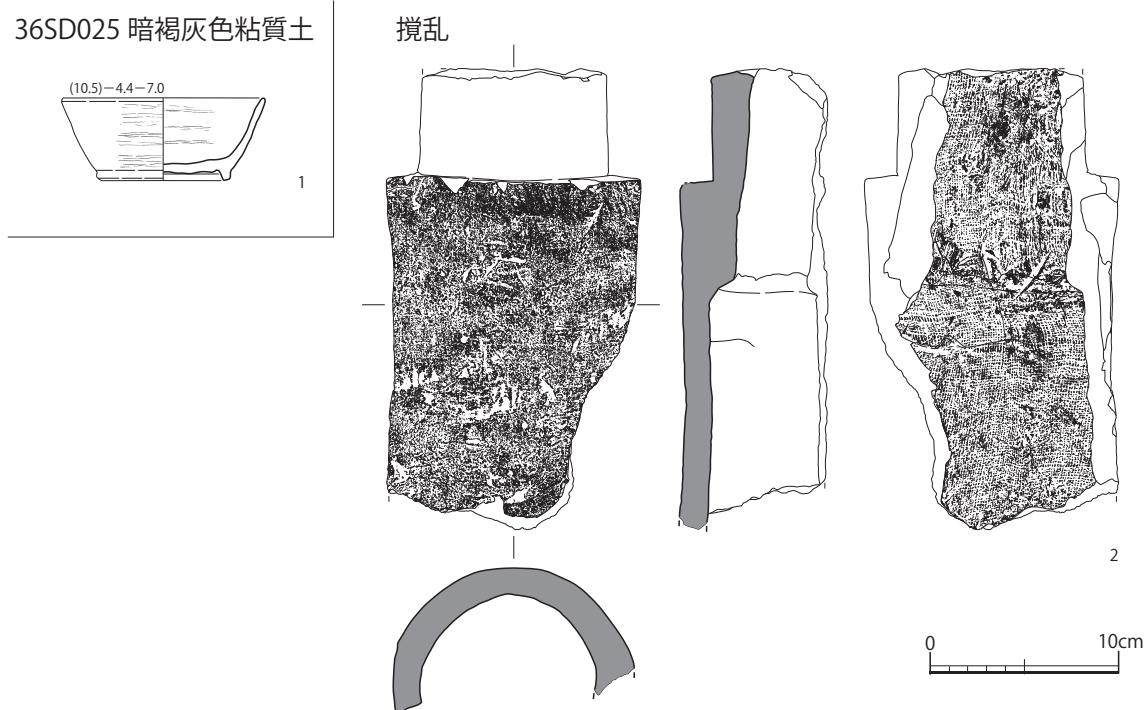
出土遺物の概要

大道遺跡群第36次調査では、位置関係上、周辺調査地と同様の出土遺物の傾向が看取され、遺物の多くは古代の溝跡（36SD025）からである。よって、出土遺物の割合は8世紀末～9世紀前半を所産とするものが多くを占める。また、少数ではあるが中世に該当する国産陶器破片が見られることから、当該時期の遺構も存在していた可能性がある。主な遺構から発見された遺物を概観すると、調査区の北東部に確認される36SD011は第31次調査で検出された31SD020の延長部であり、18世紀代以降を中心とする肥前陶磁器や福岡産の擂鉢等が出土している。調査区の中央付近にある掘立柱建物は構成する柱穴から国産磁器稜花皿が認められることから、近世期に位置づけられる。また、ピットなどからは古式土師器や土師器が出土しているが、いずれも破片資料であることから図示していない。

各遺構出土遺物については、限定的ではあるが遺構一覧表に掲載しているので参照していただきたい。

出土遺物（第90図）

1は36SD025から出土した土師器坏cである。底部と体部の境に断面四角形を呈す高台が付けられる。体部中位で器壁は薄くなり、口縁部は先細り気味に尖る。体部内外面には横方向のミガキが施され、胎土も比較的精製土を使用しており、丁寧な作りである。8世紀末～9世紀前半に位置づけられる資料である。2は古代の所産の丸瓦である。攪乱坑からの出土であるが、遺跡の性格を述べる上で貴重な資料であることから図示している。凹面には布目を観察することができ、凸面は丁寧なナデが施される。側面はヘラ切り後ナデで仕上げられる。



第90図 第36次調査出土遺物実測図 (1/4)

第6節 大道遺跡群第37次調査

(1) はじめに

第37次調査区は第31次調査区の市道を挟み南側に位置し、区画整理が始まる以前は、JR九州の社宅が建てられていたエリアである。そのため、調査区内にはコンクリート製の基礎や規模の大きい搅乱坑が認められた。JR九州の社宅が移転し宿舎が解体された後は、丁寧に整地が行われ、小さな区画ながらも地区の方々が利用できる広場として活用されていた。

今回、複合文化交流施設「ホルトホール大分」の建設工事開始が喫緊に迫り、当調査地点が建設予定地内に該当することから、事前に発掘調査を行った。敷地内は前述の通り社宅が建っていたことから、社宅基礎等で遺跡の大部分が残っていないことが想定されたため、建物が配されていない場所に調査地点を絞り実施している。調査では、第28次調査から延長すると考えられる南北溝（SD001）やピット群が検出されている。出土遺物は近世期が主体であるが、ピットから古代の遺物も少数ながら出土していることから、当該時期の遺構が本地点にも展開していることが推定される。遺構密度は全体的に低く、特に調査区南側は希薄である。

調査面積は約345m²を測り、個別図面及び遺構全体図作成に伴う空中写真測量の撮影作業を終えた後、埋め戻しを行い、第34・36次調査を含め平成22年3月16日に調査を終了した。

(2) 基本層序

先述のとおり調査区には、社宅が存在していたことから建物基礎等が認められたが、調査区北側については建物が及んでいなかったため、調査区内の基本土層を観察することができた。

グランドとして使用されていた整地層の下位には厚さ約0.3～0.7mの砂利及び建物解体層が表出する。これらの層を除去すると、周辺の状況と同様近代～近世段階に比定される耕作土層が確認される。耕作土層を掘り除くと黄灰褐色シルト質土が認められ、遺構は本土層から検出されることから黄灰褐色シルト質土を遺構検出面とし、調査を実施した。検出標高はおおむね5.0mであり、周辺調査区とほぼ同様であった。

(3) 遺構

溝跡 (SD)

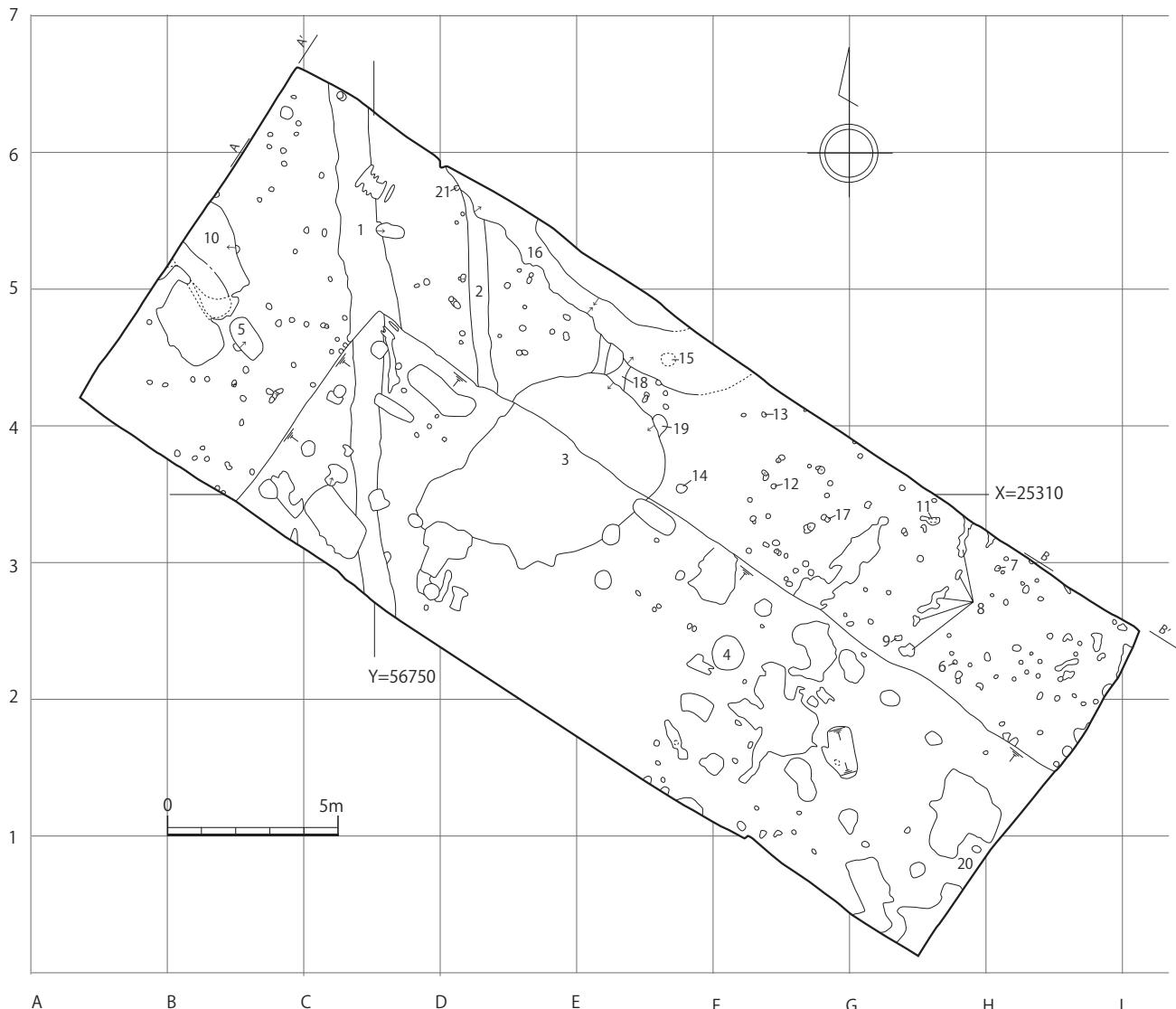
37SD001（第91図）

調査区西側、C3～6グリッドにかけて検出した南北溝である。検出長約15m、最大幅約1.0m、深さ約0.2～0.3mを測り、断面形状は緩やかな逆台形を呈する。埋土は、ほぼ黒茶褐色の单一土層であり、水流痕跡は認められない。溝底面は若干の起伏が認められるもののフラットな状態である。南北方向とも調査区外へと延伸するが、市道を挟んで確認された28-2SD150と同一の溝跡となる可能性が高い。出土遺物は、古墳時代の土師器破片のみである。

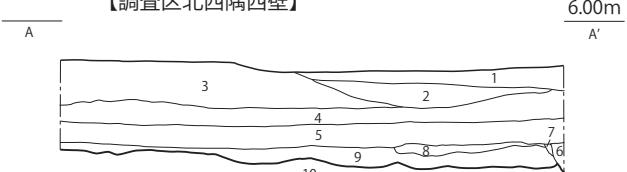
(4) 出土遺物

遺構密度が低いことから、出土遺物も全体的に少量である。遺物構成の主体は近世段階の陶磁器である。表土からであるが、肥前産陶磁器の瓶があり、形状から茶筅形瓶と呼ばれるものに該当し、府内城・城下町跡第19次調査SK360出土資料に類似する。古墳時代・古代の遺物は小破片だが、37SK010から出土した土師器壺cは胎土中に金雲母を多く含んでおり、周辺から出土している土師器と様相が異なる。

今回の報告では、遺物実測図を掲載していないが、遺構一覧表において主な出土遺物を記述していることから、参照していただきたい。

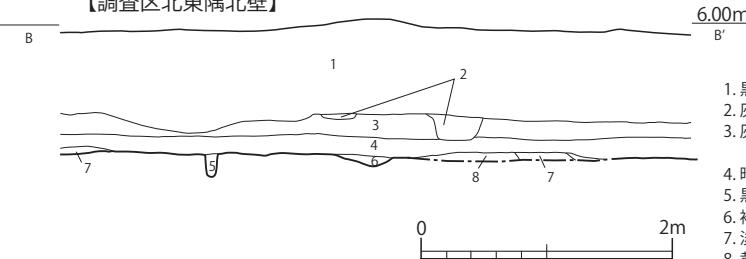


【調査区北西隅西壁】



1. 黒灰色砂礫（攪乱）
2. 暗褐色粘質土（攪乱）
3. 黒灰色砂礫土（攪乱）
4. 灰褐色粘質土（小礫φ0.1cm 大と白色粒が多量に混入 北壁では消失）
5. 灰褐茶色粘質土（小礫φ0.1cm 大か砂利、白色粒が多量に混入 鉄分の固着がわずかに見られる—北壁3層と同じ）
6. 淡灰黄褐色ブロック（黄灰褐色砂質土と灰褐色砂の混土層）
7. 暗褐色土—S010
8. 暗褐灰茶色ブロック（暗褐色土と灰褐色粘質土のブロック）—S010
9. 淡褐灰茶色砂質土（わずかに黒褐色土が混入）—S010
10. 黄灰褐色シルト質土（やや粘質 地山）

【調査区北東隅北壁】



1. 黒褐色礫土（表土 磕混じり）
2. 灰黒褐色礫土（攪乱埋土）
3. 灰褐茶色粘質土（φ0.1cm 大の小礫や砂利 白色粒が多量に混入 鉄分の固着が見られる）
4. 暗褐灰色粘質土（白色粒が混入）
5. 黑褐色土（遺構埋土）
6. 褐灰色粘質土（遺構埋土）
7. 淡灰黄褐色砂（非常に硬質 粗砂と細砂で構成 白色粒・赤褐色粒を多く含む）
8. 黄灰褐シルト質土（やや粘質 地山）

第91図 大道遺跡群第37次調査遺構配置図(1/200)・調査区壁土層図(1/60)

第14表 大道遺跡群第36次調査遺構台帳

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
1		溝状遺構	土師器壺・高坏	1→5	古墳時代?	C4
2		ピット	土師器破片			C4
3		ピット	土師器壺×壺破片			B4
4		溜状遺構	土師器壺×壺・壺口縁			C5
5	SB005	掘立柱建物跡	國産磁器模花皿	5→6	近世後半期	C4
6		溝状遺構	土師器破片		近世?	C6
7		ピット	土師器坏d		古代	D6
8		土坑?	國産陶器壺(中世) 黒色土器A類椀 土師器坏d			C6
9		ピット	平瓦(近世) タイル		現代	C6
10		ピット	土師器破片	10→17		C5
11		溝状遺構	陶胎染付碗 國産陶器擂鉢(福岡) 関西系陶器碗		18世紀以降	E6
12		溜状遺構	土師器破片			C4
13		ピット	土師器破片			B4
14		ピット	古式土師器鉢			C5
15						
16		ピット	土師器破片			C7
17		ピット	土師器破片			C5
18		ピット	土師器高坏			D5
19		溜状遺構	土師器破片			C5
20						
21		溜状遺構	土師器破片			C6
22			土師器壺口			C5
23		ピット	土師器壺×壺底部			D6
24		ピット?	土師器破片			C6
25	SD025	溝状遺構	土師器坏c・坏a・短頸壺 須恵器坏c・蓋c・蓋4×3 丸瓦・平瓦 玉砂利	25→1+5+7+8+16	8世紀末~9世紀前半	D6
26		ピット	弥生土器壺破片	26→25		D7
27		ピット	弥生土器破片			C6
28		ピット	土師器(古墳)破片			C6
29		ピット	弥生土器壺底	29→4		C5

第15表 大道遺跡群第37次調査遺構台帳

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係	時期	地区番
1	SD001	溝状遺構	土師器破片		古墳時代?	G7
2	SD002	溝状遺構	古銭(寛永通宝)	2→16	17世紀後半以降	F6
3		カクラン×大型土坑	陶胎染付碗 関西系陶器碗 青磁染付碗 平瓦(近世)	18,19→3	近世以降	E6
4		土坑	土管		現代	D5
5		土坑	土師器破片			F8
6		ピット	土師器破片			D3
7		ピット	土師器破片			D2
8		ピット群	土師器破片			D3
9		ピット	土師器破片			D3
10		カクラン?	土師器坏c			F9
11		ピット	土師器破片			E3
12		ピット	古式土師器壺(在地)			E4
13		ピット	土師器破片			F4
14		ピット	土師器破片			E5
15		ピット(S16内)	肥前磁器皿(手塩皿)	15→16	近世以降	F5
16		溝状遺構	初期伊万里皿・肥前筒形碗・蓋・花瓶・菊皿 備前擂鉢(中世) 須恵質土器壺 龍泉窯系青磁皿 青磁破片(器種不明)	2,15,18→16	19世紀代?	F6
17		ピット	土師器破片			E4
18		溝状遺構?	陶胎染付碗	18→3,15	18世紀後半以降	F5
19		土坑?	陶胎染付碗	19→3	18世紀後半以降	F5
20		ピット	土師器鉢×坏(古墳)		古墳時代?	B3
21		ピット				G6

第16表 大道遺跡群第21次調査遺物観察表1

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第13図	1	SD001 2層	001	国産陶器	皿	-	2.3+α	(5.6)	-	灰褐色	(釉)灰緑色	施釉・目跡	施釉・回転ヘラケスリ	(底部)墨書
第13図	2	SD001 2層	002	石製品	硯	5.0+α	4.7	1.2	-	-	-	-	-	(裏面)線刻
第13図	4	SK020 1層	020	弥生土器	高环	26.0	19.6	15.6	-	角閃石・長石・石英・金雲母・赤色粒子・白色粒子	(内)橙色～淡黄緑色 (外)橙色～淡黄緑色	ミガキ・ケズリ?・工具ナデ・ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	搬入品? 赤色塗彩 透かし5箇所
第13図	5	SK020 1層	004	弥生土器	高环	(29.6)	8.9+α	-	-	長石・石英・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)橙色	ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・指オサエ・ ハケ目・ハケ目後ナデ	赤色塗彩 (内)黒斑
第13図	6	SK020 1層	010	弥生土器	鉢	9.5	7.6	4.1	-	長石・石英・黒色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・工具ナデ・ 工具ナデ後ナデ	ヨコナデ・工具ナデ・ 後ナデ・ナデ・指オサエ	(外)黒斑
第13図	7	SK020 1層	009	弥生土器	鉢	(14.4)	8.6	(4.8)	-	長石・石英・雲母・角閃石	(内)淡橙茶色 (外)橙茶色～淡橙茶色	ヨコナデ・工具ナデ・ 工具ナデ後ヘラミガキ	ヨコナデ・工具ナデ・ 後ミガキ・ヨコナデ・ ナデ・指オサエ	赤色塗彩 (内外)黒斑
第13図	8	SK020 1層	001	弥生土器	台付鉢	-	10.0+α	5.7	-	長石・石英・赤褐色粒子・長石・灰色粒子	(内)淡橙色～橙色 (外)淡橙色～橙色	摩滅の為不明	摩滅の為不明・ナデ	搬入品 突堤2条 貼付文3本1組5箇所
第13図	9	SK020 1層	019	弥生土器	台付鉢	18.6	15.2	10.2	-	角閃石・石英・赤褐色粒子・長石・灰色粒子	(内)淡灰黄色 (外)淡灰黄色	ナデ・指オサエ・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ケズリ後 ナデ・ミガキ・ヨコナデ・ ナデ・指オサエ	黒斑
第13図	10	SK020 1層	007	弥生土器	壺	(18.5)	17.9+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・灰色粒子・白色粒子	(内)淡灰黄色 (外)淡黄緑色	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後 ナデ・ナデ・指オサエ	(外)スス付着
第13図	11	SK020 1層	021	弥生土器	壺	14.8	14.1	4.0	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子・白色粒子	(内)にぶい黄緑色 (外)にぶい黄緑色	ヨコナデ・指オサエ・ ナデ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目後 ナデ・指オサエ	穿孔2個1組2箇所 (内外)黒斑
第13図	12	SK020 1層	005	弥生土器	壺	(12.9)	18.5	4.1	-	長石・石英・角閃石・雲母	(内)灰黄色 (外)淡黄緑色～赤褐色	ミガキ(不明瞭)・ナデ・指オサエ・ケズリ 後ナデ	ヘラミガキ・ハケ目 の痕跡	赤色塗彩 穿孔2個1組2箇所 (外)スス付着
第13図	13	SK020 1層	030	弥生土器	壺	-	10.2+α	3.8	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)灰黄色 (外)灰黄色	ハケ目・指オサエ	ナデ・モ滅の為不明	赤色塗彩・黒斑
第13図	14	SK020 1層	006	弥生土器	壺	-	18.7+α	4.9	-	白色粒子・角閃石	(内)にぶい黄緑色 (外)にぶい黄緑色	ナデ・指オサエ	ミガキ・モ滅の為不 明	
第13図	15	SK020 1層	034	弥生土器	壺	-	11.5+α	(4.7)	-	角閃石・雲母・長石・石英・赤色粒子	(外)橙茶色～灰黄色 (内)橙茶色	ナデ・指オサエ	ハケ目後ナデ・ナデ	(外)黒斑・スス付着 底部レンズ状
第14図	16	SK020 1層	002	弥生土器	壺	-	25.6+α	5.4	1.1	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子・花崗岩・黒曜石	(内)淡橙茶色 (外)にぶい橙色	工具ナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後 ナデ・指オサエ・ケズ リ後ナデ	胸部穿孔
第14図	17	SK020 1層	016	弥生土器	壺	15.2	35.0	4.9	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・工具ナデ 後ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・指オサエ・ ハケ目・ハケ目後ナデ ナデ	赤色塗彩? (内外)黒斑
第14図	18	SK020 1層	033	弥生土器	壺	-	14.4+α	5.8	-	雲母・長石・石英・角閃石・白色粒子	(内)灰茶色 (外)灰茶色～暗紅茶色	ハケ目後ナデ・指オサエ・工具ナデ	ケズリ後ナデ・ナデ	(外)黒斑・スス付着
第14図	19	SK020 1層	017	弥生土器	壺	10.0	24.0	4.8	-	長石・角閃石・石英・白色粒子・黒色粒子	(内)褐灰色 (外)淡黄緑色	ヨコナデ・ナデ・ハケ 目・指オサエ・ハケ 目後ナデ	ハケ目後ヘラミガ キ・ミガキ・指オサ エ・摩耗の為不明	赤色塗彩・黒斑 頸部突帯一条
第14図	20	SK020 1層	025	弥生土器	複合口縁壺	16.1	42.8	(9.1)	-	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい黄緑色～灰黄色	ヨコナデ・ケズリ・ 指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目自 小・ケ目後ナデ・ナデ	搬入? 沈線・波状文 貼付3箇所・穿孔?
第15図	21	SK020 1層	024	弥生土器	複合口縁壺	(17.0)	53.8	5.4	-	長石・角閃石・灰 色粒子	(内)橙色 (外)明黄褐色	ヨコナデ・ナデ・ハ ケ目・モ滅の為不明	ヨコナデ・縦ハケ目 後ナデ・ハケ目・ナ デ	赤色塗彩 頸部突帶・胸部3条の貼付突 帶・貼付浮文1箇所 櫛描波状文
第15図	22	SK020 1層	023	弥生土器	複合口縁壺	17.9	58.4	7.6	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄緑色 (外)にぶい黄緑色	ヨコナデ・ハケ目・指 オサエ・ナデ・不整 ケ目後ナデ	ヨコナデ・ハケ目自 小・不整ケ目後ナデ 貼付突帶 貼付浮文 被熱痕・黒斑 あばた状剥離	
第16図	23	SK020 1層	022	弥生土器	甕	(13.4)	18.7	3.0	-	長石・角閃石・赤 色粒子・白色粒子	(内)にぶい橙色 (外)淡黄緑色	ヨコナデ・ナデ・工具 ナデ?(ヘラケズリ)? 後ナデ	ヨコナデ・ハケ目自 小・ヨコナデ・ハケ目・指 オサエ	ヨコナデ・ハケ目自 小・スス付着
第16図	24	SK020 1層	018	弥生土器	甕	15.0	20.9	3.1	-	長石・石英・白色 粒子・角閃石・雲 母・赤色粒子	(内)橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ハケ目後 ナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目・ナ デ・指オサエ	(外)スス付着 (内外)黒斑
第16図	25	SK020 1層	013	弥生土器	甕	(16.9)	21.8	(4.6)	-	長石・石英・白色 粒子・赤色粒子・黑 色粒子	(内)にぶい黄緑色 (外)橙色～にぶい橙色	ヨコナデ・工具ナデ・ ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目自 小・ナデ・指オサエ	(外)スス付着
第16図	26	SK020 1層	003	弥生土器	甕	16.5	22.2	4.7	-	長石・石英・雲母	(内)灰黄色 (外)橙色～にぶい黄 緑色	ハケ目後ナデ・ナ デ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目自 小・ハケ目後工具ナ デ・工具ナデ・指オサ エ・ナデ	(外)黒斑
第16図	27	SK020 1層	008	弥生土器	甕	21.1	30.2	2.5	-	長石・石英・黒色 粒子	(内)にぶい黄緑色 (外)明赤褐色	ヨコナデ・ハケ目・ナ デ・指オサエ・工具ナ デ・工具ナデ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目自 小・ハケ目後工具ナ デ・工具ナデ・指オサ エ・ナデ	(外)スス付着
第16図	28	SK020 1層	027	弥生土器	甕	(29.0)	10.1+α	-	-	石英・長石・角閃 石・金雲母・赤色 粒子	(内)橙色～にぶい黄 緑色 (外)橙色～にぶい橙 色	ヨコナデ・工具ナ デ・工具ナデ	ヨコナデ・ハケ目自 小・ヨコナデ・工具ナ デ	R027-028-029同一個体 上復元 (外)スス付着・黒斑
第16図	28	SK020 1層	028	弥生土器	甕	-	15.4+α	-	-	雲母・長石・石英・角 閃石	(内)橙茶色～灰黃 色 (内)橙茶色	ナデ・ケズリ	ナデ	R027-028-029同一個体 (外)スス付着
第16図	28	SK020 1層	029	弥生土器	甕	-	7.5+α	4.2	-	雲母・長石・石英・角 閃石	(内)橙茶色 (外)橙茶色～灰黃 色	工具ナデ後ナデ・ナ デ・指オサエ	工具ナデ後ナデ・ナ デ・指オサエ	R027-028-029同一個体 (外)黒斑
第16図	29	SK020 1層	011	弥生土器	甕	21.6	33.3	6.3	-	長石・石英・赤色 粒子	(内)にぶい黄緑色 (外)灰黃色～明赤褐色	ヨコナデ・指オサエ ナデ・ハケ目後ナデ 工具ナデの痕跡	ヨコナデ・ハケ目自 小・ヨコナデ・ハケ目・指 オサエ	被熱痕 (内外)スス付着

第17表 大道遺跡群第21次調査遺物観察表2

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm)()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第16図	30	SK020 1層	012	弥生土器	壺	23.7	37.0	6.5	-	長石・石英・赤色粒子	(内)灰黄色 (外)明赤褐色 ～にぶい黄橙色	ヨコナデ・指オサエ・ ナデ・工具ナデ後ナデ・ ハケ目・ハケ目後ナデ・ナデ	ヨコナデ・指オサエ・ ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目・ハケ目後ナデ・ナデ	(内外)スス付着
第17図	31	SK020 1層	026	弥生土器	壺	26.6	37.5	5.0	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色～にぶい橙色 (外)橙色～にぶい橙色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ 継方向のケズリ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・継方向の ハケ目・指オサエ・ハケ目後ナデ・ナデ	(内外)スス付着・黒斑
第17図	32	SK020 1層	015	弥生土器	壺	(23.7)	33.4	5.5	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)灰黄色～にぶい橙色 (外)灰黄色～橙色	ナデ・指オサエ・ケズリ・工具ナデ後ナデ・指オサエ	継方向の工具ナデ後ナデ・ ヨコナデ・ナデ	破裂痕 (外)黒斑
第17図	33	SK020 1層	014	弥生土器	壺	(29.1)	44.6	6.8	-	長石・石英・赤色粒子	(内)淡橙茶色 (外)橙褐色	ヨコナデ・指オサエ・ ナデ	ヨコナデ・指オサエ・ 強いヨコナデ・工具ナデ・ヘラケズリ後ナデ・ナデ	(内外)スス付着・黒斑
第17図	34	SK020 1層	035	弥生土器	壺	(19.9)	12.5+α	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)黄色～橙色～褐色	ヨコナデ後ナデ・指オサエ・ハケ目・工具ナデ後ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ後ヨコナデ・指オサエ・ハケ目後ナデ・ケズリ部分的にナデ	(内外)スス付着・黒斑
第17図	35	SK020 1層	031	弥生土器	壺?鉢?	-	12.0+α	6.4	-	長石・白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)淡灰黄色	ナデ	ハケ後ナデ・指オサエ・ナデ	(外)スス付着
第17図	36	SK020 1層	032	弥生土器	壺	-	8.1+α	(5.1)	-	角閃石・長石・灰・赤色粒子・白色粒子	(内)茶褐色 (外)にぶい橙色	ヘラケズリ	ハケ目後ナデ・工具ナデ・ナデ・指オサエ	(外)赤色塗彩?
第18図	1	SK040 2層	001	弥生土器	台付鉢	18.9	20.2	(12.9)	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ナデ・工具ナデ・指オサエ	ヨコナデ・工具ナデ・指オサエ	鉢部と脚部接合面に棒状工具で突いた痕跡
第18図	2	SK040 7層	001	弥生土器	壺	-	4.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・黒色粒子・赤色粒子	(内)にぶい灰褐色 (外)にぶい灰褐色	ナデ	ナデ・ヨコナデ	突帯貼付
第18図	3	SK040 7層	002	弥生土器	壺or壺	-	4.3+α	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	工具ナデ	工具ナデ・ナデ	(外)黒斑
第18図	4	SK050	001	弥生土器	鉢	-	7.5+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	摩滅の為不明	摩滅の為不明	(外)黒斑
第18図	5	SK050 1層	001	弥生土器	複合口縁壺	16.7	9.7+α	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・角閃石	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ナデ・工具ナデ・ハケ目	波状文・赤色塗彩 スス付着
第18図	6	SK050 1層	002	弥生土器	壺	(14.9)	22.0+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	工具ナデ・ナデ	工具ナデ・指オサエ・ナデ	(外)黒斑
第18図	7	SK051	001	弥生土器	壺	-	5.0+α	-	-	長石・石英	(内)橙茶色 (外)橙茶色	ハケ目?	ヨコナデ・摩滅の為不明	
第18図	8	SK051 茶褐灰粘質土	001	弥生土器	器台?	-	3.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	波状文
第18図	9	SP008	001	弥生土器	壺	22.1	35.2	5.8	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・雲母	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ハケ目後ナデ・ナデ・指オサエ	(外)黒斑 赤色塗彩
第18図	10	SP028	001	土師質土器	不明製品	-	4.9+α	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・金雲母	(内)明赤褐色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	

第18表 大道遺跡群第34次調査遺物観察表

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm)()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第13図	3	SD001	001	国産陶器	向付	4.7+α	3.8+α	1.7+α	-	白茶色	-	鉄絵による線描・ (銅)緑釉	鉄絵・(銅)緑釉	鐵部焼

第19表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表1

掲団番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考	
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面		
第46団	1	28-1SH020	001	古式土師器	皿?	-	1.7+α	-	-	白色粒子・雲母・角閃石・赤色粒子	(外)灰黄色 (内)茶黑色	ナデ?	摩滅の為不明	(内)黒斑	
第46団	2	28-1SH050	010	古式土師器	高环	-	5.3+α	-	-	白色粒子・角閃石・雲母	(内)にぶい橙色~橙色 (外)にぶい橙色	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目後ナデ	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目後ナデ	(外)黒斑	
第46団	3	28-1SH050	013	古式土師器	高环	-	5.4+α	-	-	長石・石英・金雲母・灰色粒子・赤色粒子	(内)にぶい黄橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ハケ目・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ		
第46団	4	28-1SH050	030	古式土師器	高环	-	3.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母	(内)にぶい橙色 (外)赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・瓶?	脚付鉢?	
第46団	5	28-1SH050	012	古式土師器	高环	(20.3)	14.3	(13.4)	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)淡黄橙色 (外)淡黄橙色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	(外)黒斑	
第46団	6	28-1SH050	008	古式土師器	高环	(18.4)	7.2+α	-	-	花崗岩・長石・石英・角閃石・赤色粒子・雲母	(内)橙色 (外)にぶい橙色	摩滅の為不明	摩滅の為不明		
第46団	7	28-1SH050	002	古式土師器	高环	(21.9)	6.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後粗いナデ・ナデ		
第46団	8	28-1SH050	009	古式土師器	高环	(19.1)	4.2+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・横方向のハケ目後ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	(外)黒斑	
第46団	9	28-1SH050	028	古式土師器	高环	-	4.7+α	(12.8)	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・横方向のハケ目後ナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	(外)黒斑 (内)シボリ痕	
第46団	10	28-1SH050	027	古式土師器	高环	-	7.8+α	(12.4)	-	長石・石英・角閃石・砂岩粒・雲母	(内)橙茶色 (外)にぶい橙色	ナデ・ヨコナデ・ケズリ・ハケ目	ヨコナデ・縦方向のハケ目	在地系	
第46団	11	28-1SH050	026	古式土師器	高环	-	6.4+α	(12.7)	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい黄橙色 ~明赤褐色 (外)明赤褐色	ナデ?・ハケ目(摩耗)	摩滅の為不明		
第46団	12	28-1SH050	004	古式土師器	高环	-	8.4+α	(13.6)	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色~灰黄色 (外)茶色	ケズリ・ハケ目・ナデ工	ナデ・ハケ目・指オサ工	(内外)黒斑	
第46団	13	28-1SH050	029	古式土師器	高环	-	8.3+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・赤褐色粒子・雲母・角閃石	(内)橙色 (外)橙色	摩滅の為不明・ナデ工(摩滅)	摩滅の為不明・ミカナデ(摩滅)		
第46団	14	28-1SH050	025	古式土師器	高环	-	6.6+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・赤色粒子・雲母・角閃石・角閃石	(内)灰褐色~灰橙色 (外)茶褐色~橙色	ナデ・ケズリ・モリの為不明	モリの為不明	布留式系	
第46団	15	28-1SH050	024	古式土師器	高环	-	7.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナデ・ハラクスリ・摩滅の為不明	摩滅の為不明		
第46団	16	28-1SH050	022	古式土師器	鉢	(10.3)	3.8	4.2	-	白色粒子・黑色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)淡黄色~橙色	ヨコナデ・ナデ・指オサ工	ヨコナデ・ナデ・指オサ工	(外)黒斑	
第46団	17	28-1SH050	001	古式土師器	鉢	10.3	5.7	5.0	-	白色粒子・赤色粒子・雲母・角閃石	(内)淡黄橙色 (外)淡黄橙色	ナデ・指オサ工	ナデ・ハケ目・指オサ工	P-2 (内外)黒斑	
第46団	18	28-1SH050	021	古式土師器	壺	(7.2)	3.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子・黒色粒子	(内)茶褐色 (外)茶褐色	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ		
第46団	19	28-1SH050	018	古式土師器	壺	-	3.2+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・雲母・角閃石	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目		
第46団	20	28-1SH050	015	古式土師器	小型丸底壺	-	2.7+α	-	-	白色粒子・雲母・角閃石	(内)茶黒色 (外)灰褐色	ナデ・指オサ工	ナデ		
第46団	21	28-1SH050	003	古式土師器	小型丸底壺	11.9	10.2	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子・黒色粒子	(内)茶色 (外)茶色	ハケ目・工具ナデ後ナデ	ハケ目・ハケ目後ナデ	(内)黒斑	
第46団	22	28-1SH050	014	古式土師器	小型丸底壺	(10.4)	8.4+α	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)灰白色 (外)褐色	モリの為不明(ナデ工)	モリの為不明(一部にハケ目)		
第46団	23	28-1SH050	011	古式土師器	壺	-	4.0+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・縦方向のハケ目	ヨコナデ・ハケ目後ナデ		
第46団	24	28-1SH050	005	古式土師器	複合口縁壺	(14.2)	4.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)黄橙色 (外)黄橙色	ハケ目後ヨコナデ・斜方向のハケ目後ナデ	ハケ目後ヨコナデ		
第46団	25	28-1SH050	020	古式土師器	甕×鉢	-	4.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色	ヨコナデ・横方向のハケ目後ナデ	ヨコナデ・横方向のハケ目後ナデ	刻目突帶	
第46団	26	28-1SH050	017	古式土師器	甕	-	4.3+α	-	-	長石・角閃石・赤色粒子	(内)黄褐色 (外)黄褐色	摩滅の為不明	摩滅の為不明(一部にハケ目)		
第46団	27	28-1SH050	016	古式土師器	甕	-	4.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)黄褐色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ		
第46団	28	28-1SH050	019	古式土師器	甕	(18.0)	5.7+α	-	-	白色粒子・長石・石英・角閃石	(内)明褐色 (外)暗褐色	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ナデ(一部ケズリ後ナデ)	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ		
第46団	29	28-1SH050	023	ミニチュア土器	鉢	(5.0)	2.6	-	-	白色粒子・黑色粒子・雲母・角閃石	(内)灰黄色~茶褐色 (外)黄褐色	ナデ・指オサ工	ナデ・指オサ工	(外)黒斑	
第46団	30	28-1SH050	032	石製品	石錐?	8.2	4.6	1.0	51.8g	-	-	-	-	-	結晶片岩
第47団	1	28-1SH050	006	石製品	磨石	14.4	6.0	3.2	455.0g	-	-	-	-	-	
第47団	2	28-1SH050	007	石製品	磨石	11.9+α	7.8	4.1	660.0g	-	-	-	-	-	
第47団	3	28-1SH050	031	石製品	磨石×砥石	14.7	6.0	5.0	595.0g	-	-	-	-	-	
第47団	4	28-1SH059	001	土師器	椀B	14.2	5.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)淡橙色 (外)灰白色~淡橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・横方向のハケ目(摩耗)	P-1 (外)黒斑 口縁一部赤色塗彩?	
第47団	5	28-1SH059	002	土師器	椀B	(12.5)	4.8	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・雲母	(内)浅黄橙色 (外)橙色	ヨコナデ・工具ナデ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ケズリ	P-3 (外)二次被熱	
第48団	6	28-1SE010	010	古式土師器	鉢	9.8	2.9	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)淡黄橙色 (外)灰黄色	ヨコナデ・ミガキ?	ヨコナデ・ヘラケズリミガキ	赤色塗彩? (外)スス付着 (内外)黒斑	
第48団	7	28-1SE010	012	古式土師器	鉢	(13.6)	4.9	-	-	白色粒子・長石・角閃石	(内)にぶい黄褐色 ~黄灰色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	(内)スス付着・黒斑	
第48団	8	28-1SE010	011	古式土師器	椀	-	6.0+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・工具ナデ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	底部ナデ消し	
第48団	9	28-1SE010	013	古式土師器	小型丸底壺	-	6.2+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)灰黄色~淡灰黄色 (外)灰黄色	ヨコナデ・工具ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ		

第20表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表2

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外側	
第48図	10	28-ISE010	014	古式土師器	小型丸底壺	-	5.7+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)淡橙色～黄橙色 (外)淡橙色～黄橙色	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ナデ・工具ナデ・指オサエ	
第48図	11	28-ISE010	015	古式土師器	小壺	-	8.7+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ケズリ・ナデ	斜方向のハケ目後ナデ・指オサエ	(外)黒斑 (内)半分黒変
第48図	12	28-ISE010	017	古式土師器	広口壺	(20.3)	9.8+α	-	-	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子・雲母	(内)灰黄色～淡橙茶色 (外)灰黄色	ハケ目・ハケ目後ナデ・ナデ・工具ナデ・ヘラケズリ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	(内外)スヌ付着 (外)赤色塗彩
第48図	13	28-ISE010	026	古式土師器	複合口縁壺	(21.8)	9.4+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色～橙茶色 (外)にぶい橙色	ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	(外)口縁部沈線・波状文
第48図	14	28-ISE010	016	古式土師器	長頸壺	-	10.3+α	-	-	白色粒・角閃石・赤色粒子	(内)黄灰色～橙色 (外)橙色	ハケ目・ナデ・ハケ目後ナデ	継方向のハケ目後横方向のハラミガキか工具ナデ・ハケ目後ナデ	赤色塗彩
第48図	15	28-ISE010	031	古式土師器	壺	-	5.6+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・角閃石	(内)橙茶色 (外)橙色	ハケ目・ナデ・ハケ目後ナデ・ハケ目	ハケ目	貼付突帶1条
第49図	16	28-ISE010	035	古式土師器	壺	16.8	29.5	-	-	角閃石・長石・金雲母・赤色粒子・白色粒子	(内)にぶい橙色～褐灰色 (外)淡黄橙色～橙色	ヨコナデ・継方向のハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・指オサエ・ハケ目・ハケ目後ナデ	P-2 底部穿孔 (外)黒斑
第49図	17	28-ISE010	032	古式土師器	壺	17.2	33.5	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)灰黄色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ後ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目後ナデ	(内外)スヌ付着・黒斑
第49図	18	28-ISE010	033	古式土師器	複合口縁壺	18.0	35.4+α	-	-	長石・石英・金雲母・赤色粒子・灰白色粒子	(内)橙色～灰褐色 (外)橙色～にぶい橙色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ケズリ後粗い継ミガキ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ケズリ後粗い継ミガキ・ナデ・指オサエ	(内外)黒斑・口縁付近熱による変形状の剥離 (外)波状文・頸部対角状に方形の透かし2箇所
第49図	19	28-ISE010	037	古式土師器	壺	-	36.2+α	-	-	白色粒子・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)茶褐色 (外)にぶい橙色	ハケ目・指オサエ・ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ・指オサエ	(内)スヌ付着 (外)黒斑
第50図	20	28-ISE010	018	古式土師器	甕?	(14.0)	6.6+α	-	-	長石・石英・白色粒子・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙茶色 (外)橙茶色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目後ナデ	(外)黒斑
第50図	21	28-ISE010	024	古式土師器	甕	(14.0)	6.8+α	-	-	長石・石英・雲母	(内)灰黄色 (外)橙色	ヨコナデ・横方向のハケ目・ナデ・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・継方向のハケ目	(内)黒斑
第50図	22	28-ISE010	022	古式土師器	甕	15.4	11.7+α	-	-	石英・白色粒子・雲母・角閃石	(内)黄褐色 (外)黄褐色	ハケ目・ケズリ・ナデ・ハケ目後祖ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目後ナデ	(外)黒斑 (内)スヌ付着
第50図	23	28-ISE010	029	古式土師器	甕	(14.0)	17.7+α	-	-	長石・石英・赤色粒子・雲母・角閃石	(内)暗橙茶色 (外)橙色	ヨコナデ・ケズリ後ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	布留式系 (外)黒斑
第50図	24	28-ISE010	003	古式土師器	甕	14.7	21.9+α	-	-	白色粒子・角閃石・金雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・指オサエ・工具ナデ・ケズリ後工具ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	P-6 (内外)スヌ付着
第50図	25	28-ISE010	034	古式土師器	甕	15.2	22.1	-	-	長石・角閃石・赤色粒子・灰色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色～にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ・ナデ・指オサエ・ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ・指オサエ・ハケ目後ナデ	(外)スヌ付着・黒斑
第50図	26	28-ISE010	001	古式土師器	甕	17.2	22.1	-	-	長石・白色粒子・角閃石・金雲母	(内)黄褐色 (外)淡黄褐色～灰黄色	ヨコナデ・ヘラケズリ・ケズリ後指オサエ	ヨコナデ・横斜方向のハケ目後ヨコナデ・ハケ目	P-7-6 (外)スヌ付着 布留式系
第50図	27	28-ISE010	002	古式土師器	甕	16.5	23.7	-	-	白色粒子・角閃石・雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・ヘラケズリ後ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	P-5-6-7 (内外)スヌ付着
第50図	28	28-ISE010	004	古式土師器	甕	17.6	25.0	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)茶褐色 (外)茶褐色	ヨコナデ・ケズリ後ナデ・指オサエ	ヨコナデ・スヌ付着・黒斑	(外)スヌ付着
第50図	29	28-ISE010	028	古式土師器	甕	(16.4)	18.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・雲母・金雲母	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ・ケズリ後工具ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	布留式系　刻目？ (外)スヌ付着
第50図	30	28-ISE010	036	古式土師器	甕	18.5	29.7+α	-	-	白色粒子・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ナデ・ケズリ後工具ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	(内外)スヌ付着
第51図	31	28-ISE010	008	古式土師器	甕	(16.8)	9.2+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ・指オサエ・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・指オサエ・ハケ目後ナデ	布留式系
第51図	32	28-ISE010	027	古式土師器	甕	(17.8)	16.4+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)褐色 (外)赤褐色～茶褐色	ヨコナデ・ハケ目・ハケ目後ナデ・ヘラケズリ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目後ナデ	
第51図	33	28-ISE010	005	古式土師器	甕	19.2	11.4+α	-	1.1	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)淡黄褐色～橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	穿孔あり (外)スヌ付着
第51図	34	28-ISE010	006	古式土師器	甕	(21.2)	10.3+α	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子・黒色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・ケズリ後ハケ目後ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	(内外)スヌ付着
第51図	35	28-ISE010	030	古式土師器	甕	(20.0)	15.0+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・角閃石・金雲母	(内)淡橙色 (外)淡橙色	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	(外)スヌ付着
第51図	36	28-ISE010	009	古式土師器	甕	(21.1)	11.6+α	-	-	白色粒子・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)褐色～赤褐色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	口縁部スヌ付着
第51図	37	28-ISE010	007	古式土師器	甕	(21.8)	9.8+α	-	-	白色粒子・角閃石・金雲母	(内)黄褐色～灰黄色 (外)黄褐色～灰黄色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ヘラケズリ後ナデ	ハケ目後ヨコナデ・継方向のハケ目	(外)スヌ付着
第51図	38	28-ISE010	023	古式土師器	甕	-	3.6+α	-	-	長石・石英・金雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	布留式系　摩滅の為不明
第51図	39	28-ISE010	019	古式土師器	甕	-	4.5+α	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	(内)淡黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ	布留式系 (内)黒斑
第51図	40	28-ISE010	021	古式土師器	甕	-	5.7+α	-	-	長石・石英・赤色粒子	(内)淡橙色 (外)淡橙色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後粗いミガキ・指オサエ	ハケ目後ナデ・ナデ
第51図	41	28-ISE010	025	古式土師器	甕	-	11.5+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)灰白色 (外)灰黄色～灰褐色	ハケ目後ナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	縦方向のハケ目(摩滅)・ハケ目後ナデ
第51図	42	28-ISE010	020	弥生土器	甕	-	3.3+α	(5.2)	-	長石・石英・白粒子・角閃石	(内)黒灰色 (外)黒灰色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	(内外)黒斑

第21表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表3

掲図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考	
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	重量(g)			内面	外面		
第52図	1	28-1SE020	001	古式土師器	高坏	15.9	5.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)明黄褐色 (外)明黄褐色	ヨコナデ・ハケ目後 ナテ後粗いミガキ・ ナデ	ヨコナデ・横方向の ミガキ・強い工具ナ テ後粗いミガキ・指 オサ工	布留式系 (外)黒斑・丁寧な作り	
第52図	2	28-1SE020	004	古式土師器	二重口縁壺	(16.8)	5.4+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)淡黄褐色～橙色 (外)淡黄褐色	ミガキ	ミガキ	外来系 精製品	
第52図	3	28-1SE020	005	古式土師器	甕	(14.0)	2.4+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ		
第52図	4	28-1SE020	003	古式土師器	甕	-	4.0+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子 金雲母	(内)椎色 (外)橙色	ハケ目後ヨコナデ・ ケズリ	ヨコナデ・指オサ工	布留式系	
第52図	5	28-1SE020	006	古式土師器	壺	-	20.6+α	-	-	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	(内)灰黄色 (外)茶色	ナテ・ハケ目・ケズリ	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目	(外)ス付着	
第52図	6	28-1SE020	002	古式土師器	鉢	-	10.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)橙色	横方向のハケ目・ハ ケ目後ミガキ・ミガ キ	摩滅の為不明・ハケ 目・横方向のハケ目	貼付突堤	
第52図	7	28-1SE020	黒灰土	001	石製品	磨石	9.1	8.3	3.4	400.0g	-	-	-	-	
第52図	8	28-2SE165	003	瓦器	椀	-	3.1+α	-	-	金雲母・白色粒子	(内)灰白色 (外)灰色	ミガキ	ミガキ		
第52図	9	28-2SE165	002	黒色土器A類	椀	-	2.3+α	-	-	金雲母・白色粒子	(内)黒色 (外)灰黄色	モ滅の為不明	モ滅の為不明		
第52図	10	28-2SE165	001	黒色土器A類	椀	-	2.1+α	(7.8)	-	金雲母・白色粒子 角閃石・長石・赤色粒子	(内)黒色 (外)にぶい黄褐色	モ滅の為不明	モ滅の為不明		
第52図	11	28-2SE170	010	古式土師器	高坏	-	4.2+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)橙茶色 (外)にぶい黄褐色	ナテ・ケズリ後ナテ	ハケ目後ナテ	透かし3箇所	
第52図	12	28-2SE170	011	古式土師器	高坏	-	2.9+α	-	-	角閃石・長石・赤色粒子 金雲母	(内)橙色 (外)橙色	ナテ・工具ナテ	工具ナテ		
第52図	13	28-2SE170	003	古式土師器	鉢	10.5	7.9	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子 黑色粒子・茶褐色粒子	(内)明黄色～橙色 (外)明黄色	ヨコナデ・工具ナテ・ ナテ・指オサ工	ヨコナデ・ハケ目後・ ヨコナデ・ハケ目・ハ ケ目後ナテ・工具ナ テ	(外)黒斑	
第52図	14	28-2SE170	004	古式土師器	椀×鉢	12.8	5.7	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色～橙 色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・工具ナテ・ 指オサ工	ヨコナデ・ハケ目後 ナテ	(外)赤色塗彩 (内外)黒斑	
第52図	15	28-2SE170	007	古式土師器	二重口縁壺	8.8	9.6	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)橙茶色 (外)茶色	ヨコナデ・ナテ・指 オサ工	ヨコナデ・ナテ・指 オサ工	(外)黒斑	
第52図	16	28-2SE170	006	古式土師器	小形壺?	9.8	10.5	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子 白色粒子・黒色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	モ滅の為不明・ハラ ケズリ後ナテ	ヨコナデ・ハケ目後 ナテ・ナデ	P-4 (外)黒斑	
第52図	17	28-2SE170	001	古式土師器	壺	10.8	13.7+α	-	-	金雲母・角閃石・長石・石英・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・指オサ工・ ハケ目後ナテ	(外)黒斑	
第52図	18	28-2SE170	002	古式土師器	壺×甕	-	9.9+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)茶褐色 (外)にぶい橙色	ナテ・指オサエ・ケズ リ後ナテ	ハケ目後ヨコナデ ハケ目(一部後ナテ)		
第52図	19	28-2SE170	012	古式土師器	甕	16.7	23.6	3.8	-	金雲母・角閃石・長石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ケズリ・工 具ナテ	ヨコナデ・ハケ目後・ (外)ス付着	(外)黒変	
第52図	20	28-2SE170	009	古式土師器	甕	(16.0)	9.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ・ケズリ後 ナテ・ハラケズリ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目	P-10	
第52図	21	28-2SE170	008	古式土師器	甕	-	6.5+α	-	-	角閃石・長石・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目	布留式系	
第52図	22	28-2SE170	005	古式土師器	甕	-	11.6+α	-	-	長石・角閃石・金雲母・赤色粒子 白色粒子	(内)にぶい橙色 (外)黒褐色	ハラケズリ後ナテ・ ハラケズリ後ハケ 目・指オサ工	継斜方向のハケ目	P-9 (内外)ス付着	
第53図	23	28-2SE170	茶黒土	005	古式土師器	器台	-	2.5+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナテ・ハラケ目・指オサ 工・摩滅の為不明	ハラミガキ・摩滅の 為不明	透かし1箇所
第53図	24	28-2SE170	茶黒土	007	古式土師器	高坏	(23.8)	6.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色～にぶい橙色 (外)橙色～にぶい橙色	ハケ目後ミガキ・ハ ラミガキ	ハラミガキ・ハケ目 後ナテ後粗いミガ キ・ナテ後粗いミガ キ	有段式 外来系
第53図	25	28-2SE170	茶黒土	012	古式土師器	高坏	-	7.0+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子 灰色粒子	(内)灰黄色 (外)橙色～にぶい橙色	モ滅の為不明・ハラ ミガキ ?・指オサ工	モ滅の為不明	(内)黒斑
第53図	26	28-2SE170	茶黒土	004	古式土師器	高坏	-	7.1+α	(11.0)	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色 ～灰黄色	ナテ・指オサ工・ハ ケ目後ミガキ・ヨ コナデ	ハラミガキ・ハケ目 後ミガキ・ヨコナデ	円形透かし3箇所
第53図	27	28-2SE170	茶黒土	015	古式土師器	椀×鉢	(18.6)	6.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母	(内)橙色 (外)茶褐色	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目・指オサ工	ヨコナデ・ハケ目自 由 ヨコナデ・ハケ目自 由ナテ・指オサ工	大型
第53図	28	28-2SE170	茶黒土	013	古式土師器	鉢	-	8.6+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・雲母・砂粒	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ナテ・ハケ目後ハラ ミガキ	ナテ・ハケ目後ナテ・ ナテ後粗いハラミガ キ	
第53図	29	28-2SE170	茶黒土	018	古式土師器	鉢?	-	5.9+α	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子 白色粒子	(内)黒褐色 (外)黒褐色	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハラケズリ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ヨコナデ・ 指オサ工	頸部突堤1条
第53図	30	28-2SE170	茶黒土	003	古式土師器	小型丸底壺	(11.4)	7.3+α	-	-	金雲母・長石・石英・角閃石・赤色粒子 粒子	(内)橙色 (外)橙色	ハケ目・ハケ目後ナ テ・ナテ・指オサ工	ハラミガキ・摩耗の 為不明	(外)黒斑
第53図	31	28-2SE170	茶黒土	009	古式土師器	壺	-	11.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤褐色粒子・雲母	(内)橙色～淡橙色 (外)橙色～淡橙色	ハケ目後ナテ・指 オサ工・ハラケズリ ナテ	ハケ目後ヘラミガ キ・ミガキ・ハケ目・ 指オサ工	外来系? (内)黒斑
第53図	32	28-2SE170	茶黒土	002	古式土師器	壺×甕	-	11.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・白 色粒子・金雲母	(内)橙色 (外)橙色	ナテ・ハラミガキ・指 オサ工	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目後ナテ	(外)ス付着

第22表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表4

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第53図	33	28-2SE170 茶黒土	020	古式土師器	壺	-	3.6+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子・灰色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ハケ目	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ	(内)スス付着
第53図	34	28-2SE170 茶黒土	008	古式土師器	壺	16.2	6.2+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	(内)橙色～褐色 (外)橙色～褐色	ハケ後ヨコナデ・横方向のハケ目・指才サエ・ナテ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・縦方向の ハケ目・ハケ後ヘラミガキ	
第53図	35	28-2SE170 茶黒土	017	古式土師器	甕	(13.6)	5.4+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	(内)橙色 (外)橙色～にぶい黄橙色	ハケ目後ヨコナデ・ ヘラケズリ後ヘラミガキ・指才サエ	ヨコナデ・ハケ目後 ナテ	
第53図	36	28-2SE170 茶黒土	021	古式土師器	甕	-	3.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・黑色粒子・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色～黒褐色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	布留式系 (外)スス付着
第53図	37	28-2SE170 茶黒土	019	古式土師器	甕	-	2.7+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・灰色粒子	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	布留式系 口縁部打ち欠き
第53図	38	28-2SE170 茶黒土	022	古式土師器	甕	-	3.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・灰色粒子	(内)茶褐色 (外)茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	布留式系
第53図	39	28-2SE170 茶黒土	016	古式土師器	甕	-	4.6+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・灰色粒子	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色～橙色	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	(外)一部スス付着 口縁部打ち欠きか
第53図	40	28-2SE170 茶黒土	006	古式土師器	甕	(20.4)	8.5+α	-	-	金雲母・長石・石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	(内)にぶい橙色～橙色 (外)にぶい橙色～橙色	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目・ハケ目後ナテ・指才サエ・ナテ・指才サエ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目・指才サエ	
第53図	41	28-2SE170 茶黒土	001	古式土師器	甕	(19.8)	17.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ハケ目・ハケ目後ナテ・指才サエ・ナテ・ケズリ後ハケ目後ナテ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目・指才サエ	(外)スス付着
第53図	42	28-2SE170 茶黒土	011	古式土師器	甕	-	5.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナテ・指才サエ	ハケ目後ナテ	(外)黒斑
第53図	43	28-2SE170 茶黒土	010	古式土師器	甕	-	9.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤褐色粒子・金雲母	(内)橙茶色～橙色 (外)橙茶色～橙色	ケズリ後ナテ	ナテ・指才サエ	(外)黒斑
第53図	44	28-2SE170 茶黒土	014	ミニチュア土器	椀	-	2.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ナテ・指才サエ	ナテ・指才サエ	
第54図	45	28-2SE170 黒灰土	004	古式土師器	高坏	(13.2)	4.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	不定方向のヘラミガキ	ハケ目後横方向のヘラミガキ	布留式系
第54図	46	28-2SE170 黒灰土	005	古式土師器	鉢	-	3.5+α	4.0	-	角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子	(内)橙色～にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色	ナテ・指才サエ・工具ナテ	工具ナデ後ミガキ? ナテ・指才サエ	(外)黒斑
第54図	47	28-2SE170 黒灰土	002	古式土師器	椀	(11.6)	3.4+α	-	-	長石・角閃石・赤色粒子・石英・金雲母	(内)にぶい黄橙色～橙色 (外)にぶい黄橙色～にぶい橙色	ヨコナデ・ミガキ(暗文?)	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ後不定方向のミガキ	
第54図	48	28-2SE170 黒灰土	001	古式土師器	台付鉢	(13.6)	7.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母	(内)橙茶色 (外)橙茶色	ヨコナデ・ハケ後ナテ・指才サエ	ヨコナデ・ハケ目後ナテ(部分的にミガキ) ミガキ・ハケ目	(内外)黒斑
第54図	49	28-2SE170 黒灰土	006	古式土師器	二重口縁壺	-	5.2+α	-	-	角閃石・長石・石英・赤色粒子	(内)橙色～褐色 (外)橙色	摩滅の為不明・ナテ	摩滅の為不明	外来系
第54図	50	28-2SE170 黒灰土	010	古式土師器	壺	-	4.0+α	-	-	角閃石・金雲母・長石・赤色粒子・黑色粒子	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色	横方向のハケ目後ヨコナデ・ナテ	ヨコナデ・縦方向の ハケ目後ヨコナデ	布留式系
第54図	51	28-2SE170 黒灰土	008	古式土師器	甕	-	2.3+α	-	-	角閃石・長石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色～橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	布留式系
第54図	52	28-2SE170 黒灰土	007	古式土師器	甕	-	4.2+α	-	-	角閃石・長石・石英・赤色粒子	(内)橙色～にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色	ヨコナデ・ナテ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ	布留式系 (外)スス付着
第54図	53	28-2SE170 黒灰土	009	古式土師器	甕	-	3.9+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)淡黄橙色 (外)淡黄橙色	ヨコナデ・摩滅の為 不明・ハケ目後ナテ	ヨコナデ	
第54図	54	28-2SE170 黒灰土	011	古式土師器	甕	(17.9)	6.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	(内)淡黄橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・縦方向の ハケ目後ナテ	(内)黒斑
第54図	55	28-2SE170 黒灰土	003	古式土師器	甕	-	6.5+α	1.6	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	(内)橙色 (外)橙色	斜方向のケズリ後ナテ	ハケ目後ナテ・ナテ	(外)黒斑
第54図	56	28-2SE175 灰色砂	001	白色研磨土師器	塊	(16.4)	5.6	(6.8)	-	金雲母・白色粒子・長石・石英	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナテ・摩滅の為 不明	摩滅の為不明	浅境タイプ
第54図	57	28-2SE215	001	古式土師器	甕	-	3.3+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母・灰色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナテ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ	(内)黒斑
第54図	58	28-2SE215	002	古式土師器	甕	-	2.8+α	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒子・金雲母	(内)橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ナテ	ヨコナデ・ナテ	(外)スス付着
第54図	59	28-2SE215 黒灰土	001	古式土師器	甕	12.6	6.4+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)淡黄橙色～橙色 (外)淡黄橙色～橙色	ヨコナデ・ナテ・指才サエ・ハケ目後指才サエ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目	
第54図	60	28-2SE215 黄黒土	001	古式土師器	椀	17.1	6.4	-	-	金雲母・白色粒子・角閃石・石英	(内)橙色 (外)にぶい橙色	ハケ目後ミガキ・ミガキ	ヨコナデ・ハケ目後 工具ナテ	
第54図	61	28-2SE220	001	土師器	坏C	-	2.1+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母・白色粒子・灰色粒子・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ナテ後粗いミガキ	回転ナデ	赤色塗彩
第55図	62	28-1SK018	001	ミニチュア土器	椀	-	2.6+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母	(内)橙茶色 (外)橙茶色	ナテ・指才サエ	ナテ・指才サエ	

第23表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表5

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第55図	63	28-1SK022	003	古式土師器	椀	-	3.2+α	-	-	白色粒子・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)淡黄橙色 (外)淡黄橙色	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	(外)黒斑
第55図	64	28-1SK022	002	古式土師器	鉢	22.3	6.3+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	(外)黒斑
第55図	65	28-1SK022	004	古式土師器	甕	-	2.8+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)明黄褐色 (外)暗褐色	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	線刻? (外)スス付着
第55図	66	28-1SK022	001	古式土師器	甕	(18.7)	11.5+α	-	-	長石・石英・角閃石・黒曜石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目?ナデ・ナデ	ヨコナデ・工具ナデ 後ミガキ	(内)黒変 (外)スス付着
第55図	67	28-1SK024	001	古式土師器	複合口縁壺	16.5	40.0+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ハケ目・ナデ・斜め方向のハケ目・ナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後粗い工具ナデ オサワ	(外)波状文・貼付突帯・黒斑 (内)黒変
第55図	68	28-1SK024 黒灰土	001	古式土師器	高环	19.7	12.6+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色~橙茶色 (外)橙色~橙茶色	継方向のミガキ・摩耗の為不明・横方向のケズリ	ヨコナデ・ハケ自後ヨコナデ・ ヨコナデ・斜方向のミガキ	脚部円形透かし2箇所 (内外)黒斑
第55図	69	28-1SK024 黒灰土	003	古式土師器	小型丸底壺	(11.9)	5.1+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子 黑色粒子	(内)淡黄橙色~明赤褐色 (外)灰黄色	ハケ目後ヨコナデ・ナデ	ハケ目後ヨコナデ・ ハケ目後ナデ	(内)赤色塗彩 (外)黒斑
第55図	70	28-1SK024 黒灰土	002	古式土師器	高环×壺	-	3.4+α	-	-	長石・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)灰黄色 (外)橙色	ハケ目後ヨコナデ? 指オサワ	ハケ目後ヨコナデ?	赤色塗彩? (内)黒斑
第55図	71	28-1SK024 黒灰土	004	弥生土器	壺	-	6.2+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)淡灰黄色	ハケ目後ナデ・指オサワ	斜ハケ目・ハケ自後ヨコナデ・ヨコナデ・工具ナデ	(外)貼付突帯(ベルト状)・格子状線刻文
第56図	72	28-1SK024 黒灰土	006	古式土師器	甕	14.6	15.5	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子 黑色粒子	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	ヨコナデ・ナデ・工具ナデ・指オサワ	ヨコナデ・ハケ自後ヨコナデ・ハケ目後ナデ	穿孔(焼成後一箇所) (外)火線・黒斑
第56図	73	28-1SK024 黒灰土	005	古式土師器	甕	18.4	17.2+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄橙色 ~にぶい橙色 (外)にぶい黄橙色	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ・指オサワ	ヨコナデ・ハケ自後ヨコナデ・斜方向のハケ目	(外)スス付着 (内)黒斑
第56図	74	28-1SK100	002	土師器	椀B	13.0	6.1	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)赤褐色 (外)黄橙色	ヨコナデ・摩滅の為不明・ナデ?	ヨコナデ・横斜のハケ目	P-2
第56図	75	28-1SK100	001	土師器	壺	(23.8)	20.8+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)橙茶色~淡黄橙色	摩滅のため不明・横方向のハケ目?ナデ・工具ナデ	摩滅のため不明・ハケ目後ヨコナデ・継方向のハケ目	P-1
第56図	76	28-1SK100	003	土師器	甕	14.0	20.8	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)淡黄橙色~明赤褐色 (外)灰黄色~明赤褐色	ハケ目後ヨコナデ・ナデ・工具箱・指オサワ	ハケ目後ヨコナデ・ ナデ・ハケ目後ナデ	(内外)黒斑
第56図	77	28-1SK100	004	土師器	甕	(26.6)	20.2	(8.4)	(7.6)	赤色粒子・長石・石英・角閃石・雲母	(内)淡橙色~赤褐色 (外)淡黄橙色~橙色	ハケ目・ナデ・指オサワ	ナデ・ハケ目後ナデ・ ナデ・ハケ目・指オサワ	底部穿孔 (外)黒斑
第57図	78	28-1SD002	001	石製品	磨石	7.6	3.3	2.9	108.0g	-	-	-	-	-
第57図	79	28-1SD003	001	ミニチュア土器	器台	-	3.5+α	-	-	白色粒子・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)にぶい橙色	ナデ	ナデ・指オサワ	
第57図	80	28-1SD005	001	土師器	椀B	(12.8)	5.4	-	-	長石・石英・角閃石	(内)黄橙色~橙色 (外)黄橙色~橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ後ナデ	(外)黒斑
第57図	81	28-1SD005	002	土師器	椀B	(13.3)	5.7	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)橙茶色 (外)橙茶色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
第57図	82	28-1SD005	003	土師器	椀B	-	4.5+α	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)淡黄色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	摩耗の為不明・ハケ目?	
第57図	83	28-1SD005	004	土師器	椀A	-	4.0+α	-	-	白色粒子・長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ヨコナデ?・ナデ?	ヨコナデ・ナデ	
第57図	84	28-1SD005	005	土師器	高环	-	7.4+α	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子・黒色粒子	(内)赤褐色~黄橙色 (外)赤褐色~黄橙色	ナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ?	ナデ	
第57図	85	28-1SD005	006	土師器	高环	-	4.8+α	-	-	長石・角閃石・金雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)橙色	ナデ・ハケ目・ヨコナデ	ヨコナデ・強いヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ	底部赤色塗彩
第57図	86	28-1SD005	008	土師器	壺?	-	2.5+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)淡橙色~橙色 (外)淡橙色~橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
第57図	87	28-1SD005	007	土師器	甕E?	-	4.5+α	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)黄橙色~橙色 (外)黄橙色~橙色	摩耗の為不明	摩耗の為不明	
第57図	88	28-1SD029	012	綠釉陶器	椀	-	2.3+α	-	-	(胎土)にぶい黄褐色	(胎)にぶい黄褐色	施釉	施釉	(内外)貫入
第57図	89	28-1SD029	002	須恵器	坏蓋H	(14.8)	3.7	-	-	長石・石英	(内)灰色 (外)灰白色	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ	(外)降灰九州須恵器編年IV A期
第57図	90	28-1SD029	008	須恵器	坏蓋H	-	3.4+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・長石	(内)黄灰色 (外)灰黑色	回転ナデ?	(モ減)	摩減の為不明九州須恵器編年I A期
第57図	91	28-1SD029	001	須恵器	蓋b	(17.8)	2.6	-	つまみ径(5.2)	長石・石英	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し後回転ナデ・ナデ		
第57図	92	28-1SD029	003	須恵器	蓋c	-	1.9+α	-	つまみ径(3.0)	長石・黑色粒子	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ・ナデ	転用硯	
第57図	93	28-1SD029	005	須恵器	坏c	-	2.7+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ?	(モ減)	摩減の為調整不明
第57図	94	28-1SD029	009	須恵器	坏a	-	1.2+α	(7.2)	-	白色粒子	(内)淡黄灰色 (外)淡黄灰色	回転ナデ	摩減の為ヘラ切り離し	
第57図	95	28-1SD029	006	須恵器	壺	-	2.3+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰色 (外)暗灰色	回転ナデ・回転ナデ	回転ケズリ後回転ナデ・回転ナデ	
第57図	96	28-1SD029	004	須恵器	坏H	(13.0)	3.2+α	-	-	長石・白色粒子	(内)灰色 (外)暗灰色	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ記号受部自然釉九州須恵器編年IV A期	
第57図	97	28-1SD029	011	須恵器	坏蓋	-	2.3+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・黑色粒子	(内)灰色 (外)淡黄灰色	回転ナデ・モ減の為不明	回転ナデ	

第24表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表6

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第57図	98	28-1SD029	007	須恵器	壺×瓶	-	3.6+α	-	-	白色粒子・雲母	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ・回転ナデ 後ナデ	回転ナデ	
第57図	99	28-1SD029	017	土師器	皿c	-	1.5+α	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ナデ	回転ナデ・回転ケズリ 後回転ナデ	
第57図	100	28-1SD029	016	土師器	蓋4	-	1.9+α	-	-	白色粒子・灰色粒子・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ後ミガキ?	ヨコナデ後ミガキ?	摩滅の為不明
第57図	101	28-1SD029	015	土師器	坏d?	-	2.8+α	-	-	赤色粒子・黑色粒子	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	沈線
第57図	102	28-1SD029	013	土師器	盤	-	2.3+α	8.0	-	白色粒子・灰色粒子・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ナデ?	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し・ヘラ痕?	(内)赤色塗彩
第57図	103	28-1SD029	014	土師器	高环	-	1.9+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・黑色粒子・雲母	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色塗彩
第57図	104	28-1SD029	018	石製品	棒状石製品	6.6	1.7	12	23.0g	-	-	-	-	
第58図	1	28-1SD030	018	青磁	碗	-	1.8+α	-	-	灰色	(内)オーバー色 (外)灰緑色	施釉	施釉	越州窯系Ⅲ類
第58図	2	28-1SD030	029	須恵器	皿c	-	2.2+α	(19.8)	-	白色粒子・赤色粒子・雲母	(内)灰色 (外)灰色	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り・ ヘラ切り後ナデ	
第58図	3	28-1SD030	017	須恵器	蓋	-	1.8+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・長石	(内)灰色 (外)灰青色	回転ナデ	回転ナデ	
第58図	4	28-1SD030	003	須恵器	坏H?	-	2.2+α	-	-	長石・石英	(内)白色 (外)灰色	回転ナデ・回転ナデ 後ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	ヘラ記号
第58図	5	28-1SD030	002	須恵器	壺c	-	2.5+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)淡黄灰色 (外)淡黄灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ 後ナデ	(内)自然釉
第58図	6	28-1SD030	004	須恵器	高环	-	5.4+α	-	-	長石・石英	(内)灰白色 (外)灰白色～灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	しぶり痕
第58図	7	28-1SD030	028	須恵器	甕a	-	6.7+α	-	-	長石・白色粒子・赤色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ・同心円当 て具痕	回転ナデ・格子目タ タキ	
第58図	8	28-1SD030	005	須恵器	横瓶	-	11.0+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)暗灰色 (外)灰色	同心円状タタキ・指 オサエ	平行タタキ(摩耗)	(外)自然釉 閉塞部あり
第58図	9	28-1SD030	027	土師器	蓋a3×4	(14.2)	1.6	9.2	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ	
第58図	10	28-1SD030	023	土師器	蓋3	-	1.4+α	-	-	角閃石・長石・白 色粒子・赤色粒子	(内)茶褐色 (外)茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	
第58図	11	28-1SD030	022	土師器	坏a5?	(13.8)	3.4	8.2	-	角閃石・白色粒子・赤色粒子・長 石	(内)橙色 (外)淡橙色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し後ナデ	
第58図	12	28-1SD030	016	土師器	坏d	15.4	3.4	8.8	-	赤色粒子・白色粒子・雲母・長石・黑 色粒子	(内)橙白色 (外)橙色	摩滅のため不明瞭	ヨコナデ・回転ヘラ ミガキ	
第58図	13	28-1SD030	021	土師器	坏a4	(14.0)	3.9	8.8	-	角閃石・白色粒子・黒色粒子・長 石	(内)茶橙色 (外)暗褐色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し後ナデ	
第58図	14	28-1SD030	025	土師器	坏a×d	(16.8)	5.1+α	-	-	角閃石・長石・白 色粒子・赤色粒子	(内)暗褐色 (外)橙色～茶色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し	
第58図	15	28-1SD030	024	土師器	坏?	-	3.3+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子	(内)茶白色 (外)茶白色	ナデ後指オサエ・竹 管波状文	ナデ後指オサエ・竹 管波状文	
第58図	16	28-1SD030	026	土師器	坏c	-	3.2+α	(7.0)	-	角閃石・赤色粒子・長石・白色粒子	(内)暗白色 (外)暗白色	ナデ	回転ナデ	
第58図	17	28-1SD030	019	土師器	脚裾部	-	2.0+α	-	-	赤色粒子・角閃 石・長石・白色粒子	(内)橙色 (外)橙色	摩滅のため不明瞭	回転ナデ	
第58図	18	28-1SD030	001	土師器	小壺c	-	2.9+α	7.4	-	長石・石英・赤色 粒子・金雲母	(内)橙色 (外)にぶい橙色～橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し後ナデ	(底部)刻画あり「厨」
第58図	19	28-1SD030	013	瓦	平瓦	16.9+α	16.3+α	4.2	-	長石・石英・金雲 母・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ケズリ・ヘラケズリ 後ナデ	ケズリ・格子目タ タキ	面取りニ箇所
第58図	20	28-1SD030	009	ミニチュア土器	器台	(3.2)	3.7	3.0	-	白色粒子・角閃 石・赤色粒子・金 雲母	(内)橙色 (外)橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
第58図	21	28-1SD030	007	ミニチュア土器	器台	-	5.0+α	-	-	白色粒子・角閃石	(内)灰白色～灰黑色 (外)灰白色～灰黑色	ナデ	ナデ・指オサエ	(外)黒変
第58図	22	28-1SD030	010	ミニチュア土器	器台	-	3.6+α	-	-	白色粒子・角閃 石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ・指オサエ	製塩土器?
第58図	23	28-1SD030	012	ミニチュア土器	器台	-	4.0+α	-	-	白色粒子・角閃 石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ・指オサエ	
第58図	24	28-1SD030	008	ミニチュア土器	器台	-	3.4+α	(4.4)	-	白色粒子・角閃 石・赤色粒子	(内)にぶい橙色～茶褐 色 (外)にぶい橙色～茶褐色	ナデ	指オサエ	
第58図	25	28-1SD030	011	ミニチュア土器	器台	-	3.1+α	-	-	長石・角閃石・赤 色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ・指オサエ	
第58図	26	28-1SD030	020	土製品	土錐	3.5	1.4	-	0.3 6.9g	石英・長石・角閃 石・白色粒子・雲 母	(内)橙色 (外)橙色	-	ナデ	
第58図	27	28-1SD030	006	繩文土器	浅鉢	-	3.5+α	-	-	白色粒子・金雲母	(内)橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ	(外)沈線・黒斑
第58図	28	28-1SD030	015	金属製品	鑷	4.7	1.4	0.8	10.5g	-	-	-	-	銅製品(銅鑷?)
第58図	29	28-1SD030	014	金属製品?	不明	7.3	0.9	0.5	18.1g	-	-	-	-	金銅製品
第59図	30	28-1SD030	036	須恵器	坏蓋	-	3.7+α	-	-	長石・白色粒子・石英・黒色粒子	(内)灰青色 (外)灰青色	回転ナデ	回転ナデ	九州須恵器編年ⅠB～Ⅱ期
第59図	31	28-1SD030	037	須恵器	蓋3	-	2.5+α	-	-	長石・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回 転ナデ	九州須恵器編年ⅣB～V期

第25表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表7

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第59回	32	28-1SD030 灰色砂	019	須恵器	蓋2	(15.2)	1.7	(11.7)	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)淡灰色 (外)灰色	ヨコナデ・ナデ	ヘラ切り離し・回転 ヘラケズリ・回転ナデ・ヨコナデ	
第59回	33	28-1SD030 灰色砂	038	須恵器	蓋	-	1.4+α	-	-	長石・石英・白色 粒子・黒色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	(外)自然釉付着
第59回	34	28-1SD030 灰色砂	016	須恵器	蓋3	-	1.7+α	-	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)灰色 (外)灰色	ナデ	回転ナデ	
第59回	35	28-1SD030 灰色砂	017	須恵器	蓋3	-	1.5+α	-	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色~灰色	回転ヘラケズリ・ヨ コナデ	ヨコナデ・ナデ	
第59回	36	28-1SD030 灰色砂	039	須恵器	坏H	-	2.7+α	-	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)暗灰色 (外)灰黒色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ	九州須恵器編年IVB~V期
第59回	37	28-1SD030 灰色砂	003	須恵器	坏H	-	1.9+α	-	-	白色粒子・長石・ 石英・赤色粒子	(内)赤褐色 (外)灰色~赤褐色	回転ナデ・回転ナデ 後ナデ	回転ヘラケズリ	ヘラ記号
第59回	38	28-1SD030 灰色砂	042	須恵器	坏a	-	2.0+α	4.8	-	長石・白色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ・ヘラ切り離し	
第59回	39	28-1SD030 灰色砂	015	須恵器	坏c	-	1.3+α	7.8	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・ヨコナデ・ ヘラ切り離し後ナデ	
第59回	40	28-1SD030 灰色砂	013	須恵器	坏c	-	1.9+α	(8.2)	-	長石・白色粒子・ 赤色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・ヨコナデ・ ヘラ切り離し	
第59回	41	28-1SD030 灰色砂	018	須恵器	坏c	-	3.0+α	(10.0)	-	長石・白色粒子・ 石英・角閃石	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ・ヨコナデ・ ヘラ切り離し後ナデ	
第59回	42	28-1SD030 灰色砂	014	須恵器	坏c	-	1.7+α	(12.8)	-	石英・長石・白色 粒子・黒色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し	
第59回	43	28-1SD030 灰色砂	002	須恵器	高盤	-	4.4+α	-	-	長石・石英	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ・回転ナデ 後ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ケス リ後回転ナデ	
第59回	44	28-1SD030 灰色砂	041	須恵器	壺	-	4.4+α	-	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第59回	45	28-1SD030 灰色砂	020	須恵器	壺	-	4.8+α	8.5	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)灰茶色 (外)灰白色	回転ナデ・ヨコナデ	回転ナデ・ナデ	
第59回	46	28-1SD030 灰色砂	001	須恵器	長頸壺	-	11.7+α	(10.0)	-	長石・石英	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ・回転ナデ 後ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後回転ナデ	肩部に降灰
第59回	47	28-1SD030 灰色砂	035	須恵器	甕a	-	5.0+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)暗灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ・波状文	
第59回	48	28-1SD030 灰色砂	040	須恵器	甕a	-	4.1+α	-	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	(内)灰白色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	(外)柳書文
第59回	49	28-1SD030 灰色砂	028	土師器	蓋4	-	1.2+α	-	-	長石・白色粒子・ 赤色粒子・黑色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ・ヨコナデ	回転ナデ・ヨコナデ	
第59回	50	28-1SD030 灰色砂	029	土師器	蓋5?	-	2.2+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子・ 黑色粒子	(内)橙茶色 (外)橙褐色	ヨコナデ・回転ナデ・ ナデ	ヘラケズリ・回転ナデ・ ヨコナデ	
第59回	51	28-1SD030 灰色砂	024	土師器	皿a	17.4	2.6	15.0	-	角閃石・長石・白 色粒子・黑色粒子・ 赤色粒子	(内)茶褐色 (外)茶褐色	ヨコナデ・回転ナデ・ ナデ後渦巻状暗文	ヨコナデ・回転ナデ・ ナデ・ヘラ切り離し	
第59回	52	28-1SD030 灰色砂	023	土師器	坏a	(12.6)	3.6	(8.3)	-	赤色粒子・長石・ 角閃石・黑色粒子・ 白色粒子	(内)茶白色 (外)茶白色	ヨコナデ・回転ナデ・ ナデ	ヨコナデ・回転ナデ・ ナデ・ヘラ切り離し 後ナデ	
第59回	53	28-1SD030 灰色砂	022	土師器	坏a2	(13.0)	3.8	(10.2)	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子・ 黑色粒子	(内)橙色 (外)橙白色	ヨコナデ・回転ナデ	ヨコナデ・回転ナデ・ ナデ・ヘラ切り後ナデ	摩滅のため不明瞭
第59回	54	28-1SD030 灰色砂	027	土師器	皿a?	-	1.7+α	-	-	長石・赤色粒子・ 黑色粒子	(内)橙白色 (外)橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	摩滅のため不明瞭
第59回	55	28-1SD030 灰色砂	026	土師器	坏a	-	3.0+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・雲母・黑 色粒子	(内)橙茶色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	摩滅のため不明瞭
第59回	56	28-1SD030 灰色砂	025	土師器	坏a	-	2.8+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子	(内)橙茶色 (外)橙茶色	回転ナデ	回転ナデ	
第59回	57	28-1SD030 灰色砂	032	土師器	坏×椀	-	2.4+α	-	-	長石・赤色粒子・ 角閃石・白色粒子	(内)橙褐色 (外)橙褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ・ヘラ 切り離し後ナデ	
第59回	58	28-1SD030 灰色砂	031	土師器	坏c	-	1.4+α	-	-	石英・白色粒子・ 赤色粒子・黑色粒子・ 角閃石	(内)橙色 (外)橙色	ナデ?	回転ナデ・ヨコナデ・ ヘラ切り離し後ナデ	摩滅のため不明瞭
第59回	59	28-1SD030 灰色砂	030	土師器	坏c	-	1.7+α	-	-	角閃石・白色粒子・ 石英・赤色粒子	(内)淡橙色 (外)橙色	摩滅のため不明瞭	回転ナデ	
第59回	60	28-1SD030 灰色砂	021	黒色土器A類	椀	(16.0)	5.6	(8.0)	-	角閃石・長石・白 色粒子・赤色粒子・ 黑色粒子	(内)黑色 (外)暗橙茶色	ヨコナデ・ヘラミガ キ	ヨコナデ・回転ナデ・ ヘラケズリ・ナデ	
第59回	61	28-1SD030 灰色砂	033	弥生土器	甕	-	4.0+α	-	-	角閃石・白色粒子・ 黑色粒子・赤色粒子・ 石英	(内)茶白色 (外)茶白色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・刺突文・ハ ケ目 (外)沈線3条	
第59回	62	28-1SD030 灰色砂	005	製塙土器		-	2.6+α	-	-	長石・石英・角閃 石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	布目痕	ナデ	
第59回	63	28-1SD030 灰色砂	006	製塙土器		-	4.7+α	-	-	長石・角閃石・赤 色粒子	(内)淡灰褐色 (外)淡灰褐色	指オサエ	ナデ	
第59回	64	28-1SD030 灰色砂	008	ミニチュア土器	鉢	(3.8)	1.7	-	-	白色粒子・黑色粒子・ 赤色粒子	(内)淡橙色 (外)淡橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
第59回	65	28-1SD030 灰色砂	009	ミニチュア土器	鉢	-	2.7+α	-	-	長石・石英・角閃 石・雲母・赤色粒子	(内)黄褐色~橙色 (内)灰橙色	指オサエ	摩滅の為不明	
第59回	66	28-1SD030 灰色砂	007	製塙土器		-	4.2+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・ 角閃石・雲母	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ・指オ サエ	ヨコナデ・ナデ・指オ サエ	(内外)スス付着
第59回	67	28-1SD030 灰色砂	011	ミニチュア土器	器台	-	2.6+α	(3.1)	-	長石・石英・赤色 粒子・雲母	(内)橙色	ナデ	工具ナデ	
第59回	68	28-1SD030 灰色砂	010	ミニチュア土器	器台	-	3.0+α	-	-	長石・石英・角閃 石・赤色粒子・雲母	(内)橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
第59回	69	28-1SD030 灰色砂	004	ミニチュア土器	器台	-	1.5+α	-	-	角閃石・石英・角 閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)灰茶色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
第59回	70	28-1SD030 灰色砂	034	土製品	羽口	-	3.3+α	-	-	角閃石・石英・角 閃石・赤色粒子・黑 色粒子	(内)橙茶色 (外)灰茶色	ケズリ?	ナデ後指オサエ	
第59回	71	28-1SD030 灰色砂	043	石製品	勾玉	3.3	1.8	1.0	9.6g	-	-	-	ミガキ?	蛇紋岩

第26表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表8

捕获番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) 0は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考	
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面		
第59回	72	28-1SD030 灰色砂	012	石製品	磁石	8.4	1.8+α	1.2	29.6g	-	-	-	-	結晶片岩	
第59回	73	28-1SD030 黒黄土	004	須恵器	甕	-	3.6+α	-	-	白色粒子・黒色粒子・長石	(内)灰黒色 (外)灰黒色	回転ナデ・自然釉	自然釉・回転ナデ		
第59回	74	28-1SD030 黒黄土	003	須恵器	甕	-	5.7+α	-	-	長石・角閃石・黒色粒子・白色粒子・赤色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ・凹線	灰かぶり	
第59回	75	28-1SD030 黒黄土	001	土師器	蓋a	(25.1)	2.5	(16.2)	-	長石・角閃石・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	(内)橙白色 (外)橙色	ナデ・回転ナデ	ナデ・回転ヘラケズリ・回転ナデ		
第59回	76	28-1SD030 黒黄土	002	土師器	甕把手	-	4.3+α	-	-	石英・長石・角閃石・白色粒子・黒色粒子	(内)茶橙色 (外)茶茶色	ハケ目	ナデ後指サエ・ハケ目		
第60回	77	28-2SD130	006	須恵器	蓋4	-	2.0+α	-	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰黑色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第60回	78	28-2SD130	001	須恵器	高坏A	-	12.6+α	-	-	金雲母・黒色粒子・長石・石英	(内)淡灰色 (外)灰白色	ナデ・回転ナデ	回転ナデ	(外)しづり痕	
第60回	79	28-2SD130	005	須恵器	壺	-	3.1+α	-	-	白色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	(外)波状文・沈線2条	
第60回	80	28-2SD130	004	須恵器	甕a	-	3.2+α	-	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰黑色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第60回	81	28-2SD130	008	製塙土器		-	5.6+α	-	-	長石・角閃石・白色粒子	(内)灰黑色 (外)橙灰色	ナデ	ナデ・指オサエ後ナデ	森田分類I類	
第60回	82	28-2SD130	002	ミニチュア土器	器台?	-	3.1+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ		
第60回	83	28-2SD130	007	土製品	玉	2.2	2.0	-	0.2	角閃石・白色粒子・黒色粒子	(外)橙褐色	-	ナデ?		
第60回	84	28-2SD130	003	石製品	磁石	5.5	4.5	3.3	140.7g	-	-	-	-		
第60回	85	28-2SD130①	002	土師器	坏e	-	3.0+α	8.0	-	長石・角閃石	(内)茶白色 (外)茶白色	回転ナデ・強いナデ	回転ナデ・ケズリ	円盤高台風	
第60回	86	28-2SD130①	001	ミニチュア土器	器台?	-	2.8+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ・指オサエ		
第60回	87	28-2SD130 黒灰粘	004	須恵器	坏蓋	-	3.0+α	-	-	長石・白色粒子	(内)灰黑色 (外)灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	九州須恵器編年II期	
第60回	88	28-2SD130 黒灰粘	005	須恵器	蓋3	-	2.6+α	-	-	白色粒子・黒色粒子	(内)灰黑色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第60回	89	28-2SD130 黒灰粘	008	須恵器	坏H	-	3.5+α	-	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰黑色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	九州須恵器編年II期	
第60回	90	28-2SD130 黒灰粘	006	須恵器	坏c	-	4.0+α	-	-	長石・白色粒子・赤色粒子	(内)淡灰色 (外)灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ		
第60回	91	28-2SD130 黒灰粘	001	須恵器	高坏a	-	3.9+α	(10.4)	-	金雲母・黒色粒子・角閃石・長石	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ		
第60回	92	28-2SD130 黒灰粘	007	須恵器	壺	-	4.9+α	-	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ		
第60回	93	28-2SD130 黒灰粘	011	土師器	蓋3	-	1.3+α	-	-	赤色粒子・長石・白色粒子・黒色粒子	(内)淡橙色 (外)淡橙色	回転ナデ	回転ナデ		
第60回	94	28-2SD130 黒灰粘	009	土師器	坏d?	-	2.6+α	-	-	長石・白色粒子	(内)茶橙色 (外)茶橙色	回転ナデ	回転ナデ		
第60回	95	28-2SD130 黒灰粘	012	土師器	坏a4	(15.0)	3.5	8.9	-	角閃石・長石・赤色粒子・黒色粒子・白色粒子	(内)茶白色 (外)淡橙色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ		
第60回	96	28-2SD130 黒灰粘	010	土師器	坏c	-	1.8+α	-	-	長石・角閃石・白色粒子・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナデ?	摩滅により不明瞭	回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ	
第60回	97	28-2SD130 黒灰粘	003	繩文土器	深鉢	-	4.4+α	-	-	角閃石・白色粒子・黒色粒子・雲母	(内)茶灰白色 (外)茶黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	沈線2条	
第60回	98	28-2SD130 黒灰粘	002	ミニチュア土器	器台?	-	2.7+α	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ		
第60回	99	28-2SD130 黒灰粘	013	石製品	石帶巡方	3.5	3.0	0.5	12.2g	-	黒色	(裏)接着痕4箇所	-	細い錐状工具による穿孔	
第60回	100	28-2SD130 茶灰砂	019	須恵器	皿a	-	1.9+α	-	-	長石・黒色粒子・白色粒子	(内)淡灰白色 (外)淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し		
第60回	101	28-2SD130 茶灰砂	017	須恵器	坏a	-	3.0+α	(11.2)	-	黒色粒子・白色粒子	(内)白茶色 (外)白茶色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ・ヘラ切り離し後ナデ		
第60回	102	28-2SD130 茶灰砂	015	須恵器	坏c	-	3.2+α	11.0	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰黑色 (外)灰黑色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し		
第60回	103	28-2SD130 茶灰砂	018	須恵器	坏c	-	2.0+α	12.0	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰黑色 (外)灰黑色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し		
第60回	104	28-2SD130 茶灰砂	016	須恵器	坏c	-	3.2+α	(14.2)	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ	底部ヘラ記号	
第60回	105	28-2SD130 茶灰砂	024	須恵器	高坏a	-	5.4+α	(12.3)	-	長石・白色粒子・赤色粒子	(内)灰黑色 (外)灰黑色	回転ナデ	回転ナデ	透し有	
第60回	106	28-2SD130 茶灰砂	023	須恵器	高坏a	-	6.3+α	-	-	長石・白色粒子・黒色粒子	(内)灰黑色 (外)灰黑色	ナデ・回転ナデ	回転ナデ	透し有	
第60回	107	28-2SD130 茶灰砂	002	須恵器	高坏a	-	8.0+α	-	-	雲母・黒色粒子・長石・石英	(内)灰黑色 (外)灰黑色	回転ナデ後工具ナデ	回転ナデ	波状文3条・沈線2条・透し6箇所(上3・下3)	
第60回	108	28-2SD130 茶灰砂	001	須恵器	高坏a	-	3.1+α	-	-	白色粒子・長石・石英・角閃石	(内)淡黃灰色 (外)淡黃灰色	ナデ・回転ナデ	回転ナデ		
第60回	109	28-2SD130 茶灰砂	003	須恵器	長頸壺	-	9.3+α	-	-	長石・石英・白色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ後ナデ		
第60回	110	28-2SD130 茶灰砂	004	須恵器	甕	-	5.0+α	-	-	長石	(内)黑灰色 (外)墨灰色	回転ナデ	回転ナデ	(外)波状文・沈線(内外)降灰	
第60回	111	28-2SD130 茶灰砂	025	須恵器	壺	-	11.7+α	-	-	黒色粒子・白色粒子	(内)白色～灰色 (外)灰黑色～白色	回転ナデ	回転ナデ	大宰府分類壺e(内外)灰かぶり	
第60回	112	28-2SD130 茶灰砂	022	須恵器	壺×横瓶	(11.4)	4.1+α	-	-	長石・黒色粒子・白色粒子	(内)淡灰茶色 (外)淡灰色～灰オリーブ色	回転ナデ	回転ナデ・自然釉		
第60回	113	28-2SD130 茶灰砂	021	須恵器	甕a	-	3.0+α	-	-	長石・白色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ・自然釉	回転ナデ・自然釉		
第60回	114	28-2SD130 茶灰砂	020	須恵器	甕a	-	4.1+α	-	-	長石・角閃石・白色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ・自然釉	回転ナデ		
第60回	115	28-2SD130 茶灰砂	028	土師器	皿	-	2.0+α	-	-	白色粒子・長石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ		
第60回	116	28-2SD130 茶灰砂	029	土師器	蓋a5	(14.2)	2.5	(7.6)	-	長石・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ・ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ		

第27表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表9

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考	
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面		
第60図	117	28-2SD130 茶灰砂	030	土師器	蓋5	-	2.0+α	-	-	長石・赤色粒子・ 黒色粒子・白色粒子	(内)茶白色～橙色 (外)茶白色～橙色	回転ナデ?	回転ナデ?	摩滅により不明瞭	
第60図	118	28-2SD130 茶灰砂	031	土師器	蓋3	-	1.1+α	-	-	赤色粒子・白色粒子・角閃石	(内)茶橙色 (外)茶橙色	回転ナデ	回転ナデ		
第60図	119	28-2SD130 茶灰砂	027	土師器	坏d	-	2.9+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・ 黒色粒子・角閃石	(内)茶橙色 (外)茶橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ		
第60図	120	28-2SD130 茶灰砂	026	土師器	坏d	-	2.3+α	-	-	黒色粒子・白色粒子・ 長石	(内)茶橙色 (外)茶橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ		
第60図	121	28-2SD130 茶灰砂	034	土師器	坏a	-	3.5+α	-	-	角閃石・黒色粒子・ 赤色粒子・白色粒子	(内)淡橙色 (外)淡橙色	ナデ?	ナデ?・回転ヘラ切 り離し	摩滅により不明瞭	
第60図	122	28-2SD130 茶灰砂	033	土師器	坏d	-	2.5+α	-	-	赤色粒子・黒色粒子・ 白色粒子	(内)橙色～灰茶色 (外)橙色	ナデ	ナデ	(内)漆付着	
第60図	123	28-2SD130 茶灰砂	005	土師器	楕A	(18.0)	5.0	-	-	長石・金雲母・角 閃石・赤色粒子・ 白色粒子	(内)橙色 (外)にぶい橙色	回転ナデ・工具ナデ 後暗文	回転ナデ・手持ちヘ ラケズリ		
第61図	124	28-2SD130 茶灰砂	035	土師器	楕b	-	3.0+α	-	-	石英・長石・角閃 石・黒色粒子	(内)淡橙茶色 (外)橙色	ヨコナデ?	ヨコナデ?	摩滅により不明瞭	
第61図	125	28-2SD130 茶灰砂	036	土師器	糠把手	-	4.9+α	-	-	長石・赤色粒子・ 白色粒子	(内)茶白色 (外)橙色	ナデ	ハケ目後ナデ・ナデ・ ハケ目		
第61図	126	28-2SD130 茶灰砂	032	弥生土器	甕	-	4.4+α	-	-	長石・白色粒子・ 赤色粒子・黒色粒子	(内)橙色～暗灰色 (外)橙色	ナデ	ナデ	東北部九州系	
第61図	127	28-2SD130 茶灰砂	012	ミニチュア土器	高坏?	-	1.4+α	-	-	長石・石英・金雲 母・角閃石	(内)にぶい黄橙色 (外)淡黄橙色	摩滅の為不明	ヨコナデ・ナデ		
第61図	128	28-2SD130 茶灰砂	014	瓦	平瓦	5.8+α	3.6+α	2.1	-	長石・石英	(内)灰色 (外)灰色	ケズリ・平行タタ キ? 後工具ナデ	ケズリ・平行タタ キ? 後工具ナデ		
第61図	129	28-2SD130 茶灰砂	013	瓦	平瓦	11.3+α	17.6+α	2.0+α	-	白色粒子・金雲 母・長石・石英・角 閃石	(内)橙褐色 (外)暗灰褐色	ケズリ・布目痕工 貝ナデ	ケズリ・格子タタキ 後工具ナデ		
第61図	130	28-2SD130 茶灰砂	007	ミニチュア土器	器台?	-	2.6+α	(3.6)	-	角閃石・赤色粒子・ 金雲母・長石・石英	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ		
第61図	131	28-2SD130 茶灰砂	011	ミニチュア土器	器台?	-	2.0+α	2.8	-	長石・金雲母・角 閃石	(内)淡黄橙色 (外)にぶい黄橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	(外)黒斑	
第61図	132	28-2SD130 茶灰砂	009	ミニチュア土器	器台?	-	4.3+α	-	-	長石・角閃石・金 雲母・石英	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色	ナデ	指オサエ	(内外)黒斑	
第61図	133	28-2SD130 茶灰砂	008	ミニチュア土器	器台?	-	4.0+α	-	-	長石・金雲母・角 閃石・赤色粒子	(内)淡灰黄色 (外)灰黄色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	(外)黒斑	
第61図	134	28-2SD130 茶灰砂	006	ミニチュア土器	甕?	-	2.7+α	(4.4)	-	角閃石・金雲母・ 長石・石英・赤色 粒子	(内)暗灰茶色 (外)にぶい橙色	ナデ	ナデ・指オサエ		
第61図	135	28-2SD130 茶灰砂	037	石製品	砥石×台石	13.5	6.2+α	7.7+α	1210.0g	-	-	-	-	細かい擦痕・ミガ キ?	
第61図	136	28-2SD130 灰色粘	003	須恵器	蓋4	-	1.3+α	-	-	白色粒子・長石・ 黒色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	137	28-2SD130 灰色粘	004	須恵器	蓋3	-	1.6+α	-	-	長石・黒色粒子・ 白色粒子	(内)淡灰白色 (外)淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	138	28-2SD130 灰色粘	002	須恵器	甕a	(21.0)	39.5+α	-	-	白色粒子	(内)暗灰色～暗茶色 (外)暗灰色～灰色	回転ナデ・当て具痕 後ナデ	回転ナデ・タタキ後 回転ナデ・タタキ		
第61図	139	28-2SD130 灰色粘	005	土師器	坏a	-	2.4+α	(8.6)	-	長石・赤色粒子・ 角閃石・黒色粒子・ 白色粒子	(内)茶色 (外)茶橙色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ・ヘラ 切り離し後ナデ		
第61図	140	28-2SD130 灰色粘	008	土師器	坏d?	-	3.2+α	-	-	長石・角閃石・赤 色粒子・黒色粒子・ 白色粒子	(内)淡橙茶色 (外)淡橙茶色	回転ナデ?	回転ナデ?	摩滅著しい	
第61図	141	28-2SD130 灰色粘	006	土師器	坏a	-	2.5+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・黒色粒子・ 赤色粒子	(内)橙褐色 (外)橙褐色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	142	28-2SD130 灰色粘	007	土師器	坏a	-	3.1+α	-	-	長石・角閃石・赤 色粒子・黒色粒子・ 白色粒子	(内)茶色 (外)茶色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	143	28-2SD130 灰色粘	001	ミニチュア土器	器台?	-	3.4+α	3.5	-	石英・長石・角閃 石・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ		
第61図	144	28-2SD130 灰色砂	010	須恵器	蓋	-	2.7+α	(8.0)	-	白色粒子	(内)灰色 (外)灰白色～灰色	ナデ・回転ナデ・当て 具痕	ヘラケズリ後回転ナ デ・回転ナデ	九州須恵器編年IVB期	
第61図	145	28-2SD130 灰色砂	022	須恵器	蓋1	-	2.2+α	-	-	長石・白色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ・ 回転ナデ		
第61図	146	28-2SD130 灰色砂	023	須恵器	蓋1	-	1.7+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子	(内)淡灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ・ 回転ナデ		
第61図	147	28-2SD130 灰色砂	024	須恵器	蓋1	-	1.2+α	-	-	長石・黒色粒子・ 白色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	148	28-2SD130 灰色砂	015	須恵器	蓋4	-	1.5+α	-	-	長石・白色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	149	28-2SD130 灰色砂	014	須恵器	蓋4	(15.6)	1.4	-	-	長石・白色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	150	28-2SD130 灰色砂	029	須恵器	蓋3	-	1.1+α	-	-	長石・白色粒子	(内)灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	151	28-2SD130 灰色砂	013	須恵器	蓋4	-	1.1+α	-	-	黑色粒子・白色粒子	(内)淡灰青色 (外)淡灰青色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	152	28-2SD130 灰色砂	028	須恵器	蓋3	-	1.6+α	-	-	長石・白色粒子	(内)灰色～暗灰色 (外)淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	153	28-2SD130 灰色砂	025	須恵器	蓋2×3	-	2.0+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・黑色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第61図	154	28-2SD130 灰色砂	018	須恵器	蓋c	-	1.5+α	-	つまみ径 (4.0)	長石・白色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	ナデ・回転ヘラケズ リ		
第61図	155	28-2SD130 灰色砂	026	須恵器	蓋3	-	1.6+α	-	-	長石・白色粒子	(内)淡白色 (外)淡白色	回転ナデ	回転ナデ		

第28表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表10

掲図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径・重量(g)			内面	外面	
第61図	156	28-2SD130 灰色砂	027	須恵器	蓋3	-	1.4+α	-	-	白色粒子・黒色粒子	(内)暗灰色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
第62図	157	28-2SD130 灰色砂	009	須恵器	坏a	(14.8)	3.8	(10.4)	-	白色粒子・黒色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	ヨコナデ・回転ナデ	ヨコナデ・回転ナデ・ナデ・ヘラ切り難し 後ナデ	
第62図	158	28-2SD130 灰色砂	011	須恵器	坏	(15.4)	3.9+α	-	-	長石・白色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	ヨコナデ・回転ナデ・回転ヘーケズリ	
第62図	159	28-2SD130 灰色砂	012	須恵器	坏c	-	4.2+α	-	-	長石・白色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第62図	160	28-2SD130 灰色砂	020	須恵器	坏c	-	1.5+α	-	-	長石・角閃石・白色粒子・黒色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ・ヘラ切り難し	
第62図	161	28-2SD130 灰色砂	019	須恵器	坏c	-	2.5+α	(10.8)	-	長石・白色粒子	(内)淡灰色 (外)淡灰色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り難し	
第62図	162	28-2SD130 灰色砂	021	須恵器	坏c	-	1.5+α	-	-	白色粒子・黒色粒子	(内)白色 (外)白色	回転ナデ	回転ナデ	底部ヘラ記号
第62図	163	28-2SD130 灰色砂	001	須恵器	長頸壺	-	9.9+α	-	-	黒色粒子・長石	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ	(外)沈線 (内外)しづり痕
第62図	164	28-2SD130 灰色砂	017	須恵器	壺	(18.9)	5.7+α	-	-	白色粒子・黒色粒子・雲母	(内)灰茶色 (外)灰茶色	ヨコナデ・同心円状 当て具痕	ヨコナデ・格子目タキ後ナデ	
第62図	165	28-2SD130 灰色砂	016	須恵器	壺a	-	4.2+α	-	-	長石・白色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第62図	166	28-2SD130 灰色砂	033	土師器	坏a?	-	1.3+α	-	-	長石・白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ミガキ	回転ナデ	
第62図	167	28-2SD130 灰色砂	032	土師器	坏c	-	2.3+α	-	-	長石・角閃石・白色粒子・黒色粒子	(内)茶橙色 (外)茶橙色	摩滅により不明瞭	摩滅により不明瞭	
第62図	168	28-2SD130 灰色砂	030	土師器	坏d	-	2.9+α	-	-	長石・白色粒子・角閃石・黒色粒子	(内)橙褐色 (外)橙褐色	ヨコナデ・回転ナデ	ヨコナデ・回転ナデ	
第62図	169	28-2SD130 灰色砂	031	土師器	坏a	-	3.0+α	-	-	長石・角閃石・赤色粒子・黒色粒子	(内)淡橙茶色 (外)淡橙茶色	モ滅により不明瞭	モ滅により不明瞭	
第62図	170	28-2SD130 灰色砂	034	土師器	壺b	(26.6)	3.2+α	-	-	石英・長石・赤色粒子	(内)茶橙色 (外)茶橙色	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ	
第62図	171	28-2SD130 灰色砂	008	瓦	平瓦	10.2+α	11.9+α	2.5	-	白色粒子・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)暗灰色 (外)灰白色	布目痕	格子目タキ	面取り
第62図	172	28-2SD130 灰色砂	005	ミニチュア土器	鉢	3.1	2.6	-	-	石英・長石・黒色粒子	(内)にぶい橙色 (外)橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	(外)ス付着?・刺突?
第62図	173	28-2SD130 灰色砂	002	ミニチュア土器	鉢	4.6	3.0	-	-	長石・石英・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄橙色 (外)淡黄橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
第62図	174	28-2SD130 灰色砂	004	ミニチュア土器	鉢	-	2.4+α	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	(外)黒斑
第62図	175	28-2SD130 灰色砂	003	ミニチュア土器	鉢	-	1.2+α	-	-	石英・長石・角閃石・赤色粒子	(内)橙茶色 (外)橙色～にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・指オサエ	
第62図	176	28-2SD130 灰色砂	006	ミニチュア土器	器台?	-	2.2+α	(4.2)	-	長石・金雲母・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ・打ち欠き	製塩土器? (内外)黒斑
第62図	177	28-2SD130 灰色砂	007	ミニチュア土器	器台?	-	4.0+α	-	-	長石・金雲母・赤色粒子	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・指オサエ	
第62図	178	28-1SD031	002	土師器	坏a	-	2.1+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・赤色粒子・金雲母	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	回転ナデ?	回転ナデ?	赤色塗彩
第62図	179	28-1SD031	001	ミニチュア土器	椀	-	2.3+α	-	-	白色粒子・赤色粒子・角閃石	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
第62図	180	28-1SD045	004	土師器	椀B	(13.8)	5.0+α	-	-	白色粒子・雲母・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	(内外)ス付着
第62図	181	28-1SD045	005	土師器	椀A	-	5.7+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	穿孔
第62図	182	28-1SD045	006	土師器	椀A	-	5.4+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)橙茶色 (外)暗橙茶色	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	
第62図	183	28-1SD045	008	土師器	椀	-	3.3+α	-	-	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後横ナデ・継ハケ目後組いナデ	
第62図	184	28-1SD045	007	古式土師器	壺	-	3.3+α	-	-	白色粒子・黒色粒子・角閃石	(内)淡黄褐色 (外)茶褐色	横方向のハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後横ナデ・継ハケ目後組いナデ	ヨコナデ・ヨコナデ
第62図	185	28-1SD045	003	弥生土器	壺	-	4.0+α	-	-	花崗岩・黒曜石・長石・石英・角閃石・赤色粒子・雲母	(内)浅橙色 (外)浅黄褐色	ナデ	ナデ	黒変
第62図	186	28-1SD045	002	石製品	円盤状石製品	3.3	2.8	0.3	5.2g	-	-	-	-	結晶片岩
第62図	187	28-1SD045	001	石製品	礎石	6.5+α	5.0	3.9	113.8g	-	-	-	-	砂岩
第62図	188	28-2SD145①	001	土師器	椀B	-	4.0+α	-	-	金雲母・角閃石・長石・赤色粒子	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・指オサエ	
第62図	189	28-2SD145①	002	土師器	椀B	-	4.5+α	-	-	白色粒子・金雲母・角閃石	(内)灰黄色 (外)明赤褐色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
第62図	190	28-2SD145①	003	ミニチュア土器	椀	-	2.5+α	-	-	石英・長石・金雲母	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
第62図	191	28-2SD145 淡黒土	002	弥生土器	壺	-	4.0+α	-	-	金雲母・角閃石・長石・赤色粒子	(内)橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・工具ナデ	弥生時代中期 (外)黒斑
第62図	192	28-2SD145 淡黒土	001	弥生土器	器台?	-	5.2+α	-	-	金雲母・角閃石・長石・石英	(内)淡黄褐色 (外)淡黄褐色	ケズリ	工具ナデ後ナデ	製塩土器?
第62図	193	28-2SD150	001	縄文土器	深鉢	-	2.7+α	-	-	白雲母・白色粒子・角閃石・白雲母	(内)淡黄褐色 (外)にぶい黄褐色	摩滅の為不明	摩滅の為不明	口縁端部刻目文
第62図	194	28-2SD150	002	縄文土器	深鉢	-	5.7+α	-	-	白雲母・白色粒子・角閃石・石英	(内)灰黄色 (外)黒茶色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	沈線2条
第62図	195	28-2SD150	004	縄文土器	深鉢?	-	4.0+α	-	-	石英・長石・赤色粒子・角閃石・金雲母	(内)淡黄褐色 (外)灰黄色	摩滅の為不明	摩滅の為不明	

第29表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表11

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R-番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値			胎土	色調	調整・装飾		備考		
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			内面	外面			
第62図	196	28-2SD150	003	繩文土器	深鉢?	-	5.4+α	-	-	石英・長石・白色粒子・角閃石	(内)暗灰褐色 (外)灰黄色	ナデ・指オサエ	摩滅の為不明		
第62図	197	28-2SD150	005	繩文土器	深鉢	-	1.9+α	-	-	石英・長石・角閃石・白色粒子	(内)暗灰色 (外)橙茶色	貝殻条痕	ナデ		
第62図	198	28-2SD150	006	繩文土器	深鉢	-	1.9+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母	(内)淡灰黄色 (外)淡灰黄色～橙色	摩滅の為不明	摩滅の為不明		
第62図	199	28-2SD150	007	石製品	剥片石器	4.2	2.1	0.8	5.7g	-	-	-	-	黒曜石(腰岳)	
第62図	200	28-2SD166	001	須恵器	壺	-	3.0+α	-	-	長石・角閃石・白色粒子・赤色粒子	(内)淡灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ?		
第62図	201	28-2SD166	002	土師器	高壺	-	1.6+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)淡橙色 (外)淡橙色	丁寧なナデ(ミガキ風)	丁寧なミガキ	精製土	
第62図	202	28-2SD205	001	土師器	壺a	-	1.8+α	(6.0)	-	角閃石・長石・金雲母・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)橙色	摩滅の為不明	回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラケズリ後ナデ		
第62図	203	28-2SD205	002	繩文土器	浅鉢	-	4.6+α	-	-	金雲母・白色粒子・長石・角閃石	(内)黒色 (外)黑茶色	条痕	ナデ後粗いミガキ・ケズリ後粗いミガキ		
第63図	1	28-1SP087	001	ミニチュア土器	鉢×椀	-	3.3	-	-	白色粒子・雲母・角閃石	(内)橙色 (外)橙色	指オサエ	指オサエ		
第63図	2	28-1SX027	002	須恵器	蓋3×4	-	0.6+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	(外)一部自然釉	
第63図	3	28-1SX027	001	土師器	壺×鉢	-	9.7+α	10.5	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・角閃石	(内)淡黄橙色 (外)淡黄橙色～橙褐色	摩滅の為不明	摩滅の為不明		
第63図	4	28-1SX028	003	須恵器	皿×盤	-	2.1+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	5	28-1SX028	006	土師器	壺d	-	2.8+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・赤色粒子	(内)淡橙色 (外)淡橙色	回転ナデ	回転ナデ	赤色塗彩	
第63図	6	28-1SX028	007	土師器	測(高杯×鉢?)	-	4.1+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・角閃石	(内)黄褐色 (外)黄褐色	ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		
第63図	7	28-1SX028	001	土師器	高盤	(24.6)	3.4+α	-	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい橙色～赤褐色 (外)橙色～赤褐色	ヨコナデ・手持ちヘラミガキ	ヨコナデ・回転ヘラミガキ	R002と同一個体	
第63図	8	28-1SX028	008	土師器	壺b	-	2.7+α	-	-	長石・石英	(内)灰色 (外)黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	(内外)黒斑	
第63図	9	28-1SX028	004	製塙土器	-	-	2.7+α	3.3	-	角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい橙色	ナデ	ナデ・指オサエ	(内)黒変(スス?)	
第63図	10	28-1SX028	005	金属製品	鉄滓	7.0	5.4	2.3	106.0g	-	-	-	-		
第63図	11	28-1SX034	003	須恵器	蓋1	-	1.2+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	12	28-1SX034	002	須恵器	壺H	-	3.2+α	-	-	白色粒子	(内)灰色 (外)暗灰色	回転ケズリ・回転ナデ	回転ケズリ・回転ナデ		
第63図	13	28-1SX034	001	須恵器	高壺a	-	4.7+α	10.2	-	白色粒子・黑色粒子	(内)淡黄灰色 (外)淡黄灰色	しぼり痕・回転ナデ	回転ナデ・しぼり痕	(外)沈線(柱～裾部)	
第63図	14	28-1SX034	005	土師器	壺a	-	2.4+α	(10.0)	-	白色粒・黑色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	ナデ	ヨコナデ・ヘラ切り離し		
第63図	15	28-1SX034	004	土師器	壺a	-	1.9+α	-	-	長石・石英・赤色粒子・角閃石	(内)橙色 (外)橙色	摩滅の為不明	摩滅の為不明・ヘラ切り離し		
第63図	16	28-1SX034	006	土師器	壺b	-	5.5+α	-	-	長石・石英	(内)茶褐色 (外)茶褐色	ハケ目後ヨコナデ・ケズリ後ナデ?	ヨコナデ・ハケ目		
第63図	17	28-1SX034	007	土師器	甑	-	6.9+α	-	-	白色粒子	(内)淡黄褐色 (外)淡黄褐色	工具ナデ	指オサエ・ナデ・ハケ目	把手	
第63図	18	28-1SX034	008	土製品	加工土器片	4.4	3.9	0.7	-	長石・石英・白色粒子	(内)灰褐色 (外)茶褐色	ナデ	平行タタキ	メンコ状(外)スス付着	
第63図	19	28-1SX034	009	石製品	台石	11.6+α	7.6+α	4.3+α	548.2g	-	-	-	-	花崗岩	
第63図	20	28-1SX036	002	須恵器	円面鏡?	-	1.4+α	-	-	白色粒子	(内)黒灰色 (外)黒灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	21	28-1SX036	001	土師器	壺d	-	4.6+α	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)橙色 (外)白橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ		
第63図	22	28-1SX037	003	須恵器	蓋?	-	1.5+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰白色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	(外)降灰	
第63図	23	28-1SX037	004	須恵器	蓋3	-	1.1+α	-	-	白色粒子	(内)灰白色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	24	28-1SX037	002	須恵器	壺c	-	1.5+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰白色 (外)灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ		
第63図	25	28-1SX037	005	須恵器	壺	-	2.9+α	-	-	白色粒子・黑色粒子・雲母	(内)灰褐色 (外)黒褐色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	26	28-1SX037	006	須恵器	猿面鏡	20.2	15.4	1.5	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰褐色 (外)灰色	同心円状タタキ後ナデ	格子状タタキ後ナデ	腰の脇部の転用打ち欠き痕	
第63図	27	28-1SX037	001	土師器	壺c	-	1.6+α	(8.6)	-	白色粒子・角閃石・長石・石英・赤色粒子	(内)黄褐色 (外)茶褐色	摩滅の為不明	摩滅の為不明・回転ヘラケズリ	赤色塗彩の痕跡	
第63図	28	28-1SX038	001	須恵器	蓋1	-	1.7+α	-	-	白色粒子	(内)灰色 (外)淡黄褐色	回転ナデ	回転ナデ?	(外)降灰	
第63図	29	28-1SX038	005	土師器	壺a4?	-	2.1+α	-	-	白色粒子・角閃石・赤色粒子・黑色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	30	28-1SX038	004	土師器	壺d	-	2.0+α	-	-	白色粒子・黑色粒子	(内)橙茶色 (外)橙茶色	回転ナデ	回転ナデ	赤色塗彩?	
第63図	31	28-1SX038	003	土師器	壺a	-	3.5+α	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)橙茶色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	32	28-1SX038	002	土師器	壺b	-	4.2+α	-	-	長石・白色粒子・角閃石・金雲母・赤色粒子	(内)茶褐色 (外)茶褐色	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	(外)黒斑	
第63図	33	28-1SX038	006	石製品	磨製石斧	5.9+α	1.5	1.0	14.0g	-	-	-	-		
第63図	34	28-1SX039	001	土師器	壺a4?	(14.4)	3.7	8.8	-	-	(内)橙茶色 (外)橙茶色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ		
第63図	35	28-1SX049	001	ミニチュア土器	鉢	2.8	3.5	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)淡橙茶色 (外)淡橙茶色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	(外)黒斑	
第63図	36	28-2SX160	001	須恵器	壺c?	-	3.2+α	-	-	黒色粒子・長石	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ		
第63図	37	28-2SX160	001	繩文土器	深鉢	-	3.9+α	-	-	金雲母・角閃石・長石・白色粒子	(内)にぶい黄褐色 (外)暗褐色	ナデ	ナデ	(外)刻目突起・スス付着	

第30表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表1

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第78図	1	SB005c	001	土師器	皿	-	0.9+α	-	-	長石・赤色粒子	(内)淡褐色 (外)橙色	暗文ミガキ	ナデ?	S024 都城系
第78図	2	SB055a	001	土師器	坏?	-	1.5+α	-	-	長石・橙色粒子	(内)黄褐色 (外)黄褐色	ナデ	ナデ	S136
第78図	3	SB055c	001	土師器	坏d	-	1.7+α	-	-	長石・石英・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ後ミガキ	S077
第78図	4	SB055c	003	土師器	坏d	-	1.3+α	-	-	長石・石英・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ後回転ヘラミガキ	回転ナデ後回転ヘラミガキへラ切り離し後ナデ	S077
第78図	5	SB055c	002	土師器	妻b	-	2.0+α	-	-	長石・石英・白色粒子	(内)茶褐色 (外)茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	S077
第78図	6	SB055c 柱痕	001	土師器	坏	-	1.1+α	-	-	長石・角閃石・石英	(内)橙色 (外)深褐色	回転ナデ	回転ナデ	S077柱痕
第78図	7	SB055e	001	土師器	坏a	-	1.4+α	(10.0)	-	長石・角閃石・白(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	S051
第78図	8	SB055f	003	土師器	小皿	-	1.6+α	-	-	長石・赤色粒子	(内)淡橙色 (外)淡橙色	回転ナデ	回転ナデ	S048 碗a?
第78図	9	SB055f	001	土師器	坏a?	-	2.9+α	-	-	長石・角閃石	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ後回転ナデ	S048
第78図	10	SB055f	002	土師器	坏a	(13.0)	4.5+α	-	-	長石・角閃石	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	S048
第78図	11	SB055g	002	土師器	坏a	-	2.8+α	-	-	長石・角閃石・赤色粒子	(内)淡橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	S049
第78図	12	SB055g	001	土師器	坏d	-	3.0+α	-	-	長石	(内)淡橙色 (外)橙色	回転ナデ後回転ヘラミガキ	回転ナデ後回転ヘラミガキ	S049
第78図	13	SB060i	001	土師器	坏a	-	0.9+α	-	-	砂粒	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	S028
第78図	14	SB075a	001	土師器	小皿	-	1.7+α	-	-	長石・橙色粒子	(内)淡灰褐色～淡褐色 (外)褐色～淡黄褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・手持ちヘラケズリ・ナデ	S188
第78図	15	SB075a	003	土師器	坏	-	2.5+α	-	-	角閃石・橙色粒子	(内)淡橙白色 (外)淡橙灰色	ナデ	ナデ・手持ちヘラケズリ	S188
第78図	16	SB075h	001	土師器	楕a	-	3.1+α	-	-	橙色粒子・長石・黑色粒子	(内)暗褐色 (外)赤褐色～淡灰褐色	回転ナデ・ナデ自後手持ちヘラケズリ	回転ナデ・ナデ後手持ちヘラケズリ	S167
第78図	17	SB080a	001	土師器	坏	-	2.6+α	-	-	角閃石・長石・石英・橙色粒子	(内)暗褐色 (外)深褐色	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ後ミガキ	S177
第78図	18	SB080b	001	土師器	坏	-	2.0+α	-	-	橙色粒子・長石	(内)淡橙褐色 (外)橙褐色	回転ナデ後ミガキ・指オサ工後ミガキ・ナデ	回転ナデ後ミガキ・指オサ工後ミガキ・ナデ	S144
第78図	19	SB080f 黒灰土	002	須恵器	短頸壺	-	1.7+α	-	-	黑色粒子・白色粒子	(内)淡灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	S194黒灰土
第78図	20	SB080f 黒灰土	001	黒色土A類	楕a	-	4.5+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)黑色～淡灰褐色 (外)淡橙褐色～橙褐色	ミガキ	ナデ	S194黒灰土
第78図	21	SA070c	002	須恵器	坏蓋	-	1.9+α	-	-	長石・黑色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	S098 九十九須恵器編年Ⅲ期
第78図	22	SA070c	001	土師器	楕B	(12.8)	4.6+α	-	-	石英・角閃石・長石	(内)暗褐色 (外)暗褐褐色	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	S098
第78図	23	SA071d	002	須恵器	蓋1	-	2.6+α	-	-	石英	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	S067
第78図	24	SA070d	001	須恵器	坏	-	2.9+α	-	-	石英	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	S067
第78図	25	SA090b	001	須恵器	蓋2	-	1.1+α	-	-	長石・黑色粒子	(内)淡灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	S102
第78図	26	SK040 黒色土	001	製塙器?		-	1.4+α	-	-	石英	(内)橙色 (外)褐色～褐橙色	指オサ工	指オサ工	SH030内
第78図	27	SK057	001	土師器	坏a	(14.6)	3.1+α	-	-	長石・白色粒子	(内)日橙色 (外)淡橙色	回転ナデ	回転ナデ	SH030内
第78図	28	SP086	001	須恵器	坏H	-	1.7+α	5.0	-	長石・白色粒子	(内)白色 (外)黒灰色	回転ナデ・ナデ	回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り離し後ナデ	SH030内
第79図	29	SE035 黒灰土	001	土師器	皿c	14.0	3.4	7.6	-	長石・石英・角閃石	(内)暗褐色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	
第79図	30	SE035 黒灰土	002	土師器	蓋a5	(15.2)	1.3	(10.0)	-	橙色粒子・角閃石・長石・白色粒子	(内)暗褐色 (外)黄橙色	回転ナデ後ミガキ・指オサ工	回転ナデ・回転ヘラケズリ後回転ナデ	
第79図	31	SE035 黒灰土	005	土師器	蓋5	-	1.8+α	-	-	石英・角閃石・長石	(内)暗褐色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	
第79図	32	SE035 黒灰土	011	土師器	坏a4	-	2.9+α	-	-	長石	(内)淡橙色 (外)淡橙色	回転ナデ	回転ナデ・工具ナデ	
第79図	33	SE035 黒灰土	014	土師器	坏a2×5	(13.2)	3.6	(7.8)	-	長石	(内)茶白色 (外)茶白色	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り離し後ナデ	精製土
第79図	34	SE035 黒灰土	006	土師器	坏c	-	1.3+α	(7.0)	-	角閃石・長石・石英	(内)淡橙白色 (外)淡橙白色	回転ナデ後ミガキ	回転ヘラケズリ・回転ナデ・粗いナデ・ナデ・回転ヘラ切り離し後回転ナデ	高台内部2次被熱?
第79図	35	SE035 黒灰土	007	土師器	坏c	-	3.1+α	(7.6)	-	角閃石・長石・石英・細かい砂粒	(内)暗黄色 (外)暗黄色	回転ナデ	回転ヘラケズリ・粗いナデ	
第79図	36	SE035 黒灰土	010	土師器	坏d	-	2.6+α	-	-	橙色粒子・石英	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ後回転ヘラミガキ	回転ナデ・回転ヘラケズリ後回転ナデ	精製土
第79図	37	SE035 黒灰土	009	土師器	坏d	-	4.0+α	-	-	橙色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ後ミガキ	回転ヘラケズリ後回転ナデ	精製土 鉢タイプ
第79図	38	SE035 黒灰土	015	土師器	小壺	-	3.6+α	(7.0)	-	長石・石英・角閃石・砂粒	(内)橙色 (外)暗橙茶色	回転ナデ・ナデ	回転ヘラケズリ後回転ナデ後ミガキ・回転ヘラケズリ	高台部朱塗り?
第79図	39	SE035 黒灰土	017	黒色土A類	楕	(19.0)	5.7+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・黑色粒子・白色粒子	(内)黑色 (外)橙色	密な回転ヘラミガキ	回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ	
第79図	40	SE035 黒灰土	019	黒色土A類	楕	-	2.2+α	(5.9)	-	長石・石英・角閃石・雲母・黑色粒子・白色粒子	(内)黑色 (外)橙色	ミガキ	回転ナデ・ミガキ?	
第79図	41	SE035 黒灰土	018	黒色土A類	楕	-	3.2+α	(8.1)	-	長石・石英・角閃石・黑色粒子・赤色粒子・白色粒子	(内)黑色 (外)橙色～白橙色	多方向ミガキ	粗いナデ・丁寧なナデ	
第79図	42	SE035 黒灰土	020	瓦	平瓦	12.4+α	6.6+α	3.5+α	-	白色粒子・赤色粒子	(表)青灰色 (裏)青灰色	布目痕・ケズリ	格子目タキ後ナデ	
第79図	43	SE035 黒茶粘土	005	土師器	蓋a5	13.2	2.6	6.7	-	白色粒子・黑色粒子	(内)黄灰色 (外)黄灰色～茶黑灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り離し後回転ナデ	

第31表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表2

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面	
第79図	44	SE035 灰色砂	001	土師器	坏a4	14.0	3.9	9.4	-	赤色粒子・黑色粒子・砂粒	(内)にぶい橙色～灰白色 (外)にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後回転ナデ・ 回転ヘラ切り離し後 ナデ	
第79図	45	SE035 灰色砂	003	土師器	坏a5	-	3.2+α	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・白色粒子・黒色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	
第79図	46	SE035 灰色砂	002	黒色土器A類	椀	-	2.2+α	6.8	-	長石・角閃石・石英・雲母・白色粒子・白色粒子	(内)灰橙色～灰茶色 (外)灰橙色～黒茶色	ミガキ	回転ナデ・回転ナデ 後ナデ	打ち欠き?
第80図	1	SK001	013	古式土師器	椀	12.7	5.0	-	-	雲母・長石・石英・角閃石	(内)橙色 (外)赤褐色	ヨコナデ・ハケ目後 相いミガキ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目後 ナデ	
第80図	2	SK001	010	古式土師器	高坏	(20.8)	13.6+α	-	-	白色粒子・角閃石・雲母・赤色粒子	(内)黄橙色～橙色 (外)黄橙色～橙色	ヨコナデ・ミガキ・ハ ケ目後ヘラミガキ・ ヘラケズリ後ナデ・ ナデ	摩滅の為不明・ミガ キ・ヨコナデ?	有段式 外来系 脚裾部穿孔4箇所?
第80図	3	SK001	003	古式土師器	複合口縁壺	(16.0)	7.5+α	-	-	石英・長石・金雲母・角閃石・赤色粒子	(内)淡黃橙色 (外)淡黃橙色	ヨコナデ・ナデ・指オ サエ	ヨコナデ・ハケ目後 ナデ	波状文
第80図	4	SK001	001	古式土師器	複合口縁壺	17.0	15.7+α	-	-	石英・長石・角閃石・金雲母	(内)明赤褐色 (外)淡黃橙色	ヨコナデ・ナデ・指オ サエ・工具ナデ後ミ ガキ・ケズリ・ケズリ 後工具ナデ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目後 ミガキ・ハケ目・ハ ケ目後ミガキ	波状文・貼付突蒂(頸部1条) (内)黒斑
第80図	5	SK001	007	古式土師器	複合口縁壺	23.0	47.4+α	-	-	長石・石英・角閃石	(内)橙色～にぶい褐色 (外)明黄褐色～橙色	ヨコナデ・ナデ・指オ サエ・ハケ目後ナデ・ ハケ目後ミガキ・工具 ナデ	ヨコナデ・ナデ・指オ サエ・ハケ目後ナデ・ ミガキ・ハケ目後相いミ ガキ	貼付突蒂(頸部1条・胸部上位 2条)・柳描波状文
第80図	6	SK001	002	古式土師器	甕	(14.2)	15.9	-	-	長石・石英・角閃石・雲母	(内)茶褐色 (外)茶褐色	ヨコナデ・ヘラケズ リ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・指オサエ 擬斜め方向のハケ目	布留式系 (外)黒斑・スス付着
第80図	7	SK001	005	古式土師器	甕	(15.8)	21.6	-	-	石英・長石・金雲母・白色粒子・赤色粒子	(内)にぶい橙色 (外)にぶい黄橙色～橙 色	ヨコナデ・ヘラケズ リ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・斜め横方 向のハケ目	布留式系 (外)黒斑
第80図	8	SK001	011	古式土師器	甕	(15.8)	19.2+α	-	-	金雲母・角閃石・長石・石英・赤色粒子	(内)橙色 (外)にぶい橙色	ヨコナデ・ヘラケズ リ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目・ナ デ	布留式系
第80図	9	SK001	004	古式土師器	甕	(17.4)	24.6	-	-	金雲母・石英・白 色粒子・角閃石・赤色粒子	(内)にぶい黄橙色 (外)褐色	ヨコナデ・ヘラケズ リ後工具ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ハ ケ目後ナデ	布留式系 (外)黒斑
第81図	10	SK001	012	古式土師器	甕	(18.0)	16.0+α	-	-	金雲母・長石・石英・白色粒子・角 閃石・灰黄色	(内)黒茶色 (外)灰黄色	ヨコナデ・ヘラケズ リ・ナデ・ハケ目後 ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ目 ヨコナデ・ハケ目後 ヘラケズリ	
第81図	11	SK001	006	古式土師器	甕	(16.0)	28.7	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	(内)橙色～黄灰色 (外)橙色	ハケ後ヨコナデ・ヘ ラケズリ・ヘラケズ リ後ハケ目後ナデ・ 指オサエ・ハケ目後 ナデ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・指オサエ・ ハケ目・ハケ目後ナ デ	在地系 (外)スス付着
第81図	12	SK001	014	古式土師器	甕	-	23.2+α	-	-	石英・長石・金雲母	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色	ヨコナデ・斜め方 向のハケ目・指オサエ ナデ	ヨコナデ・斜め方 向のハケ目・工具ナ デ	(外)黒斑
第81図	13	SK001	009	古式土師器	鉢	32.5	25.0+α	-	-	金雲母・角閃石・長石・石英	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色～灰黑色	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目・ナ デ	ヨコナデ・ハケ目後 ヨコナデ・ハケ目・指 オサエ・ナデ	貼付突蒂頸部1条 (外)黒斑・スス付着
第81図	14	SK065 灰茶土	004	土師器	蓋4	(13.5)	1.9	(4.0)	-	石英・角閃石・黑 色粒子・長石・橙色 粒子	(内)橙褐色～淡黄褐色 (外)橙褐色～淡黄褐色 粒子	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し後ナデ	
第81図	15	SK065 灰茶土	002	土師器	坏d	-	3.9+α	-	-	橙色粒子・石英・角 閃石・長石	(内)淡橙褐色 (外)淡赤褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ・ヘラ ケズリ痕?	
第81図	16	SK065 灰茶土	003	土師器	坏a	-	1.1+α	(8.0)	-	橙色粒子・角 閃石・黑色粒子・長 石・石英	(内)橙灰色 (外)淡黄灰色～橙褐色	回転ナデ・ナデ	ナデ・回転ヘラ切り 離し後ナデ	
第81図	17	SK065 灰茶土	001	土師器	甕	-	5.5+α	-	-	長石・角閃石	(内)褐色 (外)褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目	
第81図	18	SK065 灰茶土	008	黒色土器A類	椀	-	1.1+α	-	-	長石・石英	(内)黒色 (外)褐色	ミガキ	回転ナデ	
第81図	19	SK065 灰茶土	009	黒色土器A類	椀	-	1.5+α	-	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子	(内)黒色 (外)褐色	ミガキ	回転ナデ	
第81図	20	SK065 灰茶土	007	黒色土器A類	椀	-	1.5+α	-	-	長石・石英	(内)黒色 (外)褐色	多方向ミガキ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後回転ナデ	
第81図	21	SK065 灰茶土	005	土師器	蓋5	-	1.4+α	-	-	長石・角閃石	(内)褐色 (外)褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ・ヘラ ケズリ痕?	
第81図	22	SK065 灰茶土	004	土師器	蓋5	-	2.1+α	-	-	長石・石英・白色粒子	(内)褐色 (外)褐色	回転ナデ	回転ナデ	
第81図	23	SK065 灰茶土	002	土師器	坏a	-	2.9+α	-	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子・黑 色粒子	(内)褐色 (外)褐色	回転ナデ	回転ナデ	
第81図	24	SK065 灰茶土	003	土師器	坏a5×2	(12.8)	3.5	(7.0)	-	長石・角閃石・石英	(内)褐色～灰色 (外)褐色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズ リ後回転ナデ・ナデ	
第81図	25	SK065 灰茶土	001	土師器	坏d×a	-	2.8+α	-	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子・白 色粒子	(内)褐色 (外)褐色	回転ナデ	回転ナデ	
第81図	26	SK065 灰茶土	006	黒色土器A類	椀	-	2.0+α	-	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子	(内)淡黒色 (外)褐色	細かいミガキ	回転ナデ	
第81図	27	SK139	001	綠釉陶器	椀×皿	-	1.2+α	4.9	-	乳茶色	(釉)見込み・高台 施釉	施釉・回転ナデ	防長産	
第81図	28	SK139	004	土師器	蓋5	-	1.4+α	-	-	角閃石・長石・橙 色粒子	(内)橙褐色 (外)橙褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	
第81図	29	SK139	003	土師器	坏a	-	1.0+α	(7.8)	-	角閃石・長石・橙 色粒子	(内)橙褐色 (外)橙褐色	回転ナデ・ナデ	ナデ・ヘラ切り離 し後ナデ	
第81図	30	SK139	005	土師器	甕b	-	2.8+α	-	-	角閃石・長石・橙 色粒子	(内)明橙褐色 (外)褐色	ナデ	指オサエ後ナデ	
第81図	31	SK139	002	黒色土器A類	椀	-	3.6+α	-	-	角閃石・長石・黑 色粒子	(内)黒色 (外)暗灰色～橙褐色	斜め方向の密なミガ キ	横方向ミガキ	
第82図	1	SD020	015	須恵器	円面鏡	-	3.4+α	(16.0)	-	長石	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ・工具ナデ	

第32表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表3

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元数値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外側	
第82図	2	SD025	007	土師器	蓋c	-	2.1+α	-	つまみ径(2.6)	長石	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ後回転ヘラケズリ	回転ナデ・回転ナデ後回転ヘラミガキ	
第82図	3	SD025	004	土師器	蓋5	(18.5)	1.9+α	-	-	黒色粒子・角閃石・長石	(内)橙白色 (外)橙白色	回転ナデ・回転ナデ後ミガキ	回転ナデ	
第82図	4	SD025	006	土師器	皿a	(15.0)	2.6	(11.8)	-	角閃石・長石	(内)橙色 (外)橙白色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転切り離し後回転ヘラケズリ	
第82図	5	SD025	003	土師器	壺a×2	(14.6)	3.3	(8.8)	-	白色粒子・黑色粒子	(内)灰橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転切り離し後アーテ	
第82図	6	SD025	002	土師器	鍋?	-	8.5+α	-	-	角閃石・長石・石英・橙色粒子	(内)橙褐色 (外)淡黄褐色	指オサエ後工具ナデ・指オサエ後ヨコナデ		
第82図	7	SD025 暗灰茶褐土	039	国産陶器	皿	-	1.5+α	-	-	淡灰白色	(内)暗褐色釉 (外)暗褐色釉	施釉	施釉	瀬戸美濃産か
第82図	8	SD025 暗灰茶褐土	009	須恵器	蓋4	(16.6)	1.6+α	-	-	白色粒子	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ	回転ナデ・強い回転ナデ	(外)灰かぶり
第82図	9	SD025 暗灰茶褐土	010	須恵器	蓋4	-	1.6+α	-	-	長石・雲母・白色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
第82図	10	SD025 暗灰茶褐土	011	須恵器	壺c	(15.0)	4.5	(10.5)	-	長石	(内)灰白色 (外)灰白色	回転ナデ・指オサエ	回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラタ切り離し後回転ナデ	
第82図	11	SD025 暗灰茶褐土	018	須恵器	短頸壺	(6.4)	1.3+α	-	-	長石・黑色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第82図	12	SD025 暗灰茶褐土	014	須恵器	長頸壺	-	5.8+α	-	-	長石・雲母・白色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第82図	13	SD025 暗灰茶褐土	008	須恵器	長頸壺	-	6.3+α	-	-	角閃石・白色粒子	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第82図	14	SD025 暗灰茶褐土	015	須恵器	壺a	-	2.9+α	-	-	角閃石・長石・石英	(内)淡灰色～灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第82図	15	SD025 暗灰茶褐土	022	須恵器	壺a	(23.1)	4.4+α	-	-	長石・雲母	(内)淡灰褐色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第82図	16	SD025 暗灰茶褐土	042	土師器	皿	16.0	3.3	10.0	-	角閃石・長石・石英・橙色粒子・石英	(内)茶灰色 (外)灰茶色	ヨコナデ	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ・手持ち離し後持ちヘラケズリ	
第82図	17	SD025 暗灰茶褐土	043	土師器	皿	(19.4)	3.6	(13.2)	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子・黑色粒子・白色粒子	(内)灰黄色 (外)灰白色	ヨコナデ・面取り風の単位の大きいケズリ後ナデ	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ後ヨコナデ	
第82図	18	SD025 暗灰茶褐土	006	土師器	皿	19.5	4.3	9.7	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	口縁端部面取り風ナデ後ミガキ(暗風)	ナデ・手持ちヘラケズリ後ナデ	(内)ミガキ→緩方向・放射状・斜め方向
第82図	19	SD025 暗灰茶褐土	033	土師器	蓋2	-	2.0+α	-	-	長石・角閃石・橙色粒子	(内)橙褐色 (外)淡橙褐色	回転ナデ後回転ヘラミガキ	回転ナデ後回転ヘラミガキ	
第82図	20	SD025 暗灰茶褐土	021	土師器	壺A	(13.6)	5.1	(5.6)	-	長石	(内)橙色 (外)淡橙色	ヨコナデ・丁寧な工具ナデ	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ後ヨコナデ	
第82図	21	SD025 暗灰茶褐土	019	土師器	壺a	(19.4)	3.8	(15.8)	-	角閃石・長石・砂粒・石英	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ後横方向ヘラミガキ	ヨコナデ・回転ヘリズリ	
第82図	22	SD025 暗灰茶褐土	020	土師器	壺	-	4.6+α	-	-	橙色粒子・石英・白色粒子	(内)淡茶橙色 (外)淡茶橙色	ヨコナデ・横方向ヘラミガキ	ヨコナデ・細いナデ	
第82図	23	SD025 暗灰茶褐土	004	土師器	椀a	-	4.6+α	-	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ・指オサエ	
第82図	24	SD025 暗灰茶褐土	002	土師器	壺d	(13.4)	3.5	(6.0)	-	長石・石英	(内)橙褐色 (外)橙褐色	回転ナデ・回転ナデ後回転ヘラミガキ	回転ナデ・回転ナデ後回転ヘラミガキ	
第82図	25	SD025 暗灰茶褐土	003	土師器	壺d	14.5	3.4	7.7	-	橙色粒子・小石・角閃石・長石	(内)橙黄色 (外)橙黄色	回転ナデ・回転ナデ後回転ヘラミガキ	回転ナデ・回転ナデ後回転ヘラミガキ・回転ヘラケズリ・回転ヘラタ切り離し後回転ナデ・回転ヘラミガキ	
第82図	26	SD025 暗灰茶褐土	001	土師器	壺d	(14.6)	5.5	-	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子・黑色粒子・雲母	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・細いナデ	鉢タイプ
第82図	27	SD025 暗灰茶褐土	005	土師器	椀	(16.0)	4.4	(8.4)	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子・黑色粒子・雲母	(内)橙色 (外)橙色～橙褐色	回転ナデ	回転ナデ・細いナデ・ナデ・ケズリ	
第82図	28	SD025 暗灰茶褐土	025	土師器	壺×横瓶	(12.0)	4.5+α	-	-	角閃石・橙色粒子・石英・長石	(内)淡黃茶色 (外)淡根茶色	ナデ後指オサエ	ナデ・ナデ後指オサエ	
第82図	29	SD025 暗灰茶褐土	023	土師器	小壺	(9.1)	2.9+α	-	-	橙色粒子・黑色粒子	(内)淡橙褐色 (外)淡橙褐色	ナデ・指オサエ	ナデ	
第82図	30	SD025 暗灰茶褐土	026	土師器	蓋a	-	8.7+α	-	-	角閃石・長石・石英	(内)淡根茶色 (外)淡根茶色	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・強いナデ	
第82図	31	SD025 暗灰茶褐土	028	土師器	壺b?	-	6.6+α	-	-	角閃石・雲母・長石	(内)灰褐色～橙褐色 (外)橙褐色	回転ナデ・指オサエ・ハケ目・指オサエ後ナデ・ハケ目	回転ナデ・指オサエ後ナデ・ハケ目	(内)一部ス付着
第82図	32	SD025 暗灰茶褐土	007	土師器	甕	(17.6)	21.5+α	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	(内)淡黄褐色 (外)淡黄褐色	ナデの為不明・平行タタキ・指オサエ?	ナデ	摩滅の為不明・平行タタキ・指オサエ?
第82図	33	SD025 暗灰茶褐土	030	土師器	甕	-	5.5+α	-	-	長石・角閃石・石英・橙色粒子・黒色粒子	(内)褐色～橙褐色 (外)橙褐色	同心円状タタキ後ナデ・回転ナデ	タタキ目・回転ナデ	
第82図	34	SD025 暗灰茶褐土	040	瓦	平瓦	13.0+α	9.3+α	3.3+α	-	白色粒子・黑色粒子・雲母	(裏)黄灰色 (表)黄灰色～灰白色	布目痕	ハケ目	
第82図	35	SD025 暗灰茶褐土	034	ミニチュア土器	器台	-	4.0+α	-	-	角閃石・雲母・長石・黑色粒子	(内)褐色～淡褐色 (外)褐色～淡褐色	-	ナデ	
第82図	36	SD025 暗灰茶褐土	035	土製品	土錐	3.5	1.2	-	0.4 6.7g	角閃石・長石	(内)橙褐色～淡黄灰色 (外)橙褐色～淡黄灰色	-	ナデ・指オサエ	
第82図	37	SD025 暗灰茶褐土	037	土製品	土錐	6.1	1.5	-	0.5 13.8g	雲母・長石	(内)灰褐色 (外)灰褐色	-	指オサエ・ナデ	
第82図	38	SD025 暗灰茶褐土	036	土製品	土錐	6.6	1.7	-	0.5 15.8g	長石・石英・黒色粒子	(内)黄褐色～橙褐色 (外)黄褐色～橙褐色	-	ナデ・指オサエ・工具痕	小型
第82図	39	SD025 暗灰茶褐土	038	金属製品	刀子?	4.7	1.3	-	5.1g	-	-	-	-	下位3/程度木材遺存
第83図	40	SD025 暗灰茶褐土(焼土プラン)	002	須恵器	皿×壺	(8.5)	2.1+α	-	-	白色粒子	(内)黑灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ	

第33表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表4

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) ()は復元値				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	重量(g)			内面	外面	
第83図	41	SD025 暗灰茶褐砂質土 (燒土ブラン)	001	土師器	椀a	16.7	4.4	-	-	角閃石・橙色粒子・長石・砂粒	(内) 橙白色 (外) 橙白色	口縁部面部取り風・ヨコナデ(ミガキ風)・不定方向の丁寧なナデ	ヨコナデ・手持ちラケズリ後ナデ	口縁部打ち欠き痕 (外) 工具による沈線
第83図	42	SD025 暗灰茶褐砂質土	064	不明陶磁器	花瓶?	-	5.2+a	-	-	灰白黄色	釉 オリーブ色	施釉・貼付文	施釉	龍泉窯? (外) 茶葉
第83図	43	SD025 暗灰茶褐砂質土	005	須恵器	蓋	-	4.6+a	-	-	長石・雲母・石英	(内) 淡灰色 (外) 灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し後ナデ	九州須恵器編年IVA~IVB期
第83図	44	SD025 暗灰茶褐砂質土	003	須恵器	坏蓋	(11.0)	3.5	(3.1)	-	長石・角閃石・石英	(内) 黒灰色 (外) 黑褐色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後ナデ	九州須恵器編年IVA~IVB期
第83図	45	SD025 暗灰茶褐砂質土	004	須恵器	坏蓋	11.5	3.8	5.4	-	長石	(内) 橙白色 (外) 橙白色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ	九州須恵器編年IVA~IVB期
第83図	46	SD025 暗灰茶褐砂質土	035	須恵器	蓋	(13.8)	4.0	(7.4)	-	赤褐色粒子・砂粒・黒色粒子	(内) 淡赤橙色 (外) 淡赤橙色	ヨコナデ?・ナデ	ヨコナデ?	九州須恵器編年IVA~IVB期
第83図	47	SD025 暗灰茶褐砂質土	014	須恵器	蓋c	-	1.6+a	-	つまみ径(2.8)	長石・黑色粒子	(内) 淡灰色 (外) 淡灰色~暗灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し後ナデ	軋用鏡?
第83図	48	SD025 暗灰茶褐砂質土	015	須恵器	蓋c	-	2.3+a	-	つまみ径(3.1)	長石・石英・角閃石	(内) 淡灰茶色 (外) 淡灰茶色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し後ナデ	
第83図	49	SD025 暗灰茶褐砂質土	017	須恵器	蓋1	(12.4)	1.2+a	-	-	長石・白色粒子	(内) 暗灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	50	SD025 暗灰茶褐砂質土	025	須恵器	蓋c1	(13.5)	4.2	-	つまみ径(2.6)	長石・黑色粒子	(内) 暗灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後回転ナデ	
第83図	51	SD025 暗灰茶褐砂質土	007	須恵器	蓋1	(14.0)	2.2+a	-	-	長石・石英・黑色粒子	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ	
第83図	52	SD025 暗灰茶褐砂質土	006	須恵器	蓋4	(15.5)	1.7+a	-	-	黑色粒子・長石	(内) 淡灰色 (外) 淡灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
第83図	53	SD025 暗灰茶褐砂質土	010	須恵器	蓋4	(16.4)	2.0+a	-	-	長石・黑色粒子	(内) 暗灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	54	SD025 暗灰茶褐砂質土	011	須恵器	蓋4	(18.0)	2.1+a	-	-	石英・長石・黑色粒子	(内) 暗灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	55	SD025 暗灰茶褐砂質土	008	須恵器	蓋2	(17.6)	2.1+a	-	-	長石・黑色粒子	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	56	SD025 暗灰茶褐砂質土	012	須恵器	蓋4	(16.0)	2.2+a	-	-	石英・長石・角閃石・黑色粒子	(内) 淡褐色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	57	SD025 暗灰茶褐砂質土	009	須恵器	蓋3	(18.8)	2.3+a	-	-	長石・石英	(内) 暗灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後ナデ	
第83図	58	SD025 暗灰茶褐砂質土	079	須恵器	坏c	18.8	5.7	10.2	-	角閃石・石英・長石	(内) 淡灰色 (外) 淡灰色	回転ナデ・不定方向ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ・粗いナデ・回転ヘラ切り離し後回転ナデ	
第83図	59	SD025 暗灰茶褐砂質土	001	須恵器	坏c	-	1.7+a	(8.8)	-	黑色粒子・長石・角閃石	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	回転ナデ・不定方向ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ	
第83図	60	SD025 暗灰茶褐砂質土	016	須恵器	高坏a	-	1.3+a	(12.8)	-	長石・石英・角閃石	(内) 暗褐色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	61	SD025 暗灰茶褐砂質土	024	須恵器	壺	(5.6)	5.5+a	-	-	雲母	(内) 淡灰色~暗灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	62	SD025 暗灰茶褐砂質土	020	須恵器	壺?	-	2.2+a	-	-	長石・黑色粒子・石英	(内) 暗灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	63	SD025 暗灰茶褐砂質土	019	須恵器	壺a	-	2.8+a	-	-	長石・白色粒子	(内) 淡灰色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	64	SD025 暗灰茶褐砂質土	021	須恵器	壺	-	2.6+a	-	-	長石・石英・黑色粒子	(内) 淡暗褐色 (外) 暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	
第83図	65	SD025 暗灰茶褐砂質土	023	須恵器	壺	-	8.2+a	-	-	長石・石英・角閃石	(内) 暗灰色 (外) 暗褐色	回転ナデ	回転ナデ	荒尾産? 沈縛3条
第83図	66	SD025 暗灰茶褐砂質土	078	須恵器	壺a	21.4	37.6+a	-	-	長石・石英	(内) 暗褐色茶色 (外) 暗茶色~暗褐色茶色	回転ナデ・同心状の当て具痕・平行の当て具痕	回転ナデ・タタキ後 力目	
第84図	67	SD025 暗灰茶褐砂質土	003	土師器	小皿	(8.6)	1.7	(4.2)	-	長石・赤色粒子・白色粒子	(内) 淡橙色 (外) 橙色	回転ナデ	回転ナデ	S025暗灰褐砂
第84図	68	SD025 暗灰茶褐砂質土	044	土師器	皿a	-	2.9+a	-	-	長石・黑色粒子	(内) 淡黄褐色 (外) 暗黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	鉢タイプ
第84図	69	SD025 暗灰茶褐砂質土	034	土師器	皿a	(14.1)	3.0	(10.1)	-	赤褐色粒子・黑色粒子・砂粒	(内) 淡赤橙色 (外) 淡赤橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・工具ナデ	
第84図	70	SD025 暗灰茶褐砂質土	030	土師器	蓋c	-	2.6+a	-	つまみ径(3.6)	赤褐色粒子・乳白色粒子・黑色粒子	(内) 淡赤橙色 (外) 淡赤橙色	ナデ	ナデ・ヨコナデ・回転ヘラミガキ・回転ヘラケズリ後ミガキ	縫刻あり
第84図	71	SD025 暗灰茶褐砂質土	031	土師器	蓋5	(16.5)	2.1+a	-	-	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	(内) 淡橙色 (外) 淡橙色	回転ナデ・回転ナデ後ミガキ	回転ナデ・回転ナデ後ミガキ	
第84図	72	SD025 暗灰茶褐砂質土	045	土師器	坏a5	(14.0)	3.9	8.0	-	赤色粒子・黑色粒子・石英	(内) ぶいい橙色 (外) ぶいい橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後回転ナデ・回転ヘラ切り離し後ナデ	
第84図	73	SD025 暗灰茶褐砂質土	040	土師器	坏	-	2.7+a	(11.0)	-	角閃石・長石・石英	(内) 淡暗褐色 (外) 暗褐色	ナデ	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し後ナデ	
第84図	74	SD025 暗灰茶褐砂質土	042	土師器	坏a	-	4.2+a	-	-	角閃石・長石	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	回転ナデ	回転ナデ	
第84図	75	SD025 暗灰茶褐砂質土	036	土師器	坏c	-	1.5+a	(9.8)	-	褐色粒子・乳白色粒子・黑色粒子・砂粒	(内) 淡褐色 (外) 淡赤橙色	ナデ	ヨコナデ・ヘラ切り離し	
第84図	76	SD025 暗灰茶褐砂質土	038	土師器	坏d	(13.0)	3.4	(6.2)	-	褐色粒子・乳白色粒子・黑色粒子	(内) 淡赤褐色 (外) 淡褐色	調整不明瞭	回転ヘラケズリ・調整不明瞭	
第84図	77	SD025 暗灰茶褐砂質土	037	土師器	坏d	(14.8)	4.5	(7.1)	-	赤褐色粒子・乳白色粒子・黑色粒子	(内) 淡赤褐色 (外) 淡赤褐色	ナデ後回転ヘラミガキ	ヨコナデ後回転ヘラミガキ・回転ヘラケズリ	焼成後内面から打ち割り・穿孔
第84図	78	SD025 暗灰茶褐砂質土	043	土師器	坏d	(17.2)	4.3+a	-	-	角閃石・長石・石英	(内) 淡暗褐色 (外) 暗褐色	回転ヘラミガキ・回転ナデ	回転ヘラミガキ・回転ナデ	
第84図	79	SD025 暗灰茶褐砂質土	039	土師器	坏d	(14.8)	4.1+a	-	-	長石・角閃石・橙色粒子・石英	(内) 淡暗褐色~淡黃褐色 (外) 淡褐色~暗褐色	回転ナデ・細密なナデ・ミガキ痕	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後ナデ	
第84図	80	SD025 暗灰茶褐砂質土	041	土師器	坏d	(16.8)	3.3+a	-	-	角閃石・長石	(内) 暗赤褐色 (外) 淡赤褐色	回転ナデ後ミガキ・放射状のナデ後ミガキ	回転ナデ後ミガキ・回転ヘラケズリ後ナデ後ミガキ	摩滅により不明瞭
第84図	81	SD025 暗灰茶褐砂質土	026	土師器	高盤	-	2.6+a	-	-	長石・白色粒子	(内) 淡橙色 (外) 淡橙色	回転ナデ?	回転ナデ?	摩滅により不明瞭
第84図	82	SD025 暗灰茶褐砂質土	027	土師器	高坏脚	-	9.0+a	-	-	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	(内) 淡赤褐色 (外) 淡茶色	回転ナデ・回転ナデ	工具ナデ・回転ナデ	
第84図	83	SD025 暗灰茶褐砂質土	047	土師器	高坏	-	5.2+a	-	-	砂粒・赤褐色粒子・黑色粒子・白色粒子	(内) 淡赤褐色 (外) 淡赤褐色	器面剥離のため不明瞭	ヨコナデ・カキ目状のヨコナデ	脚部全面打ち欠き 环部一部打ち欠き?
第84図	84	SD025 暗灰茶褐砂質土	002	土師器	鉢	-	3.1+a	-	-	長石	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	S025暗灰茶褐砂

第34表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表5

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) (0は復元数値)				胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重さ(g)			内面	外面	
第84図	85	SD025 暗灰茶褐色砂質土	029	土師器	小壺	-	1.5+α	-	-	長石・赤色粒子	(内)橙色 (外)淡橙色	回転ナデ	回転ナデ	
第84図	86	SD025 暗灰茶褐色砂質土	028	土師器	小壺	(7.2)	4.5+α	-	-	長石・角閃石・雲母・黒色粒子・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ヘラミガキ(暗文風)	
第84図	87	SD025 暗灰茶褐色砂質土	001	土師器	壺b	-	4.5+α	-	-	石英・砂粒	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・ハケ目	S025暗茶褐色
第84図	88	SD025 暗灰茶褐色砂質土	054	土師器	壺b	(26.0)	4.9+α	-	-	石英・長石	(内)淡茶褐色～淡橙色 (外)淡茶褐色	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目	
第84図	89	SD025 暗灰茶褐色砂質土	053	土師器	壺b	(25.2)	8.5+α	-	-	石英・長石・角閃石	(内)茶褐色～淡黄褐色 (外)暗茶褐色～淡黃褐色	ヨコナデ・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	
第84図	90	SD025 暗灰茶褐色砂質土	052	土師器	甕把手	3.9	3.3+α	-	-	角閃石・橙色粒子・長石	(内)淡橙灰色 (外)黒褐色～相褐色	ナデ	指オサエ・ナデ	
第84図	91	SD025 暗灰茶褐色砂質土	050	土師器	豊後型甕	-	8.4+α	-	-	赤褐色粒子・砂粒	(内)淡黒褐色 (外)淡相褐色	ナデ	ナデ・横方向ハケ目 orタタキ	
第84図	92	SD025 暗灰茶褐色砂質土	048	土師器	甕	-	6.0+α	-	-	橙色粒子・角閃石・長石・石英・黒色粒子	(内)茶褐色 (外)淡茶褐色	指オサエ後ナデ	回転ナデ	
第84図	93	SD025 暗灰茶褐色砂質土	051	土師器	甕	-	6.2+α	-	-	角閃石・石英・長石	(内)黄褐色 (外)柑橘色～黃灰色	回転ナデ	カキ目	
第84図	94	SD025 暗灰茶褐色砂質土	077	土師器	横瓶	-	28.3+α	-	-	石英・砂粒	(内)茶白色 (外)茶白色	ヨコナデ・ケズリ痕 後ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ カキ目	
第85図	95	SD025 暗灰茶褐色砂質土	065	瓦	丸瓦	15.1+α	15.2+α	9.5	-	白色粒子・黒色粒子	(裏)灰色 (表)灰色	ケズリ・布目痕	ハケ目・ケズリ	面取り2箇所
第85図	96	SD025 暗灰茶褐色砂質土	067	瓦	平瓦	10.3+α	7.0+α	2.2+α	-	白色粒子・黒色粒子	(裏)黒灰色 (表)黒灰色	布目痕	タタキ	
第85図	97	SD025 暗灰茶褐色砂質土	066	瓦	平瓦	12.7+α	10.4+α	5.2+α	-	白色粒子・雲母・角閃石	(裏)灰黄色 (表)灰黄色	ケズリ・布目痕	ハケ目・ケズリ	面取り2箇所
第85図	98	SD025 暗灰茶褐色砂質土	061	土製品	土錐	5.3	1.6	-	0.6 11.8g	角閃石・長石・石英	(外)灰橙色	-	指オサエ	小型
第85図	99	SD025 暗灰茶褐色砂質土	060	土製品	土錐	7.2	2.5	-	0.4~0.5 45.7g	長石・角閃石	(外)茶橙色	-	指オサエ	
第85図	100	SD025 暗灰茶褐色砂質土	001	土製品	土錐	8.1	1.4	-	0.6~0.7 18.1g	長石・石英	(外)茶色	-	指オサエ	S025灰褐色
第85図	101	SD025 暗灰茶褐色砂質土	070	金属製品	玉	1.3	-	-	11.1g	-	-	-	-	
第85図	102	SD025 暗灰茶褐色砂質土	068	銅製品	銅鞘	2.2	2.9	0.2~0.3	7.6g	-	-	-	-	錆帶か
第85図	103	SD025 暗灰茶褐色砂質土	069	銅製品	不明銅製品	6.2+α	1.6+α	0.3~0.4	11.2g	-	-	-	-	銅鏡破片?
第85図	104	SD025 暗灰茶褐色砂質土	074	石製品	玉	0.3	0.25	-	0.1	-	(外)青緑色	-	-	重量計測不能
第85図	105	SD025 暗灰茶褐色砂質土	073	石製品	紡錘車	3.3	-	0.4	9.2g	-	(外)暗緑灰色	-	-	
第85図	106	SD025 暗灰茶褐色砂質土	071	石製品	砥石	6.8+α	2.5	1.5	44.9g	-	(外)茶褐色	-	-	安山岩?
第85図	107	SD025 暗灰茶褐色砂質土	072	石製品	砥石	5.3+α	3.8	1.8	78.3g	-	(外)淡灰色	-	-	砂岩
第85図	108	SD025 暗灰茶褐色砂質土	075	石製品	砥石	9.9	2.7	1.3	56.4g	-	-	-	-	整形時のミガキ 錆付着・鉈紋岩
第85図	109	SD025 灰茶褐色砂質土	025	須恵器	皿c	-	1.6+α	(16.0)	-	白色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ・不定方向ナデ	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し・後回転ヘラ ケズリ	輪用窓?
第85図	110	SD025 灰茶褐色砂質土	016	須恵器	坏c	-	2.3+α	8.0	-	長石・角閃石・白色粒子	(内)濃灰色 (外)濃灰色	ナデ?	回転ナデ	転用窓? 打ち抜き
第85図	111	SD025 灰茶褐色砂質土	002	須恵器	坏c	(15.0)	4.5	(11.1)	-	長石・石英	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ	S025暗砂
第85図	112	SD025 灰茶褐色砂質土	017	須恵器	坏c	(15.2)	4.8	(11.0)	-	長石・角閃石・白 (内)灰色～灰黑色 色粒子・黒色粒子 (外)灰色～灰黑色	回転ナデ	回転ナデ・工具による ナデ?(線状)・回転 切り離し・後回転ナデ		
第85図	113	SD025 灰茶褐色砂質土	006	須恵器	坏a	(14.5)	3.6	(10.2)	-	長石・角閃石・白 (内)橙色 (外)柑橘色～柑茶色	回転ナデ・不定方向ナデ	回転ナデ・回転ヘラ 切り離し・後回転ナデ		
第85図	114	SD025 灰茶褐色砂質土	026	須恵器	高坏a	-	8.4+α	-	-	長石・石英・白色 粒子・黒色粒子	(内)淡赤色 (外)淡赤色	不定方向ナデ	回転ナデ	坏部・脚根部打ち欠き
第85図	115	SD025 灰茶褐色砂質土	010	土師器	皿	-	2.2+α	-	-	長石・角閃石・赤 色粒子	(内)淡褐色 (外)淡褐色	ナデ後ミガキ	ナデ	口縁部穿孔有
第85図	116	SD025 灰茶褐色砂質土	001	土師器	皿×坏	-	3.8+α	-	-	長石・角閃石・石英 赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ	S025暗砂
第85図	117	SD025 灰茶褐色砂質土	007	土師器	坏c	-	1.7+α	(10.1)	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子 黒色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転切り 離し	高台内 黒色
第85図	118	SD025 灰茶褐色砂質土	001	土師器	坏d	-	2.9+α	-	-	長石・白色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ後ミガキ	
第85図	119	SD025 灰茶褐色砂質土	008	土師器	坏d	-	2.7+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	丁寧なナデ後暗文風 ミガキ	ヘラケズリ後回転ナ デ後ミガキ	
第85図	120	SD025 灰茶褐色砂質土	009	土師器	坏d	-	2.8+α	-	-	長石・角閃石	(内)白色 (外)茶色	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ後ミガキ	
第85図	121	SD025 灰茶褐色砂質土	002	土師器	坏d	-	4.5+α	-	-	長石・石英・角閃 石・赤色粒子・白色 粒子・黒色粒子	(内)橙色 (外)褐橙色	回転ナデ・ナデ後細 密なミガキ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後回転ナデ	都城系か 鉢タイプ
第85図	122	SD025 灰茶褐色砂質土	003	土師器	坏d	-	4.2+α	-	-	長石・石英・角閃 石・雲母・赤切k粒 子・白色粒子・黑 色粒子	(内)橙色 (外)褐橙色	回転ナデ後丁寧なミ ガキ	回転ナデ・ナデ後回 転ナデ	
第85図	123	SD025 灰茶褐色砂質土	029	土師器	坏d	(15.0)	5.9	(6.6)	-	長石・角閃石 (内)橙色 (外)橙色	回転ナデ・回転ヘラ ミガキ	回転ナデ・回転ヘラ ミガキ	回転ナデ・回転ヘラ ミガキ	鉢タイプ
第85図	124	SD025 灰茶褐色砂質土	013	土師器	壺E×F	-	7.5+α	-	-	長石・角閃石	(内)淡黒灰色 (外)淡黒灰色	ナデ・ケズリ	ナデ	
第85図	125	SD025 灰茶褐色砂質土	012	土師器	壺b	-	6.1+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子・赤色粒子	(内)淡赤橙色 (外)淡茶色	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ	(外)一部被熱のため剥離
第86図	126	SD025 灰茶褐色砂質土	011	土師器	壺a	(18.5)	7.0+α	-	-	長石・角閃石・白 色粒子	(内)黄橙色 (外)黄褐色	回転ナデ	回転ナデ・ハケ目	須恵器模倣?

第35表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表6

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) 0は復元数値					胎土	色調	調整・装飾		備考	
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)			内面	外面		
第86図	127	SD025 灰茶褐色粘土	014	土師器	瓶	-	4.7+a	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ		
第86図	128	SD025 灰茶褐色粘土	027	瓦	平瓦	15.3+a	8.9+a	3.3+a	-	-	長石・石英・角閃石・雲母	灰黄色	布目痕・繩目痕・ケズリ	ハケ目・ケズリ	面取り2箇所	
第86図	129	SD025 灰茶褐色粘土	028	瓦	平瓦	12.4+a	11.4+a	4.5+a	-	-	長石・石英・角閃石・雲母	(裏)暗灰褐色 (表)暗灰褐色	布目痕・ケズリ	ハケ目・ケズリ	面取り2箇所	
第86図	130	SD025 灰茶褐色粘土	003	瓦	平瓦	17.4+a	9.6+a	3.8+a	-	-	白色粒子	(内)黄灰色 (外)黄灰色	ケズリ・布目痕	ハケ目・ケズリ	S025暗灰砂 面取り2箇所	
第86図	131	SD025 灰茶褐色粘土	004	瓦	平瓦	16.6+a	15.9+a	4.3	-	-	白色粒子・金雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄褐色	布目痕・ケズリ	ハケ目・ケズリ	S025暗灰砂 面取り1箇所	
第86図	132	SD025 灰茶褐色粘土	030	石製品	不明	11.7	7.2	5.0	357.4g	-	-	-	-	-	凝灰岩	
第86図	133	SD025 黒灰粘土	009	須恵器	壺×蓋	-	1.4+a	-	-	-	長石・石英	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ後回転ナデ	环蓋?	
第86図	134	SD025 黒灰粘土	008	須恵器	壺	-	2.5+a	-	-	-	長石・角閃石	(内)灰色 (外)灰色	回転ナデ	回転ナデ		
第86図	135	SD025 黒灰粘土	003	土師器	皿	-	1.9+a	-	-	-	長石・石英	(内)橙色 (外)橙色	ナデ	ナデ		
第86図	136	SD025 黒灰粘土	002	土師器	壺	-	3.3+a	-	-	-	長石・角閃石・石英	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ		
第86図	137	SD025 黒灰粘土	001	土師器	壺a	-	2.0+a	(10.0)	-	-	長石・石英	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し後ナデ		
第86図	138	SD025 黒灰粘土	004	土師器	鉢	-	6.9+a	-	-	-	角閃石・長石	(内)橙色 (外)白茶色	回転ナデ	回転ナデ		
第86図	139	SD025 黒灰粘土	006	土師器	甕b	-	3.4+a	-	-	-	長石・石英	(内)橙色	ヨコナデ	ヨコナデ		
第86図	140	SD025 黒灰粘土	005	土師器	甕b	-	3.4+a	-	-	-	長石・角閃石・石英	(内)橙色 (外)橙色	ヨコナデ	ヨコナデ		
第86図	141	SD025 黒色土	001	須恵器	鉢	-	5.5+a	-	-	-	長石・角閃石・白色粒子・黑色粒子	(内)灰色 (外)灰茶色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ		
第86図	142	SD089 黒灰土	001	須恵器	壺	-	2.0+a	-	-	-	長石・石英・黑色粒子	(内)暗灰色 (外)暗灰色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ		
第86図	143	SD089 黒灰土	002	土師器	甕	-	2.4+a	-	-	-	角閃石・長石	(内)赤褐色～淡褐色 (外)墨褐色～淡褐色	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ		
第86図	144	SD089 黒灰土	003	土師器	鍋?	-	3.4+a	-	-	-	角閃石・石英・長石	(内)橙褐色 (外)暗褐色	ナデ	ナデ		
第86図	145	SP071	001	土師器	壺a	-	2.6+a	-	-	-	長石・赤色粒子	(内)橙色 (外)橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ ケズリ		
第86図	146	SP071	002	土師器	甕	(13.0)	2.5+a	-	-	-	長石・白色粒子	(内)灰黑色 (外)灰茶色	回転ナデ	回転ナデ		
第86図	147	SP116	001	土師器	壺?	-	1.8+a	-	-	-	角閃石・長石・石英	(内)淡灰褐色～淡黃色 (外)淡灰褐色～棕褐色	ヨコナデ・指オサエ 後ナデ	ヨコナデ・手持ち ラケズリ		
第86図	148	SP198	001	ミニチュア土器	鉢	3.8	3.3	0.7	-	-	角閃石・長石	(内)暗灰色～淡褐色 (外)暗褐色～淡褐色	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ		
第86図	149	SX004	001	国産陶器	皿	-	1.6+a	(8.0)	-	-	灰色	(内)淡灰褐色 (外)高台部鉄軸	施釉	回転ケズリ・施釉	(内)灰かぶり、砂付着 (外)部分的に露胎	
第86図	150	SX004	002	石製品	トヂン?	-	10.7+a	9.9	850.0g	長石・石英	茶褐色	-	-	ナデ・指オサエ(部分的 に工具ナデ痕)	窯道具?・自然釉	
第86図	151	暗灰茶褐色土	001	ミニチュア土器	鉢	4.0	2.7	-	-	-	角閃石・長石	(内)淡褐色～棕褐色 (外)灰褐色～棕褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ・ヨコナデ		

第36表 大道遺跡群第36次調査遺物観察表

挿図番号	遺物番号	遺構番号	R番号	種別	器種	法量(cm) 0は復元数値					胎土	色調	調整・装飾		備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)			内面	外面	
第90図	1	SD025 暗褐色粘土	001	土師器	壺c	(10.5)	4.4	(7.0)	-	-	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒子・黑色粒子・白色粒子	(内)橙色 (外)橙色	ミガキ・回転ナデ後 回転ヘラミガキ・回転ナデ後ナデ	回転ナデ後回転ヘラ ミガキ・ミガキ	
第90図	2	壊乱	001	瓦	丸瓦	24.4+a	13.4	6.9	-	-	白色粒子・赤色粒子	(内)灰色 (外)灰色	(裏)布目痕	(表)ケズリ・ナデ・タタキ後ナデ	

第Ⅳ章 総括

第1節 調査成果の時代別整理

1 はじめに

今回、『大道遺跡群6』に所収した調査成果は、平成25年7月竣工予定の「ホルトホール大分」建設に伴う事前調査として実施したものである。敷地面積は約19,000m²に及ぶが、確認調査を行い遺跡の分布状況を把握した結果、本調査の面積は約8700m²となった。

遺跡地の様相は、調査対象全域において建物跡や井戸跡、溝跡及びピット群が広範囲に多数展開しており、一部を現代の建物基礎等により削平されているものの、良好に遺存していた。確認された遺構は、弥生時代後期～平安時代初め頃までに該当し、その中でも、古墳時代前期及び8世紀後半～9世紀前半頃を中心とする古代の遺構に特筆すべき成果を得ることができた。以下、各調査地点の成果を総合的に捉え、時代別に整理を行い、主要遺構を中心として略述する。

2 時代別の調査成果

【縄文時代】

これまでの大遺跡群における調査状況と同様、明確に縄文時代と位置づけられる遺構は検出されていない。但し、28-2SD150 や 28-2SD205 より縄文時代後期～晩期に該当する破片資料が出土している。

【弥生時代】

弥生時代の遺構分布は希薄である中で、第21次調査地で遺物が大量廃棄された遺構が検出されている(21SK020)。弥生時代後期前葉～中葉頃の特徴を有した大・中・小の各タイプの甕や安国寺式複合口縁壺、短頸壺が完形復元可能な良好な状態で出土している。また、瀬戸内系の様相を呈した土器も共伴しており、大分平野を含めた瀬戸内地域の土器編年を検証する上で、重要な資料になるものと考えられる。同調査地点では、21SK040・050、21SP008からは、弥生時代後期後葉頃の所産である甕や脚付鉢等が出土している。他の調査地点からは弥生時代の遺構は発見されておらず、第21次調査地に限定される。今回の報告書に所収している調査地よりやや北に位置する第20・23次調査地では弥生時代後葉～終末期に該当する遺構が確認されている。しかしながら、この時期の遺構は極めて少数であり、点的な分布でしか認められない。

【古墳時代】

調査地全域に遺構が分布しており、大道遺跡群全体において最も遺構の確認事例が多い時期である。古墳時代の遺構は、竪穴建物跡・井戸跡・溝跡・廃棄土坑といった多様な内容である。竪穴建物跡は、第28次調査地に3基(28-1SH050・058・059)、第31次調査地点に1基(31SH030)がある。28-1SH050は古墳時代中期初頭頃、28-1SH059と31SH030はやや距離が離れるが主軸方向が近似しており、古墳時代後期に比定される。その他、削平により主柱穴だけが残ったと思われる竪穴建物跡も複数存在している。井戸跡は第28次調査地で4基(28SE010・020・170・215)確認されている。何れも素掘り構造である。28SE010からは完形に近い甕・壺がまとまって出土している。土器には打ち欠きが施されており、廃絶にあたり祭祀が行われたものと判断される。大道遺跡群内では、このような事例が複数確認されていることから、今後、該当する遺構の抽出を行い、共通性を見出し、当該時期の井戸祭祀の行為についての検証が必要である。廃棄土坑は第31次調査地で1基(31SK001)発見されている。溝跡は、古墳時代前期と後期の二つの時期のものが存在する。第21次～第28次調査地へと東西方向に延びる溝(21SD035・025・125)は、第23次調査地にある23SD170と並行するような配置をしている。28SD025は21SD015と結節するよう見えるが、仮に同一溝と認定した場合、第23次調査地で確認された推定環濠と考えられる溝跡と同様な形状を呈し、2重環濠であった可能性も示唆される。

古墳時代後期の遺構は、第 28 次調査地で南から弓なりに北へと延びる溝（28SD045・145）がある。水流痕跡が認められており、水路の機能を有していたと考えられる。

これまで大道遺跡群では、古墳時代中期～後期の様相は明確ではなかった。しかし、今回の成果により、遺跡群内の北～北東側に当該時期の遺構が展開していることが判明した。また、古代の大溝より九州須恵期編年Ⅲ～Ⅳ期に該当する坏蓋・坏身が出土していることも、調査地周辺に古墳時代中期～後期の遺構が存在した証左となる。

古墳時代前期の土器について概観すると、古墳時代前期に該当する資料の大部分は布留式系、若しくはその影響を受けたものが占めている。壺・甕の胴部形状を見るとナデ肩・球形化が進んでいる。また、壺の内面にはヘラケズリが施されるものも認められる。複合口縁壺には胴部にベルト状突帯を持たないものばかりである。高坏は布留式系とともに、有段式のいわゆる庄内系高坏が認められ、在地系のものは極めて少ない。

上記の土器群は、これらの特徴から、概ね古墳時代前期中葉～後葉頃（坪根編年古墳時代土師器Ⅱ b～Ⅲ期）と捉えることができる。主な遺構の時期については以下のとおりである。

28SE010・31SK001	古墳時代前期前葉～中葉頃	28SE170	古墳時代前期中葉～後葉頃
28SE020	古墳時代前期後葉頃		

【古代：8世紀末～9世紀前半頃】

古代の遺構は、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、道路状遺構と多様である。掘立柱建物跡は主に第 31 次調査地に集中している。周辺の調査から主軸方位が N-25° -W 前後のグループと N-15° -W 前後の大きく 2つ区分される。第 31 次調査地においては 31SB055・060・075・080 が前者に、31SB005・013 が後者に該当し、身舎面積は概ね 20～30 m² の範囲で、比較的小規模な掘立柱建物跡群である。前者の主軸方位は、周辺調査地を東西方向に縦断する大溝と近似していることから、立地や建物配置に影響を与えていたと考えられる。井戸跡は第 31 次調査地で 1 基認められている。周辺調査全体を合わせると 5 基存在し、掘立柱建物跡群の分布に合致するよう 1～2 基配置されている。素掘り構造が多数を占めるが、5SE140 では板材を井桁状に組んだ井筒構造を、31SE035 の井筒は丸太刳り貫きの井筒を有している。古代の遺構群の中で特筆されるものは、各調査地を横断する大溝が挙げられる。幅約 4 m から最大で 7 m を有し、全長 200 m 以上にわたって、さながら官道のように直線的に延びる。溝底面の標高は約 4.5～4.6 m で、北西部（第 8 次付近）、中央部（第 28-1 次）が約 4.3 m と深くなる。水流方向は第 31 次調査地では北西方向（海側）から、第 28 次調査地では南東方向（台地側）であったことが看取され、砂礫層も厚く堆積していることから、かなりの水流があったものと推測される。規模や全体プランから、単なる水路とは言い難い。掘削に際しては計画的に土木工事が施工されたことが想定される。大溝は海～国衙推定地である上野台地方面へと延びており、海（港・津）からの物資を運ぶための人口河川・運河とも考えられる。ただ、現状では仮説の一つでしかなく、大溝の性格を判明するには、大溝の始点・終点にあたる遺跡の様相を検討することが重要である。

第 28 次調査では、大溝の北と南の両岸に、近接して波板状連続土坑（28SF040・041・042・043）、不定形プランを呈する連続土坑（28SX037～039）、底面に小穴が多数残る溝状遺構などが造作され、この地点の大溝の底面は他と比べ約 0.2～0.3 m 深くなっている。このような遺構群は道路又は通路としての機能が想定されており、北岸に配される波板状連続土坑を辿ると空閑地とも思える遺構密度の希薄なエリアにいたり、第 23 次調査の掘立柱建物跡群の方向へと達する。南岸側にも大溝から南東方向、南方向へと分岐するように波板状連続土坑が配されている。28SF040 をはじめとするこれら遺構群が形成される場所は、水路から陸地への接岸地点の一つであったと認識することができる。

その他、第 31 次調査地から第 5 次調査地へと延伸する溝（31SD089）が、北東部で円弧状に巡っている。一部、掘立柱建物跡と重複関係が生じるが、大溝北側エリアで別区画が存在した可能性が高い。

古代の遺構分布は、ほぼ大溝を境にして北側に限定されていることから、土地利用について規制がなされてい

たと考えられる。

【中世以降】

この段階で、最も古く位置づけられる遺構は 28SE165 である。白色研磨土師器が出土しており、その形態から 12 世紀中頃の所産と判断される。第 28-1 次調査区では掘立柱建物跡が 2 棟（28SB080・090）あるが、出土遺物が無いため、時期は明確ではない。近世以降になると、溝が多数構築されるようになる。初瀬井路の開削に伴い耕地化が進展したことが要因として挙げられる。但し、溝跡群は古代の大溝や古墳時代の推定環濠跡と伸展方向が類似し、北西から南東に向かって斜行するものが大半を占める。地形的な要因があるのか、古代以降、土地利用について規制が生じているかは定かではないが、留意する必要がある。

第 2 節 古代の建物配置及び遺物について

今回の報告対象地点を中心に既報告地点も含めて概略すると、確認された古代の建物跡は出土遺物等より 8 世紀末～9 世紀前半頃に該当し、全て掘立柱建物跡に限定される。これは小田氏（1996）の言うところの「掘立柱単独型」に該当し、分類項目では E 類集落に分類される。小田氏は E 類集落を更に a～d 類に細分しており、大道遺跡群は建物配置状況から「比較的大規模な建物群が規則的に配される遺跡—Ec 類」にあたると考えられる。大道遺跡群で確認されている掘立柱建物跡は、規模が確定されているものに限定すると、2 間 × 3 間 → 7 棟、2 間 × 2 間 × 2 間 × 4 間・1 間 × 3 間 → 3 棟、2 間 × 5 間・1 間 × 5 間・1 間 × 4 間・3 間 × 5 間・1 間 × 2 間 → 各 1 棟で構成されている。身舎面積については、15～20 m² → 6 棟、25～30 m²・30～35 m² → 4 棟、20～25 m² → 3 棟、50 m²以上 → 2 棟、40～45 m² → 1 棟、5～10 m² → 1 棟となっている。30 m²前後が 8 棟、40 m²以上が 3 棟と中規模～大規模な建物が比較的多いことが窺える。建物配置を見ると、大部分が大溝と併行するように南北棟を基本とし、整然と配されているが、北西から南東方向に展開するに従い、大溝との距離が縮まり、建物規模も縮小化する状況が看取される。建物跡群は主軸方位から 2 つのグループに分けられるが、配置の上でも、大きく第 23 次調査地と第 5・28・31 次調査地の 2 つに区分される。また、これら建物跡群は直接的な重複関係を生じる部分が少ないという点も特徴として挙げられる。

次に出土遺物について概観すると、遺物の構成主体は須恵器・土師器の供膳具が占め、須恵器の量が顕著である。供膳具のうち、土師器坏 d は精製土を使用し、赤橙色を呈し、内外にミガキ痕が顕著に施されるものが破片を含め多く見られ、深碗のようなタイプも複数ある。供膳具に次ぐのが須恵器の甕・長頸壺といった貯蔵具と企救型甕を代表とする土師器の煮炊き具である。特殊製品については、輸入磁器である越州窯系青磁、奈良三彩、灰釉陶器、綠釉陶器、黒色土器、漆付着土師器坏、刻書土器、円面硯、猿面硯、転用硯、石帶（巡方）、銅鞆、銅鑷、瓦、刀子、製塩土器、小形棒状砥石などがある。中でも注目される資料は「厨」と刻書された土師器壺 c が挙げられる。具体的に施設名称が刻まれていることも勿論であるが、刻まれた土器が小壺という点に留意する必要がある。周辺に厨的施設が存在したとも思えるが、内容物の伴う容器として持ち込まれた可能性もあり、掘立柱建物跡群=厨と認定するには慎重を期さなければならない。その他、石帶（巡方）であるが、石帶=官人と判断しがちであるが、石帶は跨帶が禁止されたことにより普及するようになったとされ、『衣服令』「制服条」からは官位が無い者でも跨帶を身に着けることができた旨が読み取れ、竪穴建物跡からも発見される事例もあり、地方の末端役人クラスでも十分持ち得ることができるとの指摘がある。本遺跡群から出土したものは黒色の蛇紋岩を丁寧に磨いて作り上げたものであり、『衣服令』「制服条」にある「烏油腰帶」を意識してのものと推測される。硯に関しては、須恵器を再加工した転用硯が 7 点あり、これらは割れ口若しくは割れた形状に作為性が看取されるもので、今後供膳具の破片資料においては十分観察が必要であり、転用硯の認定に注意しなければならない。

第3節 結語

以上、古代の遺構や出土遺物について略述してきたが、図中に示す遺物は、掘立柱建物跡からの出土も若干見られるが、その大部分は大溝から出土したものである。遺物組成から官衙的様相があることを読み取ることができるが、文字関連遺物や石帶は地方の末端役人クラスでも有すことが可能であるため、遺物のみで官衙遺跡と認定することは注意しなければならない。

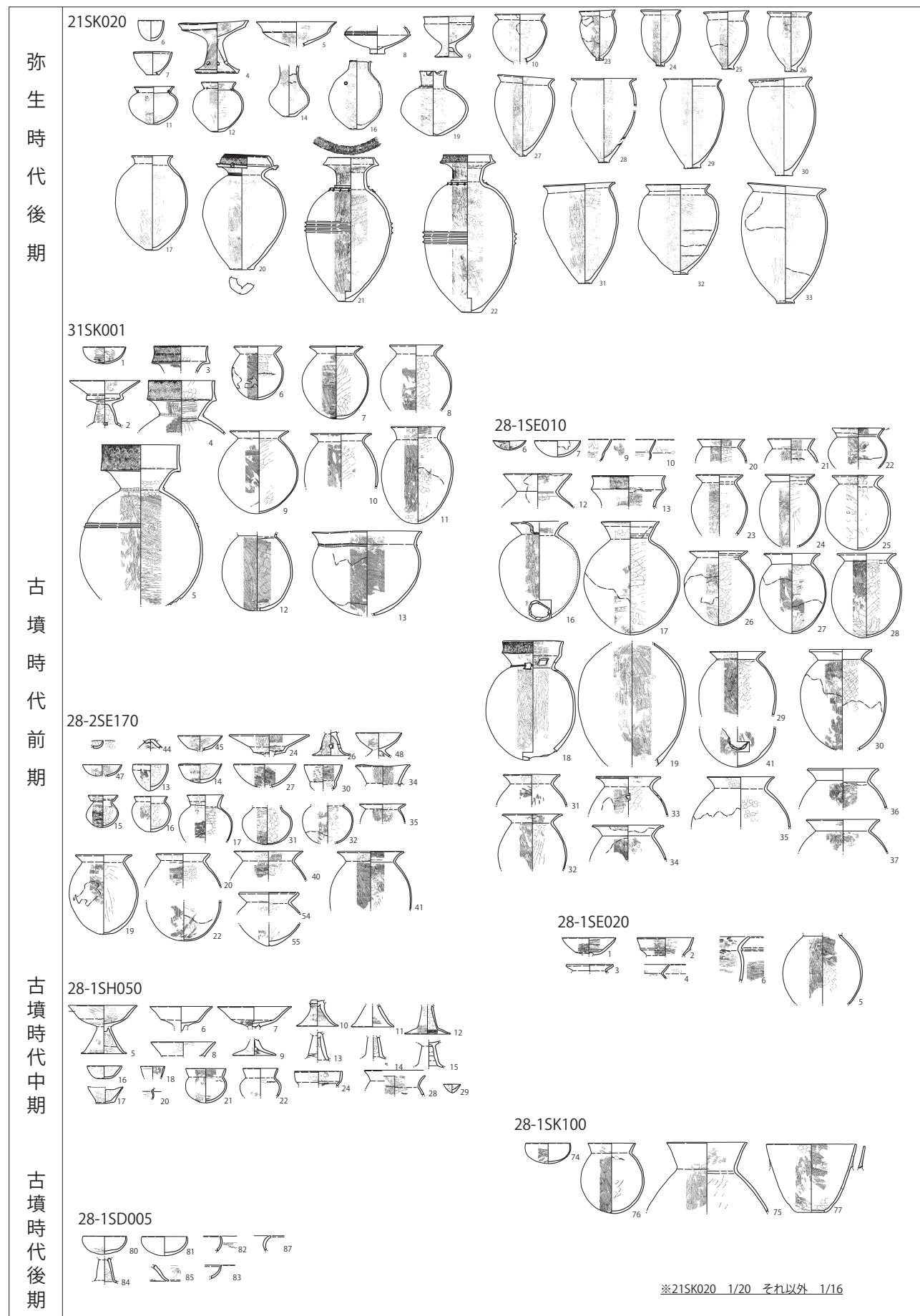
掘立柱建物跡群は、身舎面積 50 m²以上を有す建物を中心に複数の付属施設が規則的に配置されるといった状況や規格・重複関係の少なさといった点から判断すると、官衙的要素を十分示している。古代（8世紀末～9世紀前半頃）に該当する遺構を種別すると掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡で構成され、廃棄土坑が認められないという点が特色として挙げられる。また、これら遺構群は南に位置する大溝と関連性を有することは明白である。

掘立柱建物跡群の機能であるが、掘立柱建物は「倉」と「屋」に区別することができ、「倉」は束柱を持つ高床式の総柱構造を呈すものであり、倉庫としての機能を有したとされ、「屋」は建物の周囲にだけ柱を配置し、住居として利用されるものとされる。

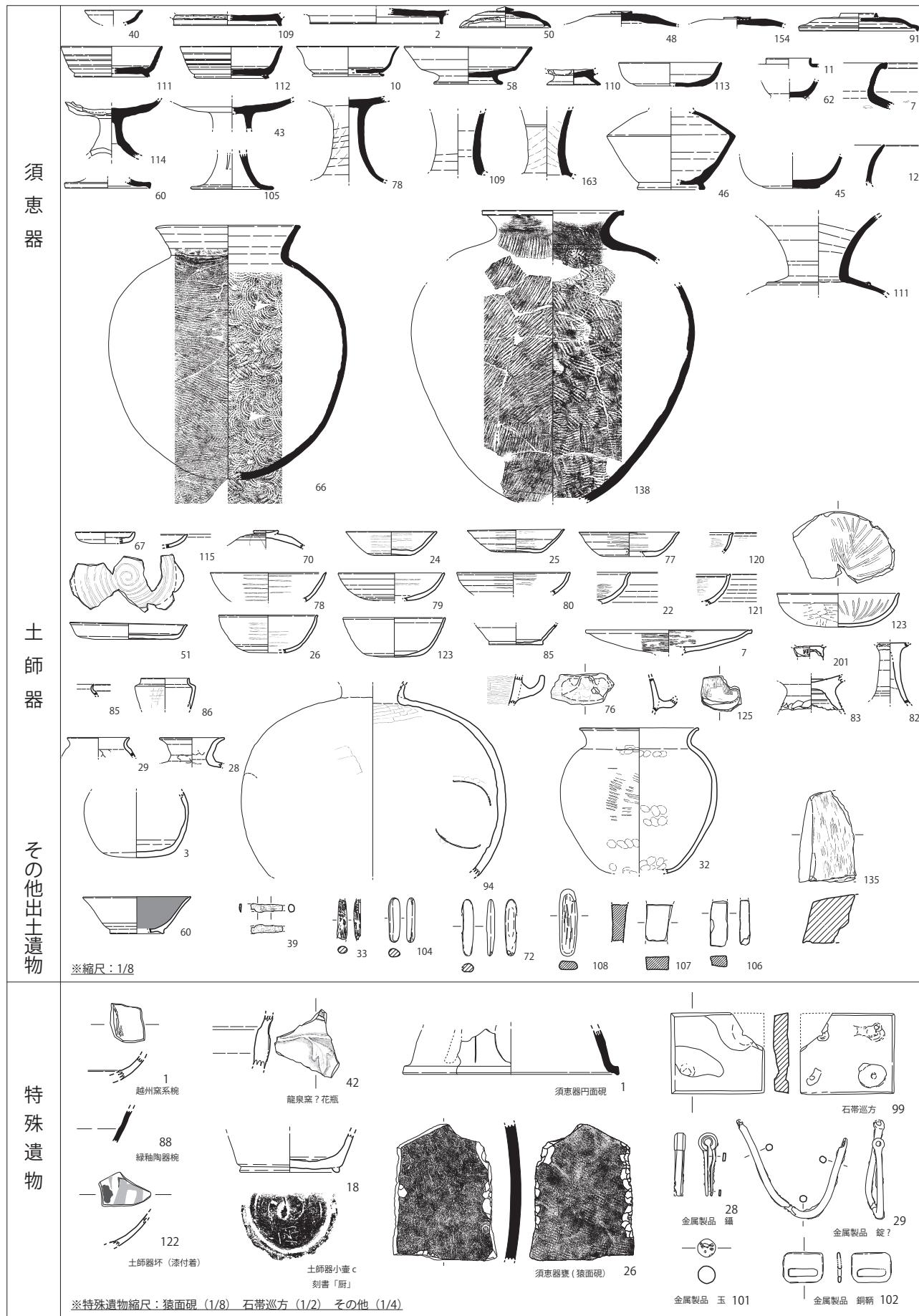
大分市東部に位置する地蔵原遺跡における後藤氏の研究では、まず検出された掘立柱建物跡群の構造に着目し、総柱建物跡が極めて少ないことを指摘している。そして、文献史料の解釈から「倉」を租税として長期間保管するための高床の板屋、「屋」は穀稻などを短期保管するため、倉庫として代用された建物である可能性を導き出した。さらに、地蔵原遺跡において古代の遺構が急速に展開するまさにその段階の時代背景を示唆するものとして『類從三代格』所収の延暦 15 年(796)11月 21 日付の太政官符に言及している。この太政官符に引用された天平 18 年(746)の官符によれば、「このころ、官人・百姓・商旅の徒が、調綿などの国物を、豊前国草津津や豊後国埼津、同坂門津から積み出し、ほしいままに往還していた。」とあり、政府は直ちにこの不法行為を禁じ、大宰府も重ねて禁令を出したものの、「上件の三津尚軒徒多し」という有様で、これら三津からの官物、私物の京への積み出しという不法行為はやむことがなかった。結果的には、豊前・豊後の三津における公私の船の往来を許すことになるのである。このような状況下、大野川河口部に位置し、大野川を介して後背する豊後国の諸郡とつながり、諸郡の調や庸などの官物を集め、あわせて種々の農作物、手工業製品などを集散させることができとなる場所が当該地であると解く。そして、地蔵原遺跡こそ、まさに郡司層に相当する有力百姓・商旅の徒が構築した拠点基地であり、ここでもって、公私の物資の集散と京への搬送が行われたとする、極めて注目される見解が提示されている。

大道遺跡群の掘立柱建物跡についても同様な状況が看取され、「屋」構造を呈すが倉庫的機能を有していた可能性が高く、分布状況から 2 つの倉庫エリアがあったと想定することができる。掘立柱建物跡群が形成される時期は上記の様な不法行為が活発化している段階に合致しており、海岸線付近の沖積地に掘削される人口河川とも言える大溝に近接して構築されるという立地的環境を有している。掘立柱建物跡群の配置、廃棄土坑が認められない点、供膳具を主体とする遺物構成といった状況を総合すると、掘立柱建物跡群＝倉庫群は、大溝を利用した水上交通に關係する公的施設と位置づけることができる。また、大溝の展開状況から、確認された遺構群は国衙に關係する可能性が高い。ちなみに大道遺跡群が所在する地域は、字郷ノ本という地名を残していた。郷という地名＝郷衙と判断するには、郷衙とされている他事例と詳細な比較・検証した上で、郷衙と認識できる必要十分条件を提示する必要があると思われる。

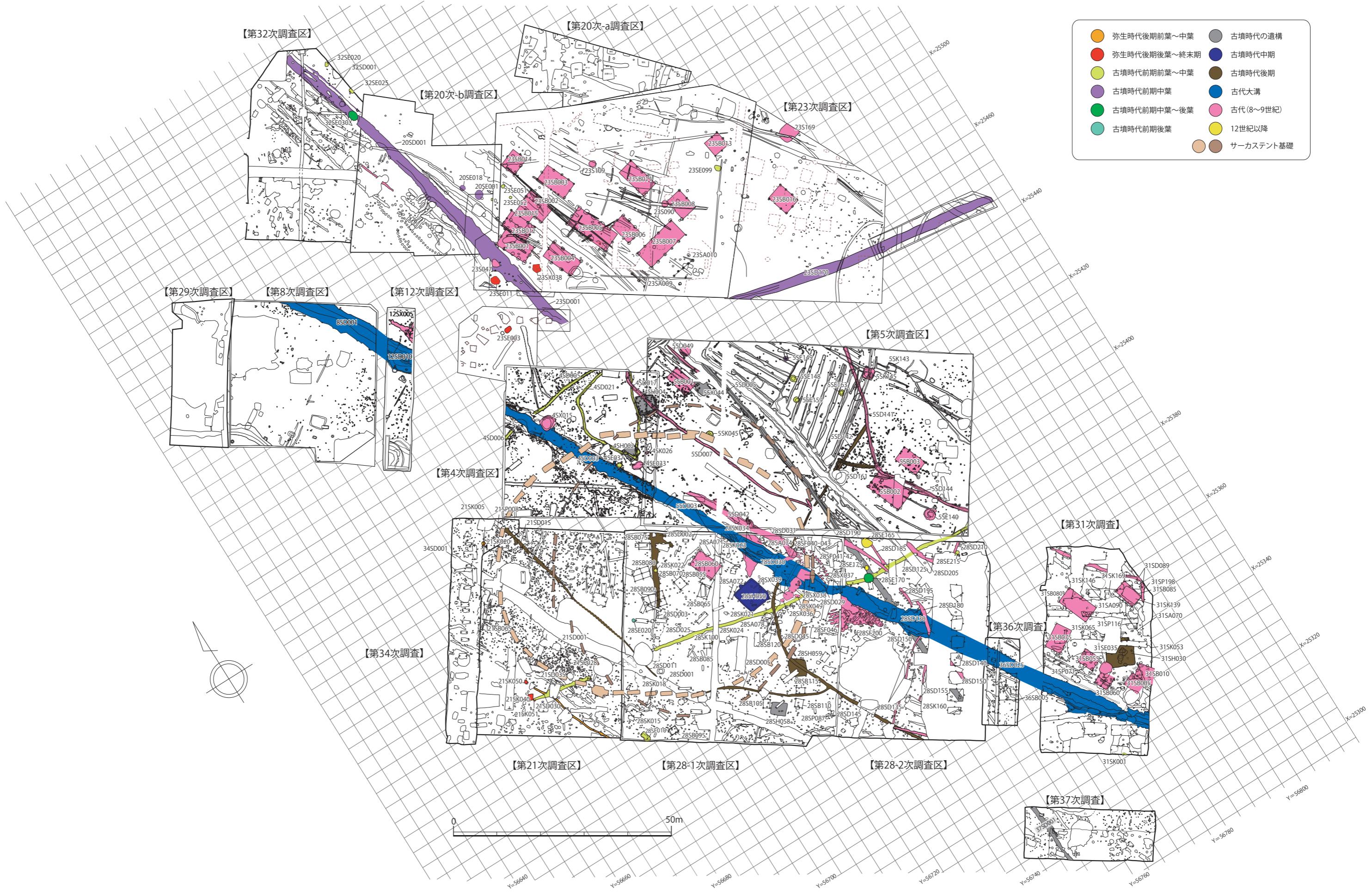
今回所収する調査地点及び周辺の遺跡状況から判断して、これらの掘立柱建物跡群は官衙施設と考えられ、大溝の北側を区画エリアとして展開していることが判明した。また、確認された掘立柱建物跡群は施設群の一部に該当し、未調査区域に性格が異なる遺構が広がっている可能性を示唆するものである。



第 92 図 大道遺跡群第 21・28・31 次主要遺構出土遺物 (弥生時代後期～古墳時代)(1/20・1/16)



第93図 大道遺跡群第28・31次主要遺構出土遺物(古代)(1/8・1/4・1/2)



第 94 図 大道遺跡群北部主要遺構遺構変遷図 (1/800)

参考文献

- ・久住 猛 1999 「庄内式併行期の土器生産とその動き」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
- ・大分市教育委員会 2008 『大道遺跡群1』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4
- ・大分市教育委員会 2009 『大道遺跡群2』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5
- ・大分市教育委員会 2010 『大道遺跡群3』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6
- ・大分市教育委員会 2011 『大道遺跡群4』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7
- ・大分市教育委員会 2012 『大道遺跡群5』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8
- ・重藤輝行 2010 「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化談叢』第63集 九州古文化研究会
- ・中西武尚・服部真和 2002 「古墳時代中・後期の土師器－大分県－」
『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性』九州前方後円墳研究会
- ・岡山県教育委員会・国土交通省岡山河川事務所 2008 『百間川原屋島遺跡7 百間川二の荒手遺跡』
旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査XVII
- ・大分市教育委員会 2005 『下郡遺跡群III』－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2－
- ・大分市教育委員会 2007 『下郡遺跡群V』－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4－
- ・大分市教育委員会 2008 『下郡遺跡群VI』－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5－
- ・坪根伸也「弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分」『下郡遺跡群VIII』大分市教育委員会
- ・佐藤良子「古墳時代中期から後期の遺物」『下郡遺跡群VIII』大分市教育委員会
- ・坪根伸也 2010 「古代の土師器について」『下郡遺跡群VIII』大分市教育委員会
- ・稗田智美 2010 「第Ⅲ章第5節(4) 古代の土師器について」『下郡遺跡群VIII』
- ・稗田智美 2010 「第Ⅲ章第5節(5) 豊後における古代前期の煮炊具について」『下郡遺跡群VIII』
- ・坪根伸也・塙地潤一 2001 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』
- ・森隆 1995 「III 土器・陶磁器 2. 黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- ・稗田智美 2012 「第V章 第2節 羽田遺跡出土の白色研磨土師器塊について」『羽田遺跡3』大分市教育委員会
- ・坪根伸也 1999 「大分市下郡遺跡群の古代道路状遺構について」大分県地方史 第173号 抜刷
- ・山村信榮 2001 「古代道路の構造」古代交通史 第10号 抜刷
- ・大分市教育委員会 2005 『海部の遺跡1』都市計画道路横塚久土線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- ・小田和利 1996 「製塩土器からみた律令期集落の様相」『研究論集21』九州歴史資料館
- ・山中正敏 1994 「古代地方官衙遺跡の研究」塙書房
- ・塙地潤一 2006 「豊後国における8・9世紀の遺跡動向～乙津川流域を中心として～」
『第8回西海道古代官衙研究会資料集』西海道古代官衙研究会 中四国古代史研究会合同研究会
- ・大分市史編さん委員会 1987 『大分市史 上』
- ・大分県 1982 『大分県史』古代I
- ・大分県 1984 『大分県史』古代II
- ・太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XIV』

写真図版

写真図版 1

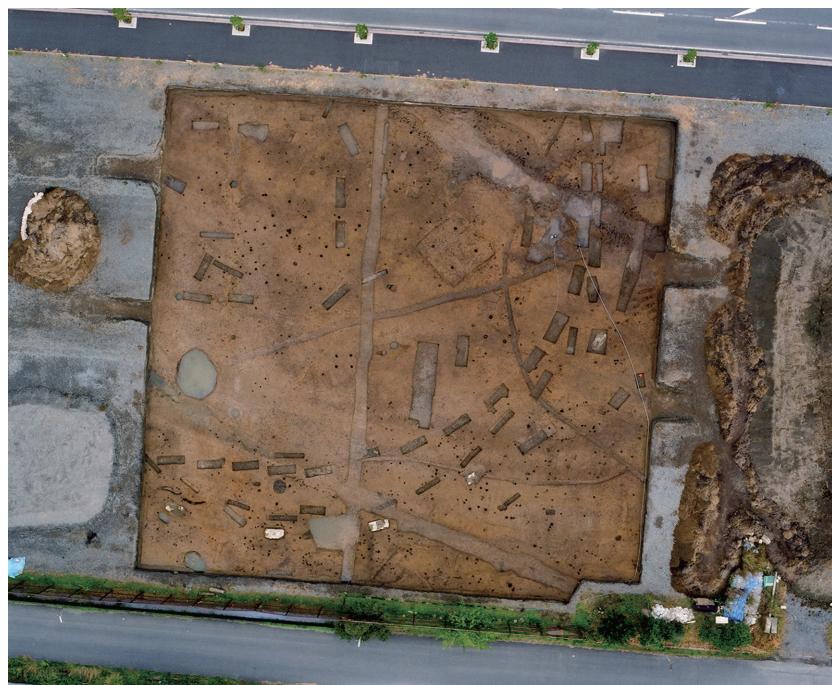


大道遺跡群全景（下が北）



第 21 次調査区全景（上が北）

写真図版 2



第 28-1 次調査区全景（上が北）



第 28-2 次調査区全景（上が北）

写真図版 3



28-1SH050 検出状況（南より）



28-1SH050 土層観察時（南東より）



28-1SH050 土層観察時（詳細）



28-1SH050 壁溝検出状況（東より）



28-1SH050 壁溝検出状況（詳細）



28-1SH050 作業風景



28-1SH050 完掘状況（南西より）



28-1SK010 検出状況（北より）

写真図版 4



28-1SK010 遺物出土状況（北より）



28-1SK010 遺物出土状況（詳細）



28-1SK010 土層観察時（北より）



28-1SD045 検出状況（南東より）



28-1SD045 土層観察時（北より）



28-1SD045 完掘状況（北より）



28-1SD030 土層観察時（東より）



28-1SD030 刻書土器出土状況（西より）

写真図版 5



28-1SD030 刻書土器出土状況（詳細）



28-1SD030・041・042・043 遠景（南より）



28-1SD030 作業風景（北より）



28-1SF041・042 検出状況（南より）



28-1SF041・042 検出状況（北より）



28-1SF041・042 完掘状況（北より）



28-1SF043 完掘状況（北より）



28-1SX037・038・039 検出状況（南より）

写真図版 6



28-1SX034 土層観察時（南より）



28-1 次調査区北壁土層（南より）



月に照らされる調査区



28-2 次調査区北西部検出時（北より）



28-2SE170 検出状況（南より）



28-2SE170 遺物出土状況（南より）

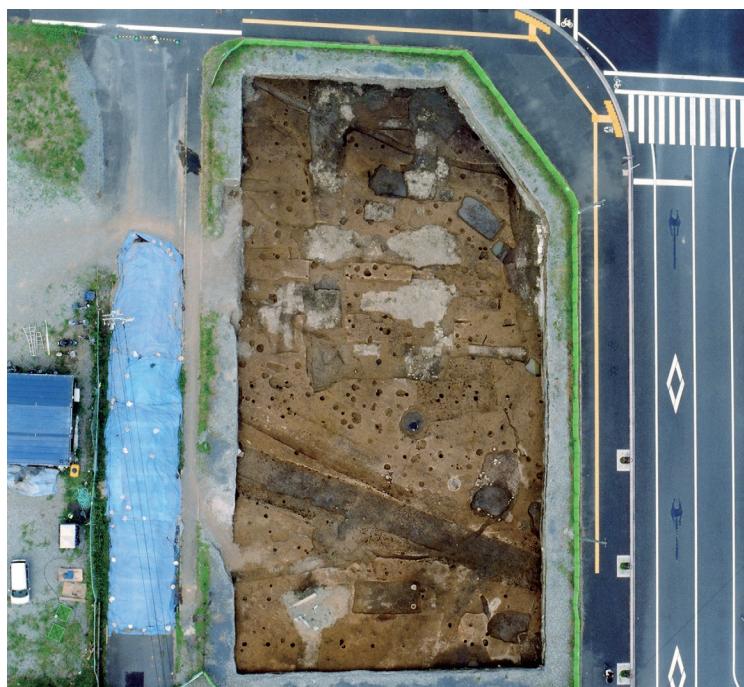


28-2SE170 土層観察時（南より）



28-2SE170 完掘状況（南より）

写真図版 7



第 31 次調査区全景（上が北）



31SB005 検出時（北より）



31SB010 検出状況（南より）



31SB010c 根石出土状況（東より）



31SH030 検出状況（南より）

写真図版 8



31SH030 黄茶土検出状況（東より）



31SH030 土層（南より）



31SH030 完掘時（南より）



31SE035 検出状況（南より）



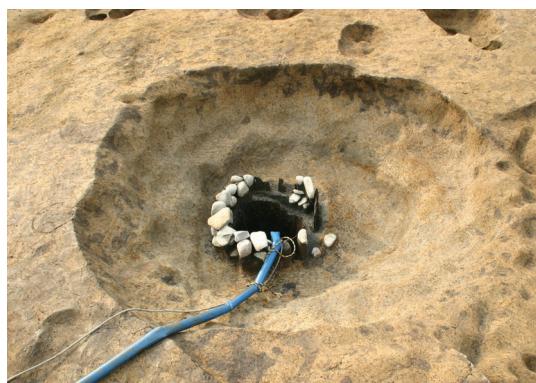
31SE035 磯出土状況（東より）



31SE035 遺物出土状況（南より）



31SE035 木櫛出土状況（北より）



31SE035 完掘時（南より）

写真図版 9



31SE035 完掘時詳細（北より）



31SE35 井戸枠取り出し状況



31SK001 遺物出土状況（北より）



31SK001 遺物出土詳細（北より）



31SK001 完掘時（北より）



31SK065 検出状況（東より）



31SK065 土層（北より）



31SK065 完掘時（北より）

写真図版 10



第31次溝群検出状況（北より）



31SD025 検出状況（南東より）



31SD025 焼石出土状況（北より）



31SD025 遺物出土状況（西から）



31SD025 黒色土プラン土層（南東より）



31SD025 縦断土層遠景（南より）



31SD025 縦断土層詳細（南より）



31SD025 縦断土層西部（南より）

写真図版 11



31SD025 縦断土層中央部（南より）



31SD025 縦断土層東部（南より）



31SD025 土層（西より）



31SD025 完掘時（南より）



31SD025 東壁土層（西より）



31SD025 西壁土層（東より）



31SD025 完掘時（東より）



SD025 作業風景（南東より）

写真図版 12



31SD089 完掘時（東より）



31SD089 南側土層（南より）



31SD089 北側土層（西より）



34SK020 遺物出土状況（南東より）



34SK020 完掘時（南東より）



37SD001 完掘時（南より）



第 37 次調査区北西隅土層（南東より）



第 37 次調査区全景（南東より）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおみちいせきぐん							
書名	大道遺跡群6							
副書名	大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9							
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第125集							
編著者名	佐藤道文 倉増美千代 古閑健一(株式会社埋蔵文化財サポートシステム)							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111 FAX(097)536-0435							
発行年月日	西暦2013年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積(m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
おおみちいせきぐん 大道遺跡第21次	おおいたしかないけみなみ 大分市金池南1丁目	44201	201325	33° 13' 39"	131° 36' 28"	20061225～20070328	1628	区画整理事業
大道遺跡群第28次	"	"	"	33° 13' 39"	131° 36' 30"	20080901～20090316	5000	区画整理事業
大道遺跡群第31次	"	"	"	33° 13' 37"	131° 36' 33"	20090618～20090831	1119	区画整理事業
大道遺跡群第34次	"	"	"	33° 13' 39"	131° 36' 28"	20100204～20100316	430	区画整理事業
大道遺跡群第36次	"	"	"	33° 13' 37"	131° 36' 33"	20100204～20100316	160	区画整理事業
大道遺跡群第37次	"	"	"	33° 13' 36"	131° 36' 32"	20100221～20100316	352	区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大道遺跡群第21次	集落	弥生・古墳	廃棄土坑・溝跡		弥生土器			
大道遺跡群第28次	集落	古墳・古代	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡		古式土師器・土師器・須恵器・輸入陶磁器・刻書土器・石帶(巡方)			
大道遺跡群第31次	集落	古墳・古代	掘立柱建物跡・溝跡・廃棄土坑		古式土師器・土師器・須恵器・転用硯			
大道遺跡群第34次	集落	弥生・古墳	廃棄土坑		弥生土器			
大道遺跡群第36次	集落	古代	溝跡		土師器・須恵器			
大道遺跡群第37次	集落	古墳	溝跡		土師器			
要約	<p>今回の調査では、弥生時代から奈良・平安時代の遺構が確認された。第21次調査では、弥生時代後葉に比定される弥生土器がまとまって状態で出土しており、土器編年を検証する上で良好な資料を得ることができた。第28・31次調査では、8世紀末～9世紀前半頃の大溝及び掘立柱建物跡群を検出した。大溝は約4m～最大で7mの幅を有し、直線的に200m以上に渡って延伸しており、土層観察から水流痕跡が認められることから水路として機能していたと考えられる。その北側に規則的に配置する掘立柱建物跡群は倉としての機能していたことが推測され、建物配置及び出土遺物から判断すると官衙的様相が極めて高いことが指摘される。その他、大道遺跡群では調査事例が少ない古墳時代中～後期の遺構も確認され、当該時期の集落が展開していること可能性が示唆される。</p>							

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 125 集

大道遺跡群 6

一大分市駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9—

2013 年 3 月 15 日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町 2-31